



学位論文題目 Title	「18世紀ハンガリー王国の《ツィガーニ共同体》—市場町ミシュコルツにおけるその形成、機能、「解体」?—」
氏名 Author	市原, 晋平
専攻分野 Degree	博士（文学）
学位授与の日付 Date of Degree	2016-09-25
公開日 Date of Publication	2020-09-25
資源タイプ Resource Type	Thesis or Dissertation / 学位論文
報告番号 Report Number	甲第6729号
権利 Rights	
JaLCDOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/D1006729

※当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

PDF issue: 2020-11-20

博 士 論 文

平成 28 年 7 月 8 日

「18 世紀ハンガリー王国の《ツィガーニ共同体》—市場町ミシュコルツにおけるその形成、機能、「解体」?—」

神戸大学大学院人文学研究科博士課程

後期課程 社会動態専攻

市原 晋平 (109L104L)

凡例

1. 引用部分における[]は引用者の補足説明を意味する。
2. ハンガリー人研究者、参考文献、史料等においてハンガリー人名で表記されている人物名についてはハンガリー語の用法に従い、姓・名の順に表記している。また、史料において個人名がラテン語で表記されている場合についても、ハンガリー名に改めている。
3. 論文中のハンガリー王国の地名については、ハンガリー語で表記し、現在、他言語での表記がより一般的な場合は、初出時に括弧を付しその地名を表記する。
4. 本論文における貨幣単位については、以下の通り。
 - ・ 1 フォリント(Forint)/ハンガリー・フォリント(Magyar Forint)=1,2 ライン・フォリント(Rhénes Forint)
 - ・ 1 ライン・フォリント=60 クロイツァール(Krajcár)
 - ・ 1 フォリント=100 デーナール(Dénár)
 - ・ 3 クライツァール=1 ガラシュ(Garas)

博士論文

市原晋平「18 世紀ハンガリー王国の《ツイガーニ共同体》—市場町ミシュコルツにおけるその形成、機能、「解体」?—」

凡例

目次

序章	-----1
第1章 18 世紀の市場町ミシュコルツ	-----13
第2章 18 世紀ハンガリー王国における「ツイガーニ問題」 —国家、県、市場町の諸規定、行政書簡の分析から—	-----23
1 節 法規定発布主体	-----24
2 節 ハンガリー総督府のツイガーニ関連政令	-----25
3 節 ボルショド県のツイガーニ関連条例	-----29
2-3-1 ボルショド県のツイガーニ関連条例	30
2-3-2 諸県のツイガーニをめぐるコミュニケーション	32
4 節 ミシュコルツの条例の中のツイガーニ	-----35
第3章 ミシュコルツへのツイガーニ集団の定着 —ツイガーニ鍛冶師活動制限条例(1740 年)の分析から—	-----38
導入	-----38
第1 節 18 世紀前半のボルショド県におけるツイガーニの鍛冶師の活動可能性	-----41
第2 節 18 世紀前半のミシュコルツにおけるツイガーニの鍛冶師の活動	-----47
第3 節 18 世紀前半のミシュコルツ社会の変化と金属加工業者	-----48
小括	-----51
第4章 ミシュコルツのツイガーニの人口動態・空間的分布 1750 -1780 年代	-----55
第1 節 ツイガーニの人口動態	-----55
第2 節 ツイガーニの居住地域	-----60
小括	-----67
第5章 18 世紀中葉のミシュコルツにおけるツイガーニ共同体、ならびに頭領の機能	-----69
導入	-----69
第1 節 ミシュコルツのツイガーニ「共同体」	-----74
第2 節 1767 年以前のミシュコルツにおける「頭領」の機能と限界	-----77

5-2-1	18 世紀ミシュコルツの「頭領」たち	77
5-2-2	ミシュコルツにおける「頭領」の諸機能	79
5-2-3	頭領の機能の「限界」	81
第 3 節	1767 年以降のミシュコルツにおける「頭領」の消滅	-----83
5-3-1	1767 年以降の「元・頭領」 ーヴァダースイ・イシュトヴァーンの動向からー	83
5-3-2	1767 年以降の他地域における「頭領」	86
5-3-3	ミシュコルツにおける頭領の「消失」と地域的要素	88
小括		-----90
第 6 章	18 世紀後半のミシュコルツにおけるツィガーニの「同化」	-----91
導入		-----91
第 1 節	「書類上の同化」	-----94
6-1-1	「同化」の基準ーツィガーニ帳簿質問事項ー	94
6-1-2	ツィガーニ帳簿におけるミシュコルツのツィガーニのプロフィール	98
第 2 節	行動上の「同化」	-----101
6-2-1	行政・裁判関連史料に見るミシュコルツのツィガーニの行動傾向	101
6-2-2	ツィガーニとその他の住民の関係性	102
第 3 節	「同化」と「犯罪」	-----108
6-3-1	定着者と外部流入者の「犯罪行為」	109
6-3-2	「犯罪」関連史料に見るツィガーニの社会的紐帯	112
小括		-----115
終章		-----117
結論		117
今後の課題と展望		118
表・地図		-----i
参考文献表		-----xviii

序章

本論文は、従来、前近代のジプシー史研究においては手薄であった同集団の歴史を地域史的な文脈も視野に入れた上で描き出すという問題関心から、「前近代ハンガリーにおいてジプシーと呼ばれた人々」(以下、ツィガーニ)に焦点を当て、事例研究を行うものである¹。

現代においてロマ/ジプシーとは、一般的に、インドを出自とし、10-15 世紀にかけて、中東、ヨーロッパに広がったとされる、インド・ヨーロッパ語系の言語ロマニ語を母語とする民族集団の自称/他称(蔑称)であると定義される。ただし、このようなロマの民族性、文化的、歴史的一体

¹ 以下で、本研究におけるツィガーニという呼称とその使い分けについて簡単に述べておきたい。ロマやジプシーといった呼称を巡っては、当事者の自己認識など、様々な問題が絡み合っており、その用法についてデリケートな議論が存在する。一般にジプシーや本研究でも頻繁に用いるツィガーニなど、それに類する言葉は差別用語とされている。しかし、歴史上のこの人々を研究の対象とする場合には、断りを入れた上で、史料上に現れる言葉をあえて使用するという方法を用いる研究者も存在する。このような立場には、本文で述べるような構築主義的なロマ/ジプシー理解も影響を与えているものと思われる。つまり、ジプシーというカテゴリーは歴史的に内実やその枠組みが変化するものであり、場合によっては、その範疇には現在のロマ民族とは必ずしも連続性を想定できない人々も含まれている、という認識である。その考え方を史料論的な観点から補足すれば、ヨーロッパにおいて、ロマへの帰属を表明する知識人が登場するのは、多くの場合 20 世紀後半以降であり、また、本論文が対象とする 18 世紀を含め前近代においては、ジプシーはその他の社会的下層の構成員の多くと同様に、そもそも文字史料の作成に必要な能力や知識を持たなかった、ということがこの議論に決定的な意味を持つ。つまり前近代において、この人々に関する史料を作成したのは、自らをジプシーであると認識する人々自身ではなく、行政機関や知識人など、ジプシーを客体として捉えた人々であった。このことは、このような性格を持つ当時の史料を用いてジプシーの歴史研究を行う場合、研究者は、ジプシーを実際に眺め、あるいは直接的な接触を持たずにこれらの人々のことをただ想起するだけであった史料作成者たちのまなざしというフィルターを通してのみ、ジプシーを認識することが可能であるということの意味する。以下の議論で述べるように、史料のタイプによっては、ジプシー自身の自己認識が全く読み取れないわけではないものの、以上の点には常に留意する必要がある。本研究では、決して当事者の意識を軽視しロマに対する差別を助長するという意図からではなく、以上のような理由から、基本的には構築主義に基づく立場を踏襲したい。そこであくまで便宜的に、時期を限定しない、あるいは通時的な対象を指す場合は基本的にはロマ/ジプシーと併記する。また、話題が現代に限定される場合は主にロマを呼称として使用する。一方で、ロマ自身による書き言葉での意思表示が存在していない時代、つまり周囲の社会によるロマ/ジプシーについての記録のみが残る時代に限定して言及する場合は、「周囲からジプシーと呼ばれた人々」という意味で「ジプシー」という呼称を用いる。また近代以前のハンガリーにそれが限定される場合は、史料上の用語の一つである「ツィガーニ」を用いるようにする。近現代のハンガリーのことに言及する場合には基本的にはロマを使うことにするが、史料作成者が「ジプシー」やツィガーニの表現を用いている記述を引用、参照する場合は、原文の言い回しを用いることもある。なお、18 世紀にハンガリーにおいて「ツィガーニの言葉」を採録した一部の文献には、「ロマ(ruma/ romi/ romé)」という語への言及があるが、当時のツィガーニのどの程度がその言葉を使用していたのかなどの判断は難しいため、当時におけるこの語彙の使用者をツィガーニ全体と等置することはさしあたり避ける。語彙集については AUGUSTINI AB HORTIS, Samuel, *Von den heutigen Zustände, sonderebaren Sitten und Lebensart wie auch von denen übrigen Eigenschaften und Umständen der Zigeuner in Ungarn [1775]* (Bratislava: Stúdio-dd-, 1994), 161-166. また、呼称の問題については例えば以下を参照。水谷驍『ジプシー：歴史・社会・文化』平凡社、2006 年 27-43 頁。

性を強調する定義は、20 世紀後半以降のロマの権利獲得運動、いわゆるロマ・ナショナリズムの広がりの中で普及していったものであり、その中には一部のロマ・エリートによって拡大解釈された事実も含まれていること、また、各国、各地域別にロマ集団がかなり多様な状況にあるという実態になじまないことなど、この概念の現代性、構築性がすでに多くの研究によって指摘されている²。

いずれにせよ、20 世紀後半から 2000 年代のヨーロッパにおいて、各国、あるいは EU の多数派社会とロマとの関係をめぐり、旧社会主義圏からの労働移民、根強い広範な社会的差別、中東欧諸国の EU 加盟条件としてのその状況改善など、様々な視角から問題が提起され、当時者であるロマの知識人らをも巻き込みながら議論が交わされてきた³。そのような中でこの人々の歴史への関心も、とりわけナチス期のジプシー迫害などを中心に近現代史の文脈で高まりを見せた⁴。

ただし、より長期的な視点から見れば、ロマ/ジプシーに関する歴史の語りにおいては、実証的な歴史学研究の影響は伝統的に弱く、近代歴史学成立以降も、社会学や文化人類学の研究成果からの類推による歴史語りが学界における主流を占めてきた。他方で歴史学に軸足を置く研究者は、トート・ペーテル曰く「ヘーゲル史観」に立ち、近代国家形成にとって意義があると見な

² MATRAS, Yaron, “Review article: A conflict of paradigms”, *Romani Studies* 5, Vol. 14, No. 2. (Liverpool, 2004), 193-209; VERMEERSCH, Peter, *The Romani Movement: Minority Politics and Ethnic Mobilisation in Contemporary Central Europe* (New York – Oxford: Berghahn Books, 2006); BINDER Mátyás, “„Felébredt ez a nép...“. A magyarországi romák/ cigányok etnikai-nemzeti önszerveződési folyamatairól”, GERGELY Jenő (szerk.), *A múlt feltárása--előítéletek nélkül* (Budapest: ELTE BTK Történelemtudományok Doktori Iskola, 2006), 61-81.

³ BARANY, Zoltan, *The East European Gypsies: Regime Change, Marginality, and Ethnopolitics* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003); VERMEERSCH, Peter and RAM, Melanie H., “The Roma”, RECHER, Bernd (ed.), *Minority Rights in Central and Eastern Europe* (London and New York: Routledge, 2009), 61-73; 小川悟『ジプシー——抑圧と迫害の轍』明石書店、1990 年；イアン・ハンコック著『ジプシー差別の歴史と構造——パリア・シンδροーム』水谷驍訳、彩流社、2004 年。

⁴ 例えば、ドナルド・ケンリック/グラタン・パクソン共著『ナチス時代の「ジプシー」』小川悟監訳、明石書店、1984 年；ZIMMERMANN, Michael, *Rassenutopie und Genozid: die nationalsozialistische »Lösung der Zigeunerfrage«* (Hamburg: Christians, 1996); LEWY, Guenter, *The Nazi Persecution of the Gypsies* (New York: Oxford University Press, 2000); BÁRSONY, János and ÁGNES, Daróczi (eds), *Pharrajmos: Fate of the Roma During the Holocaust* (New York-Amsterdam-Brussels: Idebate Press, 2008). 日本においては例えば、金子マーティン編『「ジプシー収容所」の記憶——ロマ民族とホロコースト』岩波書店、1998 年；佐藤雪野「戦間期チェコスロヴァキアにおけるロマに対する法的処置」『言語と文化』14 号、2000 年、157-168 頁；同「マイノリティとしてのチェコのロマ——多数派との関係の歴史と現在——」、高橋秀寿、西成彦編『東欧の 20 世紀』、人文書院、2006 年、126-156 頁；同「チェコスロヴァキアにおけるロマの歴史とオーラル・ヒストリー——ラツコヴァーの自伝を手がかりに——」『国際文化研究科論集』15 号、2007 年、65-79 頁；加藤久子「社会主義ポーランドの建設とロマ——「ジプシー」をめぐる政策とプロパガンダ——」『現代史研究』53 号、2007 年、1-14 頁；大谷実「一九世紀末から二〇世紀初頭のドイツにおけるシンティ・ロマ概念の変遷——百科事典と内務省資料を手掛かりに——」『ゲシヒテ』第 8 号、2015 年、3-22 頁。歴史研究を含めハンガリーの諸学問分野における研究動向については、山本明代「ハンガリーにおけるロマ研究の現状と課題」、水野博子編『記憶のタペストリー——マイノリティ、ナチズム、戦争をめぐる現代文化の諸相——』(若手研究(A)「1945 年以後の日本・オーストリア両国における「記憶の文化」形成に関する比較研究」／萌芽研究「20 世紀国際関係における「少数民族問題」——「少数民族保護」政策と国際連盟を中心に——」研究報告書)、2005 年、19-30 頁。

された事績や人々、特に国民国家における多数派民族の歴史を描くことに長く関心を寄せてきたため、どの国家においても少数派として位置づけられたロマ/ジプシーを主要なテーマと見なしてこなかった⁵。事実、一国史的範疇の通史においてロマ/ジプシーの言及に紙幅が割かれることは現在においてもまれである⁶。学界を離れてより一般的には、経験的分析に基づかない「差別的」、あるいはロマン主義的な歴史観などが長く影響力を保っていた。しかしその後、20世紀後半以降には、このような歴史観を多数派社会によるロマへの無知や差別の一形態と見なし、それに対抗する言説として、ロマ/ジプシーの民族性や、その歴史における文化的伝統の継続性、地域的共通性、および被差別・被迫害の側面を強調する語りが、ロマ知識人を中心として現れ始める⁷。この両者の語りは、政治的な立ち位置を大きく異にしているものの、ロマ/ジプシーを歴史上、特定の特徴を固有に持ち続けた集団と想定し、その歴史の流れを単線的に、単純化して描く点では多くの場合共通していた。例えば、「差別的」歴史観では、ロマは歴史を通じて「悪しき習慣」を身につけた、変化することのできない人々として語られる一方、ロマの知識人らによる「迫害史」の語りにおいてはどの地域においても見られる差別、迫害という要素を「一つの民族」としてのロマの「共通の運命」として強調する傾向が指摘されている⁸。また、そのような歴史観においては、20世紀前半にナチスなどによって押し進められたロマの迫害政策という事

⁵ TÓTH Peter, “Gondolatok a cigányok magyarországi történetéről és annak forrásairól”, GÉMES Balázs (szerk.), *Pillanatképek a romák múltjából* (Szekszárd: Romológiai Kutatóintézet, 1998), 37-44.

⁶ ERDŐS Zoltán, “Értelmezés és megértés: A magyarországi cigányság korai történetének historiográfiája”, *Iskolakultúra*, 2007/11-12. (Veszprém-Budapest, 2007), 129-144. 日本における各国通史においても、ロマ/ジプシーへの言及は、ドイツ史の通史にナチス期の迫害への言及があることを除けば、ハンガリーを扱った著作を含め、ほとんど行われない。木村靖二編『ドイツ史』山川出版社、2001年、320頁。近代以前も含め、何らかの言及が複数回行われる例外としては柴宜弘編『バルカン史』山川出版社、1998年、14、154、232、386頁；関哲行、立石博高、中塚次郎編『世界歴史体系 スペイン史』、山川出版社、2008年、1巻、187頁、2巻、248頁。

⁷ 例えばハンガリーでは、ROSTÁS-FARKAS György és KARSAI Ervin, *A cigányok története: Le romengi historija* (Budapest: Művelődési és Közoktatási Minisztérium/ Cigány Tudományos és Művészeti Társaság, 1992).

⁸ 両者のロマに関する歴史語りの諸傾向やその政治性などについては例えば、KAPRALSKI, Slawomir, “Identity Building and the Holocaust: Roma Political Nationalism”, *Nationalities Papers*, Vol. 25, No. 2. (1997), 269-283; WILLEMS, Wim and LUCASSEN, Leo, “Gypsies in the Diaspora?: The pitfalls of a biblical concept”, *Histoire Sociale/ Social History*, Vol. 66. (Ottawa: 2000), 251-270. ハンガリーについては、以下を参照。BINDER Mátyás, “„A cigányok” vagy a „cigánykérdés” története?: Áttekintés a magyarországi cigányok történeti kutatásairól”, *REGIO: Kisebbség, Politika, Társadalom*, 20-4. (Budapest, 2009), 35-59; idem, “„Újraegyesülés”? A roma nemzeti gondola keleti-európai történeti kontextusban”, DEÁKY Zita és NAGY Pál (szerk.), *A cigány kultúra történeti és néprajzi kutatása a kárpáti medencében: Bódi Zsuzsanna emlékére rendezett történeti és néprajzi konferencia előadásai [Gödöllő, 2009, február 18-20.]* (Gödöllő, Magyar néprajzi társaság/ Szent István Egyetem Gazdaság- és Társadalomtudományi Kar, 2010) (以下 *A cigány kultúra történeti és néprajzi kutatása a kárpáti medencében*), 225-235; idem, “„Közös a kultúránk, az eredetünk és a nyelvünk, egy nemzet vagyunk”: A roma nemzeti narratíva vitatott kérdései a történetírás tükrében”, SZALAI László (szerk.), *A nemzeti mítoszok szerkezete és funkciója Kelet-Európában* (Budapest: L'Harmattan/ ELTE BTK Kelet-Európa Története Tanszék, 2013), 99-120; DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatások tükrében, 1890-2008* (Budapest: Osiris Kiadó, 2009); VIDRA Zsuzsanna, “A roma holokausz narratívái: Történetírás, megemlékezés, politikai diszkurzusok”, *REGIO: Kisebbség, Politika, Társadalom*, 16-2. (Budapest, 2005), 111-129.

実が大きく影を落とす傾向にあり、近代以前の歴史に対しても、各地の統治権力や周辺社会からの苛烈な迫害という出来事が特に強調されることも少なくない⁹。このような傾向を背景として、地域ごとに歴史的に形成されたロマ/ジプシーたちの個別性を、前近代も含めて史料批判に基づいて検討し、同時代の文脈の中に位置づけようとする姿勢は近年まで見られなかった。しかし、1990年代以降、オランダのヴィム・ヴィレムス、レオ・ルカーセン、イギリスのデイヴィッド・メイオールら、構築主義的な立場の歴史社会学者の研究によって、歴史上におけるジプシー・イメージの多面性や、周辺社会ならびにロマ自身によるその構築性が明らかとなるに至って、各時代の「ジプシーと見なされた人々」を、歴史上連続し、固有の特徴を一貫して保持し続ける人々として無前提に捉える見方には再考が迫られている¹⁰。近代以前をも対象とする彼らの研究は、近代・現代的視座のみから捉えられたロマ/ジプシー像に疑問を投げかけ、それを補足、修正する可能性を持っており、その点においてロマ/ジプシー史のより総体的な理解に貢献しうる。しかしこれらの構築主義的研究は、「ジプシーと見なされた人々」そのものの動向ではなく、絵画、小説、学術書、辞書、法律など、ジプシーに関わる言説やジプシーを表象した様々な情報媒体、あるいはその成立背景を分析するという傾向が強く、ある特定の文脈において「ジプシーと見なされた人々」が「実際に」どのような活動を繰り広げたのかを語りうる史料の検討に向かうことは少ない¹¹。これらの研究では、近代以前の社会において数的、政治的、経済的、文化的に強い影響力を保持することのなかった周縁集団の一つとしてのジプシーを、その時代を実際に生きた人々として捉え、また、それらの領域においてより強い影響力を持ちえた諸集団とジプシーとの間で生じた様々な関係性を、より日常的な現場から問うという姿勢はあまり見られないのである。

このような「実際に」ありえたジプシーの姿やその周囲との関係性を問うことは、ジプシーに

⁹ そのような傾向を持つものとして、例えばベルント・レック著『歴史のアウトサイダー』中山博幸、山中淑江訳、昭和堂、2001年、109-117頁；金子マーティン「ブルゲンラント・ロマ小史」加賀美雅弘編著『「ジプシー」と呼ばれた人々——東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在』学文社 2005年、157-198頁。

¹⁰ LUCASSEN, Leo, “« Harmful tramps » Police professionalization and gypsies in Germany, 1700-1945”, *Crime, Histoire & Sociétés / Crime, History & Societies*, Vol. 1. No. 1 (Genève, 1997), 29-50; MAYALL, David, *Gypsy Identities 1500-2000: From Egipcians and Moon-men to the Ethnic Romany* (London and New York: Routledge, 2004); WILLEMS, Wim, *In Search of the True Gypsy: From Enlightenment to Final Solution* (London: Frank Cass, 1997). 構築主義的なロマ/ジプシー史研究を紹介した文献としては、水谷、前掲書がある。

¹¹ 極端に構築主義的な立場、あるいは「言語論的転回」の立場からは、史料に基づいて「実際」を問うことが可能であるのか、との疑問も予想されうる。それに対しては、たとえすべての史料が構築的な手続きの産物であり、突き詰めれば実際に生じていたことを確定することができないとしても、ジプシーの姿がより具体的に描かれた史料に取り組むことは、構築主義的な視点に立脚する議論の射程を複層化・豊富化することにも寄与しうる、との反論が可能である。つまり、そうすることによって、構築主義的ジプシー史研究において主として知識人の権威的な言説や、治安維持などの特定の目的のために作成された史料群に限定して展開される傾向にあったジプシー像に関する議論を、そのような研究がこれまで見過ごしてきた、ジプシーとの距離がより近い場において作成された多種多様な史料の存在を確認・認識し、またそれらをも構築主義的視点から読み直すことによって、再検討することが可能となるのである。本研究は、全面的にこのような立場に立つて行われるものではないが、適宜そのような視点からの分析も挿入する。

関する一次史料を歴史的文脈に位置づけつつ地道に検討することによってのみ可能であり、かつ説得的たりうることであるが、長い間、近代以前のジプシー史研究のための史料状況は必ずしも良好とは考えられていなかった。それでも、20 世紀末以降の東・中欧諸国では、社会史研究における前近代の周縁集団への関心の一部として¹²、あるいは新史料の発掘への関心や現代的な一時には政治的な一視点に規定されたロマ/ジプシーの歴史語りへの批判といった文脈から、同時代史料の批判的検討に基づいて近代以前のジプシーの歴史を再構成する傾向が現れており¹³、本論文の舞台となるハンガリーにおいても、前近代ツィガーニ史研究は、ナジ・パールを旗手として 20・21 世紀転換期ごろに大きな前進を見せた。

ハンガリーは現代において、ルーマニア、ブルガリア、スロヴァキア、スペインなどと並んで、ヨーロッパにおいて 600 万人から 900 万人が生活すると見積もられているロマ人口のうち、推定で 50 万人以上を抱えるとされる国家の一つである¹⁴。歴史的にも、遅くとも 15 世紀以来、ツィガーニはハンガリー王国内で生活していたとされており¹⁵、また、後述するように、とりわけ 18 世紀以降、その数量的把握が王国全体を対象に大規模に実施されていた地域である。そのため、前近代ジプシー研究にとって、この地域を対象とすることは、史料的な側面で大きな恩恵を

¹² 例えば、レック、前掲書；フランツ・イルジグラー/アルノルト・ラゾッタ著『中世のアウトサイダー(新装版)』藤代幸一訳、白水社、2005 年。AMMERER, Gerhard, *Heimat Strasse: Vaganten im Österreich des Ancien Regime* (Wien: Verlag für Geschichte und Politik, 2003)。

¹³ 例えば、以下を参照。ACHIM, Viorel, *Roma in Romanian History* (Budapest: Central European University Press, 2004); MRÓZ, Lech, *Roma-Gypsy Presence in the Polish Lithuanian Commonwealth: 15th-18th Centuries* (Budapest/New York: Central European University Press, 2015)。

¹⁴ VERMEERSCH, Peter and RAM, Melanie H., “The Roma”, RECHÉL, Bernd, *Minority Rights in Central and Eastern Europe*, 61-62.しかし、上掲の論文において参照された値はあくまで研究者による見積もりであり、公式の国勢調査において自らをロマであると回答した人々の数はより少数である。例えば、2005 年から 2006 年にかけてなされたフランスの社会人類学者ジャン・ポール・リエジョアによる見積もりによるとハンガリーには約 60 万人程度のロマが居住していることになっていたが、それ以前で直近のハンガリーの国勢調査(2001)において、自らをロマであると回答した人々の数は約 194000 名であった。ハンガリーにおける最新の国勢調査(2011 年)の結果によると、その数は、約 309000 名に増加しているものの、60 万という数には達していない。このような見積もりのズレが現れる原因は、研究者による見積もりと自己申告という調査方法の違いに求められる。とりわけ、研修者の見積もりにおいては、自らをロマであると公言していても周囲からそうに見なされている人物もロマとして扱われていること、並びに自己申告においては、ロマ自身が差別などを避けるために自らのアイデンティティを隠しているという可能性があり、それらによってズレが広がっているとの指摘がなされている。ハンガリーにおける全体の人口はむしろ減少傾向にあるにもかかわらず、10 年おきに行われた 2 度の国勢調査の間にロマ人口が約 10 万人増加したことも、後者の仮説を裏付ける根拠となりうる。増加の原因としては 2000 年代のハンガリーにおける差別是正の取り組みやロマ/ツィガーニ・アイデンティティ普及運動の一定の成功という要素が考えられている。FLECK Gábor és SZUHAY Péter (összeáll.), *Kérdés és Válaszok a cigányokról* (Budapest: Napvilág, 2013), 13-15.

¹⁵ KRISZTÓ Gyula, *Nem magyar népek a középkori Magyarországon* (Budapest: Lucidus, 2003), 245-247.ハンガリーにおける、その出現時期をめぐることは、現在においても議論が存在するが、本論文ではこの点には立ち入らない。TÓTH Péter, “A cigányok megjelenése a középkori Magyarországon”, MÁRFI Attila (szerk.), *Cigánysors: A cigányság történeti múltja és jelene I.* (Pécs: A cigány kulturális és közművelődési egyesület, 2005) (以下、*Cigánysors I.*), 15-19; NAGY Pál, „Faraó népe”: *A magyarországi cigányok korai története (14.-17. század)* (Pécs: Pécs Tudományegyetem, Bölcsészettudományi Kar Neveléstudományi Intézet Romológia és Nevelésszociológia Tanszék, 2004), 7-29.

期待できる。また、ハンガリーのツィガーニを取り上げることで、ある程度の相対化が進みつつあるとはいえ、従来、構築主義的な研究のみならず、実証的な地域史の研究成果においてもツィガーニの「犯罪化」や「迫害」の観点を強調しがちであり、かつ、日本におけるロマ/ジプシー史の認識に依然として大きな影響を与えているドイツにおけるジプシー史研究(=「ツィゴイナー(Zigeuner)」史研究)の視点をより広い視野の中に位置づけ、比較史的にとらえ直すきっかけを見出すことができるかもしれない¹⁶。

話題をハンガリーの前近代ツィガーニ史研究に戻すと、ナジの研究は、各地に残された断片的ながら膨大な史料に基づいて、中世後期から 19 世紀前半まで、時代ごとによって変わって行くツィガーニと周囲との関係性に対して大まかな像を提示したことにとどまらず、特定の時代の中でもツィガーニの状況や周囲との関係性にはある程度の地域差、多様性が存在していたことを明らかにし、単一、均質、一直線に語られがちな歴史観を批判した点に大きな意義がある。

ナジの議論のさらなる特徴は、社会学、文化人類学の議論などを援用しつつ、ツィガーニを周囲の社会とは異なる生活形態(それは、彼の議論においては「物乞い共同体(mendikációs közösség)」という言葉で表現される)、ならびに「文化サイクル(kulturális ciklus)」を有する人々と捉え、また、その歴史をこの人々が周辺社会との接触を通じて「文化変容(akkulturáció)」を遂げていく、(現在においても終わることのない)長期的な過程として大局的に捉えたことである。ナジによれば、その中でも 17 世紀末から 18 世紀後半にかけての時期が変容の一つの画期と見なされる。つまり、17 世紀末まで、ハンガリー各地の地域社会とツィガーニの間には、周囲と異なるツィガーニの生活形態を一定程度保証・尊重しつつ、その生活形態から生じる利益を享受する、あるいは需要がなければ排除するという関係が成立しており、ツィガーニの「文化変容」の内容や度合いは接触した地域社会の要請に応じて、様々でありえた。他方、17 世紀末以降、ハプスブルクとオスマンの戦争状態が終結し、ハンガリー王国がハプスブルクの権力下へ統合されたことを機に、ツィガーニに対しても、地域のみならず国家の規制が施行されるようになっていく。そのような諸措置の中で、18 世紀中葉以降、ツィガーニたちは、従来広く見られた移動を前提とした生活形態を禁止されるとともに、定住的な生活形態への変化を促進され、それに応じて、各地のツィガーニの生活には、急速な変化が実際に様々な形で生じていく。その過程において一部で観察しうる極端な変化を、ナジは「ツィガーニのガジョー化(Gádzsósodás)」、そして「ガジョーのツィガーニ化(cigányosodás)」という言葉で表現する。ガジョー(gádzsó/gadzó)とはロマニ語において「ロマ以外の人々」を示す概念だが、「ガジョー化」とは、ツィガーニを取り巻く周辺社会に属する人々が美德とする生活様式、価値観をツィガーニが身につけていき、最終的に周囲からツィガーニと見なされなくなっていく現象を指している。反対に「ツィガーニ化」とは元々ツ

¹⁶ ドイツにおけるロマ/ジプシー研究の影響を受けた研究としては、例えば、金子、前掲書；同、前掲論文；小川、前掲書など。ただし、上で提起したドイツ語圏の状況との比較史的研究についての本格的な試みは、今後の課題とせざるを得ない。20 世紀後半以降のドイツにおける前近代「ツィゴイナー」史研究の簡潔な動向整理は以下を参照。HIPPEL, Wolfgang von, *Armut, Unterschichten, Randgruppen in der frühen Neuzeit* (München: Oldenbourg, 2013²), 41-44, 100-101, 123-124.

ィガーニとは見なされていなかった人物が、ツィガーニとの接触、その生活形態の受容などを通じてツィガーニの範疇で捉えられるようになっていくプロセスを指す¹⁷。この議論が示すように、ナジは前近代におけるツィガーニという枠組みを、社会・経済・文化的な状況変化によっては、それを捨てることが可能であり、また誰もがそうなりうる社会的カテゴリーとして柔軟に捉えており、また、15 世紀から 19 世紀までの長期的な視点から見た場合、血統に基づく連続性を必ずしも想定しない姿勢も、暗示的にはあるが見て取れる。事例の少なさから一般化は避けているものの、そのような点では彼の議論は構築主義とも親和性を持つ¹⁸。

ナジの以上のような「文化変容」理論は、—「ガジョー化」、「ツィガーニ化」の議論については、実証的なデータのさらなる集積や理論的彫琢の必要性があると感じられるものの、様々な種類の史料の渉獵に支えられており、当面の大きな枠組みとしては妥当性の高いものと思われる。また、主にハンガリーの知識人の記述や研究書などに表出するツィガーニ・イメージの長期的分析を行ったドゥプチュク・チャバによると、18 世紀は、ツィガーニに関する語りに変化が生じ、それまでほとんどの語りにおいて主流であった「治安維持的」アプローチに加えて、「文明化論的」アプローチが登場し始める時代として位置づけられるが、このような構築主義的な研究成果とも、ナジの「文化変容」論の時期区分は符合している¹⁹。

ただし、ナジや、より小規模ながら多くの点で彼と同様の議論を展開する同世代の歴史家トー

¹⁷ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában* (Kaposvár: a Csokonai Vitéz Mihály Tanítóképző Főiskola Kiadója, 1998); idem, „„Kicsinségemben elszakattam”: cigány közösség, szocializáció, és gyermekesors Magyarországon a 16-19. században”, *Educatio*, 1999-2. (Budapest, 1999), 320-338; idem, „Levágott ujjak, megsebzett arcok: Magyarországi cigány emberek különös testi jegyei a 18-19. században”, FORRAY R. Katalin (szerk.), *Ciganológia – Romológia* (Budapest – Pécs: Dialóg Campus, 2000), 89-126; idem, „Faraó népe”: *A magyarországi cigányok korai története (14.-17. század)* (Pécs: Pécs Tudományegyetem, Bölcsészettudományi Kar Neveléstudományi Intézet Romológia és Nevelésszociológia Tanszék, 2004); idem, „A magyarországi cigányság története a 16 -19 században”, FORRAY R. Katalin (szerk.), *Ismeretek a Romológia az alapképzési szakhoz* (Pécs: Pécs tudományegyetem Bölcsészettudományi Kar Neveléstudományi Intézet Romológia és Nevelésszociológia Tanszék, 2006), 37-55; idem, „„Gádzsósodás – cigányosodás.” Akkulturáció és parasztosodás a cigányok magyarországi történetében”, *Amaro Drom*, 17. évf. 2. sz. (Budapest, 2007), 21-22.

¹⁸ 現代を対象とした文化人類学や社会学の成果においても、「ロマ/ツィガーニ」であることの基準の曖昧さや、「ツィガーニ」と「ガジョー」との境界は確固たるものではなく、ある人が社会認識上、両者の境界を行き来する(/させられる)ことは不可能ではないことが指摘されている。PRÓNAI Csaba, „A kulturális antropológiai cigánykutatások rövid története”, *Magyar Tudomány*, 1997-6 (Budapest, 1997), 729-740; DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatások tükrében*, 16-17.

¹⁹ ドゥプチュクが提示したツィガーニ・イメージの 6 類型において、「治安維持的」アプローチと「文明化論的」アプローチはともに、ツィガーニを後進的で、適応能力がなく、周囲の価値観から見て逸脱した存在としてネガティブに捉え、これらの人々を抑制、監督、統制することが必要だと考える立場を代表する。両者のアプローチの違いは、前者が、ツィガーニやその「逸脱性」を固有の文化や「人種」と結び付け、その性質を静態的で、変化しない固定的なものと思なす一方で、後者はツィガーニの「後進性」や「逸脱性」は、主流社会の価値観に沿って変化・「改善」させることが可能であり、またそうなるべきであると捉えている点にある。ドゥプチュクの指摘によれば、ハンガリー社会におけるツィガーニ・イメージは、18 世紀後半から 20 世紀後半にかけて、「治安維持的」アプローチを並存させつつ、「文明化論的」アプローチが優勢であったという。DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatások tükrében*, 19-26.

ト・ペーテルらは、ツィガーニに関連する史料の発掘、公開を研究の主眼に置く傾向があったため、ツィガーニとは関連しない(と彼らが見なした)史料や研究蓄積、とりわけ地域的な文脈を説明しうる情報への関心はそれほど高くない²⁰、その結果、彼らの研究では、ツィガーニの多様性を規定しえた地域的な個別事情が語られることは稀である²¹。この批判は、ハンガリーでは比較的蓄積のある特定地域を対象にした個別研究一般に対してさえ、多くの場合適用できる²²。

無論、上記の関心にも目配りがなされた研究がないわけではない。例えば、ノーグラード県の1770年代のツィガーニ帳簿を検討したソムセード・アンドラーシュの論文では、県内各郡の地域構造を背景とした分析が行われている。例えば、ロションツ郡は記録されたツィガーニの数が最も少ない郡だったが、ソムセードはその理由について、この郡内には農地に適した土地が少なく、住民も自然採取物の加工で主な生計を立てていたことにより、農具の修復や農地への入植など、当時ツィガーニに対して存在しえた需要が比較的生じにくかったためである、と分析する。

²⁰ TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában* (Budapest: Bölcsész Konzorcium, 2006). ナジが2000年代以降精力的に行っている史料刊行の成果としては、例えば、後述の註29を参照。

²¹ 以下の本文でも何度も言及するように、ナジには18世紀の市場町シクロシュ、トートには同じく18世紀の市場町ミシュコルツのツィガーニをそれぞれ扱った地域史的な研究が存在し、当地のツィガーニ研究に関する基礎的なデータを豊富に提供してくれているが、これらの市場町が18世紀当時に置かれていた状況への概説的言及は、ほとんど行われない。ただし、ナジについては、ツィガーニ史を地域史とより深く接合させることを必要だと認識していることも付言しておく。NAGY Pál (szerk.), *Források a siklósi cigány múltjából (1721-1830)* (Szekszárd: Romológia Kutatóintézet, 2003), 8.

²² 例えば県やより狭い範囲を対象とする統計史料を用いた研究は、近年まで断続的に刊行されているが、多くの研究において、ツィガーニに関する統計のみを利用する傾向にあり、そこで得られた成果をそれ以外の地域住民に関する諸データと比較するなどの視角はあまり見られない。MÉSZÁROS László, “Bács-Kiskun megyei cigányságának történetéhez (Az 1768-as cigányösszeírás népesség statisztikai-demográfiai adatai)”, *Bács-Kiskun Megyei Múltjából*, I., (Kecskemét, 1975), 133-143; MÓRÓ Mária Anna, “Mária Terézia cigány-rendeletei és a Baranya megyei cigányösszeírások 1775-1779”, *Baranyai helytörténetírás* 1978 (Pécs, 1979), 205-302; BODÓ Béla, “Cigányok A XVIII. századi Szabolcs vármegyében”, *Krónika*, Újfolym I. Évf. 1. Sz. (Pécs, 1987), 167-186; SZOMSZÉD András, “A nógrádi cigányság története az összeírások tükrében (17. sz. második felétől a 19. sz. közepéig)”, *A Nógrád Megyei múzeumok Évkönyve*, XIII. (Salgótarján: 1987), 157-207; BAGI Gábor, “Cigányok a Jászságban 1768-ban”, *Jászsági évkönyv* 1996 (Jászberény, 1996), 103-115; P. KOVÁCS Melinda, “Cigányok Egerben a XVIII. században”, CSIFFÁRY Gergely (szerk.), *Historia est... (Írások Kovács Béla köszöntésére)* (Eger: Garamond kiadványszerkesztő Stúdió/ Heves Megyei Levéltár, 2002), 279-287; BÓDI Zsuzsanna, “Egy 18. századi magyarországi cigány összeírás: Tények és következtetések”, BÓDI Zsuzsanna (szerk.), *Romanothon* (Budapest: Magyar Néprajzi Társaság, 2004), 25-52; DOMINKOVITS Péter, “Cigányösszeírások Sopron vármegyében, a 18. század második felében (Egy tematikus repertórium előmunkálatai az 1770-es években)”, *Cigánysors* I., 51-69; HAZAG Ádám, “Adalékok a 18. századi Magyarország cigányságának életéről a Szepes vármegyei cigányösszeírás tükrében”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XLIV. (Miskolc, 2005), 227-236; idem, “Cigányösszeírások statisztikai elemzése az északkelet-magyarországi régióban”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XLVII. (Miskolc, 2008), 802-813; idem, “Borsodi források cigányokról a 18. század második felében”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XLVIII. (Miskolc, 2009), 97-108; SCHLEININGER Tamás, “A solti járásban letelepedett cigány családok összeírásai Mária Terézia korában”, BÁRTH János (szerk.), *Szavak Szívárványa* (Baja - Kecskemét: a Bács-Kiskun Megyei Önkormányzat Muzeumi Szervezete/ a Bács-Kiskun Megyei Nemzetiségi Alapítvány, 2006), 51-81; TÓTH Péter, “Az 1768. évi cigányösszeírás a Jászságban”, *Zounuk: a Szolnok Megyei Levéltár évkönyve*, 26. sz. (Szolnok, 2011), 443-464; TÜRKE Gábor, “A Romák helyzete Pest-Pilis-Solt vármegyében a 18. században”, *Tanulmányok Pest megye múltjából*, IV. (Budapest, 2012), 69-83.

一方、県内最大の農業地域であるセーチャーニ郡では多い年には郡内集落の約 80%にツィガーニの居住が記録されたが、ソムセードはツィガーニの鍛冶仕事への農民層の需要が郡内に多く存在したことにその原因を求めている²³。また、ショプロン県の貴族所領内の 1 村落で起きた、ツィガーニが被害者、加害者の両方として関与した数度の暴力事件の経過とその背景の説明を試みたドミンコヴィチ・ペーテルの研究は、地域史との接合により自覚的な試みと言える。ドミンコヴィチは、事件関係者である貴族たちの村落内・村落間ネットワーク、あるいは県レベルでの影響力などの情報に注目しつつ事件の全体像を再構成し、その結果、この暴力事件が村落内の有力貴族と下級貴族間で生じた村内の共同利用地をめぐる紛争という文脈の中で起こった出来事であったことを明らかにした²⁴。彼の試みは、ツィガーニと関連した個々の事件において、ツィガーニと関わりを持った周囲の人々とは具体的に誰であり、どのような背景の下でその出来事が発生したのかを明示した模範的なケーススタディとなっている。このような研究がすでになされているとはいえ、それらはいまだ例外の域を出ていない。前近代ツィガーニ史の現状においては、ナジが包括的に提示した、多様でありえた各地のツィガーニの特徴を地域的文脈と結び付けて検証する作業がいまだ十分に進展してはいないのである。

この問題を踏まえて、ツィガーニに関連する史料を地域史の研究成果にも照らし合わせて検討することは、従来の研究史上の間隙を埋めるのみならず、ナジが提示した「文化変容」論の大枠に対する追試としての意義をも持つだろう。そこで本研究では、ナジの議論においてツィガーニの「文化変容」の傾向に変化が生じる時期と見なされる 18 世紀、そして、中でも著しい変化が同時代人によっても指摘されていた市場町ミシュコルツ(Miskolc)のツィガーニに具体的な対象を限定し²⁵、同地における変化の内実、特徴を時代的、地域的な文脈とも関連付けながら跡付けることを目的として議論を進めていく。

ミシュコルツを取り上げるメリット、例えば従来の構築主義的なアプローチでは見えて来ない以下の点に考えを及ぼせる史料を利用できる点にもある。構築主義的ロマ/ジプシー研究においては、あくまでジプシーは認識枠組みであり、過去におけるジプシーに関する情報は、一それが単一にせよ、多様にせよ、特に現在において確固たるものとして認識される特定のロマ/ジプシー・イメージを相対化するために利用される傾向がある²⁶。そこで重要視されるのはあくまでジプシーというレッテルであり、そのレッテルを張られた個々人がどのような人々であり、どのような生をたどったのかに研究者の関心が向くことはほとんどない。これはもちろん、史料制約に起因するところも大きいと思われる。他方で、本論文が検討する時期のミシュコルツにおいては、先行研究の情報や従来未使用であった帳簿史料から、同地のツィガーニの連続性・断絶

²³ SZOMSZÉD András, “A nógrádi cigányság története az összeírások tükrében”, 165-171.

²⁴ DOMINKOVITS, Péter, “Ellentétek közepében: cigányok a felsőbüki közbirtokosok konfliktusában a 18. század derekán”, MÁRFI Attila (szerk.), *Cigánysors: A cigányság történeti múltja és jelene II.* (Pécs: A cigány kulturális és közművelődési egyesület, 2009), 23-34.

²⁵ とりわけ 18 世紀後半におけるミシュコルツのツィガーニの変化については知られてきた。このトピックについては、従来の評価も含めて第 6 章で論じる。

²⁶ OBLATH Márton, “A „cigány” kategória diskurzív és történeti rekonstrukciója”, *Anthropolis* 3. Évf. 1. sz. (Budapest, 2006), 51-60.

を、特に 1750 年代から 1780 年にかけて、一定程度再構成することが可能であり、また、複数の個々人の動向についても参事会の議事録、請願書、裁判文書などの史料から確認可能であるため、個々人について徹底的に詳述することは困難だとしても、上述の問いに対しても取り組むことができる。また、構築主義的観点から言えば、これらの地域レベルの史料を調査することによって、ツィガーニという枠組みに対する周囲の視線が、そのレッテルの対象であり続けた個々人の動向をどのように捉え、またそのまなざしがどのように変化していくのか、という点に考えが及ぼせるのである。

使用史料については、各章において適宜説明を加えるが、ここで主なものについて簡単に述べておきたい。本論文では、主に、ブダペシュトのハンガリー国立文書館²⁷、そして国立ボルショド・アバウーイ・ゼムプレーン県文書館²⁸所蔵の未刊行史料、ならびにメゼイ・バルナ、ナジ・パールらによって編纂されたツィガーニ関連文書集²⁹、あるいはバルシ・ヤーノシュやトート・ペーテルの手によるボルショド県やミシュコルツの条例集、レーミアーシュ・ティボルの著作に収録された 18 世紀後半のミシュコルツ住民調査といった刊行史料³⁰、さらにナジやトート、その他の多くの研究者による、18 世紀ツィガーニ史研究、あるいは、ドブロッシ・イシュトヴァーン監修による大部の通史シリーズの第三巻³¹をはじめ、18 世紀の市場町ミシュコルツの様々な側面を対象とする諸研究に大きく依拠しつつ、議論を展開する。中でも重要な位置を占めるのが、同地で居住するツィガーニを定期的に登録したツィガーニ帳簿³²、ツィガーニの法的地位を規定した政令、条令などの法制史料³³、18 世紀前半のミシュコルツにおけるツィガーニの経済活動に

²⁷ Magyar Országos Levéltár (以下、MOL).

²⁸ Borsod-Abaúj-Zemplén Megyei Levéltár (以下、BAZML).

²⁹ MEZEY Barna (szerk.), *A magyarországi cigánykérdés dokumentumokban 1422-1985* (Budapest: Kossuth kiadó, 1986) (以下、MCD); NAGY Pál (szerk.), *Cigányperek Dél-Dunántúlon. 1796-1847* (Szekszárd: Romológiai kutatóintézet, 2001); idem (szerk.), *Cigányperek Magyarországon. II rész: Korai perek (1715-1758)* (Pécs: Pécsi Tudományegyetem Bölcsészettudományi Kar Romológia Tanszék, 2002); idem (szerk.), *Források a siklósi cigány múltjából (1721-1830)* (Szekszárd: Romológiai Kutatóintézet, 2003); idem (szerk.), *Cigányperek Magyarországon (1758-1787)* (Szekszárd: Kerényi, 2003); idem (szerk.), *Források a magyarországi cigányság történetéből 1758-1999* (Gödöllő: az Emberi Erőforrások Fejlesztése Alapítvány, 2011).

³⁰ TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok 1573-1755* (Miskolc: BAZML, 1981) (以下、*Miskolci statútumok*); TÓTH Péter és BARSÍ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai 1578-1785* (Miskolc: BAZML, 1989) (以下、*Borsod vármegye statútumai*); RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalmi: feudális kori összeírásai alapján* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, BAZML és Bíbor kiadó, 2004), CD-melléklet.

³¹ FARAGÓ Tamás (szerk.) [DOBROSSY István (Főszerk.)], *Miskolc története III. 1.-2. köt. 1702-1847-ig* (Miskolc: a Nemzeti Kulturális Örökség Minisztérium / BAZML / a miskolci Herman Ottó Múzeum, 2000) (以下、MT III.).

³² ツィガーニ帳簿を利用した主な研究については、註 22 を参照。

³³ 法制史料は例えば以下の研究で利用されている。SZABÓ László, “Mária Terézia 1760/1761-es cigányrendelete a Jászságban”, *Jászkunság*, 12-3. (Jászberény, 1966), 125-131; VISSZ Szusanna, “A cigánykérdés – 200 éve”, *Új forrás: Komárom megyei antológia*, 13-1 (Tatabánya, 1973), 85-92; TÓTH Péter, “Borsod vármegye tervezete a cigányok szabályozására 1784-ből”, *A miskolci Herman Ottó Múzeum Közleményei*, XXVI. (Miskolc, 1989), 63-67; idem, “Mária Terézia cigánypolitikája”, *Cigánysors* I., 39-44; BANA József, “Győr város kísérletei a ciányok megrendszabályozására 1746-ban”, *Cigánysors* I., 33-38.

も言及のある『市場町会計報告書(以下、会計報告書)』、ミシュコルツの統治権力である参事会とツィガーニたちの様々な関わりについての記録が引き出しうる『市場町参事会会議議事録(以下、参事会議事録)』³⁴、ツィガーニたちの経歴や日常生活の詳細な情報、自己認識やその他の価値観などを引き出すことが可能な裁判文書や請願書などである³⁵。前者2点は、ミシュコルツのツィガーニたちの状況や社会的地位をマクロな視点から把握することを可能にし、後者はよりミクロな視点から彼らの姿に迫るための重要な情報を引き出せる。

最後に、本論文が取り扱う18世紀ハンガリー王国という時間・空間が歴史的にどのような場であったのかについて、手短に概観しておこう。1526年のモハーチの戦いの後、中世ハンガリー王国の領域はハプスブルクとオスマンの両帝国、そしてトランシルヴァニア侯国の間で分裂し、17世紀末まで戦場となっていた。1699年のカルロヴィッツ条約によって約150年に渡る対オスマン戦争をひとまず終了させ、旧オスマン領の大部分、並びにトランシルヴァニア侯国を統治下に置くこととなったハプスブルク家の下で、ハンガリー王国は、大きく領域を拡大し、18世紀において、国制上の大きな変化を経験していくこととなる。18世紀初頭のハンガリーでは、戦争によって荒廃した領域の状況改善や国家制度の再編を急務とした。その状況を背景として、ラーコーツィ・フェレンツ2世を指導者に頂く反ハプスブルク蜂起を鎮圧した後の18世紀前半の国家運営においては、ハプスブルク家の国王カーロイ3世と貴族層を中心とする政治代表者たる王国諸身分との間の協調関係や均衡状態が重視されていたが、世紀半ばのプロイセンとの2度の戦争を経た女王マリア・テレジア(Maria Theresia)とその息子のヨーゼフ2世(Josef II.)の統治時代に至って、ハンガリー王国は、統治領域に対して中央集権化を志向するウィーン宮廷主導の「啓蒙絶対主義」改革の範疇へと徐々に組み込まれて行った。この改革によって経済、教育、軍事、衛生、福祉など、様々な分野において国家の管轄範囲が拡大していく過程で、身分制的王国議会の長期的閉会、修道院やイエズス会の解散、ギルド資格の厳密化、プロテスタントへの寛容やユダヤ教徒の解放、「農奴解放」など、社会の様々なレベルにおいて、ハンガリー王国内の社団的特権が再編された。その結果、非常に単純化すれば、王国議会における立法権を停止された貴族身分や、解散と財産没収によって王国内での影響力を失った修道院の一部、貿易特権のはく奪に曝されたオスマン帝国臣民の「ギリシャ人」商人層など、ある者たちは従来の社会的優位を削減

³⁴ 他地域の参事会議事録は以下の研究で利用されている。IVÁNYOSI-SZABÓ Tibor, “Adatok a Cigányok Kecskeméti Történetéhez (1596-1850)”, *Bács-Kiskun Megye Múltjából* XIII. (Kecskemét, 1993), 7-55.

³⁵ 裁判文書は例えば、以下の研究で利用されている。HÖGYE István, “Adatok a Zemplén megyei cigányság XVII-XVIII. századi történetéhez”, *A Miskolci Herman Ottó múzeum közleményei*, XXII. (Miskolc, 1984), 39-47; HAJDU Lajos, *Büntett és büntetés Magyarországon XVIII. század utolsó harmadában* (Budapest: Megvető Könyvkiadó, 1985), 119-128; SOÓS István, “Cigányper Sopronban (Adalékok Sopron és a cigányság XVIII. századi kapcsolatához) I. rész”, *Soproni Szemle*, 41-3. (Sopron, 1987), 225-236; idem, “Cigányper Sopronban (Adalékok Sopron és a cigányság XVIII. századi kapcsolatához) II. rész”, *Soproni Szemle*, 41-4. (Sopron, 1987), 320-329. 『会計報告書』、請願書を主たる史料として利用した研究は管見の限り存在しないが、請願書の断片的な利用であれば例えば、以下の研究がある。TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon a 18. század közepén”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XXX-XXXI. (Miskolc, 1993) (以下、Cigányok Miskolcon), 212; NAGY Pál, “„Kicsinségemben elszakattam””, 333.

され、また公職に就くことが可能となったプロテスタント、王国自由都市への移住・商業への従事が可能となったユダヤ教徒など、ある者たちは社会的上昇の機会をつかんでいくこととなる。最終的にヨーゼフの改革はハンガリーやその他の諸領邦の特権諸身分などの大規模な抵抗・蜂起、ならびに対オスマン戦争、フランス革命の勃発などの対外問題にともない頓挫することとなるが、この時代にハンガリー王国の様々な社会集団が変化を経験したことは事実である³⁶。以下の各章で詳述するツィガーニたちをめぐる変化もこのような流れの中に位置づけることは可能であろう。このような改革的潮流の中で、従来、県などの地域的中間団体に裁量権のあったツィガーニの統制に関しても、中央の影響力は増大していくことになる。より短い期間の出来事や、個別のトピックについては、本論文のテーマと関連する限りにおいて、各章において取り扱う。

ここまでで設定した目的を果たすために、以下 6 章に渡って議論を展開する。第 1 章では、場としての 18 世紀ミシュコルツの特徴を概観する。次いで第 2 章では、18 世紀においてツィガーニの活動を規定する地域的な条例や国家の政令が検討される。3 章、4 章では、それぞれ、18 世紀前半のミシュコルツにおけるツィガーニ鍛冶師の活動、18 世紀中葉以降のミシュコルツのツィガーニの人口動態と空間的分布を検討する。また、第 5 章では、18 世紀中葉のミシュコルツのツィガーニ共同体、ならびに、その指導者と位置づけられうる頭領が有した機能、およびその変化を祖上に載せ、第 6 章では、主に 18 世紀後半の史料から、ミシュコルツにおけるツィガーニの「同化」という現象を、当時のツィガーニの様々な行動から読み解いていく。これらの検討を通じて、ミシュコルツにおいてツィガーニの「文化変容」が生じる諸条件を考察し、また、この時に生じた変化が「文化」にはとどまらないことをも指摘することになるだろう。

³⁶ KOSÁRY Domokos, *Újjáépítés és Polgárosodás 1711-1867* (Budapest: Háttér, 1990), 31-35, 40-46, 150-157; BARTA János, ifj., *A tizennyolcadik század története* (Szekszárd: Pannnonica, 2000); KATUS László, “Magyarország a Habsburg Monarchiában (1711-1918)”, ROMSICS Ignác (Főszerk.), *Magyarország Története* (Budapest: Akadémiai Kiadó, 2007), 519-538; H. バラージュ、エーヴェ著『ハプスブルクとハンガリー』渡邊昭子、岩崎周一訳、成文社、2003 年；秋山晋吾「近世東欧の交易ネットワークとその担い手たち—18 世紀ハンガリーとバルカン商人—」『東欧史研究』38 号、2016 年、67-72 頁。

第1章 市場町ミシュコルツ

本章では、本論文の主たる舞台となる18世紀のミシュコルツという場について、基本的な情報を整理しておきたい。

ハンガリー王国北東地方の一県、ボルショド県(Borsod vármegye)は、ハンガリー大平原の北端とカルパチア山脈が接する地域に位置しており、その中部に置かれた市場町³⁷ミシュコルツ(Miskolc)は、南北、両方の地域に開かれた都市集落³⁸として地理的に通商上の有利な条件を備えていた[地図①]³⁹。この集落は中世末期の1514年に国王所領ディオージュール(Diósgyőr)の一部として「国王市場町」の地位と同時に、定期市開催の特権を獲得したことにより、流通の中継地、集積地としての性格を強め、その後、県の中心としての機能を持つようになった⁴⁰。しかし、一方で16世紀前半に生じた中世ハンガリー王国の分裂の結果、ミシュコルツはハプスブルク下のハンガリー王国、オスマン帝国征服地、トランシルヴァニア侯国の3勢力の境界地域に位置することとなったため、流通の中継点としての機能を維持しつつも、その他の境界地域の集落同様、戦乱の危険や複数勢力からの多重の税負担にさらされることとなる⁴¹。また当時、ハプス

³⁷ 市場町(mezőváros/oppidum)とは、領主権の下にある集落の一形態で、定期市開設権、租税徴収権、条例制定権など様々な特権を領主から獲得した集落のことを指す。その住民の法的身分は、領主権下の集落であり、特権の有無などの点から区別された村(falu/villa)と同様に、貴族をはじめとする領主に法的、財政的に従属する存在としての農奴身分(jobbágy/rusticus, iobagio)であった。このような法的な位置づけにおいて、市場町やその住民は、領主支配を受けず、王国議会にも単体で代表を送ることができた都市集落、王国自由都市(szabad királyváros/civitas)やその住民であった市民(polgár/civis)とは一般的に区別されていたが、大小さまざまな領主所領の中心地として機能した市場町の内実は多様であり、中には特に近世において商業、手工業、学問の中心地として、平均的な王国自由都市をはるかにしのぐ規模に発展するものも見られた。後述のように、ミシュコルツもそのような大規模な市場町の一つである。MEZEY Barna (szerk.), *Magyar Alkotmánytörténet* [5., átdogozott kiadás] (Budapest: Osiris, 2003), 170; 飯尾唯紀『近世ハンガリー農村社会の研究——宗教と社会秩序』北海道大学出版会、2008年、11-15頁。秋山晋吾「農村と地方都市」大津留厚、水野博子、河野淳、岩崎周一編『ハプスブルク史研究入門—歴史のラビリンスへの招待—』昭和堂、2013年、73-80頁。

³⁸ 前近代のハンガリーにおいては、「都市/街(város)」という語は法的な都市身分、すなわち、王国自由都市を指す狭い意味で用いられることも少なくなかった。しかし、この város という表現自体は、18世紀の史料において、後述のごとく「国王の市場町」、すなわち農奴身分にあったミシュコルツに対しても用いられおり、また、近年の都市史研究の動向においては、人口規模や経済、学術、信仰などの要素における中心的機能といった法的身分以外の要素に、分析概念としての「都市」の基準を求める傾向が一般化している。そのため、本論文においては、都市身分を持たない市場町ミシュコルツに対しても、その人口規模や中心機能を考慮して、より小規模の村落と区別された「都市的な集落」という意味合いで都市という表記を用いる場合もある。また、法的な都市身分については、常に王国自由都市と表記する。近世・近代ハンガリー史の都市概念に関しては、以下を参照。FARAGÓ Tamás, “Miskolc az ország településrendszerében és a XVIII. század eleje és a XIX. század közepe között”, MT III. 2. köt, 967-970; Bácskai Vera, *Városok Magyarországon az iparosodás előtt* (Budapest: Osiris, 2002).

³⁹ VERES László és NÉMETH György “Iparfejlődés”, MT III. 1. köt, 324-325; FARAGÓ Tamás, “Miskolc az ország településrendszerében és a XVIII. század eleje és a XIX. század közepe között”, MT III. 2. köt, 966; RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 12.

⁴⁰ RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 11.

⁴¹ SZAKÁLY Ferenc, “Miskolc helye Magyarország török kori település- és gazdasági rendszerében”,

ブルク家領ハンガリー王国の国王財産管理機関ハンガリー財務局(Magyar kamara)の一部局であり、北東部の国王所領を管轄していたセペシュ財務局(Szepesi kamara)は、戦費調達のためディオーシュジェール所領を抵当に入れた。その結果、所領の一部としてミシュコルツは 1536 年から 1703 年の間、ハッレル家、ニャーリ家、ボッシャーニイ家、チェルネル家、ドゥーリ家、セペシュ家など複数の抵当領主(zálog birtokosok)によって分割されることとなった⁴²。このような領主たちから要求される負担が過重であったことから、オスマン撤退後の 1702 年にハッレル家の抵当領主の所有権が失効した際に、ミシュコルツ参事会を中心としたミシュコルツ内の富裕住民層は、皇帝軍の司令官などからの借金に頼りつつも、財務局が要求する額 41000 フォリントを支払うことで、市場町の「買戻し(megváltás)」を行い、その他の領主からの「買戻し」も完了した結果、ミシュコルツは 1703 年に、いかなる貴族の領主権からも期限付きで自由となった⁴³。

「買戻し」と前後して、ラーコーツィ・フェレンツ 2 世(Rákóczi Ferenc II.)の反ハプスブルク蜂起が勃発し、ハンガリー王国全土に広がりを見せるが、その際、ミシュコルツは買戻し状態の維持を認めたラーコーツィ側に加担することとなった。戦争初期におけるラーコーツィの拠点の一つとして、兵員供出や給養など多くの負担を担ったミシュコルツ住民だったが、1706 年にラブティン・デ・ブッシィ(Rabutin de Bussy)将軍率いる皇帝軍による攻撃を受けたことで、都市の大部分を破壊され、多くの住民が死亡、あるいは避難した⁴⁴。1709 年から 1710 年にかけて流行したペストがそれに追い打ちをかけた。この伝染病によって、当時多くとも 5000 人程度だったと思われるこの都市の人口のうち、3600 人程度が死亡したという⁴⁵。最終的には、ラーコーツィ戦争が終結した 1711 年以降もミシュコルツは国王側から「買戻し」の状態を保証されたものの、一連の被害と混乱の結果、この都市はすぐには回復できないほどの打撃を被ることとなった⁴⁶。ミシュコルツの「短い 18 世紀」は、このような「後退」とともに始まる。

しかし、ミシュコルツはその後 18 世紀を通じて、様々な変化、発展を経験することとなる。いくつかの観点から、その変化を確認しておきたい。

まず、ミシュコルツの身分上の変化とそれに伴う統治上の変化に目を向けよう。上述のように、1702 年から 1703 年にかけて、「買戻し」によって貴族支配からの自由を獲得したミシュコルツは、その後 1731 年と 1744 年にハンガリー財務局に対して追加の「買戻し」を繰り返し、結果として約半世紀間、1755 年まで自律的な体制を維持した。この期間のミシュコルツは、公共業務の組織や都市条例の制定・執行などの行政、課税や徴税、会計などの財政、そして都市内の司法実践といった都市統治に関する諸分野において広範な自治権を認められており、各種案件への

SZAKÁLY Ferenc (szerk.) [DOBROSSY István (Főszerk.)], *Miskolc története II. 1526-tól 1702-ig* (Miskolc: BAZML/ A miskolci Herman Ottó Múzeum, 1998) (以下、MT II.), 507-529; 飯尾、前掲書、168-169 頁。

⁴² RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 43-45.

⁴³ STIPTA István és TÓTH Péter, “Miskolc igazgatásának és jogéletének jellegzetességei”, MT. III. 2. köt. 697-698.

⁴⁴ RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 51-52.

⁴⁵ FARAGÓ Tamás, “A város népesség”, MT III. 1. köt., 194-95.

⁴⁶ FAZEKAS Csaba, “Miskolc város az országos politikában”, MT III. 1. köt., 7-28.

決定・執行は、「買戻し」負担に貢献した住民自身によって住民の中から選出された首席判事と市場町参事会、その他の官職に委ねられた。参事会には貴族住民も多く参加していたが、参事会が住民に課した課税や公共業務は様々な免税特権を有する貴族も一定程度負担することが求められた。また、ミシュコルツの住民たちは農奴身分として 17 世紀まで課されてきた領主への 9 分の 1 税や賦役奉仕(robot)などからは免除され、他方、酒場の設置、肉の計量、定期市の開催権、ビール、パーリンカ(蒸留酒)の醸造権、塩、タバコ、鉄、コーヒーの販売権など、国王から獲得した様々な国王小用益権(regalék/ király kisebb haszonvételek)を通じて、経済的な利益を拡大することができた。この時、領域内に関わる権利のみに限れば、この時期のミシュコルツは王国自由都市とほぼ同等の権利を有していたとされる⁴⁷。

この状況は 1755 年に大きく変化する。マリア・テレジア即位に伴う契約の再確認という意味合いで、1744 年にミシュコルツがハンガリー財務局に対して追加の買戻し金を支払った際、その金額と引き換えに、次の買い戻しが 32 年後に実施されることが本来取り決められていた。しかし財務局は、1740 年代ごろから、財務局長官グラシャルコヴィチ・アンタル(Grassalkovich Antal)の主導の下、かつて国王所領であった土地の再取得を試みる傾向を見せはじめ、ミシュコルツにも過去の契約見直しを迫った。少なくとも現契約の満了まで現状を維持することを望んでいたミシュコルツ当局は財務局と交渉を行ったが、最終的に 1755 年 8 月 24 日のいわゆる『グラシャルコヴィチ契約』(Grassalkovich-felé szerződés)によってミシュコルツはそれまで享受していた特権の一部を制限されることとなる⁴⁸。行政面では、都市行政ならびに司法業務の筆頭に当たる首席判事の名称が判事に変更された。また、都市主導層の選出に際して、「買戻し」時代にはミシュコルツ住民の意向のみが反映されていたが、今後は財務局の監督者が指名した人物からのみ、住民は判事や参事会員を選ぶことが可能とされた。参事会の管轄可能な範囲も多く変更が加えられた。都市内の行政執行についての権限は残されたものの、都市住民のうち、貴族に対する案件は原則上、管轄範囲から除かれることとなり、貴族への公共の負担を課すことは公的には不可能となった。その一方で、貴族身分の人物も参事会員として都市統治に関わることは否定されなかった。他方、貴族ではない住民に対しては、農奴に対する 9 分の 1 税や賦役の負担が復活し、それらの負担を免れるためには財務局に一定金額を支払う必要が生じた。司法面では、参事会の裁判権は維持されたものの、判決を下せる範囲、裁判開廷の条件、罰の種類や罰金の限度、徴収した罰金のうちの都市当局の取り分などについて明確に規定がなされた。財政面における参事会の権限の縮小は特に著しいものだった。参事会は財務局の許可なく借金をすることが禁じられた。それまでの「買戻し」において、借金に大きく依存していた参事会にとって、この措置は、以前の自律的な身分に戻ることをより困難にした。また、ミシュコルツ内で徴集された税金に関わる最終的な監査権、定期市、並びにワイン産業に関する監督業務の統括、土地の利用に関する指針の策定など、経済、財政に関する多くの権限が参事会の手を離れ、財務局に付随した。

⁴⁷ SZEGŐFI Anna, “Mezőgazdaság-Árútermelés-Piac”, MT III. 1. köt., 278-279 ; STIPTA István és TÓTH Péter, “Miskolc igazgatásának és jogéletének jellegzetességei”, MT. III. 2. köt., 685-686, 696-697.

⁴⁸ FAZEKAS Csaba, “Miskolc város az országos politikában”, MT III. 1. köt., 32-34.

さらに、都市官職の給与も細かく規定され、いくつかの官職に関しては参事会の管轄から財務局による管轄へと移行した⁴⁹。

こうしてミシュコルツは、「国王の特権市場町」(oppidum privilegiatum coronale)という特殊な地位ではあったが、ハンガリー財務局の管轄下で、再び農奴身分の集落となったのである。

しかし、参事会当局の権限が制限されたことは、この都市が衰退したことを意味するものではない。むしろ 18 世紀半ばから後半にかけて、ミシュコルツでは様々な分野における拡大、発展の局面が観察されている。

その最たるものは、急激な人口増加と住民の多様化である。先に見たように、18 世紀初頭のミシュコルツは戦争と伝染病の影響で人口の大半を減少させることとなった。その破局直後の 1715 年時点の人口は 2400 人から 3000 人の間であったと見積もられている。しかし、その後、大量の入植者をハンガリー王国やその周辺の領域から継続的に受け入れた結果、18 世紀末までにはその人口は世紀前半の 5 倍以上、約 15000 人程度に増加したとされる⁵⁰。

このミシュコルツの人口増加の流れを作り出していたのは非常に多様な出自、社会的属性を持つ人々であった。例えば、貴族である。17 世紀末の時点において、ミシュコルツは貴族住民の割合が顕著に高い集落だった。その比率は 1690 年の時点で全住民の 60%に及んだと考えられている⁵¹。それは、その頃、増大する領主からの負担から逃れるために貴族証書を購入した富裕農民層が大量に現れたことに起因する。彼らは「買戻し」の主体の一部を形成し、参事会の内外から都市の運営に影響を与え続けた⁵²。このように元々高い水準にあった貴族住民数は、1727 年に県議会開催地がミシュコルツに固定された結果、ボルショド県内の貴族層がミシュコルツに移住し始めたことによりさらに増加していく⁵³。1711 年に 243 家長、1744 年には 335 家長、そして 1755 年には 564 名の家長がミシュコルツ内で居住していたことが分かっている⁵⁴。しかし絶対数の増加の反面、比率の点では、その後、貴族層は縮小していく。非貴族層の増加率のはるかに上回っていたためである。

非貴族層の増加は、県内のみならず、より広範囲からの流入によっても支えられていた。ミシュコルツ内のブドウ畑や近隣村落の穀物農地における農業労働者、都市の発展に伴って増加したサーヴィス業者・奉公人の中には、近隣村落出身者以外にも、ハンガリー上部地方(felvidék)出身の「スロヴァキア人」⁵⁵、カルパチア山麓地方(Kárpátalja)から到着したルテニア人など、より

⁴⁹ STIPTA István és TÓTH Péter, “Miskolc igazgatásának és jogéletének jellegzetességei”, MT. III. 2. köt., 707-709; TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok*, 61-62; BAZML IV. 1501/a. Miskolc város tanácsának iratai, Tanácsülési jegyzőkönyvek (以下、BAZML TJ), 3. köt., 888-894.

⁵⁰ FARAGÓ Tamás, “Miskolc az ország településrendszerében és a XVIII. század eleje és a XIX. század közepe között”, MT III. 2. köt, 959.

⁵¹ *ibid.*, 956.

⁵² Veres László, “Az armalista nemesség szerepe Miskolc 17-19. századi gazdasági-társadalmi életében”, A miskolci Herman Ottó múzeum közleméye, 27 köt. (Miskolc, 1991), 132-134; STIPTA István és TÓTH Péter, “Miskolc igazgatásának és jogéletének jellegzetességei”, MT. III. 2. köt. 695-706.

⁵³ RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 74.

⁵⁴ Ö. Kovács József, Szendi Attila és Fazekas Csaba, “Városi Társadalom”, MT. III. 2. köt., 528..

⁵⁵ 本研究では上部地方出自のスラヴ系住民に対して、「スロヴァキア人」という表記を用いる。ただし、「スロヴァキア」概念は当時のハンガリー語には浸透しておらず、この人々は多くの場

遠方からの流入者も含まれていた。この人々はミシュコルツのみならず、その周辺の村落にも入植し、ミシュコルツの日常生活との恒常的なつながりを維持した⁵⁶。18 世紀ミシュコルツにおける多様化は手工業の分野においても知られている。17・18 世紀転換期の時点でも、ミシュコルツの住民には手工業に従事する人々が多く含まれており、肉屋、革靴職人、ブーツ職人、毛皮服職人、床屋兼外科医、ボタン付け、金属細工師、鍛冶師、織工、樽職人、車輪職人、仕立て職人など、10 程度の職種に 120 家長が従事していた。これは当時の家族数の 9 分の 1 程度と推定しうる。その後、18 世紀の過程で、1758 年に 19 業種、家長 239 名、1770 年には 47 業種、家長 548 名と、その業種や従事者の数は段階的に増加していく。特にブーツ職人の増加数は著しく、1698 年から 1770 年の間には 29 名から 200 名と、実に 7 倍近い増加率を示しており、この都市や周辺地域におけるブーツの需要の伸びが窺える。この時期に新たにミシュコルツに流入した手工業従事者の中には、修行・遍歴を目的として半年間から数年程度ミシュコルツに滞在した人々も多く含まれたが、中には上部地方やドイツ語圏からやって来たドイツ系職人も確認されている⁵⁷。加えて、18 世紀中葉から 19 世紀にかけてミシュコルツの経済を大きく支えた交易商人層においては、オスマン帝国領からやってきた正教徒の「ギリシャ人」商人⁵⁸、そしてモラヴィアやガリツィアに出自を持つユダヤ商人がその多数を占めていた⁵⁹。宗派的帰属全体に目を転じると、17 世紀までのミシュコルツにおいて圧倒的多数派を構成していた宗派は改革派(カルヴァン派)だったが、18 世紀の流入者の多くはローマ・カトリック信徒であり、その他にも、ルター派、先述のギリシア正教、ユダヤ教など、様々な宗教的帰属を有する人々が移民としてミシュコルツに入植して行った⁶⁰。

こうした点を考慮するとミシュコルツは、18 世紀の間に、エスニシティ(言語、文化、慣習)、宗派、職業の点で、多様な人々を内包する都市に変化したと言える。ただし、ファラゴーによると 18 世紀末ごろには個人の名前などの点で移入民のハンガリー文化への同化の兆候が見られ、19 世紀には、言語や慣習という点においても、ハンガリー的な要素への同化がすすんでいくと

合トート(tót)と呼ばれていた。また、「スロヴァキア」概念自体がこの時期にはまだ当のスラヴ系の人々の間ですら共有されていないという指摘も存在している。そのことにも留意した上で、本稿では、あくまで便宜的に上述の呼称を採用した。中澤達哉『近代スロヴァキア国民形成思想史研究——「歴史なき民」の近代国民法人説』刀水書房、2009 年。

⁵⁶ FARAGÓ Tamás, “A város népesség”, MT III. 1. köt., 194-195, 219-220; SZEGŐFI Anna, “Mezőgazdaság-Árútermelés-Piac”, MT III. 1. köt., 273-275; Ö. Kovács József, Szendi Attila és Fazekas Csaba, “Városi Társadalom”, MT. III. 2. köt., 538.

⁵⁷ FARAGÓ Tamás, “A város népesség”, MT III. 1. köt., 220; VERES László és NÉMETH György “Iparfejlődés”, MT III. 1. köt., 337-339.

⁵⁸ 本稿における「ギリシャ人」とは、主にギリシア正教会に属するオスマン帝国内のキリスト教徒のことを指しており、ギリシャ出身者以外にも、セルビア、ブルガリア、マケドニアなど様々な地域に出自を持っている。同商人についての全般的説明は、以下を参照されたし。AKIYAMA, Shingo, “Greek Merchants, Their Wives, and Transiency of Migration in Eighteenth-Century Hungary”, *Medeiterán és Belkán Fórum*, VIII. Évfolyam I. Szám (Pécs, 2013), 2-8; 秋山晋吾「近世東欧の交易ネットワークとその担い手たち」。

⁵⁹ LUPOVITCH, Howard N., *Jews at the crossroad: Tradition and accommodation during the Golden Age of the Hungarian Nobility* (Budapest: Central European University Press, 2007). 1. chapter.

⁶⁰ FARAGÓ Tamás, “A város népesség”, MT III. 1. köt., 153-155, 255.

される。例えば、ドイツ人、「スロヴァキア人」、一部の「ギリシャ人」などがそのような運命をたどったことが知られている⁶¹。

また、このような多くの人口流入の影響もあり、ミシュコルツの領域的な様相も変化していった[地図②③参照⁶²]。ミシュコルツの統治領域は中世以来、市内域と市外域からなり、シャヨー川(Sajó)の支流であるシンヴァ川(Szinva)と、ペツェ川(Pecze)などその複数の支流とが合流する地点が集落の中心にあたる。18 世紀初頭の市内域は、東西に並行して流れるシンヴァとペツェに挟まれた領域を中心としつつ、これらの川を超えて南北に展開した居住区をも含む形で構成されていた。ミシュコルツは城壁を持たない都市であったが、17・18 世紀当時には 3 基の市門(北部のセントペーテル門(Szentpéteri kapu)、南部のチャバ門(Csabai kapu)、西部のディオージュジェル門(Diósgyőri kapu))を有していた(1742 年以降はさらに 1 基、東部にジョルツァ門(Zsolcai kapu)が造営される)。当時の戦争状態やその後の混乱に伴う危険から住民を守るために、都市の周りにはこれらの門を結ぶ形で柵が張り巡らされており、さらにその外側には堀が掘られ、また土塁が設置されていた[地図④]⁶³。この堀や柵は 18 世紀前半を通じてそのまま残され、オーストリア継承戦争などの戦争時には再び新たな堀が掘られもした。しかし、比較的平穏な 18 世紀後半になると、本来の用途に必要性が見出されなくなり、堀はゴミ捨て場、あるいは用水路として使用され、柵は貧民たちによって燃料とするために時々持ち去られるほどになった⁶⁴。

市内域の中央、2 本の川に挟まれた地点には、大通りであるピアツ(Piac)通りがジョルツァ門から西に向けて走り、ナジフニャド(Nagyhunyad)通りを経てディオージュジェル門へと通じていた。大通りからは複数の通りが南北へ延びており、川を超えた先でピアツ通りに並行するまた別の通りを派生させていた[地図⑤]⁶⁵。都市の中央に位置するこの地区に加えて、シンヴァを超えて南側の川岸にあるジェッレール⁶⁶居住区(パプセル(Papszer)、フェルシュヴァーロシュ(Felsőváros)南部)、そして、北西部のペツェ川流域などは、18 世紀以前からも居住地として利用されてきた場所に当たる。しかし、18 世紀の人口増加の流れの中で、居住域は拡大していくことになる。居住地としてとりわけ新たに活用され始めたのはペツェ川以東・以北の元々農地やワイン貯蔵所として使われていた分与地であった。レーミアージュ・ティボルは 1759 年、1773 年、1781 年に作成された地図の分析から、特にミシュコルツ市内域の東部と北部において集住地が

⁶¹ ibid., 156, 237-238.

⁶² この中で、ミシュコルツの通り(ucca)を比較的詳細に記した地図③は 19 世紀に作成された地図の内容を参照して作成されたものである。ただし、18 世紀の時点では、いくつかの通りの名称と場所の組み合わせが、この地図の表記とは異なっているように思われる事例の存在が調査の過程で判明したため、以下でそのような通りに言及する場合は、必要に応じて、個別にその旨の説明を行うこととする。

⁶³ MT III., 1. köt. 502.

⁶⁴ GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III., 1. köt., 67-70; RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 21.

⁶⁵ MT III., 1. köt. 507.

⁶⁶ ジェッレール(zsellér)とは、農奴身分内の下位区分であり、分与地保有農奴(telkes jobbágy)とは異なり、領主から農耕用の分与地を分割されていない人々のことを指す。その中でも家用の土地を与えられている者を家持ちジェッレール(házass zsellér/ inquilinus)、その他の農民の分与地や貴族の屋敷内に居住する者を家なしジェッレール(házatlan zsellér/ subinquilinus)という。

新たに出現したことを確認している。この地域はウーイヴァーロシュ(Új város)(=新市街)と呼ばれ、上述の様々な出自の人々、とりわけ、人口が密集した結果火災の危険が増した都市中心部を嫌った農民層や、貧しい階層に新たな住処を提供した。最終的には、セントペーテル門を超えた場所にあり、従来はワイン貯蔵所が多く掘られていたテテムヴァールと呼ばれる地区にも居住地が広がっていき、従来の市内域の外部に暮らす人々が多く出現した。こうして、市門と柵によって区切られていた市内域は、それまでの枠組みを超えて拡大を始めることとなった⁶⁷。

他方で、市門の外に広がる市外域には、個々の貴族や、市場町参事会、あるいは財務局が所有する分与地や直営地が広がり、それぞれの用途に応じて利用されていた。市内域から北西部と南部に位置する丘陵地帯はブドウ畑として利用され、そこで作られたワインは 16 世紀以来、——その主たる管理者や交易の担い手が変化して行ったとしても——ミシュコルツに大きな利益をもたらした。ブドウ畑に利用された丘陵周辺をはじめとした市外域の各地には砂岩の岩肌をくりぬいたワイン貯蔵所が設けられたが、そこは、しばしば禁じられたにもかかわらず、18 世紀を通じて市内区に居住地を持たない日雇や、貧しいジェッレール、浮浪者などの住居や一時滞在地としても用いられた⁶⁸。市内域の西部、北部、東部には、主に住民たちの消費用の穀物耕作地が広がり、そこからさらに東にあたるシャヨー川沿いの平地は、住民に開放された共同放牧地や牧草地として利用されていた⁶⁹。ミシュコルツと周辺の村落との間で境界線をめぐる紛争が発生することはあったが、その結果としての境界の大きな変更は 18 世紀には生じなかった⁷⁰。

ミシュコルツの以上のような変化の背景には、王国内の交通ネットワークの変化と、ミシュコルツの地理的な位置が少なからず作用した。ミシュコルツ市内域を取り囲む市門から外部へ向かう道は、王国の主要な街道と接続しており、南のチャバ門はエゲル(Eger)やペシュト(Pest)へ、西のディオーシュジェール門もエゲルへ、北のセントペーテル門は上部地方の鉱山地帯にあたるゲメル県ロジュニョー(ロズナヴァ : Rozsnyó/Rožnava)へそれぞれ延びていた。また、1720 年代にミシュコルツの東部境界域を流れるシャヨー川水系で橋の架け替えが行われた結果、ミシュコルツは上部地方東部の中心都市カッシャ (コシツェ : Kassa/Košice)、王国東部の主要都市デブレツェン(Debrecen)、山麓地方とも結ばれることとなり、ミシュコルツ市内域からそれらの街道につながる道の上にジョルツァ門が設置された。こうして、ミシュコルツは 18 世紀半ばまでにハンガリー大平原地域と特にハンガリー王国北部、東部を結ぶ主要な街道の結節点上に位置することとなった⁷¹。

ミシュコルツは 17 世紀以前も交易上の中継地としての機能を有していたが、上部地方と大平原地方の往来がオスマン撤退後により活発となった結果、ミシュコルツの中継地としての機能

⁶⁷ GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III., 1. köt., 102-118, 138; RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 13, 16-25.

⁶⁸ SZEGŐFI Anna, “Mezőgazdaság-Árútermelés-Piac”, MT III. 1. köt., 297-302; Ö. Kovács József, Szendi Attila és Fazekas Csaba, “Városi Társadalom”, MT. III. 2. köt., 574.

⁶⁹ FARAGÓ Tamás, “Miskolc az ország településrendszerében és a XVIII. század eleje és a XIX. század közepe között”, MT III. 2. köt., 959; RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 12.

⁷⁰ GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III., 1. köt., 71.

⁷¹ *ibid.*, 57-58; SZEGŐFI Anna, “Mezőgazdaság-Árútermelés-Piac”, MT III. 1. köt., 304; RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 26.

はさらに発展を見せることとなる。すなわち、18 世紀の過程で、ミシュコルツはこれらの地域からの農業製品、手工業製品、原料などの集積地となり、ハンガリー王国中央と東部、北部を結ぶ交易の一大拠点の一つとなっていく。中継交易を担ったのは上述のように、18 世紀においては主に「ギリシャ人」商人、18 世紀末から 19 世紀にかけてはユダヤ商人であった。農地の少ない上部地方には、周辺の村落からミシュコルツに集められた良質な穀物への、大平原地域には上部地方の羊毛への需要がそれぞれ存在し、また、ミシュコルツやトカイ(Tokaj)などのブドウ生産地で作られたワインはハンガリー王国内のみならず、ポーランドなど、国外からの需要も獲得した。18 世紀には年 4 回開催されていた王国市では、これらの商品をはじめとした様々な商業取引が行われ、その時期の都市は王国内外からやって来た一時滞在者で大きな賑わいを見せた。それと同時に、王国市は、ミシュコルツや他の都市のギルド構成員、そこには属さない手工業者による製品、周辺地域の農産品などの出品の機会を提供していた。また、18 世紀中には、より小規模な週市も週 2 回開催されるようになり、そこでの商品の交換がミシュコルツと周辺地域の住民の生活を支えた。上述したようにミシュコルツでは、手工業者の流入が 18 世紀半ば以降加速していくが、ミシュコルツにおけるこのような商工業活動の機会の増加も、これらの手工業者がこの都市を訪れる動機を与えたと言える⁷²。

以上のことを鑑みるに、18 世紀のミシュコルツの空間的変容の特徴は移民の増加に伴う市内域・居住地域の外部への拡大と、市外域の実質的縮小、そしてそれらの背景にある広域的なネットワークの再編と商工業の隆盛にあると言える。

このように、18 世紀を通じて、市場町ミシュコルツは、身分上の地位や統治体制の再編、急激な人口増加と住民の多様化、市内域の空間的な拡大、商業、手工業の発展など、様々な変化を経験していった。その結果、18 世紀初頭時点では、同じくハンガリー王国東部の市場町ジュンジュシ(Gyöngyös)やニーレジハーザ(Nyíregyháza)などと同等の中規模の都市であり、せいぜい県の中心地にとどまっていたミシュコルツは、18・19 世紀転換期の時点では、北東ハンガリーのみならず、王国自由都市カッシャを筆頭とするハンガリー王国東部の「中心的機能を有する諸都市」⁷³の中で、デブレツェンやエゲルと並んで五指に数えられるようになる⁷⁴。

本論文で検討するツィガーニたちが活動した 18 世紀ミシュコルツとは、このような変貌を遂げる最中にあった場だと言える。ここまで、あえてツィガーニへの言及を意図的に省略してきたが、無論、ミシュコルツで活動したツィガーニたちもこのような変化と無関係ではない。むしろ、本論文を執筆することを可能とさせている事実、つまり 18 世紀のミシュコルツにおけるツィガ

⁷² SZEGŐFI Anna, “Mezőgazdaság-Árútermelés-Piac”, MT III. 1. köt., 304-309; FARAGÓ Tamás, “Miskolc az ország településrendszerében és a XVIII. század eleje és a XIX. század közepe között”, MT III. 2. köt., 966-967.

⁷³ 行政、宗教、商工業、教育、文化など、諸分野における活動が展開され、かつ中心施設の所在地である都市のことを指す。BÁCSKAI Vera, *Városok Magyarországon az iparosodás előtt* (Budapest: Osiris, 2002); ケヴェール・ジェルジ著『身分社会と市民社会——19 世紀ハンガリー社会史』平田武訳、刀水書房、2013 年、79-85 頁。

⁷⁴ FARAGÓ Tamás, “Miskolc az ország településrendszerében a XVIII. század eleje és a XIX. század közepe között”, MT III. 2. köt., 966-975.

一二のより恒常的な出現、そして定着という事実自体が、このような変化の結果だとも言えるかもしれない。そして、とりわけミシュコルツに長く定着することとなった人々は、そのような変化の中で、自身の在り方をも変化させていくこととなる。

ツィガーニたちがミシュコルツにおける変化とどのように関わって行ったかは、以下で詳しく言及されることとなるだろう。特に 18 世紀前半のミシュコルツにおいてツィガーニに開かれていた活動可能性は彼らをこの都市に留めるきっかけを提供することになる。それについては、第 3 章で詳しく、検討することとしたい。

ただし、変化を検討すると言っても、ツィガーニと関わりえたミシュコルツの変化の諸相はここで述べた全ての分野に渡って確認できる訳ではない。例えば、同じくこの時期のミシュコルツにおける外来集団/少数派エスニシティという観点から、近年の研究では同系列のカテゴリーとして言及される傾向のある「ギリシャ人」、ユダヤ教徒⁷⁵との関わりは、この 2 つの集団が比較的富裕層に属したという関係上、史料的に跡付けられるケースは非常に少ない。また、その他の住民のエスニシティが明確であることもほとんどないため、例えば「ギリシャ人」とユダヤ教徒との間に見られた「新たに流入したエスニシティ間の交流・紛争」⁷⁶というトピックを論じることが、この時代のツィガーニについては難しい(ただし、流入者と土着の集団との経済的紛争という観点については 3 章で扱うこととなるだろう)。このように、本論文において以下で取り上げることとなるのは、ミシュコルツの変化の一部がツィガーニの動向にどのように影響しえたのか、ということに留まるため、都市史的な関心を十全に満たしうるものではないことはあらかじめ述べておかねばならない。

では、ミシュコルツにおいてツィガーニと関わりえたアクターとしてはどのような人々が想定できるだろうか。それもこの後個別の事例から明確に見えてくると思われるが、大まかに述べておきたい。まず、本稿が用いた史料のほとんどの作成者であり、この時代にミシュコルツ内でツィガーニに関わった事案の多くに対処する必要があったミシュコルツ参事会と参事会管轄下の役人たちである。彼らはツィガーニを時には保護し、時には処罰し、時には交渉し、その要求を受け入れる、または拒絶する主体としてしばしば史料中に姿を見せる。そして、その社会的な属性は明確ではないことが多いが、——そして、分かったとしても多くの場合、貴族か、農奴かという身分的情報しか知ることはできないが——、日常的にツィガーニに接していたミシュコルツの住民たちである。彼らとツィガーニとの接触、交流や紛争の様子は『参事会議事録』、裁判関連文書、請願書の中で様々な形で現れることになる。さらに、ミシュコルツの外からやってきた様々な人々も、ツィガーニとの関わりの中で、言及されることとなる。そして、最後にミシュコルツの内外を問わず、ツィガーニ同士のつながりが史料からも垣間見えてくる。このつながりの在り方やその変化は、特に第 5~6 章にて詳しく検討されることになるだろう。

最後に、ミシュコルツのツィガーニと直接関わりえた主体として想定できるにもかかわらず、

⁷⁵ Ö. KOVÁCS József, SZENDI Attila és FAZEKAS Csaba, “Városi társadalom”, MT III. 2. köt., 539-543; RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 138-146.

⁷⁶ LUPOVITCH, Howard N., *Jews at the crossroad*, 46, 61-62, 67-68.

本稿では十分に取り上げることができない要素についても指摘しておかねばならない。それは県当局とハンガリー財務局という 2 つの統治権力である。ボルショド県が作成した史料としては、県の条例、ツィガーニの諸情報を記したツィガーニ帳簿や各県の間の手簡などを第 2 章以下でも使用するが、ミシュコルツの市場町裁判所の上訴審の一つとして機能しえた県裁判所の史料や県議会議事録などについては十分な検討はできていないため、県とミシュコルツのツィガーニとの関わりについては断片的な言及にとどまらざるを得ない。そして、1755 年以降ミシュコルツの領主となったハンガリー財務局の史料についても、残念ながらこれまでに検討する機会を持てなかった。すでに触れたように財務局は、1755 年以降もミシュコルツにおける行政・司法業務の執行をミシュコルツ参事会に委ねたが、会計業務や市場での活動の取り締まりなどについては、自身の管轄下に置いていた。そのため、これらの分野でツィガーニの活動が行われていたとすれば、財務局の史料にも何らかの痕跡が残されていると期待できる。しかし現時点ではこの観点からのアプローチは困難である⁷⁷。これらの統治権力とミシュコルツのツィガーニの関わりのより詳細な検討については、今後の課題としていきたい。

そしてもちろん、ミシュコルツの中のツィガーニの在り方を規定していたのは、ミシュコルツという場の特徴だけではなかったことも忘れるべきではない。18 世紀、とりわけ中葉から後半にかけての数 10 年間は、ツィガーニに対する、地域レベル、県レベル、国家レベルの法規定が、その前後の時代に比して頻繁に発布された時代だった。次章では、これまでの研究で明らかとされている諸規定を概観し、その中でツィガーニの地位がどのように規定され、また、この人々が問題化される場合、どのような点に焦点が当てられたのかについて、検討したい。

⁷⁷ このトピックに関しては、以下の史料目録内の諸情報を精査する必要があるだろう。NAGY István és F. KISS Erzsébet, *A Magyar Kamara és egyéb kincstár szervek* (Budapest: Magyar országos levéltár, 1995).

第2章 18世紀ハンガリー王国における「ツィガーニ問題」—国家、県、市場町の諸規定、行政書簡の分析から—

以下では18世紀中にハンガリー王国内で論じられた「ツィガーニ問題(cigány kérdés)」の特徴を国家、県、地域(市場町ミシュコルツ)のレベルで発布された条例や統治権力間で交わされた書簡などに基づいて整理する。

この「ツィガーニ問題」という言葉は、ハンガリーでは時代ごとに、特に近代以降に様々な意味で使われている概念である。例えばこの言葉は、1930年代から第二次世界大戦期には、一部の知識人たちによって、ハンガリー社会に何の利益ももたらさず、またハンガリー人にとって危険な存在である、と見なされた「ツィガーニ人種」の「根絶」なるものを議論する際に用いられた。そのような問題化の結果行きついたのが、ツィガーニと見なされた人々の社会的隔離(労役所、強制収容所)、強制不妊化、東方移送、大量殺害など、いわゆる「ツィガーニ問題の最終的解決」であった⁷⁸。他方、20世紀後半、とりわけ1989年の体制転換以降から現在の時期について言えば、「ツィガーニ問題」、あるいは「ロマ問題」とは、ロマと多数派社会との間に存在する様々な格差、差別を問題と捉え、その是正を意図して使われる言葉でもある⁷⁹。このように様々な形で論じられることがありえた「ツィガーニ問題」なる言葉に大まかな定義を与えるとすると、ロマ/ツィガーニが実際に問題を生み出しているか、いないかにかかわらず、ロマ/ツィガーニをめぐる問題化された事象、ないしはその解決の取り組み、と言い換えられるだろう。

本論文が取り扱う18世紀にも、研究史上、「ツィガーニ問題」と措定されてきた現象が存在する。ただし、18世紀の同時代概念としてこの言葉が使われていた例は、管見の限り見当たらないため、18世紀に関しては、後の時代の人々がこの時代の現象に対して当てはめた概念だと考えられる。先行研究において18世紀の「ツィガーニ問題」が語られる際には、特に、国家、あるいは県などの中間領域、そして領主所領や都市などのより限定的な地域当局など、様々なレベルの統治権力が、ツィガーニをどのような点で問題化していたのか、に注目が向けられる傾向がある。前近代ツィガーニ史の研究者ナジによると、17世紀後半から18世紀の間のハンガリー王国において、「ツィガーニ問題」をめぐる議論は、ツィガーニとその周辺社会との間で従来から保たれてきた経済的棲み分けなどの関係性やバランスが社会的再編や人口の変動の過程で崩れてしまったことから、それをどのように調整し、収束させるか、といった点に主眼を置くものだったという⁸⁰。この後の議論を先取りして言えば、その「問題」に対しては、ツィガーニをその周辺の定住者の社会に「同化」させるという方針に基づいた解決が最終的に図られるようになる。本章では、そのような流れに行きつくことになる、18世紀の、統治権力の側から見た「ツィガーニ問題」の推移を、世紀前半からヨーゼフ2世期(1780~1790)まで、大まかに取り扱う。

⁷⁸ DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatók tükrében*, 4. fejezet.

⁷⁹ VERMEERSCH, Peter, *The Romani Movement: Minority Politics and Ethnic Mobilisation in Contemporary Central Europe*; VIZI, Balázs, "Hungary: A model with lasting problems", RECHEL, Bernd (ed.), *Minority Rights in Central and Eastern Europe*, 119-134.

⁸⁰ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 229-230.

本論文における大きな関心は、すでに表明したように市場町ミシュコルツに焦点を当て、18 世紀ハンガリー王国のローカルな領域におけるツィガーニと周辺社会との諸関係とその変化を明らかにすることであるが、それをより深く理解、評価するためには、この当時のハンガリー王国の統治権力によって、大枠としてツィガーニがどのように捉えられ、問題化されていたのかを把握する本章の試みは重要となる。

本章で論じられるテーマは、ツィガーニ史研究の中では比較的多く取り上げられてきた分野にあたり、ここで主に取り上げるボルショド県についても、近年までの研究によって、ある程度の検討がなされている。そのため、本章での議論は、第一に、先行研究で明らかとなってきた知見を整理、再確認するという性格のものとなる。

以下では、18 世紀当時、ツィガーニを問題化しえた主な統治主体を整理した後、トートとナジの諸研究や刊行史料集を主に参照しつつ、政令や条例、行政書簡などを通じて、それらの統治主体においてツィガーニがどのように扱われていたかをまとめていく。

第1節 法規定発布主体

・ハンガリー総督府(helytartótanács)

18 世紀前半から 19 世紀中葉にかけてのハンガリー王国最高統治機関であるハンガリー総督府はハプスブルク家の君主に直属しており、ハンガリー内の多岐にわたる事案(財政、経済、税制、宗教、衛生など)に関して、ウィーンの方針に従いつつ政策を決定し、諸地域の統治権力へ総督府令(helytartótanácsi rendelet)、あるいは王令(királyi rendelet) (以下、まとめて政令とする)を発布する権限を有していた。特に王国議会が長期的に停止することとなる 1760 年代から 1790 年までは様々な政令の作成を通じて、国内の政治決定により強い影響力を有する機関として機能した⁸¹。

・県(vármegye)

近世ハンガリーにおける県とは、王国の特定の領域内に居住、ないし所領を保有している貴族身分保持者の合議体のことを指し、その代表機関である県議会を中心に、その領域内における様々な分野への影響力を有する地域レベルの上級統治権力として機能した。県の特権には例えば、領域内での独自の条例(statútum)制定権(ただし、これは王国法に反しない範囲の内容に限る)、県領域内の裁判権や徴税権、王国法や政令の執行権(政令への拒否権も含む)、王国議会への代表者選出権などがある。この機構は、16-17 世紀においては貴族身分の相互扶助団体としての性格を強く持っていたが、その一方で 18 世紀の国家体制の再編の中で、総督府からの政令を実行する地方の行政執行機関としての性格も強めていったとされる⁸²。また、県は複数の郡(járás)に分割さ

⁸¹ MEZEY Barna (szerk.), *Magyar Alkotmánytörténet*, 128-129; KATUS László, “Magyarország a Habsburg Monarchiában (1711-1918)”, ROMSICS Ignác (Főszerk.), *Magyarország Története*, 508-509.

⁸² MEZEY Barna (szerk.), *Magyar Alkotmánytörténet*, 146-155; KATUS László, “Magyarország a Habsburg Monarchiában (1711-1918)”, ROMSICS Ignác (Főszerk.), *Magyarország Története*, 504-508;

れ、その区域は県内の司法を複数名で統括する県判事(*szolgabíró*)の管轄単位としても機能した。なお、当時の国家体制には、県と同等の地位にあり、県や個々の領主の権限が及ばない統治主体として王国自由都市と特権管区(*kiváltságos terület*)という枠組みも存在していた。これらの統治主体の領域は、特定の県領域内や複数の県の領域を跨ぐ形で広がっていたが、ミシュコルツが位置するボルショド県にはそのような領域は見られないため、これらに関する詳細については本研究では省略する。

・所領(村、市場町、特権都市)

県の領域内には貴族や教会、その他の領主権力により所有される数々の所領(村、市場町、特権都市など)が存在した。そこでは、それぞれの領主が自らの所領内での司法、行政、条例制定などの権限を有しており、各所領内のツィガーニに関しても、このレベルにおける法規定の中で取り扱われた。すでに述べたように、本研究で中心的に取り扱うミシュコルツも、このカテゴリーに属する⁸³。

以上の統治主体が、18 世紀ハンガリー王国においてツィガーニが「問題化」される際に行政上の議論を行い、また王国レベルの法律、政令や、県・所領内の条例に従ってツィガーニに対する実際の対処・執行を行っていた。

以下では、これらの総督府や県がツィガーニを問題化した結果生じた政令や条例の中身を検討する。

第2節 ハンガリー総督府のツィガーニ関連政令

まず、総督府の政令について見ていく。総督府政令において、ツィガーニに関してどのようなことが命じられたのか、ということは先行研究でもすでに多くのことが知られている。中でも、1724 年のカーロイ 3 世(神聖ローマ皇帝としてはカール 6 世 : *Károly III./Karl VI.*)の政令、マリア・テレジア治世の主要な 4 つの政令、そして、ヨーゼフ 2 世時代の 1783 年に発布された、それまでの政令を総合する包括的な政令などの内容やその諸項目の意図については、近年のナジ、トートの研究が多くを検討を加えている⁸⁴。また、マリア・テレジア期にボルショド県へ送付された総督府のツィガーニ関連政令を整理したトートの論文からは、上述の 4 点とは別に、より多くの政令が発布されていたことも知られている。トートが確認したところによると、ボルショド

秋山晋吾「貴族の自治の誕生—中・近世ハンガリー史の中の県制度—」、篠原琢・中澤達哉編『ハプスブルク帝国政治文化史』昭和堂、2012 年、105-136 頁。

⁸³ KATUS László, “Magyarország a Habsburg Monarchiában (1711-1918)”, ROMSICS Ignác (Főszerk.), *Magyarország Története*, 506; MEZEY Barna (szerk.), *Magyar Alkotmánytörténet*, 170-177.

⁸⁴ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 238-268; TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 45-60. また、これらの政令については邦語文献においても大まかな内容が確認可能である。デーヴィッド・クローウェ著『ジプシーの歴史——東欧、ロシアのロマ民族』水谷驍訳、共同通信社、2001 年 125-128、130-131 頁；アンガス・フレーザー著『ジプシー——民族の歴史と文化』水谷驍訳、彩流社、2002 年、214-216 頁。

県に限って見ても、マリア・テレジア治世後半の 20 年間だけで 20 本弱の政令が發布されており、また、同論文ではそれがすべてではないことも示唆されている⁸⁵。以下では、彼らの研究成果に依拠しつつも、全ての政令を網羅的に検討することは行わず、主要な諸政令の内容に焦点を絞って整理していく。

・ 1724 年政令

18 世紀の王国レベルでのツィガーニ関連政令の端緒とされる政令はカーロイ 3 世時代の 1724 年に發布された。そこでは、犯罪に関わっておらず、所領での受け入れを望むツィガーニを、登録した上で、領主が所領内に受け入れ、また定住させる権利が認められ、他方で領主に属さずに放浪するツィガーニを逮捕、処罰し、所領内や県内から追放すること、あるいはツィガーニの放浪や犯罪の援助を、隠れ家や食料、衣服、武器等の提供という形で行った人々にも罰を与えることなどが命令されている。この政令の背景について、その前文では、「放浪するツィガーニの一部やその他の悪質で危険な人々の放浪集団」によって、とりわけシュタイアーマルクとハンガリー王国との境界地域にて行われる暴力的な略奪など不法行為の抑止を目的としたものとして説明しており、先行研究でもそれを踏襲している⁸⁶。しかし、領主からの受け入れを望むツィガーニに関しても言及していることなどを考えると、犯罪抑止策として以外にも、当時ハンガリー王国の領域に対して行われていた大規模な入植民受け入れの奨励とも関係していたと思われる⁸⁷。しかし、カーロイ 3 世の治世においては、例えば 1738 年から 1739 年にかけて發布されたペスト防止の政令の中で様々な移動集団の一つとしてツィガーニが言及される事例は存在するが、断片的なものを含めても、特にツィガーニのみを対象とした国家レベルの政令はその後ほとんど確認されていない⁸⁸。

・ マリア・テレジア期の諸政令

マリア・テレジア時代になると、先述のように、特に 1750 年代末以降、ツィガーニ関連政令が大幅に増加する。この背景は、ナジの仮説によれば、18 世紀半ばに各地の入植の流れが一端落ち着いた一方、ハンガリー王国周辺の戦争や政変の過程で国内に流入するツィガーニの数が増加したことにあるとされる⁸⁹。この時期には、とりわけ、1758, 1761, 1767, 1773 年にそれぞれ、ツィガーニのみを対象にしたまとまった政令が發布されている。1758 年の政令は、領主が「犯罪」と関わっていないツィガーニを自身の所領へ定住させる形で受け入れることを奨励する一方で、ツィガーニの放浪は「公共にとって有害で、多くの悪事の原因であるような生活形態」

⁸⁵ TÓTH Péter, “Mária Terézia cigánypolitikája”, *Cigánysors* I., 39-44.

⁸⁶ MCD, 81-83; NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 239-240.

⁸⁷ 18 世初頭の大規模入植については VARGA J. János, “Kísérletek Magyarország újratelepítésére 1689-1723”, HANÁK Péter (szerk.), *Híd a századok felett: Tanulmányok Katus László születésnapjára*. (Pécs: University Press Pécs, 1997), 137-150.

⁸⁸ TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában* (Budapest: Bölcsész Konzorcium, 2006), 46-47.

⁸⁹ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 247-249, 276.

と見なされ、そのような生活を捨てること(Vagam illum publico perniciosam vivendi rationem tanquam multorum malorum Causam deserere)がツィガーニに要請された。その上で、定住せず放浪を続けるツィガーニを王国の諸領域から追い出すことも、県などの中間的統治権力に義務付けられており、その方向性は1724年の法令の再確認と見なされている⁹⁰。

しかし、その後1760年代のツィガーニ政令は、より多岐に渡る内容を備えたものとなっていく。1761年の政令では、「ツィガーニ」という呼び名の廃止(その後、「ツィガーニ」という名称が廃れることはなかったものの、代わりの呼称として、新ハンガリー人(Új Magyar/Neo-Hungarus)、新農民(Új Jobbágy/Neo-Rusticus)、新住民(Új Lakos/Neo-Colonus)、新市民(Uj Polgár)などの呼称が徐々に用いられるようになって行く)⁹¹、ギルドへのツィガーニの受け入れ、諸県、自由都市、特権管区によるツィガーニの登録、定住の強制、馬の保有の禁止、ツィガーニへの通行許可書の発行の禁止が制定された⁹²。さらに1767年の政令では、ツィガーニの住環境や服装への介入、あるいはツィガーニという社会的枠組みに対して地域的に保証されていた一定の法的自律性の解体も試みられた(最後の点については、第5章で改めて論じることとなるだろう)。この政令の中では、それ以前と同じくツィガーニの放浪と盗み・略奪が関連付けられると同時に、「無学で、徘徊しており怠惰な生活を営む人々(ez a tudatlan, kóbor és henye életet élő nép)」、「制御されず、うろつき回り、怠惰に慣れきったこの種の人々(ez a zabolátlanul kóborló és henyéléshez szokott emberfajta)」、そして、「悪しきモラルやひどい無知の中に(ebben a romlott erkölcsében és vastag tudatlanságban)」とどめられた「だらしく、神の教えにも人の教えにも浸されていない人々(ezen szabados, sem isteni, sem emberi tanítással át nem itatott nép)」などの表現が彼らに対して用いられ始める⁹³。このような表現や政令の内容の多様化は、ツィガーニをめぐる新たな問題が放浪とそれに伴う盗み・略奪についてのみならず、その解決のために推進された定住化のプロセスの中でも新

⁹⁰ TÓTH Péter, “Mária Terézia cigánypolitikája”, *Cigánysors* I. 39; BAZML IV. 501/f. Borsod Vármegye Nemesi Közgyűlésének iratai, Királyi rendeletek - Mandata et intimata politica XI. I. 54.

⁹¹ これらの呼称それぞれが、どのような基準に応じて使い分けられていたかという点については、恐らく「新市民」が王国自由都市や市場町など都市部でも用いられていたと考えられることを除けば、現時点でも明確な判断は下すことはできない。しかし、1760年代以降、これらの呼称が用いられるようになってからも、ツィガーニという呼称が引き続き用いられ続けていたことだけは確かである。また、ナジはシクローシュの出産・結婚・死亡台帳(anyakönyv)の記述を参照しつつ、「新市民」と「ツィガーニ」の呼称の使い分けは「同化」の度合いに応じてなされていると主張している。しかし、例えばボルショド県が作成したツィガーニ帳簿では、作成の時期に応じて、あるいは作成単位となった郡ごとに、ツィガーニ(Zingarus)、新住民(Neo-Colonus)のいずれかの呼称によって調査対象が統一的に表記されているものの、異なった呼称が採用された複数の調査においても、そこで登録された人物たちには大きな変化が見られないという点など考慮すると、少なくともボルショド県では両者の概念に厳密な使い分けがなされていたとは思えないため、ナジの主張を一般化することには留保が必要であろう。Nagy Pál (szerk.), *Források a siklósi cigány múltjából*, 13; MOL ARS 24. cs. 27. なお、本論文で主たる検討対象となるミシュコルツに限れば、同地の史料各種において確認できる同様の呼称は「新住民」と「新ハンガリー人」の2種類のみである。ただし、それらにしても、1760年代から1780年代までの間、一貫して用いられていたわけではなく、ツィガーニという呼称も変わらず用いられている。

⁹² TÓTH Péter, “Mária Terézia cigánypolitikája”, *Cigánysors* I., 40.

⁹³ MCD, 84-85.

たに認識され、その解決策が模索され始めたことを意味している。

加えて、1773 年にはさらに新しい要素が付け加わる。ツィガーニの子どもを親元から引き離し、農民の家庭やギルドに補助金を与えて養育させる、あるいは初等学校(trivialis iskola)に通わせるという方策である。時に強制的な手段が用いられたこのような引き離しも、ツィガーニ集団の中で子供が暮らすと、親から悪い習慣を受け継いでしまう、という考え方から行われたものだった。また、この時、周囲と同一の言語の使用、腐肉食の禁止なども規定されている。他方で、定住し、農奴としての義務を負い、実際に統制されたツィガーニに対しては、誰からも苦しめられないようにすることも諸県に指示された⁹⁴。

・ヨーゼフ 2 世時代の諸政令

ヨーゼフ 2 世の時代に入ると、この方向性は新たな展開を迎える。当初、ツィガーニに関する政策はマリア・テレジア期の政令の踏襲で十分であるとの立場を取っていたとされるヨーゼフであるが、その方針はその後いくらか変化し、1782 年 12 月 10 日には総督府を通じて、各県にツィガーニの統制状況の報告と、ツィガーニの定住を強化するための意見書(opinio)の提出が要請されるに至った⁹⁵。このような要請が行われた背景として、同年 10 月までにツィガーニ 150 名超が容疑者として逮捕されたホント県(Hont vármegye)ケメンツェ(Kemence)での強盗・殺人事件が発覚し、また、その裁判—ツィガーニたちが被害者を殺して食べたとの訴えが行われたことから、通称「人喰い裁判」(emberevőper)と呼ばれる—において、性急な判決を戒めるウィーン宮廷の求めにもかかわらず、県裁判所が証拠不十分のツィガーニ 50 名強を処刑した事件との関連を示唆する研究もあるが、その点は現時点ではまだ明確に実証されてはいない⁹⁶。いずれにせよ、1782 年 12 月の要請を受けて各県から提出された諸提案を参考にして、総督府は 1783 年 10 月 9 日に全 59 条項からなる政令を發布した[表 2-1]。これらの条項は、大きく分けて 3 つのカテゴリーからなる。一つ目は、ツィガーニの定住強制、許可なしの移動禁止、農業、手工業分野での雇用から、周囲への服装、言語、住居、食事等の同調や子どもの引き離し、といったマリア・テレジア期に制定された諸条項を再確認したものである。あるいはツィガーニ同士の結婚の禁止(第 1 条、32 条)、ツィガーニ帳簿作成手順や実行主体の決定(第 8 条、53 条)、ツィガーニの姓名の変更の禁止(第 23 条)、ツィガーニの徴兵、募兵活動における音楽奉仕の要請(第 26 条、39 条、42 条)、ツィガーニ同士の集会、宴会の禁止(第 30 条)、家族と引き離した子供の養育費の一部を親に負担させる命令(第 55 条)などの、既存の条項を発展させたり新たに付け加えた規定がある。そして、各県からの提案の採用や否定に関する諸項目も含まれており、そこでは、要塞建設、道路や橋の修理へのツィガーニの動員(第 41 条)や政令の達成に妨げとなる領主の報告(44 条)などの提案の採用、またはツィガーニの楽器の破壊や没収(第 28 条)、沿岸地域やバナト、ブコヴィ

⁹⁴ TÓTH Péter, “Mária Terézia cigánypolitikája”, *Cigánysors* I., 42.

⁹⁵ TÓTH Péter, “Borsod vármegye tervezete a cigányok szabályozására 1784-ből”, 63-67.

⁹⁶ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 257-258; HAJDU Lajos, *Büntett és büntetés Magyarországon XVIII. század utolsó harmadában* (Budapest: Megvető Könyvkiadó, 1985), 119-128.

ナへの集団入植(第 38 条、54 条)、ツィガーニの集団的枠組み、言語、文化的諸要素の維持(第 52 条)、強制労働(第 57 条)といった提案への拒否、などが扱われている。そして、最後の第 59 条項で、これらの諸条項を貫く「唯一の基本原則」として、「この放浪者たちを家での居住や、農奴やその他の定住した人々の生活形態に導かねばなら」ず、また「この目的のためにツィガーニを怠惰な生活やあらゆる盗みや略奪の原因となるものから引き離さなければならない」ことが述べられる⁹⁷。この 1783 年政令は、ヨーゼフが死去し、彼の政策のほとんどが撤回される 1790 年までの間、ハンガリーのツィガーニ政策を規定していた⁹⁸。この政令については、その包括性に加えて、各県からツィガーニへの対処に関する意見、要求を集約し、可能な限りでそれに配慮して作成されたこと、ならびに政令発布後、県ごとに地域の実情に合わせて条項の修正、追加がなされたことと見られていることなどが、マリア・テレジア期の政令の作成プロセスと異なる点としてしばしば指摘される⁹⁹。

以上の諸政令から、問題化されるツィガーニの姿と、その問題解決構想について次のように指摘できる。カーロイ 3 世の 1724 年政令から 1758 年までは、ツィガーニの移動と犯罪、違法行為が結び付けられる形でツィガーニ問題が表面化しており、その対応として所領への受け入れと各領主、県の統治領域内からの追放という二通りの解決が図られた。しかしその後、放浪や盗みに加えて、彼らの生活形態や「モラル」、制度などの点での周囲との大きなズレが、ツィガーニの定住に困難を生じさせていると認識され始め、その問題に対する解決策として、ツィガーニを、子どもの時期から教育して、農業や手工業、軍務、その他の労働に従事させ、また周囲の人々と同様に振る舞わせることが徐々に目指されていった。その際、最終目標とされたのは、ツィガーニを「怠惰な」生活や盗み、略奪の原因となるあらゆるものから引き離し、家での居住や、農奴やその他の定住した人々の生活形態に導くことであった。ツィガーニがこのような状態を達成した暁には、1783 年政令の 59 条によれば、その人々は「新農民」を対象として制定された規定の対象外となり、また「以前の地位を想起させる新農民の名で彼らと呼ぶことも認められなくなる」とされた¹⁰⁰。つまり、以上の政令の要請に十分に適応した人々は、ツィガーニ/「新農民」ではなく、社会的な認識において「農民」と見なされることになった。このように、18 世紀当時、国家レベルで構想された「ツィガーニ問題」の解決策は一農業従事者という狭義の意味ではなく、手工業者なども含め、広義の「農民身分」を念頭に置いた一、生活習慣や生業、あるいは法的なレベルにおける「農民化」だった。以下ではこれを「同化」(asszimiláció)という言葉で表現していく。なお、「同化」の要件、基準については、第 6 章で改めて考察する。

3 節 ボルショド県のツィガーニ関連条例、並びに県間のコミュニケーション

では、この間、県のレベルの条令ではツィガーニをどのように扱っていたのだろうか。県レベ

⁹⁷ MCD, 85-94.

⁹⁸ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 256-268.

⁹⁹ *ibid.*, 257-258; TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 56-58.

¹⁰⁰ MCD, 94.

ルのツィガーニへの対応に関しては、マリア・テレジア期に国家レベルの政令が本格化する以前には、各県は、総督府のツィガーニ政策を考慮しつつも、その方針から外れる内容の条例も必要に応じて発布し、ツィガーニに独自に対処していたことや、国家レベルの政令が頻繁に発布され始めて以降には、県の側も徐々にそれに追従していったこと、さらに、複数の県が、相互の行政書簡のやり取りを通じて、県の境界を越えて移動する放浪ツィガーニの対処に関する見解の共有を試み、また、ハンガリー総督府のツィガーニ政策に対する意見交換をおこなっていたことなどが、比較的最近の研究で指摘されている¹⁰¹。ただし、特定の県の動向と、総督府の政令の推移とを関連付けた検討は十分なされてきたわけではない。そこで、刊行されたボルショド県の条例集を用いて、同県の条例とツィガーニ関連の国家レベルの政令との間の関連性を、また、『ボルショド県議会文書 県議会政治関連文書』内の史料を用いて、ボルショド県とその他の県との間でツィガーニをめぐる交換されたやり取りの内容を以下で確認しておきたい。

2-3-1 ボルショド県のツィガーニ関連条例

ナジによると、カーロイ 3 世の 1724 年法令は、地域におけるツィガーニの受け入れを奨励する面も有していたが、その内容に対する地域の反応は様々であった。労働力としてすでにツィガーニをある程度確保していた地域では、ツィガーニの更なる流入は、従来のバランスを崩すものとして好まれず、地域の統治権力はツィガーニの流入を阻害する方向に動く傾向が見られた。また、戦争後の再建が進まない地域においても、労働力への需要は一定程度ありえたものの、地域の独自の関心が総督府の意図と食い違うこともしばしば見られたという。その一例として、1724 年 12 月に、カーロイの政令に前後して発布されたボルショド県の条例にもナジは言及を行っている¹⁰²。

1724 年にボルショド県は、ミシュコルツのツィガーニのみを対象とした条例を発布し、この市場町の家々の間に掘立小屋を建てたツィガーニに対し、その中に設置された火床が火災につながるという理由のためにそれを禁止すると同時に、市場町の外部でのみ小屋を建てることを許可した。違反者には 40 回の杖刑が課された。次いで、1726 年にも、ミシュコルツ、並びにその他の市場町、村の領域に居住するツィガーニを追い出して、その周辺領域にツィガーニの滞在場所を指定することが命令されている。その冒頭では、この条文が 1724 年の総督府令に従ったものである旨が謳われている。しかし、ツィガーニの都市での活動を排除こそしていないものの、ツィガーニとその他の住民との居住空間を分ける方針は、ツィガーニの定住を奨励していた同政令の規定とは食い違っていると見なすこともできよう¹⁰³。この条例も、1724 年の県条例と同様、明言はないが、市内域の防火への関心などからこのような形で総督府の規定が読み替えられたものと推察される。

¹⁰¹ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 271-306; TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 58-59.

¹⁰² NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 271-274.

¹⁰³ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 272; TÓTH Péter és BARSZ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai*, 70, 75.

マリア・テレジア期に入ると、1751年にボルショド県の徴税関連の条例の中で、様々な課税対象と並んで、ツィガーニへの課税についての言及が見られる。そこでは、ツィガーニに対して、その保有物に応じて設定された税が県によって課されること、テントと荷車を保有する者は1フォリント30クライツァール、テントを持たず、荷車のみ保有する者には1フォリントの支払いの義務があり、それ以外の財産も持つ者には、その多さに比例して額が計算されること、領主との契約を結んでいるなどの条件に応じて減額の措置が受けられること、などが規定されていた¹⁰⁴。この年以降、ボルショド県ではツィガーニに対する徴税記録が集落ごとに継続的に作成されるようになっていく。

1758年の政令が発布される以前の同年1月ごろには、ノーグラード県(Nógrád vármegye)やゲメル県(Gömör vármegye)での条例を受けた形で、ボルショド県でもツィガーニの移動手段である馬に関して、それが許可なく売買によって獲得されたものであり、またこの人々による盗みに役立てられていることを理由に、領主の許可がない場合は保有を禁止し、それに従わない場合は没収するとの旨が条例として発布されている¹⁰⁵。このような項目は、この時点では、総督府の政令には含まれていない内容であり、地域的なツィガーニ対策が、国家に先んじて生じていたことを示す例でもある。

しかし、それ以降の約20年間、マリア・テレジア期のボルショド県条例には、ツィガーニ関連の条例が見られなくなる。この理由は、恐らく、そもそも法律や政令で定められた内容に何らかの補足や異論がなければ、県の条例を制定する必要がないという点に求められるだろう¹⁰⁶。つまり、マリア・テレジア期後半のボルショド県は総督府の提示したツィガーニ政策をそのまま受け入れていたため、あえて条例を制定しなかったと考えられる。実際に、条例は制定されていなくとも、総督府の指示に従ってツィガーニ関連業務をボルショド県が実施していたことは確認できる。例えば、1768年以降、各県に義務付けられた領域内のツィガーニの定期的な調査と、その結果の総督府への送付に関しては、ボルショド県からも総督府への送付が断続的になされていたことが確認されている¹⁰⁷。以上のことから、少なくともボルショド県に関して、先行研究で指摘された一般的な傾向と同様に、マリア・テレジア期に政令が頻繁に発布されるようになった後は、独自のツィガーニ関連条例が制定されなくなっていく、ということが確認できる。

ヨーゼフ期には、1783年4月8日の県議会でもボルショド県の評定人(esküdt)が1782年に総督府から要請された意見書を作成し、報告を行ったこと、1783年の全59項の政令を受けて、1784年2月29日に県判事たちが、県内でのみ有効な補足的なツィガーニ条例を作成したことなどがトートの研究から明らかとなっている。中でも1784年の県条例は、1783年政令の諸条項に、県内での実際の状況を加味して内容をいくらか変更、ないし補足したものと見なしうる。同県条例では大まかに分けて、①住居、②職業実践、③馬の保有、④子どもの扱い、⑤服装の5項目につ

¹⁰⁴ TÓTH Péter és BARSZ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai*, 93.

¹⁰⁵ *ibid.*, 101.

¹⁰⁶ MEZEY Barna (szerk.), *Magyar Alkotmánytörténet*, 146-155.

¹⁰⁷ TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 205-215; ICHIHARA Shimpei, “A cigányság területi mobilitása a 18. században a miskolci járás cigányösszeírásainak a tükrében”, *PUBLICATIONES UNIVERSITATIS MISKOLCINENSIS. Sectio Philosophica*, Tomus XVIII. Fasc. 1. (Miskolc, 2014), 131-172.

いての諸条項が制定された。①では、「新住民」の掘立小屋やテントの撤去を冬の間は猶予すること、「新住民」用の家屋の寸法の規定、新住民が捨てた家屋の取り扱い、鍛冶師の「新住民」の家屋建設への共同体の支援などが規定された(1783年第6条、第31条などへの補足)。②については、ハンガリー人鍛冶師の有無に関わらず、住民数に応じて、安価な仕事を行う「新住民」の鍛冶師1名以上を共同体内に留めておくべきこと、他方で、家を保有している集落以外での鍛冶仕事の実践は許可されないこと、ハンガリー人農民の家でジェッレールとして奉公を行う家なしの「新住民」は牧畜業には携われないこと、音楽演奏には演奏許可証明が必要であることが命じられている(政令28条などへの補足)。③では自ら農耕を行う「新住民」に加え、炭を運ぶという業務上の必要性から鍛冶師の「新住民」にも馬の保有が認められ(政令第2条への補足)、また、④では、子どもの引き取りに関して、養育先から逃げ帰った子供とその両親を罰した上で養育先に返す旨、並びに、他方で、幼い「新住民」の子どもの引き離しについては、引き取りたがる家庭が少ないことを理由に、県当局は強制しない旨が明言された(政令第5条、第20条、第33条などの補足)。最後に⑤では、「新住民」男性が身につけるべき周囲の住民の服装が、手工業者とそれ以外に分けて具体的に明文化されている。それによると、「ジェッレールの新住民」は、ケープ、白か青のズボン、馬革、牛革製の拍車なしブーツ、短靴など、手工業者はさらに、「ハンガリー人の職人も身につけているけばけばしくない服装」をまとうことも可能とされた(政令第15条への補足)。これらは、地域的な鍛冶仕事従事者の不足を考慮した条項を組み込み、また、服装や家の寸法など、地域によって異なる基準に具体的に言及している点で、全国レベルの法令では詳細に規定することができない部分を地域に合わせて規定したものであり、県独自の視点が盛り込まれたものと評価されている¹⁰⁸。

以上の検討から、ボルショド県は、18世紀前半には、総督府の政令の意図と食い違う方向性を持った条例を、地域の安全に配慮する形で独自に制定していたものの、マリア・テレジア期、とりわけ1760年代以降、ツィガーニ関連の取り決めについては、総督府側が提示した「同化」の方針に概ね従って行くことが指摘できる。他方で、その頻度は減少するものの、ヨーゼフ期には、詳細な総督府政令を基にしてボルショド県独自の条例が制定されていたことも確認できる。

2-3-2 諸県のツィガーニをめぐるコミュニケーション

県のツィガーニに関する措置は条例の制定だけではない。1750年代ごろから、近隣の複数の県が連絡を取り合い、互いにツィガーニに関する対処を要請していたことがナジによって明らかとなっている。このような動きは、とりわけ、総督府のツィガーニ政策がまだ本格化していなかった1760年代以前には、単一の県を超えたより広い地域においてこの案件に関する共通見解を作り上げることに寄与し、中央の政令が登場するまで、ツィガーニ統制の指針を提供していたという¹⁰⁹。先に触れた、他県の条例を受ける形で発布された1758年初頭のボルショド県条例も

¹⁰⁸ TÓTH Péter, “Borsod vármegye tervezete a cigányok szabályozására 1784-ből”, 63-67.

¹⁰⁹ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 284-306; TÓTH Péter és BARSÍ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai*, 59.

そのことを流れに位置づけられる。このような統治権力間でのツィガーニをめぐるコミュニケーションについても、ボルショド県が関わった事例を以下で確認しておきたい。

ツィガーニに関する諸県間のコミュニケーションは、主に 18 世紀中葉から 1780 年代までのハンガリー王国北中・北東地方の諸県、東北東部、あるいは南東部などの諸県の間で確認されており、その中にはボルショド県の事例も含まれる。これらの地域の県が近隣県に宛てた行政書簡では、県境を超えて自県にやってくるツィガーニへの対処が送付先の各県に伝達されている。例えば、ボルショド県が 1760 年にゼンプレーン(Zemplén vármegye)、ゲメル、アバウーイ(Abaúj vármegye)、サボルチ(Szabolcs vármegye)、ヘヴェシュ(Heves vármegye)などの近隣県に送付した書簡では、通行許可証を持たずに県内を移動するツィガーニの逮捕やその馬の没収などの措置を実行するボルショド県側の方針が明示されている。その一方で、書簡を受け取った県に向けられた要請として、ボルショド県への事前の流入を抑止する目的で、同県におけるこのような措置の実施を、送り先である諸県内で生活するツィガーニたちに通達することが求められている¹¹⁰。

また、時には総督府のツィガーニ政策に対する意見交換も書簡を通じて行われている。1762 年 1 月 12 日にボルショド県に発送されたトルナ県の書簡は、前年にハンガリー総督府から発布されたツィガーニ政令のことを、「貴族の自由と対立しているのみならず、《貧しき我らがハンガリー国民》に言い表せないほどの大きな恥をかかせることを狙っている」と評している。この書簡は、そのような評価の理由を、同政令によって、「ハンガリー以外の女王陛下の他の国々でも我慢されておらず、世界の始まり以来、いつもほとんど恥ずかしいもの、軽蔑されたものと見なされ、どこでも迫害されてきたこの民が、この度新たに、貧しく惨めで、軍事買い戻し税を支払う我らの民と、そして将来的には、恐らく我々[貴族]自身とも、同じ考慮の中へ入れられてしまう」ことに求めており、「そんなことはもはや耐えられません」との憤りが示される。さらに、総督府の目標としているツィガーニの定住と農耕への従事の実現に対しても、「いつも木陰を好んで怠惰にぶらついている人々を、特に農耕、種まき、そしてとりわけ収穫のために受け入れ、そうすることに慣れさせるのは、彼らの本質に基づく、不可能のように思えます」との見解を示し、政令に対する全体的な不賛成を表明する。そして、トルナ県(Torna vármegye)がマリア・テレジアにこの政令の撤回を求めるつもりである旨と、ボルショド県を含む近隣諸県がこれに賛同する場合は返信を望む旨を述べて書簡は締めくくられている¹¹¹。それに対して、ボルショド県は、2 週間後の 1 月 29 日付の書簡で総督府の方針に理解を示す意見を表明している。ボルショド県はそこで、総督府の政令の目的を「この人々[=ツィガーニ]の間で広まっており、ほとんど本質となっている盗みでの生活や自由な行き来を、それを禁止することによって、最も容易に排除し、また、家の建設、農耕、学習した手工業技術の実践のためにツィガーニを支援し、またそれを強制し、そして、木陰のテントの中での怠惰な状態から彼らを引き離して、その食料を手仕事によって稼ぐことへと、この国の大きな利益を見越して、強いるように促している」と評価し、さ

¹¹⁰ BAZML IV. 501/b. Borsod Vármegye Nemesi Közgyűlésének iratai, Közgyűlési iratok-Acta Politica (以下、BAZML Acta Politica) XI. I. 101.

¹¹¹ BAZML Acta Politica XI. I. 105.

らに「総督府は、[どの]領主方にもご自身の所領にツィガーニを受け入れることを強制しようと望んでいるのではなく、自発的にツィガーニを受け入れようという領主や、あるいはすでにツィガーニをその保護下に置いている領主にのみ、(...)注意を促している」というボルショド県側の理解が提示される。つまり、「この政令は、どの領主にも、義務として課されたものではなく、もし、あなた方の意志が認めないのであれば、あなた方がこの取り決めに縛りつけられるというものでもない」ため、ボルショド県はこの政令には「不都合さも、不合理さも見出していない」というのである¹¹²。しかし、ナジも指摘しているように、この場合、条令を読み違えていたのはむしろボルショド県の方であり、この政令は、どの領主にも向けられたものであった¹¹³。いずれにしても、18 世紀後半の大部分においても、総督府政令の実行主体はあくまで県の諸機関であり、このボルショド県のように、一既にそれ以前にも同様の事例が見られたことは先に述べたが一総督府の政令を独自に解釈することや、自らの解釈に基づいて、本来の意図からかけ離れた形で条例化することは十分ありえることだった。王国全体に及ぶツィガーニ政策が法的に本格化していったとしても、その意図の浸透や政令への同意の調達はすぐには困難であったことがここからも伺える。

ナジの見立てによれば、このようなやり取りが、少なくともボルショド県の位置する北東地方の諸県の間で最も頻繁になされたのは、マリア・テレジア期のツィガーニ政令が頻繁化する直前にあたる 1757 年から 1758 年にかけてである。その後も数量的には多少減少するものの、1760 年代にもボルショド県と近隣諸県のツィガーニに関するやり取りは活発に継続されて行く¹¹⁴。それでも、1770 年代以降、恐らく総督府令によるツィガーニ政令の更なる整備を背景として、県の間でのやり取りは、完全になくなったわけではないにせよ下火になって行く。

以上で概観してきた政令、県の条令、そして県の間でのやり取りからは、統治権力によって問題化されるツィガーニのイメージを抽出することが可能である。すでにその試みに着手したトートによれば、それは次のように表現される。

「諸政令の導入部が、ツィガーニがどのように見なされていたのか、を正確に物語っている。彼らは気ままに放浪し、盗みや略奪から生活している、怠惰であることに慣れ切った人々であり、より良き生活へと導かれる必要がある。また彼らは神の法にも、人の法にも染まっていない自由な人々であり、その道徳に関しては墮落しており、無知が甚だしい。神にも親しまず、国家にとっても有用ではないため、文明化された人々の間では我慢されない。国家の主導層は、子どもを、明らかに多くの点で教育可能なものとして、とりわけ考慮に入れている。そこではこう考えられていた。子供たちは、親の生活を見て取ったことによって汚れており、またそれを見習っている。こうしてツィガーニはまっとうな社会から疎外されているのだ、と。ツィガーニは、他の人々のためになるような有用な仕事を持たずに、怠惰へと沈

¹¹² BAZML Acta Politica XI. I. 106.

¹¹³ Nagy Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 291-292.

¹¹⁴ *ibid.*, 289-298.

み込んでいる。このようなことから、彼らを物乞いや盗みへ駆り立てるような貧困や必要性が結果として生じている。国家の主導層は直接的な禁止に頼るのみならず、農民や職人との恒常的な関係の維持も、ツィガーニの適応を同じく助けるだろうとあてにしていた¹¹⁵。」

もちろんこのような法の条文中で語られているのは、実像のツィガーニである以上に、定住社会の認識上のツィガーニであり、ドゥプチュク言葉を借りれば定住社会が「自らを欺くための」「特別な鏡」、ないしは「対抗イメージ」としてのツィガーニである¹¹⁶。そこでは、統治権力側が自らに代表させている価値観(定住生活、仕事、文明化、[職業]教育、有用性、他集団との接触)に対立する問題含みの像(放浪・盗み・略奪、物乞い、怠惰、無知、無用性、貧困、疎外)としてツィガーニという像が立ち上げられている。これらの像があまりにも一面的なものであったことは、すでにナジらの実証研究において知られているが、3章以下の行論においても、このような像にとどまらない、地域の中のツィガーニの姿が浮かび上がることだろう。

いずれにしても、このトートの見解は、これまで検討した全国レベルの政令において特に妥当するが、県レベルにおいても、県間の書簡などからは、放浪の問題化や、怠惰や盗み、周囲になじまないことをツィガーニの本質と見なすような考え方など、同様なツィガーニ像がある程度受け入れられていたことを伺い知ることができる¹¹⁷。

第4節 ミシュコルツの条例の中のツィガーニ

最後に、ミシュコルツの内部で制定された条例に触れておきたい。ただしこれらはミシュコルツが「買戻し」によって一定の自律性を有していた1755年ごろまでの事例に限られており、それ以降、ミシュコルツが都市内を対象に発布した条例の中で、ツィガーニに関するものは長く見出せなくなる。

1724年、並びに1726年に、ボルショド県条例において、ミシュコルツのツィガーニに関する条例が発布されていたことはすでに述べたが、その内容は都市内の家々の間に掘立小屋を建てているツィガーニを、都市域の外側へと排除するというものであった。これは、この時点において、ツィガーニが都市内で生活していた可能性を示唆するものであると同時に、そのような都市内での生活が、何らかの理由からツィガーニに認められていなかったことを示すものでもある¹¹⁸。このような排除の根拠として、一総督府の政令に従うと述べている1726年の条例は別にし

¹¹⁵ TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 53.

¹¹⁶ DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatások tükrében*, 11.

¹¹⁷ ただし、トートの提示したこの像に対しては、18世紀に問題化されたツィガーニ像を、時系列を無視して一つにまとめすぎているのではないかと、この印象を抱かなくもない。例えば、引用の中に登場するツィガーニの子どもの教育というテーマは早くても1760年代後半ごろに現れるもので、それ以前はあまり重視されていない。特に、県レベルでは、文化的な変容よりは、どちらかと言えばツィガーニの放浪や馬の保有の抑制、定住の促進に力が入れていたことはここまでの引用からもうかがい知れる。

¹¹⁸ TÓTH Péter és BARSZ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai*, 70, 75.

て一少なくとも 1724 年の条例から読み取れるのは、掘立小屋の中にある火床によって容易に火災が引き起こされる危険がある、ということである。このようなツィガーニと火災を結び付ける言説は、ミシュコルツ内のその他の条例の中でも登場する。1746 年の防火に関する条例では、第 5 条でツィガーニを取り上げ、ツィガーニの居住地を都市の外に限定すると定められている。例外的に、冬の間は都市の中で暮らすことを許可しているが、その場合には、領主がツィガーニ用の家を建設し、そこに住まわせる必要があるとした¹¹⁹。ただし、これが実施されていたことを示す史料は確認できない。このように、ツィガーニと火災が結び付けられる原因を考えると、その一つとして彼らが生計活動の過程で火を頻繁に使用していた可能性が浮上する。前近代におけるツィガーニの生計活動において鍛冶仕事をはじめとする金属加工業への従事は広く見られ、当時の記述などから作業工程に火を使用していたことが知られている¹²⁰。また、次章で見るように、17-18 世紀転換期のボルショド県内や、18 世紀前半のミシュコルツでもそのような活動は行われていたと考えられる。この想定の妥当性は、同じく 1746 年の防火条例の別の条項において、仕事の過程で火を用いる壺焼き職人の仕事場も、同様に都市の外部に限定する旨が定められていることによって補強されるだろう¹²¹。

1740 年に発布された条例も、ツィガーニの鍛冶仕事と関連したものである。この条例は同年 1 月末、ミシュコルツの金属細工師ギルドの請願を受けて市場町参事会が発布したものであり、そこでは、ミシュコルツに留まるツィガーニに対して、自らの仕事の実践場所が彼らのテントに限定されること、これまでツィガーニが市場にて実施してきたブーツのかかとへの金具取り付けも禁止されること、が規定されている。さらに、ツィガーニ以外の、ギルドに属さない手工業者に対しても、ギルド規約に反して営業を行った場合は罰せられる旨が述べられている¹²²。

18 世紀前半に確認されるツィガーニと関係のある条例のうち、市場町内における鍛冶仕事と直接には結び付けられない条例は、ペストの防止に関するもののみである。18 世紀前半のハン

¹¹⁹ *ibid.*, 53-54.

¹²⁰ ツィガーニの鍛冶仕事は、中世で観察された特定の技法が、18 世紀の版画や 20 世紀の民族誌などでも知られていることから、ツィガーニの伝統の継続やその文化の「不変性」と結び付けられることもあるが、構築主義的視点も考慮した場合、それは、特定の人間集団における技術の継承という観点のほかに、同様の技術の有していたがために、全くつながりのない人々が時代ごとに周囲からツィガーニと見なされたという可能性にも留意する必要があるだろう。いずれにしても、「20 世紀まで受け継がれた」とされた中世の鍛冶技術は、例えば 1497 年のギリシャで観察された以下のようなものである。「彼らはあらゆる種類の職人技を実演した。靴の作成に修理、さらに鍛冶仕事もだ。何とも奇妙な印象を受けた。例えば、金床が地面に置かれるとすぐに、その男は(…)そのそばへ座り込んだ。男の近くで、その妻が同じく地面の上に陣取って糸紡ぎをしていた。その結果、火は彼ら 2 人のちょうど間に来た。彼らのそばには管状の小さめの革袋 [=ふいご] があり、それは半分地面に埋められている。女の方が糸紡ぎをしている間、時折どちらかの袋を地面から持ち上げ、それから再び下へ押し付ける。こうすることで、男が作業できるように、火に向けて地面から風を吹き付けているのだ。」DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatások tükrében*, 40-41. ツィガーニの金属加工、鍛冶仕事に就いては、以下も参照。NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 182-186; TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 97-100.

¹²¹ TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok*, 53-54.

¹²² BAZML TJ 2. köt., 770.

ガリー王国では、ペストが 1709 年から 1710 年にかけてと 1739 年と 1742 年にかけての 2 度流行し、1709-1710 年の流行時にはミシュコルツでも激しい被害が発生した。その教訓から、2 度目の流行時には、ボルショド県では県境界地域における検疫所の設置など、徹底した対策が取られることとなる¹²³。ミシュコルツの都市レベルでも同様に条例を作成し、監視の強化、病人の報告、葬儀手続きの指定(人が集まる葬式の禁止)などの措置を通じて、流行防止を住民に喚起した¹²⁴。そのような措置の中には、ボルショド県の領域へ特定の移動者の流入を禁じる条項が含まれており、とりわけペスト発生地域であるハンガリー王国南東部(アラド県(Arad vármegye)、テメシュ県(Temes vármegye)など)からやってくるツィガーニやユダヤ教徒、そして上部地方から薬用品などを行商にやってくる「スロヴァキア人」商人への警戒が強められた¹²⁵。ここで問題となっているツィガーニの移動の理由は具体的には分からないが、当時のツィガーニ鍛冶師の業務形態がしばしば移動を伴うことであったことを考慮すると、県への流入を禁止されたツィガーニの中には、県外の鍛冶師も含まれていたと考えられる。

以上が、18 世紀の国家レベル、県レベル、地域レベルにおける「ツィガーニ問題」と関連した知見の概要となる。ここまで、18 世紀ハンガリー王国における国家レベル、県レベルでのツィガーニへの対応について、先行研究に大きく依拠したうえで、県と総督府のそれぞれの指針の連動性や違い、ズレなども意識しつつ、ボルショド県、ミシュコルツと関係ある事例を中心に整理を行った。先行研究での指摘と同様となるが、特に 18 世紀中葉ごろ、ツィガーニの移動、馬の保有、盗みなどが各地の県、国家機関などによって問題化されて行くこと、そのような問題をツィガーニの定住化、ならびに定住を成立させるためのインフラ整備として周囲への「同化」＝「農奴化」を強制することで解決しようとする流れが統治権力の間に現れること、その流れは特に 1760 年代以降、県が総督府の政令に追従するという形で主に展開されていくことが確認できた。次章以下では、1 章で整理したミシュコルツという場の特性、並びに本章で検討したツィガーニに関する政令や条例に規定されつつ 18 世紀の都市ミシュコルツで活動したツィガーニたちの諸相に焦点を当て、その紐帯の形成および変化の過程を見通していきたい。

¹²³ FARAGÓ Tamás, A város népesség”, MT. III., 1. köt. 194-195.

¹²⁴ TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok*, 39.

¹²⁵ BAZML TJ, 2. kör, 730.

第3章 ミシュコルツへのツィガーニ集団の定着—ツィガーニ鍛冶師活動制限条例(1740年)の分析から—

導入

前近代のツィガーニの歴史研究には、現状として、時代ごとの研究蓄積の偏りが顕著に見られる。その主な原因は、関連史料の残存状況、あるいは史料調査の進展状況の違いに求められるだろう。中でも、比較的多くの研究が集中しているのは18世紀後半だが、その時代への集中は、これまで見てきたように、当時展開されたツィガーニ政策の過程で中央政府や各地域で様々なツィガーニ関連の史料が作成されたことに起因している¹²⁶。この状況に比して、その前段階にあたる18世紀前半は、やや等閑視される傾向にある。

それでも、18世紀前半に関する研究がまったく存在しないわけではない。この時代におけるツィガーニと周囲との関わり方の大まかな特徴はナジによってすでに指摘されている。ナジによると、18世紀前半は、ハプスブルク、オスマン、トランシルヴァニアからなる、いわゆる三分割の時代が17世紀末に終結したことに伴って、それまでハンガリー各地で形成されていたツィガーニと彼らを取り巻く社会との関係のバランスが変化して行く時期であるとされる。その背後には、大きく言えば、ハンガリー王国全体がハプスブルク家の統治体制へと統合されたことに伴う様々な社会的変動の影響、ハンガリー外からの新たなツィガーニ集団の流入、戦争の終了に伴う人口の急激な変動など、王国レベルでの状況の変化が存在した。その中で、ツィガーニは、地域における労働力や特別な技術への需要、経済的排他性、あるいはツィガーニ自身の態度など、様々な条件に規定されつつ、排除・拒絶されることもあれば、地域当局や領主による統制の下、移動生活が容認され、地域社会から受け入れられることもありえた。この時代のツィガーニとその周辺社会との関係についてナジが強調するのは、このような地域ごとの多様性である¹²⁷。一方でこの時期にも、1724年に国家主導でツィガーニを定住させ、社会へ「統合」しようとする動きも生じているが、ここまでですでに見てきたように、ツィガーニの統制への主導権は、当時はまだ各地域の統治権力の手に握られており、時には中央の要請に反する形も含めて、それぞれの地域に必要とされた形態でツィガーニとの関係が形成されていた¹²⁸。

ナジは、以上の像を多様、かつ断片的な各地の規定やその他の事例から引き出している。一方で、この時代を研究する際のジレンマとして、諸地域の在り方が詳細に判明していないため、そこで明らかとなったことを過度に一般化せざるを得ないこと、また地域的に発布された条例などの規定の背後に迫ることができないことなどを指摘する¹²⁹。序章でも指摘したように、このような問題点を解消した研究は、研究蓄積がより多い18世紀後半でもいまだ多いとは言えないが、

¹²⁶ ERDŐS Zoltán, “Értelmezés és megértés: A magyarországi cigányság korai történetének historiográfiája”, 129-144.

¹²⁷ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 231-238.

¹²⁸ *ibid.*, 231-242, 271-279.

¹²⁹ *ibid.*, 274.

いずれにしても、この点を解決するためには、ツィガーニに関する個々の事実を、ツィガーニとは直接的には関連のない史料や地域史の研究成果をも参照しつつ、出来る限り当時の地域的な文脈の中でとらえ直すことが必要となるだろう。本章は、この課題をも意識しつつ、18 世紀前半のミシュコルツという場においてツィガーニが周囲の社会と結びついていた関係性を問うものである。

ミシュコルツにおいて現時点で知られているツィガーニに関する最も古い記録とされるのは、1689 年の裁判において、ある女性がツィガーニと同衾したことを認める証言を行った、というものである¹³⁰。とは言え、その頃のミシュコルツにおけるツィガーニの活動はほとんど可視化されていない。例えば、18 世紀以前のミシュコルツの条例において、ツィガーニに関して言及したものは確認されていない¹³¹。

これらのことは、18 世紀以前のミシュコルツにツィガーニがほとんど存在しなかったことを立証するものではないが、この市場町の住民、とりわけ、その監督・運営を指導していた参事会の視点からは、ツィガーニがこの市場町の生活にとって取り立てて重要なものでも、関心が向けられるものでもなかったことを窺える。しかし、18 世紀初頭以降、史料におけるツィガーニへの言及は断片的ながら、徐々に増加していく。1750 年代以降のミシュコルツのツィガーニを主たる対象としたトートの研究の冒頭でも言及されているように、18 世紀前半におけるツィガーニは金属加工活動に従事する人々として史料中に現れていたことが知られている。第 2 章で見たように、ミシュコルツ内で発布されたツィガーニに関する条例の多くからもそのような活動との関連が読み取れる。さらに、同じくすでに見た 1740 年に発布されたツィガーニの鍛冶師の活動を制限する条例から、当時のツィガーニはミシュコルツ内のその他の金属加工業者の利害を脅かす存在と見なされていたとトートは解釈している¹³²。そのような状況は、市場町社会のどのような背景の下に生じたものだろうか。そしてそのような状況を受けて、ツィガーニには、ミシュコルツ内でのどのような活動の余地が開かれていたのだろうか。

以下では、18 世紀前半のミシュコルツにおけるツィガーニの状況を、ツィガーニがこの都市内で行っていた金属加工による生計活動に注目して、検討する。なかでも 1740 年に発布されたツィガーニの鍛冶師の活動を制限する条例の意義をその当時のミシュコルツやそこで活動していた手工業者の状況をも踏まえた上で再検討する。それらの分析からは、この 18 世紀前半の時期に、ミシュコルツにおいてツィガーニと都市社会との関係性が本格的に取り結ばれ、彼らがこの都市に定着し始める契機が生じていたことを指摘できるだろう。

前章の繰り返しとなるが、18 世紀前半のツィガーニに関する条例の多くは、ツィガーニの鍛冶仕事に言及、またはそれとの関係を示唆するものだといえることが可能である。その中でもミシュコルツにおけるツィガーニの状況を考える上で注目すべきなのは、1740 年の条令である。すでに第 2 章で触れたその内容を繰り返すと、それは、ミシュコルツの金属細工師ギルドの請願

¹³⁰ BAZML IV. TJ 1. köt., 450

¹³¹ TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok 1573-1755*.

¹³² TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 205.

を受けて市場町参事会が発布したものであり、ミシュコルツに留まるツィガーニに対して、自らの仕事の実践場所が彼らのテントに限定されること、これまでツィガーニが市場にて実施してきたブーツの靴底への金具取り付けも禁止されることを規定するものであった¹³³。そこからはツィガーニの仕事を規制したかった金属細工師ギルドの思惑、それらのギルドとツィガーニが競合していた可能性など、興味深い状況を読みとることが可能である。条例内で言及された金属細工師ギルドの請願書は、現在残っていないため、この件について直接的に語る史料は、この条例のみとなる。それでも、その他の史料や研究成果に基づいて、このような問題が生じた背景や、ツィガーニがこの時ミシュコルツ内で置かれていた状況について以下で考えてみたい。

この条例に対する従来の評価は概ね以下のようなものである。

まず、ツィガーニ史研究の文脈では、トートがこの条例に触れている。彼は、先に言及した指摘に加え、この条例をギルドとツィガーニとの間での経済的な摩擦の結果と評価し、そのような利害対立が生じた場合、地域の統治権力が擁護するのはギルドの方だったということを示す一例として位置づけている¹³⁴。しかし、この条例が生じた時期や、その前段階においてこの都市やギルドが置かれていた状況を踏まえた上で、条例が制定された背景を問うことはなされていない。

また、ギルド史、産業史の方面では、シュポーネル・ペーテルが、ハンガリー王国北東地方の金属細工師に関する論考の中でこの条例に言及している。彼も、トートと同様に、ミシュコルツの金属細工師ギルドが、ツィガーニの鍛冶師との間でブーツの靴底の金具付けをめぐる経済的競合を引き起こした結果、参事会に働きかけることによって、ツィガーニを締め出そうとしたという評価を行っている。シュポーネルの諸研究は、それに加えて、18世紀前半の金属細工師が置かれた状況についても触れている点、あるいは17-18世紀転換期ごろの北東地方各地におけるツィガーニ鍛冶師の活動にも言及を行っている点で非常に示唆を得られる内容を含んでいる¹³⁵。ただ一方で、1740年の時点にミシュコルツでツィガーニの鍛冶師への都市内での需要や、

¹³³ 「[1740年1月(31日?)]」

我らの都市に住む誠実なる金属細工師ギルドに属する人々の請願のために、全会一致で以下のことが決定された。この都市にとどまるツィガーニが自身の技術を実践するのは自らのテントの中に制限される。市場にてこれまでツィガーニによって実施されてきたブーツの靴底の金具を打ち付ける仕事(csizma patkolás)は、率直に彼らに許可されない。同じく、ギルドに属さない手工業技術者によって、ギルド規約に違反して行われる仕事は判事殿のご慈悲によって禁止される。そして、当の誠実なギルドに属する職人たちが自らの特権ならびにギルド規約の中で今後も保護され、維持されるように、適切な支援によって[このような現状は]修正されること。」BAZML IV. 1501/a. 2. köt. 770.

¹³⁴ TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 205; TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 97-98.

¹³⁵ SPÓNER Péter, “Vashámorok, kovácsok, cigánykovácsok”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelt-Magyarországon* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, 2006), 73-81; idem, “Városkönyvi adatok a miskolci lakatoscéh történetéhez”, GYULAI Éva és VIGA Gyula (szerk.), *Történet – muzeológia: Tanulmányok a múzeumi tudományok köréből a 60 éves Veres László tiszteletére* (Miskolc: Borsod-Abaúj-Zemplén Megyei Múzeumi Igazgatóság/ Miskolci Egyetem BTK Történettudomány Intézet, 2010), 152-161; idem, “Céhes iparosok Miskolc Város Tanácsának szolgálatában (1761-1848)”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, L. (Miskolc, 2011), 341-353; idem, *Egy mezőváros céhes ipara a városi jegyzőkönyvek tükrében: Miskolc céhes ipar története (1761-1848)* (Debrecen: Debreceni Egyetem, 2011).

彼らとギルドとの経済的競合が生じた背景を、都市を取り巻く状況や、鍛冶師、金属細工師などその他の職人の置かれていた状況とを関連づけて、十分に説明し切れているとは言えない。そこで、以下では、ハンガリー王国北東地方のギルド、産業、ミシュコルツ都市社会史に関する先行研究の成果と 18 世紀前半のミシュコルツのツィガーニに關係する史料を突き合わせることで、その背景を踏まえた上で、当時の状況をより具体的に描き直すことを試みる。

第 1 節 18 世紀前半のボルショド県におけるツィガーニの鍛冶師の活動可能性

条例の背景を考えるために、まず、17 世紀末から 18 世紀初頭のハンガリー王国北東地方の状況を整理しておきたい。ボルショド県の市場町ミシュコルツが位置するハンガリー王国北東地方は 17 世紀末まで、対オスマン帝国戦線の前線であり、また 18 世紀初頭のラーコーツィの蜂起に際してはカッシャを始め、多くの拠点がラーコーツィに協力した地域にあたる¹³⁶。当時、この地方の各地に設置された境界要塞やその周辺の製鉄所では、武器類の生産が盛んに行われていたことに加え、ボルショド県に北接するアバウーイ県のカッシャを中心とした諸都市では様々なギルドが活動を展開していた。この地方の南端にあたるボルショド県でも、ミシュコルツにおいて中世末以降、一定の産業・ギルドの発展が見られ、この都市が県内における産業の中心地の機能を担っていた¹³⁷。

また、これらのギルドに属してはいなかったものの、ツィガーニの鍛冶師も、17 世紀にはこの地方の各県で一般の領主の下や要塞にて一定期間の契約を結ぶ形で雇用されていたことが分かっている。17 世紀中にミシュコルツでツィガーニが鍛冶仕事を実践していた記録は確認されていないものの、17 世紀後半に同じボルショド県内のオーノド(Ónod)やセンドルー(Szendrő)などの要塞地域においてツィガーニ鍛冶師が活動していた事実が知られている¹³⁸。加えて、18 世紀初めに、ラーコーツィの要請を受けてボルショド県から発行された価格規定表では、「ツィガーニの鍛冶師」という項目が設けられており、その中には彼らが実践できる業務内容とその価格が記されている¹³⁹。この史料は 1706 年のボルショド県県議会議事録の中で確認できるが、ツィ

¹³⁶ BARTA János, ifj., *A tizenharmadik század története*, 17-24; HAZAG Ádám és SPÓNER Péter, “Lakatosok, fegyverművesek, óráskok, ágyúöntők”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon*, 82-96.

¹³⁷ GYULAI Éva, “Gazdalkodás, termelés és árucsera a kora újkor Miskolcon”, MT II., 175-356; idem, “Régiók és kézművesség a török kori Északkelet-Magyarországon”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon*, 7-13.

¹³⁸ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 182; TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 33.

¹³⁹ BAZML IV. 501/a. Borsod Vármegye Nemesi Közgyűlésének iratai, Közgyűlési jegyzőkönyvek (以下、BAZML KJ) 15. köt, 45-64; BAZML Acta Politica XVI. I. 64. RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalmá*, 55. なお、シュポーネルの先行研究(SPÓNER Péter, “Borsod vármegye 1770-es limitációjának kerékgyártó-árszavása”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XLV. (Miskolc, 2006), 241-248.) などでは、1706 年の規定と同様の価格規定が 1739 年にも更新されたと見なしているが、1739 年に発効したと見なされている史料の内容は、その発行理由として記された前文も含めて 1706 年の価格規定表のほぼ完全なコピーであり、また、この文書が最初に文書館に納められた時点で史料に付されたと思われる分類用の題目には「年号の明記されていない商品価格規定(Limitatio

ガーニの鍛冶師の仕事に対する価格設定は以下の通りである。(fr. =フォリント dr. =ディーナール
1 fr. =100 dr.)

「大型犁の刃のはんだ付け、犁先の取り付け、付属品の取り付け。総じて食料で埋め合わされる。54 dr.

犁先の付属品取り付け。食料を与えた場合は金額から差し引く。 12 dr.

犁先のはんだ付け 食料を与えた場合は金額から差し引く。 12 dr.

新品の犁の刃の作成 75 dr.

犁先の作成 6 dr.

屑鉄を用いた犁の接続部分の釘打ち 6 dr.

新品の鉄を用いた犁の接続部分の釘打ち 3 dr.

犁の刃の接続部の釘打ち 6 dr.

屑鉄を用いた荷車用鉄板の取り付け 6 dr.

鉄を用いた荷車用鉄板の取り付け 3 dr.

荷車の車軸固定用の留め釘作成 4 dr.

車軸の片側の留め釘作成 2 dr.

車輪とスポークの間の留め金作成 12 dr.

スポークの一方のみの留め金作成 6 dr.

留め輪の打ち付け 3 dr.

ツイガーニの自前の鉄を用いたブーツ 1 足の靴底への金具打ち付け 9 dr.

依頼人に支給された鉄、ならびに鋼鉄を用いた大型車輪用のキリの作成 45 dr.

キリの一種の作成 24 dr.

依頼人に支給された鉄を用いた大釘用キリの作成 12 dr.

木材用キリの作成 9 dr.

車輪にスポークを取り付けるためのキリの作成 9 dr.

依頼人の鉄を用いた蝶番の作成 12 dr.

依頼人に支給された鉄を用いた家畜用の枷 60 dr.

ツイガーニの自前の鉄を用いた鋸釘千本 80 dr.

依頼人に支給された鉄を用いた鋸釘千本 36 dr.

ツイガーニの自前の鉄を用いた細板用の釘 100 本 24 dr.

Rerum Venalium de Anno non expressanto)」と記されている。1739 という数字はその史料の題目と同じ表面に鉛筆書きで記入されているが、これが年号を示すものかどうかは定かではなく、またその史料本文に 1739 年に転写、再発効したことなどを示す文言は見当たらない。そのため、本論文では、先行研究の評価と異なり、この 1739 年作成と見なされてきた価格規定表を 1706 年当時作成された写しであるとは見なす方が妥当との認識に立ち、この価格規定を 1739 年というタイミングで作成されたものとは見なさない。なお、同史料が実際に 1739 年に作成されたことが今後確定されることがあったとしても、それは 1739 年においてもツイガーニの鍛冶仕事に県によって保証されていたことを意味し、本章における筆者の主張をむしろ補強するものと見なしうるため、その場合でも大幅な議論の修正は必要ないものと思われる。

依頼人に支給された鉄を用いた細板用の釘 100 本 15 dr.

依頼人に支給された鉄を用いた馬への蹄鉄打ち 12 dr.

12 本の釘 8 dr.

ハンマーとともに使うタイプのノミ作成 18 dr.

ハンマーとともに使わないタイプのノミ作成 9 dr.

大釘 6 dr.

水車の鉄具 1 fr. 24 dr.

水車の輪の部品 36 dr.

ナベ 40 dr. 」

この価格表では、犁などの農具の部品作成や取り付け、釘、ノミ、キリなどの工具の作成、あるいは、荷車の部品作成、馬の蹄鉄打ち付け、ブーツの靴底への金具の取り付け、家畜の枷や水車の部品の作成など、ツィガーニの鍛冶師が取り扱うことができた様々な品目を確認できる。これまでの研究には、「大型の犁の刃のはんだ付け、犁先の取り付け、付属品の取り付け」などの業務実践に対して、食料での支払いが認められていることに注目し、その点にツィガーニの鍛冶師の特徴を見出す論調も存在する¹⁴⁰。いずれにしても、以上の整理から、ボルショド県では、17 世紀から 18 世紀初頭にかけて、ツィガーニの鍛冶仕事は県によって公式に規定される程度には一般的なものであり、また複数の地域でその仕事に対する一定の需要が存在していたことが確認できる。

しかし、一方で、ツィガーニの鍛冶師の業務内容は、他の業種との競合の可能性を潜在的に秘めているものでもあった。同じく、1706 年の価格規定表では、ツィガーニの鍛冶師のほかに金属の取り扱いを主たる業務とする 2 業種、金属細工師(lakatos)と鍛冶師(kovács)が登場する。両者は、ボルショド県では少なくともミシュコルツにてギルドとして活動していたことが知られている。ミシュコルツの金属細工師は 1675 年にカッシャの金属細工師ギルドから特許状を獲得する形で結成された¹⁴¹。他方で鍛冶師についても、近隣県からは遅れるものの、17 世紀末から 18 世紀前半までの間にミシュコルツでの操業を開始していたとされる¹⁴²。彼らの取扱品目は以下の通りである。

「鍛冶師」

製鉄所製の鉄 1 マージャ(=約 56 kg)当たり (夏料金) 3 fr. 60 dr.

製鉄所製の鉄 1 マージャあたり (冬料金) 4 fr.

鉄 1 マージャの都市への運搬 (冬料金) 4 fr. 50 dr.

¹⁴⁰ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 184-185.

¹⁴¹ SPÓNER Péter, “Városkönyi adatok a miskolci lakatoscéh történetéhez”, GYULAI Éva és VIGA Gyula (szerk.), *Történet – muzeológia*, 152-153.

¹⁴² SPÓNER Péter, “Vashámorok, kovácsok, cigánykovácsok”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon*, 77-78.

鉄 1 マージャの都市への運搬 (夏料金) 4 fr. 10 dr.
大きめの鉄 24 dr.
中規模の鉄 14 dr.
より小さめの鉄 12 dr.
ブドウ畑用の大クワ 36 dr.
良質の 2 枚刃のクワ 42 dr.
クワのはんだ付け 15 dr.
依頼人により支給された鉄を用いた、荷車の鉄による補強 6 fr.
中型荷車の鉄による補強 5 fr.
依頼人により支給された鉄を用いた、新品の車輪の鉄による補強 1 fr.
車輪のくず鉄による補強 50 dr.
車軸の鉄による補強 50 dr.
鍛冶師自前の釘を用いた、[荷車への]新品の鉄の打ち付け 15 dr.
様々な釘を用いた、[荷車への]鉄の打ち付け 9 dr.
新品の車軸固定用鉄板の打ち付け 6 dr.
中古の荷車用鉄板の打ち付け 3 dr.
鍛冶師自前の釘を用いた、新品の馬の蹄鉄の打ち付け 12 dr.
馬の蹄鉄の打ち付け 6 dr.
蹄鉄と釘の販売 9 dr.
鋤釘 1000 本 90 dr.
細板用の釘 100 本 24 dr.
厚板用の釘 100 本 21 dr.
依頼人により支給された鉄を用いた、新品のバケツの補強 30 dr.
馬鍬の刃 一本 1fr. 8 dr.
新品の鉄板 90 dr.
新品の犁先 60 dr.
依頼人により支給された鉄を用いた、犁先のはんだ付け 48 dr.
鍛冶師自前の鉄を用いた、犁先のはんだ付け 60 dr.
犁の刃の研磨 30 dr.
クワの刃の研磨 1 dr.
石切り用ツルハシ 24 dr.
除草用の大クワ 21 dr.
新品の大型斧 60 dr.
小型手斧 48 dr.
日雇人用の小型手斧 45 dr.
鍛冶師自前の鉄を用いた、斧の鍛錬 24 dr.

細身の鎌の研磨 18 dr.
ワイン輸送用荷車の鉄の鎖 20 fr.
馬 4 頭付きの荷車の鎖 17 fr.
馬 2 頭付きの荷車[の鎖?] 11 fr.
ウィーンの鋼鉄(Bécsy aczél) フォント(=約 560 グラム)当たり 30 dr.
他の種類の鋼鉄 フォント当たり 24 dr.
鍛冶師自前の鉄を用いた、大釘 28 dr.
鍛冶師自前の鉄を用いた、車軸固定用の留め釘 6 dr.」

「**金属細工師**

スズメッキを施したフェーヘルヴァール宮廷風のクツワ 90 dr.
荷車引き用の馬のクツワ 50 dr.
スズメッキを施した金属製アブミ 60 dr.
スズメッキを施していない簡易な金属製アブミ 36 dr.
農業用荷馬車のアブミの金属部分 36 dr.
オモガイに取り付けるスズメッキを施したクツワ 30 dr.
男性用ブーツ一足への金具打ち付け 12 dr.
女性用、ならびに子供用ブーツの金具打ち付け 9 dr.
ブーツ一足分の拍車の取り付け、固定 18 dr.
拳銃一挺分の洗浄、清掃 72 dr.
ライフル一挺分の清掃、漂白 24. dr.
ライフルの撃鉄の切断 12 dr.
ライフルの撃鉄の作成 42 dr.
小銃の射出口の作成 5 fr. 60 dr.
新品の補強板 4 fr.
二挺拳銃 一式 6 fr.
フリントロック式銃 5 fr.
銃剣一式 6 fr.
スズメッキを施した精巧な帯蝶番と蝶番の扉への取り付け 1 fr. 80 dr.
より簡素な蝶番の扉への取り付け 1 fr.
メッキを施していない帯蝶番 75 dr.
扉の両側への錠前、メッキの施されたノブ、鍵、釘の取り付け 5 fr.
扉の片側への錠前、鍵、ノブ、レバーの取り付け 1 fr. 50 fr.
スズコーティングされていない簡素な錠前と鍵 75 dr.
大きめの錠前用の鍵 30 dr.
より小さい錠前用の鍵 24 dr.

門用の大型南京錠 1 fr. 20 dr.
中型南京錠 45 dr.
三角形の小型南京錠 24 dr.
四角形の小型南京錠 12 dr.
銃床 90 dr.
拳銃のグリップ 1 fr.
装飾の施された銃床の作成 1 fr. 20 dr.
五本刃の馬櫛 48 dr.
四本刃の馬櫛 36 dr.
三本刃の馬櫛 24 dr.
二本刃の馬櫛 12 dr.
メッキを施されたタンス用の錠前 1 fr. 80 dr.
メッキを施されていないタンス用の錠前 1 fr. 20 dr.
櫃の錠前と鍵 45 dr.
メッキを施された窓枠用の釘、レバー、メッキされていない蝶番の窓枠への取り付け 1 fr.
小窓付きの窓のメッキ処理 6 dr.
[解説不能] (Feketetűl?) 3 dr.
火皿の作成、硬化 36 dr.」

1706 年の価格規定表では、これらの 3 者が区別されて記入されていることから認識できるように、各業者が取り扱う品目は基本的には異なっていた。しかし中には、重複する品目も存在している。価格規定表を手掛かりにこの 3 つの職業集団の取り扱う品目の重複を抽出すると、次のようになる。

まず、通常の鍛冶師とツィガーニの鍛冶師の間には、各種の釘類や、馬の蹄鉄打ち、犁の部品、車輪や荷車の部品など、共通の取り扱い品目が存在している。一方で、鉄の精製、荷車用の鉄の鎖、そしてクワ、斧、鎌といった農具類などは通常の鍛冶師の品目のみに登場し、ツィガーニの取り扱い品目には含まれない。

続いて、金属細工師の業務としては、主に銃の作成、金属製の馬具の作成、錠前の作成、扉や窓枠の取り付けなどが規定されているが、1740 年に主な問題となるブーツの靴底の金具取り付け、あるいは一部の扉の部品などについては、ツィガーニの業務との重複が見られる。

また、同様の業務内容であっても、例えば大釘や鋲釘のように、他の職種と比較した場合、ツィガーニの方がいくらか価格が安く設定されている品目も確認できる。ブーツの靴底の金具取り付けも、そのように見なせる品目の一つである¹⁴³。

ところで、先行研究では、ツィガーニの鍛冶師とその他の金属加工業の仕事を比較した場合、ツィガーニの業務においては、銃器作成など、特別な技術を要する品目が扱われないという点で、

¹⁴³ BAZML KJ 15. köt, 45-64; BAZML Acta Politica XVI. I. 64.

彼らが専門的技術を有しておらず、その他の職業とは活動領域が異なっていたということが強調されている¹⁴⁴。それに付け加えれば、金額面で見てもツィガーニとその他の職種の違いは見て取れる。価格規定表の内容を見る限り、ツィガーニの業務では相対的に高額の対価を要する業務は多くない。例えば、ツィガーニの鍛冶師の業務の中で1フォリントを超えるものは1つしかない。その一方で、鍛冶師は荷車の車体や車輪の補強、荷車の鎖作成など、11の業務が1フォリントを超え、うち3つが10フォリント以上である。金属細工師は銃器類、南京錠などの15の品目が1フォリントを超え、うち5つが5フォリントを超えている。こうした点から見ても、従来の研究の指摘は妥当と言える。しかしそれでも、この価格規定表の内容は、両者が同一地域において活動をした場合、特定の品目に限っては利害が衝突する可能性があったことを否定するものではない。その意味で、18世紀前半のボルショド県やミシュコルツにおいてツィガーニの鍛冶師とそのほかの金属加工業者は少なくとも一定の領域においては商売敵でありえたと言える。

第2節 18世紀前半のミシュコルツにおけるツィガーニの鍛冶師の活動

ここまで取り上げてきた価格規定表は、ボルショド県全体に適用されたものであったが、ミシュコルツに限って見た場合でも、18世紀前半のミシュコルツの『会計報告書』や『参事会議事録』には、非常に断片的なものながら、ツィガーニが実際に鍛冶仕事に従事していたことの痕跡が窺える。例えば、参事会当局による現金での支払いに関する項目からは、以下のような情報も引き出すことができる。1704年にはツィガーニのパルコーが参事会当局の建物の扉の蝶番の作成、あるいは馬の蹄鉄用の釘の作成を行ったことが知られている¹⁴⁵。また、1717年にはあるツィガーニが市場町参事会所有の荷車の作成と引き換えに24デーナールを、また同じ年の別の機会に、さらに2台の荷車を作成したことから、パン一斤と90デーナールの支払いを受けている¹⁴⁶。1736年には、具体的な業務内容は不明だが、何らかの仕事への対価として市場町当局からツィガーニのカッローに20フォリント9デーナールが支払われた¹⁴⁷。あるいは、1739年に、都市のためにやかんの作製、あるいは修理を行ったことから、あるツィガーニが1フォリント2デーナール、ならびに18デーナールを受け取っている¹⁴⁸。

なお、この『会計報告書』の支出欄では、このような金属部品の取り扱いの対価として参事会から支払いを受け取った人物の肩書までが言及されるというケースは非常に少ない。また、実行者の名前について確認できない事例にも頻繁に出会う。例えば、1729年の記録でも、馬の蹄鉄や荷車の修理などへの支払いについての言及が見られるが、それを行ったのが誰なのか、どの業者だったのか、ということは記入されていない¹⁴⁹。その他の年の報告書では時折、鍛冶師の職種

¹⁴⁴ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 185.

¹⁴⁵ TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 205.

¹⁴⁶ BAZML IV. 1501/f. Miskolc város tanácsának iratai, Miskolc Város Számadási iratai (以下、BAZML Város Számadási Iratai) 27. köt., 85.

¹⁴⁷ BAZML TJ, 2. köt., 479.

¹⁴⁸ BAZML Város Számadási Iratai 36. köt., 26, 55.

¹⁴⁹ BAZML Város Számadási Iratai 32. köt.

への言及も見られるが、それはすべての取引で明記されているわけではない¹⁵⁰。そのため、ツィガーニと参事会の間での取引がこの時期、ここで参照できた以上に存在した可能性というのは十分に考えられる。

また、本章のために利用できた『会計報告書』にはブーツの靴底の金具付けへの対価としての支払いは確認できない。この報告書はあくまでミシュコルツ参事会当局とツィガーニとの取引のみを記録した性格のものであるため、そこからは、問題のブーツの靴底への金具付けのような、参事会ではなく都市住民、特にブーツ職人からの需要が主だったものと思われる業務について、その需要がどの程度存在したのか、を知ることが困難である。しかし、1740 年の条例で、規制の対象としてツィガーニの鍛冶師が特に名指しされているという事実そのものが、ツィガーニによるブーツの靴底への金具取り付けが、住民の需要を一定程度満たしていたことを示していると考えても差し支えないだろう。

以上のことから、18 世紀前半のミシュコルツでは、ツィガーニの鍛冶師の仕事に市場町内で一定の需要が生じていたことが確認できた。またブーツの金具取り付けについても、その需要がありえたように思える。

第3節 18 世紀前半のミシュコルツ社会の変化と金属加工業者

ところで、先述のように、ミシュコルツの『会計報告書』からは、この時期のミシュコルツ参事会が金属細工師や一般の鍛冶師とも取引を行っていたことも確認できる。また、ツィガーニが実際に参事会のために取り扱った品目の中には、荷車や、扉の取り付け部品である蝶番など、これら 2 つの職種と利害が対立するものも含まれている。しかし、1740 年に生じるような他業者からの抗議や、都市によるツィガーニの鍛冶師の経済活動への制限措置は、それ以外には明確な形では確認されていない。すでに指摘したように、1724 年と 1726 年に、ツィガーニの居住地を都市内ではなく都市外に限定する条例が県から発布されている。確かに居住地の移動は彼らの経済活動に結果として何らかの制限を課したかもしれないが、これらの条例にしても、元々は防火への関心から生じたものであり、ツィガーニの都市内での経済活動を制限する意図でなされたものとは言えない。

しかし、このような経済活動の余地は、ツィガーニにとって当時のハンガリー王国のどこでもありえたものではなかった。例えば王国自由都市エステルゴムでは、1713 年の都市条例でツィガーニやユダヤ教徒、物乞いをはじめとする「よそ者」の入市を厳しく規制し、これらの人々を都市近辺から排除することを命じている。この事例に言及したナジは、この条例の地域特有の背景には言及していないものの、王国自由都市や従来から経済が発展していた地域においては、外部から流入したツィガーニなどの集団が経済活動を展開する余地が大きくなかった、というより一般的な文脈にこの事例を位置づけている¹⁵¹。

¹⁵⁰ 例えば、BAZML Város Számadási Iratai 27. köt., 85; 29. köt., 137-140.

¹⁵¹ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 235.

このような地域と、ツィガーニの経済活動の余地が一定程度存在したミシュコルツとの違いはどこに求められるのだろうか。1740 年に至るまで市場町内での経済的活動がツィガーニに比較的「開かれていた」背景を理解するには、他方で、18 世紀初頭以降のミシュコルツを取り巻く環境や、鍛冶師、金属細工師など、金属加工業者の置かれていた状況を把握しておく必要があるだろう。

まず、18 世紀前半のミシュコルツの状況については、すでに述べたことの繰り返しにもなるが、以下のようにまとめることができる。ハンガリーをめぐって、ハプスブルク君主国とオスマン帝国、あるいは反ハプスブルク的な勢力との間で激しい戦争が行われた 17-18 世紀転換期にボルショド県は大きな被害に見舞われることとなった。18 世紀初頭のラーコーツィ戦争において、ミシュコルツ参事会当局がラーコーツィ側に味方した関係上、ミシュコルツはハプスブルク側の軍隊によって攻撃され、都市の大部分が焼き討ちを受けることとなった。さらに同時期に発生したペストの大流行も相まって、この時期に都市の住民の多くが死亡、ないしは他地域へと避難し、その結果都市の人口はそれ以前の半分近くにまで大きく減少したとされる¹⁵²。

一方、戦争状態が落ち着いた後のハンガリー王国では、戦争による人口減少や荒廃地の増加の問題を解決するべく、旧オスマン領や東部地域への入植が奨励されていく¹⁵³。こうした中で、ミシュコルツにも近隣地域からのみならず、ハンガリー北西部や王国外のドイツ語圏地域などからの移民が大量に入植することになる¹⁵⁴。その結果、ミシュコルツは 18 世紀を通じて様々な点で大きな変化を経験して行く¹⁵⁵。ファラゴー・タマーシュの見積もりによると、この移民の流れによって、ミシュコルツの人口は 18 世紀末までに、ラーコーツィ戦争直後の人口 2400-3000 人程度から 5 倍、あるいは、その時よりは人口の多かった 17 世紀末から見ても 3 倍強の 14500-15500 人程度にまで膨れ上がる[表 3-1]。同じく、ファラゴーによれば、18 世紀半ばの 1765 年には、ミシュコルツの人口は 8500-9500 人と推計されるため、世紀半ばの時点ですでに 18 世紀初頭の 3 倍程度に増加していた計算になる。18 世紀前半のミシュコルツはそのような急激な変化の途上にあった。

そのような変化の時代におけるミシュコルツの金属加工業者の状況は次のようなものであった。鍛冶師、金属細工師など、ミシュコルツで金属加工を行う手工業者の数は、先述のラーコーツィ戦争終了の時点では激減し、その結果、ギルドは一時的に停止状態にあったと考えられてい

¹⁵² FAZEKAS Csaba, “Miskolc város az országos politikában”, MT. III., 1 kötet. 7-28; FARAGÓ Tamás, “A város népesség”, MT. III, 1. kötet. 194-195; VERES László, “A 18-19. századi iparfejlődés sajátosságai”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon*, 13-22.

¹⁵³ VARGA J. János, “Kísérletek Magyarország újratelepítésére 1689-1723”, HANÁK Péter (szerk.), *Híd a századok felett*, 137-150.

¹⁵⁴ FARAGÓ Tamás, “A város népesség”, MT. III, 1. kötet. 153-156; VERES László, “Borsod megye etnikai arculatának változásai a 18. század első felében”, KUNT Ernő/ SZABADFALVI József/ VIGA Gyula (szerk.), *Interetnikus kapcsolatok Északkelet-Magyarországon* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, 1984), 27-35.ボルショド県の条例でも、1715 年と 1717 年に「新たな住民」の歓迎が述べられている。TÓTH Péter és BARSZ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai*, 62, 64, 83

¹⁵⁵ FARAGÓ Tamás, “Miskolc az ország településrendszerében a XVIII. század eleje és a XIX század közepe között”, MT. III, 2. kötet. 956-964.

る¹⁵⁶。その後、鍛冶師の場合は 1722 年、金属細工師の場合は 1710 年代にギルドを再開させ、以降、職人数を増加させて行く。表 3-2 で示されるように、金属細工師の職人数は、1730 年で 4 名、1734 年で 5 名、1758 年で 9 名、1770 年時点では、職人 20 名+徒弟 7 名の計 27 名と年を追うごとに増加していく。1730 年からの 40 年間で、徒弟を含めると実に約 7 倍に増大している計算となる。鍛冶師もより緩やかな推移ではあるが、1730 年で 4 名、1734 年で 6 名、1758 年で 9 名、1770 年時点で 10 名と、同様に増加していく。

ただしその一方で、これらの業種が 17 世紀末の規模まで回復するには 1758 年を待たねばならなかったことも表 3-2 から窺える。その点を考慮すると 1740 年前後の時点では、増え続けるミシュコルツの人口に比して増大していただろう需要を十分に賄える数の職人は、これらのギルドには揃っていなかったことが見て取れる。18 世紀のギルドの人員数が最後に判明している 1770 年代のミシュコルツの人口については正確なデータを提示することはできないが、見積もりが存在する 1765 年と 1786 年のデータから推測すると、1 万人を超える程度と見積もるのが妥当と考えられる。1770 年の時点のおおよそのデータから、1740 年時点の金属加工業者に生じた需要を推定すると以下ようになる。仮に、日用品であるブーツの靴底の金具付けを、住民全員が必要としたと想定した場合、ギルド構成員一人当たりが賄う必要性のある住民数が算出できる。大雑把な見積もりではあるが、1770 年の時点では約 10000 人に対して 27 名で対応すると想定した場合、金属細工師が賄うべき人数は一人あたり 500 人程度となる。(27 名のうち 7 名は徒弟のため、一人あたりの対応数をもう少し多く見積もるべきかもしれないが、当時のミシュコルツの金属細工師ギルドにおける徒弟の技術力、可能な業務について判然としないため、ここではその点は考慮しない)。一方で、1740 年の時点であれば、7000 人程度の需要に対して 5 名から 9 名が対応していると考えられるため、一人当たり最大で 830 人から 1500 人程度の需要に対処する必要があったことになる。

無論、ミシュコルツに生活するすべての住民がブーツを必要としていたわけではなく、財産状況、社会的地位、ジェンダーなどに応じて、需要が発生しない社会層がいたことは確実であるため、上記の計算結果は実態を正確に反映するものとは言えない。しかしこれらの数値をある程度の目安として、金属細工師ギルドの仕事量を 1740 年と 1770 年との間で比較すると、1740 年の方が住民の絶対数は少なかったにもかかわらず、単純計算で、1770 年の 2 倍から 3 倍の仕事量に直面しえたことが指摘できる。

また、住民のブーツへの需要の大きさを正確に図ることは不可能であるが、ブーツの靴底への金具取り付けに対する需要は 1740 年頃には増加していた可能性は十分考えられる。その根拠としては、1742 年に、ブーツ職人と靴づくり職人の間で、「両ギルドが利用している売り場が、職人数の増加に伴ってすでに狭くなってしまっているため」、売り場の利用方法をめぐる話し合いが行われ、それを参事会が調停しているという事実を示すことができる。職人数が増加していた

¹⁵⁶ SPÓNER Péter, “Vashámorok, kovácsok, cigánykovácsok”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon*, 78; idem, “Városkönyvi adatok a miskolci lakatoscéh történetéhez”, GYULAI Éva és VIGA Gyula (szerk.), *Történet – muzeológia*, 152-153.

ことを考慮すると、この当時、ミシュコルツ内でブーツ生産量は増加しており、その影響でブーツの靴底の金具付けへの需要も以前より多く生じていたと考えられる¹⁵⁷。

他方で、特に金属細工師には、当時このように増え続けるブーツの靴底への金具付けの需要を確保したい理由が存在していた。戦争状態が続いた 18 世紀初頭まで、金属細工師は銃器など武器類への需要への対応を活動の主たる基盤としていた。しかし、情勢が安定したそれ以降の時代においてその需要は減少して行き、その結果、18 世紀の過程で、金属製馬具、鍵類、ブーツの靴底の金具などの作成、取り付けなど、日用品の取り扱いが金属細工師の業務に占める比重はより大きくなっていく¹⁵⁸。1706 年時点での価格規定表に記載された 5 フォリント以上の価格の品目は、扉への錠前やドアノブの取り付けを除けば、主に銃器に関するものであったため、この問題はミシュコルツの金属細工師ギルドにとっても切迫したものだったと考えられる。ハンガリー王国北東地方のギルド史を研究するジュライによれば、金属細工師にとって 17 世紀後半の時点では、ブーツの靴底への金具付けは、銃器と同様に、重要な収入源であった¹⁵⁹。このことは、銃器の需要が低迷した際に、金属細工師がブーツの金具打ち付けに関して、一それがギルドのみの能力で賄いきれるかどうかに関わらずその独占に動いたことの理由を説明しうるものであると言える。

以上のような 18 世紀前半時点の市場町ミシュコルツの経済的・産業的環境を鑑みるに、金属細工師ギルドの側が制限を望んでいたツィガーニの鍛冶師やその他のギルド外の職人たちの活動は、少なくとも 1740 年の時点では、ギルドのみでは賄いきれない都市内の需要を一部補うものだったと考えられる。その一方で、金属細工師ギルドの側にも、従来の主要品目への需要が低迷する中で、以前と変わらず需要が存在し、むしろ伸びていく傾向にあったブーツ関連の需要を確保したいという事情が存在していたことも指摘できる。

小括

以上の分析結果をまとめてみたい。

本章では、これまでも、金属細工師ギルドと「ツィガーニの鍛冶師」との間の経済利害の表れとして捉えられてきた 1740 年のミシュコルツの条例について、これまで深く検討されることがなかった、なぜこの時点でこの条例が制定されたのかという点を、17 世紀後半から 18 世紀前半のミシュコルツやハンガリー王国北東地方の状況と関連付けて検討した。ミシュコルツの『会計報告書』、ボルショド県価格規定表や、先行研究で提示されてきた人口やギルドの人員などに関する諸データを突き合せて分析した結果、条例の背景として次のような諸要素の存在が浮かび上がった。一つ目に、ミシュコルツ内の金属細工師ギルドは、1740 年の時点では、18 世紀初頭のラーコーツィ戦争やペストなどの被害に起因する機能の低下から、恐らく回復の途上にあっ

¹⁵⁷ TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok*, 49.

¹⁵⁸ SPÓNER Péter, “Városkönyvi adatok a miskolci lakatoscéh történetéhez”, Gyulai Éva és VIGA Gyula (szerk.), *Történet – muzeológia*, 158.

¹⁵⁹ GYULAI Éva, “Gazdalkodás, termelés és árúcsere a kora újkori Miskolcon”, MT II., 310.

たということ。二つ目に、その一方で、ミシュコルツの人口はこの時期に急激な増加を経験したため、金属細工師ギルドのみでは、住民の需要を賄うことは困難になっていたと見られること。そのような賄いきれなくなった市場町内の需要の一部を、参事会当局との取引などの事実から推測して、ツィガーニの鍛冶師が担っていたと考えられること。さらに言えば、特に金属細工師ギルドは、戦争状態の終了に伴い、銃から日用品への主要品目の移行に迫られており、その中で、17 世紀から大きな収入源の一つと見なされていたブーツの金具取り付けへの需要を、それを賄いきれるのかどうかという問題は別にしても、確保し、もっと言えば競合者であるツィガーニ鍛冶師から取り戻す必要が生じていたこと。これらの要素が条例制定の背景として想定される。

1740 年のミシュコルツで条例という形で表面化した金属細工師ギルドとツィガーニの鍛冶師との間の経済的利害の衝突は、以上のような、この地域、時期に特有の諸条件がちょうど重なったタイミングで発生したものだったと捉えることができる。

ただし、その後の経過に言及しておく、ここまで検討してきた 1740 年条例の直接的な効力や、それ以降のミシュコルツ参事会とツィガーニと経済的な関係については、十分検討することはできない。その主な原因は、ツィガーニの鍛冶師の活動を実証するのに用いたミシュコルツの『会計報告書』が 18 世紀に関しては 1740 年以降残されていないことにある。このため、条例発布以後の時期に、ミシュコルツの市場町参事会がツィガーニの経済活動に対して行った支出の内容、頻度、またはその事実そのものについて確認することは難しい。また、『参事会議事録』については、1740 年以前、参事会がツィガーニへの支出を記録することはあっても、依頼した業務の具体的な内容について触れられることはなかった。その状況は 1740 年以降も同様であり、参事会が所有していた馬をツィガーニに対して売り渡したという記録が 1742 年と 1744 年に確認できることを除けば¹⁶⁰、ミシュコルツ参事会とツィガーニとの間の経済的交渉の痕跡は見られない。そのため『参事会議事録』からもツィガーニの鍛冶師の仕事に対して市場町参事会が何らかの報酬を支払ったという記録は 1740 年代以降、確認できない。そして、ボルショド県では 1770 年に価格規定表が再度作成されているが、かつては存在した「金属細工師」、「ツィガーニの鍛冶師」の項目はそこには見られなくなっており、金属加工業については、「鍛冶師」の業務のみが規定されている。また、1740 年の条令で問題になったブーツの靴底への金具付けについても言及がなく、どの業種によってこれが担われることになっていたのか判然としない¹⁶¹。このように、史料や言及の欠如のため、1740 年条例の効力をはっきりと読みとることは難しいが、『参事会議事録』にて 1740 年代以降、参事会とツィガーニとの経済的な取引を示唆する記述が見られなくなっていくことを重視するのであれば、1740 年代以降、参事会は、公的な業務を委託する対象からツィガーニの鍛冶師を除外し、別の業者を頼るようになっていたと見ることもできる。18 世紀半ば以降のミシュコルツの市場町参事会と市場町内のギルドの関係を検討した

¹⁶⁰ BAZML TJ, 3. köt., 45, 125.

¹⁶¹ BAZML Acta Politica XVI. I. 154. ただし、シュポーネルによると、この時期にも金属細工師は業務を続けており、ドイツなどからやって来たギルドに属さない業者との競合が生じていたという。SPÓNER Péter, “Várospolitikai adatok a miskolci lakatoscéh történetéhez”, GYULAI Éva és VIGA Gyula (szerk.), *Történet – muzeológia*, 156-157.

シュポーネルは、参事会が何らかの公共用の手工業業務が必要な場合、18 世紀半ばから後半にかけては、信頼性の点で都市内のギルドをより重宝し、ギルド所属者以外に仕事を任せることはまれなことだったとしている¹⁶²。そのことから考えると、参事会の取引相手としてツィガーニが現れなくなるのは、ミシュコルツ内におけるギルドの台頭と表裏一体の現象だと言えるだろう。

ただし、だからと言って、ツィガーニの鍛冶仕事への需要がその後、完全になくなったとは言えないということも指摘しておきたい。具体的には以下の章でもその都度言及するが、たとえ一定の制限があったとしても、その後もツィガーニの鍛冶師がミシュコルツ内で活動を続けていたことや、もっと言えば、参事会の庇護の下、ミシュコルツでギルドが大きく発展した 18 世紀後半にあっても、その住民からのツィガーニの仕事への需要が存在していたことは、断片的ながら史料上で確認可能である。

最後に、以上の検討内容から、本稿の主たる関心である、ミシュコルツという場とツィガーニとの関係に関して読み取れることを指摘し、後の章への橋渡しを行いたい。

従来の研究において、いくつかの市場町は、18 世紀後半にツィガーニの定着が比較的進展した場として捉えられている。そのような市場町としては、ミシュコルツ以外にもペシュト・ピリシュ・ショルト県(Pest-Pilis-Solt vármegye) (以下、ペシュト県)の市場町ケチケメート(Kecskemét)やバラニャ県(Baranya vármegye)の市場町シクローシュ(Siklós)の名が知られている¹⁶³。しかし、ツィガーニの定着の時期については、ミシュコルツと、この 2 つの市場町とは異なっていることも判明している。ケチケメートではオスマン統治下の 17 世紀にすでに都市の中にツィガーニの居住区が存在しており、また、18 世紀初頭には、集団としてのツィガーニと領主との間の取り決めをめぐって、請願提出を通じた交渉が行われていた¹⁶⁴。シクローシュでも、1710 年代にはすでに領主から分与地を割り当てられたツィガーニたちが生活しており、その一部には 17 世紀のオスマン統治期からこの都市と関係を持っていた元イスラム教徒のツィガーニも含まれていたという¹⁶⁵。他方、本章冒頭で言及したように、18 世紀初頭時点のミシュコルツでは特定のツィガーニの定着ははっきりとは確認されていない。そのため、すでにある程度のツィガーニ間の紐帯が形成されていたこの 2 つの市場町とは異なり、領主・市場町当局が一定の法的権利を付与しうる「ツィガーニ共同体」と呼ぶうるものはまだ 17・18 世紀転換期の時点ではミシュコルツには出現していなかったと考えられる。

それでは、18 世紀後半にはツィガーニの定着の場と見なされることとなるミシュコルツに、18 世紀中にツィガーニが定着し始める契機とは何だったのだろうか。本章で 1740 年条例の分析を通じて垣間見えた 18 世紀前半のミシュコルツを取り巻く状況こそが、その契機の一つであったと筆者は考える。つまり、急速な人口増加とギルド機能の一時的低下に伴って、現地のギルドだけでは賄いきれないほどに増大した金属加工業務への需要が、鍛冶師を営む者をはじめとするツィガーニたちをミシュコルツに引き寄せ、そのまま定着させていったのではないだろうか。

¹⁶² ibid., 157; idem, “Céhes iparosok Miskolc Város Tanácsának szolgálatában (1761-1848)”, 341-353.

¹⁶³ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 278.

¹⁶⁴ IVÁNYOSI-SZABÓ Tibor, “Adatok a Cigányok Kecskeméti Történetéhez (1596-1850)”, 7-55.

¹⁶⁵ NAGY Pál (szerk.), *Források a siklósi cigány múltjából*, 7-15.

ミシュコルツにおいてツィガーニの活動が活発化し始めた時期は、市場町の市内域でのツィガーニの居住を禁じる条例が県によって制定された 1720 年代半ば以前だと思われるが、後の時期の住民との連続性という観点から、定着が生じていたことがより確実と見なせるのは、1730 年代から 40 年代の間だと思われる。本章において、ツィガーニの鍛冶師として取り上げてきた人たちが、具体的にどこから来た、どのような人々であったか、ということは十分に知ることができない。しかし、1730 年代から 40 年代ごろの断片的な記録の中で確認できるカッロー、ダル、コザークといったツィガーニの姓は、次章でも詳しく見るように、ミシュコルツの住民として 18 世紀末、あるいは 19 世紀前半においても居住、定着し続けていたツィガーニの家族名と一致している¹⁶⁶。この後、ミシュコルツに比較的長く定着することになる人々は、少なくともこの時期にミシュコルツで活動を始めていたことになる。これらの姓の持ち主が鍛冶仕事に従事していたことは当時の参事会の史料では明示されていない。しかし、後の章でも指摘することとなるが、これらの家族は 1760 年代以降、ツィガーニの生計手段の登録が行われるようになった時点では、鍛冶仕事に従事する人々として認識されている。

以上の事実を踏まえると、活動の場の制限など、都市内において影響力を持つ他業者とのある種の棲み分けを強要されながらも、参事会当局、あるいはその他の住民などからの一定の需要を抛り所として、数十年後に「ツィガーニ共同体」という紐帯を作り上げることになる人々の一部が、18 世紀前半のミシュコルツに定着し始めていたことが窺える。

ここで作りだされた紐帯は、どのような形態を取り、「共同体」としてどのように機能していたのか。それについては第 5 章で検討することとして、その前に第 4 章で、1750 年代以降の史料から追跡可能となっていくミシュコルツに定着したツィガーニ家系、この都市で活動したツィガーニの人口動態、居住領域などについて確認しておきたい。

¹⁶⁶ 「ツィガーニのカッロー」は 1736 年に参事会から何らかの理由で 20 フォリントの支払いを受けている。また、「ツィガーニのダル」「コザーク頭領」はそれぞれ 1742 年と 1744 年に、参事会との間で馬の売買取引を行っている。BAZML TJ 2. köt., 479; 3. köt., 45, 125.

第4章 ミシュコルツのツィガーニの人口動態・空間的分布 1750-1780年代

18世紀中葉以降、ミシュコルツ内のツィガーニに関する史料は、これまでに見てきた経済活動と関係する記述や、諸条令の文面にとどまらず、より多様化していく。その詳細は以下、5章、6章で示されることとなるが、その前に、本章において18世紀中葉から後半にかけてのミシュコルツにおけるツィガーニの人口動態、並びに居住領域に関する諸状況を整理し、当該時期におけるこの集団の数量的、空間的な特徴を把握しておきたい。

第1節 ツィガーニの人口動態

ミシュコルツで生活したツィガーニのおおよその数や個人名は、1750年代から1780年代の間に県によって断続的に作成された帳簿形式の史料を通じて確認できる。先に見たように、1751年の県条例において、ボルショド県はツィガーニへの課税を明確に規定した¹⁶⁷。恐らくそのことと関連して、1751年から1766年までの時期に、ボルショド県では、県内の集落ごとにツィガーニ家長の名を登録し、課税・徴税額を記載した税務上の帳簿が作成されるようになる。また、1767年12月10日、並びに1773年2月22日の総督府政令において、王国内の諸県が県内のツィガーニの状態を定期的に調査し、毎年定期的にハンガリー総督府に報告することが義務付けられた結果、1768年以降、様々な調査項目からなるツィガーニ帳簿がボルショド県でも作成されることとなった。1770年代以降の帳簿では、登録の主たる対象を世帯主、つまり男性家長、あるいは寡婦としつつも、それまでの帳簿では言及されることのなかった妻の名前や子どもの数(時には名前も)が記述されるようになった。従来の研究では、本来の用途や調査項目がそれぞれ異なるものの、ツィガーニのみを対象として作成されたこのような帳簿史料を「ツィガーニ帳簿(cigány összeírás/Conscriptio Zingarorum)」の名の下に把握、活用してきた¹⁶⁸。本研究でもこのような流れを踏襲して、これらの史料をツィガーニ帳簿と表現する¹⁶⁹。

ミシュコルツについて、この史料を活用した先行研究には、18世紀後半のミシュコルツのツィガーニの活動を男性家長個人ごとに分類、整理したトート・ペーテルの研究があるが、彼は、ボルショド・アバウーイ・ゼムプレーン県文書館に保存されている1757年から1766年の税務用のツィガーニ帳簿、ならびに総督府提出用に作成された1768年および1776年のツィガーニ帳

¹⁶⁷ TÓTH Péter és BARSZ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai*, 93.

¹⁶⁸ 18世紀のツィガーニ帳簿については、TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 69-75.

¹⁶⁹ 無論、多くの統計史料と同様に、このツィガーニ帳簿も実態を十全に捉えたものとして全幅の信頼を寄せることには慎重であるべきだろう。例えば、事例は少数だが、現存するツィガーニ帳簿ではその名を確認できない人物が、同時期の別の史料において「ミシュコルツの住民であるツィガーニ」と表記されていたことが確認できる。BAZML TJ 4. köt., 576. しかし、特定の集落と関連付けてこの時代のツィガーニの人数を網羅的に確定可能な史料はツィガーニ帳簿を除いて他にはないため、その分析によって得られた数字を、それがある程度の目安に留まるものであることを前提としつつも、以下で活用することを本稿では選択する。また、この帳簿にまつわるその他の問題に言及する必要がある場合は、適宜、註において説明を行う。

簿を主な史料として用いている。本節では、それらの史料に加えて、1751年から1753年の間の税務用帳簿、並びに1775年から1784年までの間に断続的に作成され総督府に提出された帳簿のデータも利用して、ミシュコルツのツィガーニの人口動態の再構成を試みたい¹⁷⁰。

当該時期のミシュコルツのツィガーニの家長、および寡婦(以下、この2つの登録対象を総称して「世帯」と表記する)の数は、ある程度の増加の傾向を示している。1751年と1784年の数値を単純に比較すると、17世帯から20世帯に増加しているのが確認できる。そのため、この30数年間で、数字上は緩やかな増加が生じたと見ることも可能である。しかしここではどちらかというと、その数字が登録機会ごとに大きく揺れ動いていたことの方に注目したい。登録されたツィガーニ世帯の内実の変動は、家長の死亡による減少は別にして、表4-1で示された残存者数、そしてその数から導き出される転出者数の変動を見ればはっきり認識できる¹⁷¹。例えば、17世帯が登録された1751/52年帳簿の翌年に登録されたのは11世帯であり、その次の年には17世帯に戻っているが、その間の残存者はそれぞれ8名と6名である。これは、前年の調査と同じ世帯、あるいは家長や寡婦個人のうち、半分程度しか次回の調査時にミシュコルツに留まっていなかったことを示している。また、登録数全体が残存者数と同数ではない場合、それはある調査と次の調査の間に別の世帯が一定数ミシュコルツにやって来て、次回調査までとどまっていたことを意味する。ミシュコルツでは、何度もこのような入れ替わりが繰り返されていたが、1770年代以降、残留者数はある程度高い水準を維持し始め、1780年代には、前回帳簿作成時に登録さ

¹⁷⁰ 本節の諸データは特別に注記がない限り、以下の史料に基づく。BAZML Acta Politica III. I. 741, 748, 752, 760, 768, 791, 808, 822, 840, 841, 863, 883, 903, 914, 937; BAZML Acta Politica XI. I. 118, 129; MOL ARS 3. cs. 11, 5. cs. 72, 21. cs. 172, 24. cs. 27, 32. cs. 45; MOL ADZ 36. cs. 102.

¹⁷¹ この帳簿に登録された人々はどのようなツィガーニだったのか、という問いはこれまでも投げかけられてきた。その問いに対しては、帳簿作成者たちは調査対象となった集落にやってきたすべてのツィガーニを登録したのではなく、「定住するつもりがある」と帳簿作成者が判断した人々のみを登録したという見解が、現時点では一定理解を得ている。別言すれば、放浪的な移動生活を送り、ごく短期間ある集落に逗留したツィガーニについては、この調査結果から多くを語ることが難しい。これらの史料からより明確に語りうるのは、特定の集落に定着しつつ、そこを拠点として行商や鍛冶仕事のために季節的な移動を行っていた「半定住」ツィガーニ(TÓTH Péter, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 133-134.)と、特定の集落内で定住的な生活を営んでいた「定住した」ツィガーニについてである。特に前者は、特定の集落を拠点としつつも、いくつかの年には、その土地での登録者の中に名を連ねていない、という事態もしばしば見られる。「半定住」ツィガーニに拠点と呼べる集落が存在していたとすると、このようなツィガーニの登録地を帳簿作成者側はどのような基準で決めていたのか、という問題にも見当を付けておく必要がある。例えば、シュレイニンゲルの研究で用いられたペシュト県ショルト郡のツィガーニ帳簿では、外部の領主に属していたり、労働業務の関係で集落に一時滞在していたツィガーニに対して「外部の(extraneus)」という形容詞が付与されており、従って「本来の拠点にはいない」ツィガーニの場合は移動先の別の集落で登録されるという措置が取られていた(SCHLEININGER Tamás, “A solti járásban letelepedett cigány családok összeírásai Mária Terézia korában”, BÁRTH János (szerk.), *Szavak Szívárványa*, 79.). ボルショド県の帳簿では、見たところそのような「所属地」と登録地のズレを明示する措置は行われていない。しかし、本文で述べるように、ミシュコルツで登録されたツィガーニたちの顔ぶれがしばしば入れ替わる点を考慮すると、恐らく、ボルショド県の帳簿作成においても、領主との契約などの権利関係によって決定される「本来所属すべき土地」といった要素ではなく、単純に、調査時にツィガーニが滞在していた場所が登録先を決定づけていたと考えられる。

れた 20 世帯がほとんど変動していない事例も見られるなど、流動性が薄れる傾向にあったことも指摘できる。以上のことから、1750 年代から 1780 年代までにミシュコルツに居住したツィガーニたちの状況は、当初のより流動的な状態から、特定の世帯が定着していく傾向に移行したことが窺える。

ミシュコルツの都市人口に占めるツィガーニの割合に目を向けると、非常に少数派であったことが指摘できる。18 世紀半ばの時点では正確な数字は利用できないが、ファラゴの見積もりによると、1765 年の時点のミシュコルツには、貴族 750 家族、貴族以外の住民 1250 家族の合計 2000 家族がいたという。この時点でのツィガーニ世帯数は 18 であるため、ツィガーニの人々はミシュコルツ住民全体の 1%にも満たなかったということになる。また、より正確な数字と考えられる 1787 年の国勢調査の記録によると、ミシュコルツには 3038 家族、14089 名が居住していた。この時点でのミシュコルツのツィガーニに関する数量データは現時点では確認できていないが、それに最も近い 1783/84 年度前半のデータを参照すると、その時点では 20 家族、推定 81 名の登録がなされていた¹⁷²。さしあたりこのデータを用いて比較すると、ツィガーニは家族としては全世帯の 0,65%、人口としては全住民の 0,57%を構成していたことになる。このように、当該期において、ツィガーニ人口自体は増加していったものの、それ以上のペースで展開していくミシュコルツ全体の人口増加の中で、その比率は相対的に減少傾向にあったことが見て取れる。この数字は、この時期のミシュコルツに、ツィガーニをはじめ、外部からの移民が流入・定着することを許容する余裕が存在していたことを示しているとも言えよう。

ところで、ミシュコルツはボルショド県全体で見た場合でも、当時ツィガーニが最も集まる場所だったように見える。例えば、表 4-1 で示したように、ミシュコルツ郡(Miskolci járás)のその他の市場町、チャート(Csát)やディオージュジェールのデータと比べてみたい[地図⑥]。チャートでは 1764/65 年に登録されたツィガーニの世帯数は 18 となり、ミシュコルツと同数で並ぶが、その後、登録者数は減少し、追跡可能な範囲で見れば、最終的にミシュコルツのツィガーニ世帯数に 2 倍程度の差がついている。ディオージュジェールの場合も、この都市のツィガーニの数が増加した世紀後半に限っても、ミシュコルツの登録数の二分の一強程度の世帯数にとどまっている。また、ボルショド県のその他の郡の中心的市场町であったメズークヴェジュド(Mezőkövesd)(エグル郡(Egri járás))、シャヨーセントペーテル(Sajószentpéter)(セントペーテル郡(Szentpéteri járás))、センドルー(センドルー郡(Szendrő járás))のツィガーニに関する網羅的な分析にはいまだ着手できてはいないが、さしあたり表 4-2 からは、これらの市場町でも、上述の二つの市場町と同様、軒並みミシュコルツを下回る世帯数のみが登録されていたことを指摘できる。メズークヴェジュドでは、1783/84 年前半に 14 世帯という比較的多くの数字が見て取れるが、その後の帳簿によれば、1784 年/85 年前半には 4 世帯に減少し、1786/87 年前半には 8 世帯に再度

¹⁷² ツィガーニの全体数の推計は、帳簿に登録された男性家長 20 名、子ども 41 名に、帳簿に言及のなかった妻の数を男性家長と同数として加える形で算出を行った。FARAGÓ Tamás, “A város népség”, MT III. 1. köt., 153; DÁNY Dezső és DÁVID Zoltán (szerk.), *Az első magyarországi népszámlálás 1784-1787* (Budapest: Központi Statisztikai Hivatal Könyvtára/ Művelődésügyi Minisztérium Levéltári Osztálya, 1960), 42-47; BAZML Acta Politica III. I. 914; MOL ADZ 36. cs. 102.

増加していることも確認できる。このことを踏まえると、メズークヴェジュドは18世紀後半の時点でもツィガーニの入れ替わりの激しい場であったことが推察される¹⁷³。そのような状況は、先に述べたように1780年代には調査ごとの顔ぶれや世帯数に大きな変化が生じなくなっていくミシュコルツとは対照的である。いずれにしても、この時期にミシュコルツと同程度にツィガーニが集まっていた集落はボルショド県内にはなかったと思われる。

先に指摘したように、ミシュコルツのツィガーニを全体として見た場合、検討時期の終わりごろを除けば、それはある程度の流動性を有する集まりであったと評価しうる。しかし一方で、最初期から、あるいは特定の時期以降、長期にわたって帳簿に登録された人々、いわばミシュコルツのツィガーニ集団の「中核」と見なしうる複数の家系も帳簿からは確認されている。それは、表4-3から見て取れるように、1760年代までにミシュコルツに定着していた家系と、1770年代以降に新たにやってきた家系に大まかに分類できる。前者は例えば、バゴシ、ブダイ、ダニィ、ダル、ダルドシュ、カッロー、コザーク(またはコズィ)、セーケィ、ヴァダースィ(またはオラー)などの家系であり、1770年代以降、そこにヨーナーシュ、オルゴン(またはオルゴヴァーニィ)、プキ(またはバログ)、キシュ、シロキといった家系が加わっていく¹⁷⁴。なお、ツィガーニ帳簿に基づいて作成された表4-3では1783/84年のデータまでしか提示できないが、少なくとも現時点で検討できている1790年に至るまでの『参事会議事録』の記述などからは、上述の家系の構成員が何度も言及されていたことが確認できる¹⁷⁵。さらに、1770年代以降の帳簿には男性家長名に加えて妻の名前が帳簿に記される場合も多く見られたため、表4-3でも、それぞれの家長とその妻の名を併記してある。彼女たちの姓に目を向けると、そのうち数名はミシュコルツで登録されたツィガーニの家長たちと同姓であることに気づくだろう。このような組み合わせとしては、例えば、バゴシ-イヴォーク、ダニィ-ヴァダースィ、ダルドシュ-ブダイ、イヴォーク-ダル、プキ-オラー、セーケィ-ダルなどが確認できる。このことから、ミシュコルツに定着したツィガーニ数家族の間には、婚姻を通じた親族関係が存在していたと考えられる。

また、本研究の対象とする時期と後の年代での家族の連続性も指摘できる。1838年に、作成背景や目的の不明なツィガーニ帳簿がミシュコルツ郡を対象に作成されているが、その帳簿中には、バログ、ブダイ、ダルドシュ、ヨーナーシュ、キシュ、コズィ、オラー、オルゴン、シロキ、ヴァダースィなど、表4-3に見られる人々と同様の姓を持つ家長やその妻の名前が登場しており、また、ミシュコルツに定着した時期を問う同帳簿の質問項目では、その多くが自身をミシュコルツ出身者であると回答している¹⁷⁶。この時点で18世紀末にミシュコルツで生活していた

¹⁷³ MOL ADZ 43. cs. 17; BAZML IV. 501/i. Borsod Vármegye Nemesi Közgyűlésének iratai, Népszerűírások - Conscriptiones populares F. 36. N. 24.

¹⁷⁴ トートも同様に、1750年代からミシュコルツに留まり続けた家系の存在を指摘しているが、1770年代の新たな流入者の中にその後長期に定着する家系が含まれることには触れていない。また、レーミアシュは、トートの研究を引用しつつ、1770年代までの「ミシュコルツで最もよく知られたツィガーニの家族(legismertebb miskolci cigány családok)」を列挙しているが、中にはすぐにミシュコルツを立ち去った人々の名も見られるため、その表現は誇張である。TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 213; RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 147.

¹⁷⁵ BAZML TJ 10.-16. köt. その個々の事例については後に別途言及することになるだろう。

¹⁷⁶ BAZML IV. 501/e. Borsod Vármegye Nemesi Közgyűlésének iratai, Közgyűlési és törvényszéki iratok

家系のいくつかの名はすでに見られなくなっているが、他方で当時のツィガーニ住民と姓が一致する人々に関しては、恐らく 18 世紀末の家系に連なっており、それらの人々は本研究の検討期間以降も長くミシュコルツに定住していたと推察される。

ミシュコルツにやって来たツィガーニたちの出自をはっきり確定させることは不可能の領域に属するものであるが、ミシュコルツ以外の集落にも目を向けることで、大雑把な見通しを提供することはできるかもしれない。本章検討時期に作成されたツィガーニ帳簿によれば、ミシュコルツ郡内の諸集落においても、ミシュコルツに定着した人々と同姓の家系が分散していることが確認できる。アルショージョルツァ(Alsózsolca)では、1770 年代以降、複数のヴァダーズィ姓の人物がしばしば登録された。バーボニユ(Bábonny)では 1750 年代前半、それから 1770 年代以降にシロキという名のツィガーニたちが登録されており、そのうちの二人、ミハーイとジェルジは 1782 年にミシュコルツへ居を移している。市場町ディオーシュジェールには、後にミシュコルツで登録されることになるダルドシュ・ジグモンドが 1750 年代から 1765 年までこの土地を拠点にして暮らしていた。また、1780 年代には、ダルドシュ姓を持つ他の人々もこの市場町で生活し始める。ツィガーニ帳簿のフェルショージョルツァ(Felsőzsolca)の欄には、1770 年代から 1780 年代にかけて、オルゴン家のツィガーニが何度も登場し、一方キシトカイ(Kistokaj)では 1770 年以降、3 度、ヨーナーシュ性の人物が登録されている。スィルマ(Szirma)で 1760 年代から 1780 年代にかけて帳簿に現れるカッロー家はこの村に定着した人々と見なしうる。他方、ブダイの名を持つ人々はいくらかの集落に散らばっており、さらに言えばそれぞれの集落で短期間ずつ登録されている¹⁷⁷。もちろん、これらの姓を同じくするミシュコルツとその周辺地域のツィガーニたちの間に、実際に親族関係、家族関係が存在していたかどうかについて断定的に語ることはできない。しかしこれらの事例を見る限り、ミシュコルツにやって来たツィガーニの一部が、周辺地域のツィガーニたちと親族関係を有していた可能性は否定できない。いずれにしても、以上のことから、ミシュコルツのツィガーニ集団は、元々すでに一つの集団としてまとまりつつ、大人数でミシュコルツに到着し、そのまま定着した人々というわけではないように見える¹⁷⁸。そうではなく、周辺の村々などで活動していたそれぞれの家族の一部が、例えば前章で確認したように、鍛冶仕事などの生計可能性をミシュコルツに見出して、それぞれ流入した結果、形成されて行ったものであると見なす方がより妥当であろう¹⁷⁹。

2900/1838; TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 213.

¹⁷⁷ ICHIHARA Shimpei, “A cigányság területi mobilitása a 18. században a miskolci járás cigányösszeírásainak a tükrében”, 138.

¹⁷⁸ ボルショド県内では、例えばチャートのツィガーニがそのような形態で定着したものと考えられる。この市場町で登録されたツィガーニの多くは、ある特定の姓を持つ家長、並びにその家族と婚姻関係を持つ家長たちによって占められていた。ibid., 139.

¹⁷⁹ ただし、これまで詳細に検討できた史料はボルショド県内でもミシュコルツ郡のみであるため、その他の郡からやってきたツィガーニの出自を推定することなどは現時点ではできない。従って、この問題に対してここで提示したさしあたりの結論は、ツィガーニの出自たりえた集落の広がりを正確に把握するという観点からは不十分と言える。このような、ミシュコルツがツィガーニに対して有した引力をより厳密に検証するならば、ボルショド県諸郡の帳簿に加えて、少なくとも隣接する諸県の帳簿データをも検討する必要があるだろう。この問題は今後の課題とし

ツィガーニ帳簿を用いてここまでで検討したミシュコルツのツィガーニたちの人口動態の特徴を整理すると以下ようになる。ミシュコルツのツィガーニ集団は 1750 年代から 1780 年代の間に数量的には揺れ動きつつも、郡内のその他の集落と比べた場合には、終始最も大きな規模を保っていた。また、人的流動性は 1780 年代ごろには落ち着きを見せるようになり、この時点でのツィガーニたちは確かにミシュコルツに定着していたと見なすことができる。この都市のツィガーニ人口の中核として、1750 年代にはすでにいくつかの家系が存在しており、また特定の時期以降、新たに流入した数家系もその中核に加わって行く。これらの家系のうちいくらかは、婚姻を行うことで互いに親族関係を取り結んでいた。また、18 世紀時点の中核的な家系と姓を同じくする人物が 1838 年にもミシュコルツに居住していたことなどから、家系上の連続性は、19 世紀前半に至ってもツィガーニたちの間で一部維持されていたと考えられる。少なくともこれらの家系については、18 世紀から 19 世紀前半までの過程で定住した家系と見なして差し支えないだろう。さらに、当該時期のミシュコルツのツィガーニ集団は、近隣の各集落からそれぞれの必要に応じてミシュコルツに集まった人々やその子孫によって構成されていたと推察される。

第 2 節 ツィガーニの居住領域

では、人口動態に関して以上のような特徴を持っていたミシュコルツのツィガーニたちは、この都市空間の中で、どのような場と関連付けられた存在だったのだろうか。18 世紀後半の史料からは、その居住地域についてはある程度把握することも可能である。主要な先行研究であるトートの論文は、——註が付されていないが恐らく以下で見る 1764 年の調査史料に基づいて——ツィガーニの通りごとの世帯数に言及している。しかし、その他の時期との比較をしてはおらず、また、ツィガーニが居住した通りの特徴については十分な分析を行っていない¹⁸⁰。加えて、その他の先行研究でも、ツィガーニの居住地について断片的に触れているが、以下で指摘するように史料解釈が妥当と思えないものも散見される。以下では先行研究の成果への情報の付加、修正などを通じて、ミシュコルツにおけるツィガーニの居住領域について、時間的にも空間的にもより立体的な像を示したい。

2 章ですでに指摘したように、1724 年、1726 年のボルショド県条例、1746 年のミシュコルツの条例などを通じて、その鍛冶仕事に由来する火災の問題を防ぐことを主な目的として、ツィガーニの居住地は基本的に都市の「外」、あるいは「隣接地域」に定められることになった。これらの条例に基づいてツィガーニが居住していた地区が、都市領域内のどのあたりに相当するのかについてははっきりしない。しかし、この時点で想定されていた居住地域が市門の外、すなわち市外域であったことは「都市の外」という言葉から推測できる。またこの際、ツィガーニの住居は掘立小屋が想定されていた¹⁸¹。他方で、少なくとも、総督府の政令が集落内におけるツィガ

て継続的に取り組んでいきたい。

¹⁸⁰ TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 213.

¹⁸¹ TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok*, 53-54; TÓTH Péter és BARSÍ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai*, 70, 75.

一ニの定住をより積極的に要請するようになった 1760 年代以降の史料では、ツィガーニの居住領域は市外域ではなく、むしろ市内域の外れに確認されるようになる。また、掘立小屋から簡易な家屋に居住設備が変化する。その点を以下で確認しよう。

レーミアース・ティボルがその著作の付録として刊行した、「ミシュコルツの煙突ならびにワイン貯蔵室登録簿」(以下、「煙突登録簿」)のデータからは、ミシュコルツのツィガーニたちの住居の場所が確認できる¹⁸²。この登録簿は、ミシュコルツの居住領域全体を対象に、建造物の煙突、ワイン貯蔵室の有無を調査したものであり、1764 年、1781 年、1783 年、1790 年の計 4 部が作成された。この登録簿には、各建造物で居住する家長の名に加えて、1790 年を除けば、その所在地も記入されているため、このデータからはツィガーニの家屋の所在を確認し、その空間的特徴を検討することがある程度可能である。1764 年から 1783 年までの 3 度の調査記録に言及されるツィガーニとその居住地については、表 4-4 で示した通りである。ただし、レーミアースの刊行データには、本研究の目的にとって問題と思われる点もいくつか見られる。問題としては例えば、次のようなことを指摘できる。レーミアースのデータでは住民の備考欄に「ツィガーニ」という但し書きが付されている場合があるが、ツィガーニ帳簿に登録されているにもかかわらず、「ツィガーニ」の但し書きが付されていない人物もあり、レーミアースはそのような人々をツィガーニとして扱っていない。また、ツィガーニ帳簿には一度も登場したことがなく、しかも貴族である人物を、恐らく「ツィガーニ」の但し書きの存在を理由として、ツィガーニとして扱っている¹⁸³。この問題を解消するため、表 4-4 では、該当する年度のツィガーニ帳簿などと突き合せて、レーミアースのデータでは「ツィガーニ」の但し書きが付されていない人物も含めて集計するなど、データに若干の修正も施している。では、表 4-4 のデータの検討に入りたい。

まず分布状況とその変化に目を向けたい。1764 年のデータからは煙突付きの家屋に住んでいたツィガーニが合計 13 世帯いたことが確認できる。地図②、⑤と照らし合わせてみると、多くの世帯が都市の目抜き通りであるピアツ通りより北部、特にペツェ川の側に居住していたことが指摘できる。ピアツ通りには親族関係で結ばれていたと思われるバゴシ家 3 世帯が居住していた。ピアツの一角から北側に伸びたメーサール・ファービアーン (Mészár- Fábíán) 通りではそれぞれ姓の異なる 5 世帯が暮らしており、ウーイヴァーロシュ上手、ならびにペツェ川岸には、合計で 3 世帯が記録されている。ウーイヴァーロシュとは、市内域のペツェ川以北の区画のことを指しており、その一部はメーサール・ファービアーン通りの北端と接していたが、そこから東側に位置する辺りは 18 世紀末までにはファゼカシュ(Fazekas)通り、カーダシュ(Kádas)通りと呼ばれるようになる。ただし、18 世紀半ば時点ではこの一帯の名前はまだ一定しておらず、「ウーイヴァーロシュ上手」、ならびに「ウーイヴァーロシュのペツェ川岸」、あるいは「ウーイヴァー

¹⁸² RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalmá*, CD-Melléklet.

¹⁸³ その人物はケチケメーティ・ミクローシュと言う。彼は 1752 年の史料では、分与地持ちの「貴顕なるお方」(nevezetes úr)、つまり貴族として言及される(BAZML IV. 1501/b. Miskolc város tanácsának iratai, Species (以下、BAZML Sp.) XII. 243.)。また、県により作成されたツィガーニ帳簿に彼の名が現れたことは一度もない。そのため、ケチケメーティの欄に記されたツィガーニとの但し書きは、単純な書き損じであったと捉えるのが妥当と思われる。

ロシュ中部通り」や「ウーイヴァーロシュ西部」という名称がその付近を指す言葉として当時用いられていた¹⁸⁴。従ってウーイヴァーロシュのこの部分に居住していたツィガーニたちはメーサール・ファービアーン通りのツィガーニたちとも比較的近い位置関係にあったと言える。また、カードシュ通り東端から南北に伸びたツィコー(Czikó)通りに 1 世帯の居住が記録されている。そして、ミシュコルツの中心から大きく外れる北西部のウーイショルに 1 世帯の居住が確認される。このようにピアツ通りとウーイショルにおける居住を除けば、メーサール・ファービアーン、カードシュ、ツィコーの 3 つの通りに区切られた比較的狭い範囲内にツィガーニたちの多くが居住していたことが、1764 年時点の特徴として指摘できる。

1781 年、そしてその 2 年後の 1783 年の調査では、1764 年の状況からの大きな変化が確認できる。1781 年には合計で 19 世帯、1783 年には合計で 17 世帯の居住場所が登録されている。1764 年から引き続き登場する世帯が 5 世帯あり、そのうち、1781、83 年ともに 1764 年と同様の通りで居住していたのは 4 世帯である。その中の一つはピアツ通りのバゴシ家である。そして残りの 3 世帯はすべてメーサール・ファービアーン通り改め、ファービアーン通りの居住者であった。ファービアーン通りにはこれらの世帯に加えて、1781 年には 3 世帯が、83 年にはそこから 1 世帯減り 2 世帯が新たに登録された。かつてウーイヴァーロシュ上手、すなわちウーイヴァーロシュ西部に暮らしていた人たちはすでにそこからいなくなっていたが、1781 年には新たに 2 世帯が、83 年にもそのうち 1 世帯が入れ替わったうえで、合計 2 世帯が記録されている。ファービアーン通りとウーイヴァーロシュ西部で記録された世帯は 81 年には併せて 8 世帯、83 年には 6 世帯であり、1764 年から引き続き、複数のツィガーニ家系がここで生活していたことが確認できる。この場所で新たに居住を始めていた計 5 世帯の内実に目を向けると、以前から、あるいは以前に居住していたツィガーニと同姓のカッローやグディ、同じく以前からの居住者であるオラー・イシュトヴァーンの娘婿であったプキ・イシュトヴァーンなどの名が確認できる¹⁸⁵。したがって、これらの人々には、—そのうちの一人であるボーディ・ジェルジを除いて—以前からの住民との親族関係、婚姻関係などによる紐帯が存在していたと考えられる。

以前からツィガーニが多く居住していた地域での居住が引き続き確認できる一方で、1780 年代のデータでは、都市内のその他の区画での居住も確認できる。1764 年から引き続き確認できる世帯の中で、唯一居を移した老ブダイ・マーチャーシュは 1781 年、83 年ともにティゼンハーロムヴァーロシュ(Tizenháromváros)通りにて記録されている。この通りの名は、ピアツ通りの南方を流れるシンヴァ川が市内域の西部で形成した中州の一つに対して与えられた呼称であった¹⁸⁶。また、その息子で同名のブダイ・マーチャーシュも、1781、83 年ともに、シンヴァ川中洲の一つであるヴィーズケズ(Vízköz)(=川の間)に住居を有していた。ピアツ通りから西側に広がったナジフニャド通り、並びにそれと並行したキシュフニャド(Kishunyad)通りには、1781 年、83 年ともに、それぞれ 1 世帯ずつが居住していた。キシュフニャド通りから北上したあたりに

¹⁸⁴ GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III. 1. köt., 105.

¹⁸⁵ 両者の義理の親子関係を示す記述は例えば、BAZML TJ 11. köt., 58.

¹⁸⁶ GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III. 1. köt., 108.

位置するキシュアルノート(Kisarnót)通りでは、1781年のツィガーニ1世帯の居住が確認できる。さらに、市内域の東側、スィンヴァ川を挟んですぐのスィルマ(Szirma)通りの「底部」(földek lábai)、すなわち川岸には、1781年、83年ともに、4世帯の新たな居住が見られる。ツィガーニ帳簿を見る限りでは、そのうちの3世帯、つまりダル、ヨーナーシュ、オルゴヴァーニは1760年代後半から1770年代にかけてミシュコルツに現れた人々である¹⁸⁷。さらに1783年の調査時には、さらに2つの通り、すなわち市内城南西部、スィンヴァ川右岸に位置するケンデルフェルド(Kenderföld)通り、そして、北東端にあるセレシュ(Szeles)通りに、それぞれ1世帯の居住が確認できる。

以上から、1781年ごろまでには、1764年時点でツィガーニの多くが集まっていたファービアーン通りからウーィヴァーロシュ西部にかけての区画での居住が引き続き確認できるのみならず、1764年以降に新たに流入したツィガーニたちの居住地が、ファービアーン通りからさらに西や西北の方面、スィンヴァ川以南の東端と西端の川沿い、あるいは市内域の東北端などに、その他の周縁領域に分散していったことが指摘できる。特にスィルマ通りには複数世帯の集中が見られた。

では、以上のようなツィガーニが居住したそれぞれの通りや地区は、ミシュコルツの都市空間の中ではどのような位置づけにあった場所なのであろうか。ここまでの説明によって、ミシュコルツのツィガーニの集住地域にはあたかもツィガーニのみが暮らしていたかの様な印象を持つかもしれないが、決してそうではない。上述の通りの住民数や居住者の特徴を検討することで、ツィガーニたちがその他の住民との近隣関係の中に身を置きながら日々を過ごしていたことが明らかとなるだろう。1771年と1781年の徴税簿などに基づくÖ・コヴァーチ・ヨーゼフとセンディ・アッティラの見積もりによると、1771年に確認できる14の通りの中で上位5つを占めたのは、スィルマ通り(251世帯)、ウーィヴァーロシュ北部(92世帯)、パプセル(86世帯)、ケヌー(Kenő)通り(75世帯)、ファービアーン通り(55世帯)である。また1781年の28の通りの上位5位までには、ピアツ通り(313世帯)、スィルマ通り(240世帯)、トロニュアヤ(Toronyalja)(170世帯)、メグジェシュアヤ(Meggyesalja)(162世帯)、ファービアーン通り(153世帯)が入っている¹⁸⁸。この中で、パプセル、トロニュアヤは中世以来、手工業に従事するジェッレール層の居住区画であった。メグジェシュアヤも「古いミシュコルツ」に属する地域であり、参事会や貴族の所有する果樹園、庭園、分与地などが置かれていた。18世紀後半に増加するユダヤ教徒の初期のグループはこの通りに入植している。南部の市内域境界付近のスィルマ通り、ケヌー通りはこれらの通りとは異なり比較的新しく、人口の拡大に伴って居住区域が拡張されて行ったことが知られている。スィルマ通りには1781年に車輪作り、研ぎ師、石工、製粉業者、プレッツェル売り、

¹⁸⁷ 残りの1世帯の家長、セーケイ・ツィガーニは恐らく1750年代から継続してミシュコルツに居住し、税を支払っていたセーケイ・ミハーイのことだと思われるが、1764年の「煙突登録簿」では彼の名が登録されなかったことを考慮すると、その時点では、みずからの住居を有しておらず、他人の家に住んでいたか、市外域に居住していたか、あるいは調査時に一時的にミシュコルツ以外の土地に滞在していたか、のいずれかの状況にあったと思われる。

¹⁸⁸ Ö. KOVÁCS József, SZENDI Attila és FAZEKAS Csaba, “Városi társadalom”, MT III. 2. köt., 520-521.

毛皮帽子作りなどの手工業者が記録されている。ファービアーン通りは17世紀ごろまで市内域北部境界の一部とされていた通りであり、18世紀においても、北進すると都市参事会の所有する市内域の農地に通じていた。1781年の時点では、農業従事者の他にも、医師、壺焼き人、ひも結い、靴作り、仕立屋、織工といった様々な手工業者が生活していた。ファービアーン通りから南下するとピアツ通り上に参事会庁舎や県庁舎に突き当たった。ピアツは都市中心部であり、貴族や「ギリシャ人」商人、ギルド親方など、都市内の社会的・経済的エリートや富裕層が多く居住していたとされる。また、表4-4で示しているように、1780年代ごろにはツィガーニが居住していた通りの中で、キシュフニャド通り、ナジフニャド通り、ヴィーズケズなどの通りも、都市の拡大とともに居住が開始された場所であり、そこでは水車小屋管理人、織工、ビール醸造業者、18世紀に入植した上部地方の「スロヴァキア人」やルテニア人など、様々な住民が居住していた¹⁸⁹。

これらからも確認できるように、ファービアーン通りやスィルマ通りに限らず、ツィガーニが多く居住していた通りには、彼らのみが居住していたわけではなく、その他の様々な社会層も暮らしていた。ミシュコルツのツィガーニたちの多くは、どこか特定の区画にツィガーニのみで集住するわけではなく、様々な性格の隣人たちに取り巻かれて生活していたのである¹⁹⁰。また、1770年代以降に流入したツィガーニが居住したミシュコルツ市内域の周縁部は、人口の拡大とともに開かれた区画という性格を持つ通りも多く、その住民は彼らと同じく、新参の人々であったと推測される。

補足として述べておくと、当該期のミシュコルツの詳細な地誌を描き出したジュライ・エーヴァによれば、18世紀中葉以降、「ニャクヴァーゴー(Nyakkvágó)」なる通りが「ミシュコルツのツィガーニの隔離場所(miskolci cigányság egyik szegregációja)」となっていたという¹⁹¹。19世紀の地図を基に作成された地図⑤によると、ニャクヴァーゴーはミシュコルツ市内域の北東部境界に設置されたセントペーテル門の西側、ペツェ川の支流が流れる一帯のことを指しており、ジュライもこの場所をニャクヴァーゴーとして扱っている。確かにこの地名は、ここまで提示してきた通りごとの調査では言及されることはないが、『参事会議事録』におけるツィガーニ関連の記述の中では散見され、また、それがペツェ川沿いの地区であることにも言及がある¹⁹²。そのようなことにもかかわらず、私見では、地図の表記が間違いである可能性は別にしても、ニャクヴァー

¹⁸⁹ GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III. 1. köt., 112-114.; Ö. KOVÁCS József, SZENDI Attila és FAZEKAS Csaba, “Városi társadalom”, MT III. 2. köt., 532, 539, 552-553; RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, 25.

¹⁹⁰ 家の売却や土地の測量などに関する『参事会議事録』の偶発的な記述からは、ツィガーニの両隣の隣人が誰であったかを知ることにも可能である。ツィガーニの隣人としてツィガーニが言及されることもなくはない。しかし、両隣がともに、ツィガーニであるというケースは確認されていない。BAZML TJ 13. köt., 228; BAZML TJ 15. köt., 35. また、ツィガーニのプキ・イシュトヴァーンがファービアーン通りの家を売却した際に、その隣人として、ともにツィガーニではない人物たちの名が挙げたことなども、ここでの主張を補強しうる。BAZML TJ 7. köt., 410; BAZML TJ 10. köt., 245.

¹⁹¹ GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III. 1. köt., 105.

¹⁹² BAZML TJ 12. köt., 343-344.

ゴーと名付けられた地区の場所は 18 世紀中葉から後半にかけての時期と地図⑤の原型が作成された 19 世紀前半の時点では恐らく異なっているように思える。その根拠としては、1 つ目に、『参事会議事録』などにおいてしばしばニャクヴァーゴー在住者として言及されるグディ家のツィガーニたちは、他方で上述の 1764, 1781, 1783 年の「煙突登録簿」のデータにおいてはファービアーン通りに居住しているとされていること、2 つ目に、1778 年に参事会からニャクヴァーゴーに分与地を割り当てられ、そこに家を建てたサルカ・タマーシュの隣人がグディ・ジェルジであったが、同じく「煙突登録簿」のデータによると 1781 年時点のサルカの居住地もファービアーン通りとなっていること、最後に、プキ・イシュトヴァーンが所有していた家を売却したことを伝える『参事会議事録』の記述において、その家の所在地が「ファービアーン通り、とりわけその中のニャクヴァーゴー通り」と表記されていることなどを列挙できる¹⁹³。これらから、この当時のニャクヴァーゴーとは、ファービアーン通りの一部であり、同通りとペツェ川の流れが交わる一帯を指しているものと思われる。このように考えると、実際にはツィガーニ以外の住民たちも多く居住していたファービアーン通り＝ニャクヴァーゴーに、ツィガーニの孤立を連想させる「ツィガーニの隔離場所」という言葉を与えることは、そぐわないように感じられる。

話を本筋に戻そう。ここまで見てきたことから明らかなように、ツィガーニたちの居住地には、ペツェ川沿いのニャクヴァーゴー、ウーイヴァーロシュ西部、スィンヴァ川沿いのスィルマ通り底部、ヴィーズケズなど、川沿いの場所が多く見られる。このことは何を意味するのだろうか。少なくとも、その理由の一つは彼らの生業に求めることができる。すでに触れたように、18 世紀前半に県や参事会がツィガーニたちの居住の場を「都市の外」に定めた際、それに根拠を提供していたのは、ツィガーニの鍛冶仕事が火災を引き起こすことへの危惧であった。また、第 6 章でも詳しく検討するが、1770 年代以降のツィガーニ帳簿によると、当時のミシュコルツにおけるツィガーニの職業について、音楽演奏従事者が 1780 年前後に一時的に増加する傾向が見られるものの、基本的には鍛冶仕事(Faber Ferrarius)、銅加工業(Ars Cupriaria)などの手工業(Ars Fabrilis/Labor Fabrilis)が多数を占めている¹⁹⁴。これらのことから考えて、ツィガーニたちは、業務上火を用い、そのため水も必要となる鍛冶仕事に従事していたため、防火を意識した参事会によって、川辺に居住の場を割り当てられた、あるいは自発的にそのような場所を選んで暮らしていたと見るべきだろう。

このような職業上の必要性和その他の住民の意識との衝突という問題は、鍛冶仕事を行うツィガーニのみに限ったことではない。例えば先述の 1746 年のミシュコルツの条令では、業務に火を用いる壺焼き人たちも、同様に「都市の外部」に仕事場を移すように命じられており、18 世紀末までには、この人々が集まったウーイヴァーロシュの一角がファゼカシュ(壺焼き)通りと呼

¹⁹³ BAZML TJ 7. köt., 410; BAZML TJ 10. köt., 245.

¹⁹⁴ 1770 年代から 1779/80 年前半までのツィガーニ帳簿では、多数を占める鍛冶仕事などの金属加工業と、それ以外の手工業とは区別されていたが、それ以降は表記が「手工業」に統一されることとなった。ただし、帳簿以外の史料において 1780 年代以降にツィガーニの生業として言及される手工業のほとんどが、金属加工業であるため、本研究では 1779/80 年前半以降の帳簿における「手工業」も「金属加工業」のことを指しているものと解釈する。

ばれるようになっていった。また、鍛冶師と同様の作業のために火を用いる金属細工師がヴィー
ズケズに居住していたことなども確認できる。あるいは、火の使用とは関係しないものの、革靴
作りも職業上の必要性から居所を特定の場に置いていた。彼らは材料となる動物の革をなめし、
水洗いする必要があった関係上、スィンヴァ川の中州の一つヴァルガセグ(Vargaszög)や、カンデ
ィア(Kandia)通りなどの川沿いで生活していたが、近隣の住民が動物の死骸のにおいなどで苦情
を申し立てていたことなど、周辺の住民との軋轢が生じていたことも知られている¹⁹⁵。

他方で、ツィガーニであっても、鍛冶仕事との関係が薄い場合はこのような川辺への居住は必
ずしも伴わなかった。第6章でより詳しく言及するように、ツィガーニ帳簿に見出せる人々の職
業上の特徴として、登録される業種が一定しないことを指摘できる。ある年に手工業従事者とし
て登録された人物が、別の年には楽師として登録され、その数年後には再び手工業従事者となっ
ているという具合にである。しかし、その中にあって 1760 年代末から 1780 年代半ばまで常に楽
師として登録されていた数少ない例外の 1 人であるバゴシ・シャーンドルは、すでに述べたよう
に、街の中心であるピアツ通りに、この検討時期を通じて居住していた。彼の楽師としての活動
が、ピアツ通りに居住する貴族や富裕な商人・職人層を顧客とするものであったかどうかは定か
ではない。しかしいずれにしても、彼が酒場で演奏を行っていたということは史料からわかって
おり、さらに、この都市ではピアツ通りで最も多くの酒場が操業していたという事実を踏まえる
と、バゴシがピアツ通りに居住していたことは生業形態という観点からは、それほど不自然なこ
とではないだろう¹⁹⁶。

ところで、ミシュコルツの市内域を流れる 2 本の川ペツェとスィンヴァ、ならびにその支流
は、当時、十分な治水が行われておらず、時に大きな洪水を引き起こした。特にペツェ流域でも
低い土地にあたるニャクヴァーゴーあるいはキシュフニャド通りなどが特に被害を受けた場所
であった。またスィンヴァ川の氾濫の際にはヴィーズケズなどが大きな被害を受けた¹⁹⁷。ツィガ
ーニが洪水によって、公共の義務の遂行が困難になるほどの被害を受けていたことも知られて
いる。1781 年にボルショド県に提出されたミシュコルツのヴァダースイ・コズィと名乗るツィ
ガーニの請願は、直近の洪水で家などが破壊されて欠乏状態にあることを理由に、県から要請さ
れた募兵用の演奏義務から一時的な解放を訴えている¹⁹⁸。ミシュコルツの多くのツィガーニた
ちは、川辺で暮らすことによって、生業の場を確保できた反面、このような生活上のリスクも負

¹⁹⁵ TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok*, 53-54; GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III. 1. köt., 105, 109; Ö. KOVÁCS József, SZENDI Attila és FAZEKAS Csaba, “Városi társadalom”, MT III. 2. köt., 522-523, 554.

¹⁹⁶ BAZML TJ 9. köt., 108-110; DOBROSSY István, *A miskolci vendégfogadó és a vendéglátás története (1745-1945)* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, 1985), 15.

¹⁹⁷ GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III. 1. köt., 125-127.

¹⁹⁸ BAZML Acta Politica XI. I. 141; TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 212. この人物と完全に同一の名はツィガーニ帳簿にも登場しないが、この都市内で確認されたヴァダースイ姓のツィガーニ、イシュトヴァーンとヤーノシュのどちらか、あるいはその親族であった可能性が高いと思われる。上述の表 4-4 や『参事会議事録』の記述(BAZML TJ 13. köt., 168.)によれば、2 人はこの当時、ともにファービアーン通りで暮らしていたため、この請願の主の被害の場も、ニャクヴァーゴーを含むこの通りであったと考えられる。

っていたこともまた、看過すべきではないだろう。また、そのリスクは、居住地区は異なっていたとしても、川辺に住むツィガーニたちに多かれ少なかれ共有されたものであっただろう。その点では、居住地区の違いにもかかわらず、都市領域の中での川辺のツィガーニの周縁的な位置づけは同様であったと見ることができる。

以上で示したように、ツィガーニたちの居住地の多くが中心部から外れた川辺に集中していた理由を、鍛冶仕事という生業上の要請、ならびにより安全な生活を求める都市住民の意識、そしてそれに応えた参事会の差配という要素などから読み解くことができるだろう。防火を理由として統治権力によって居所を制限されていた鍛冶師のツィガーニたちは、生業実践の領分を確保するために、都市の中心から離れた川辺に居住することとなった。しかし、皮肉にもそれは洪水という別の災害に遭いやすい、劣悪な環境に身を置くことをも意味していたのである。

このような周縁的な場所の割り当てに参事会という統治権力が関与していることから、ツィガーニの都市内における配置を、「構造的な差別」の都市空間における表れと捉えることも可能かもしれない。しかし、少なくともそれはツィガーニという人間集団に対して無前提に向けられたものではなく、住民の多く居住する空間で操業することで軋轢が生じやすい鍛冶師など、特定の職種に対してのものであることにも留意する必要がある。市内域の中心部に暮らした楽師のツィガーニ、バゴシ・シャーンドルの事例は、ツィガーニであること自体が必ずしも居住地の周縁化の対象と見なされていなかったことの証左と言える。また、『参事会議事録』や裁判記録などでは、ツィガーニに対する史料作成者側の偏見が言語化されることも少なくないが¹⁹⁹、それらの史料を見た限りでは、特定の場所と関連付けられた形での差別意識の発露は確認できていないことを付言しておく²⁰⁰。

小括

本章では、5, 6章でより具体的に18世紀中葉から後半にかけてのツィガーニたちの動向を検討する下準備として、この当時のミシュコルツにおけるツィガーニの人口動態と居住領域という2つの側面から見取り図を提示した。それを簡潔にまとめると以下になる。検討時期を通じて、ミシュコルツでは、当時のボルショド県内で最大規模のツィガーニの居住が確認された。そこに集まった人々は、ミシュコルツ周辺の複数の集落からミシュコルツにやって来たであろう人々であり、そのいくらかがやがて定着していくことになる。1770年代まで見られるツィガ

¹⁹⁹ それはしばしばツィガーニと「犯罪」、「治安を乱す行為」とを結びつける形で生じた。詳しくは第6章を見よ。

²⁰⁰ 詳述は省略するが、とりわけ1780年代には、ツィガーニ側からも様々な理由のために、ニャクヴァーゴーや石灰採掘所付近の水車小屋そばなど、都市内でも中心から外れた地区に分与地の再分割を求める請願が提出されていく。それに対して参事会側は時にその訴えを聞き入れ、時に拒絶していく。これらのやり取りからは、分与地分割の最終決定権が参事会側にあったとしても、ツィガーニ側からも居住場所に関する希望を伝える可能性が開かれていたことが窺える。また、ツィガーニたちの側も、周縁的な区画での居住を要求していた点も一考に値しよう。更なる検討は今後に譲りたい。BAZML Sp. IX. 419; BAZML TJ 13. köt., 168.

ーニの内実の流動性は、1780 年代になると 20 世帯前後で落ち着き、またこの時点では、ツィガーニの世帯の多くがミシュコルツに定着していたと思われる。

ツィガーニ住民の流動性が低くなっていった一方で、ツィガーニの居住領域の凝集性は薄まって行った。世紀中葉にはファービアーン通りからウーィヴァーロシュの一角にかけて集中していたツィガーニの居住領域は、新たな流入者とともに、市内域の南東部、南西部、北東部など、都市の拡大に伴い居住地化したより周縁的な地区へも分散することとなった。ツィガーニたちの多くは、鍛冶仕事の実践や、県・ミシュコルツ参事会からの要請の結果、川沿いに住む傾向にあったが、そこでの生活は洪水の際に大きな被害を受けるなど、劣悪な条件をも伴うものだった。ただし、このような居住地区の周縁化はツィガーニに限らず、特定の職業に従事したその他の住民たちにも認められるため、このような場での居住をツィガーニのみのスティグマとして捉えることはできない。

このように、人口動態の観点からは内実の流動から安定へ、居住領域の観点からは凝集から分散へという変化によって検討時期を特徴づけることができる。こうして、当時ミシュコルツで居住していたツィガーニの数量や配置についての大まかな見取り図は示された。しかし、そこからはツィガーニたちがこの時期に、お互いに、あるいはその他の周囲の住民たちとどのような関係性を取り結んでいたのかについてはまだ具体的に見えてこない。5、6 章で検討されるのはそのような側面についてである。以下の議論を先取りすれば、1767 年ごろまでは、ツィガーニ間の社会的結合関係は一定程度の自治を伴った「共同体」としての機能を有しており、また制度上でもその状態は保証されていた。この「共同体」はどのように機能していたのか。そしてそれはどのようにして機能しなくなって行ったのか。次章ではその点に焦点を当てて、18 世紀中葉のミシュコルツのツィガーニたちの変化を検討してみたい。

5 章 18 世紀中葉のツィガーニ共同体、ならびに頭領の機能

導入

第 3 章、第 4 章から明らかなように、少なくとも 18 世紀半ばごろまでには、その後長く定着して行くことになるツィガーニたちの家系がミシュコルツに出現し、市内域、特にその周縁部に居住するようになっていた。彼らの居住領域は少なくとも 1760 年代には互いに比較的近い距離に集中していた。これらの領域がその他の住民も暮らす場所だったことには留意する必要があるが、他方で、ツィガーニ同士の距離の近さが彼らの日常的接触を頻繁にさせていたであろうことも、容易に想定できる。他方で、第 2 章で確認したように、18 世紀半ばは総督府政令を通じたツィガーニ政策の王国規模での転換の時期にあたり、その影響はミシュコルツのツィガーニたちにも徐々に及んでいくこととなる。では、このような状況に置かれたツィガーニたちは、互いにどのような結びつきの中にあっただろうか。そして、政策の進展によって何が変わっていくのだろうか。

本章では、18 世紀半ばのミシュコルツにおいてありえたツィガーニの社会的結合関係、それを基盤として周囲との関係の中で立ち現われていく「共同体」としての機能、とりわけ「共同体」の指導者、「頭領」の機能に注目し、ツィガーニに対する地域的な裁量がより大きかった 1750 年代から、国家主導のツィガーニ政策が徐々に浸透していく 1760 年代にかけて、それぞれがどのように立ち現われ、何が変わって行くのか、そして、ミシュコルツでその変化が生じた地域的な原因は何でありえたのかを考察する。

具体的な議論に入る前に、当該時期においてこのような問題を問うことの意義を確認しておきたい。近代以前のツィガーニをどのような存在なのかと問う場合、従来の議論では、序文などで触れた構図が大きな影響を持っていたと言える。つまり、ツィガーニ知識人や彼らの主張に近い立場で研究に従事する研究者たちの大部分は、ツィガーニを出自や言語を同じくする「エスニシティ」と捉える傾向にあり、他方で現代をフィールドとする社会学や文化人類学の中でも、構築主義的な立場に立つ研究者やナジら近年の歴史家は、出自やそれに伴う言語・文化の同一性ではなく、周囲とは異なり、かつ一定の生活形態や行動様式を基盤とする認識枠組みとしてツィガーニを捉える傾向にあったが、この問いについてもいずれかの軸に沿ってなされて来た。この議論に対しては、筆者はどちらかと言えばナジらの見解を支持するが、それでも不十分であるという立場にあるということは序文で記した通りである。つまり、このような議論はあくまで、ツィガーニを捉える自他の認識枠組みがどのような要素を媒介にして作り出されていたのかをめぐめるものとどまっており、そこから、そのような何らかの枠組みの下で捉えられた集団が、前近代の文脈の中で社会的、法的にどのような機能を有していたかと問う議論に発展することはあまりないためである²⁰¹。他方で、実証的な研究は、本章でも後にまとめるように、ツィガーニ

²⁰¹ 最も多くの事例を提示しているナジの場合は、ツィガーニの法的側面や集団の社会的機能に

に関する法制史料などに基づき、ツィガーニの集団やその指導者に想定されていた権限や機能を明らかにしてきた。しかし、そのような規定が実際にどのように機能していたのか、あるいはその機能が当事者たちにどのように認識されていたのかに踏み込んだ議論は、多くなされていない。

こうした研究状況において、ツィガーニとして捉えられた集団が、いかなる要素に基づいて結び付いた集団であったとしても、そして、それについては史料的に問うことができない場合でも、この集団に対して 18 世紀の時点で与えられていた法的な権限、そしてその実践を問うことは重要である。そうすることで、これまで多くの場合、近代的観点からは「エスニシティ」として捉えられる傾向の強いこの集団を、近世社会の文脈の中に位置づけてとらえ直すことができるからである²⁰²。

その際、近世ヨーロッパ史研究においてすでになじみの深い構図をこの人々にも適用することが役に立つだろう。つまり、ある社会集団を、一定の要素を媒介とした社会的結合関係から成り立つ集合体として、そしてその結合関係に対して社会的に有効な集団的権利を付与した法的な単位を社團(広義の身分)として捉えるという構図である²⁰³。ある集団は社團となることで、一定の権利を統治権力から認められる代わりに、その枠組みを単位として特定の役割を負っていた。そのような社團編成的な社会が近世においては成立していたのである。

その視点をツィガーニに移すと、従来の研究でも知られてきたように、中世以来、国王、領主などの統治権力はツィガーニ集団に特定範囲を移動するための特許状を発行し、移動先での自由を保証することがあった²⁰⁴。また、18 世紀前半から半ばにかけて、ツィガーニに対してその権限や義務が、地域的に独自に定められていたことはいくつかの県や王国自由都市の事例から知られている²⁰⁵。このことから、当時のツィガーニ集団を、統治権力との関係の中で、その権利、

についても豊富な事例が提示されているが、それはツィガーニの認識枠組みをめぐる問題とは切り離されて論じられる傾向にある。

²⁰² 本研究で大いに参照している『ミシュコルツ史』の諸論考も、ツィガーニを言語・文化と関連付けられた「エスニシティ」の一種として捉える傾向が強い。FARAGÓ Tamás, “A város népesség”, MT III. 1. köt., 256; Ö. KOVÁCS József, SZENDI Attila és FAZEKAS Csaba, “Városi társadalom”, MT III. 2. köt., 538-545.

²⁰³ 近世における重要な社会構成要素として社團を位置づける観点について、アンシャン・レジーム期のフランス王国を対象とした古典的研究としては、二宮宏之「フランス絶対王政の統治構造」吉岡明彦、成瀬治編『近代国家形成の諸問題』岩波書店、2007 年、219-262 頁。近世のハンガリー王国、トランシルヴァニア侯国など、歴史的ハンガリーを対象とした近年の議論については、中澤達哉『近代スロヴァキア国民形成思想史研究——「歴史なき民」の近代国民法人説』刀水書房、2009 年；秋山晋吾「近世国制とディアスポラ——18 世紀トランシルヴァニアのカトリック・ブルガリア人——」小沢弘明、山本明代、秋山晋吾編『つながりと権力の世界史』彩流社、2014 年、26-45 頁；同「近世東欧の交易ネットワークとその担い手たち」などを参照。

²⁰⁴ KRISZTÓ Gyula, *Nem magyar népek a középkori Magyarországon*, 245-247; NÁDASI Edit, “A gróf Esterházy-család galántai és cseszneki uradalmán élő cigányok a XVII–XVIII. században”, *Kisebbségkutatás*, 11. Évf. 1. Sz. (Budapest, 2002), 59-65; NOVÁK Veronika, “Cigány oklevelek és kiváltságlevelek az Eszterházy család levéltárában”, BÓDI Zsuzsanna (szerk.), *Romanothon*, 7-23.

²⁰⁵ 頭領に関する規定は、本章で後に詳しく見ることとなるだろう。その他の規定については、例えば、以下が参照できる。NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 273-276; BANA József, “Győr város kísérletei a cigányok megrendszabályozására 1746-ban”, *Cigánysors*

義務や行動可能性などが法的に規定された人間集団と見なし、社団という視点から捉えることも可能だと言える。

ツィガーニ集団をこのような一種の社団として捉えるときに、重要な存在として浮かび上がってくるのがツィガーニ集団の指導者である。この人々は以下で見るように様々な称号で表現されてきたが、ここでは便宜的に、ツィガーニ集団がハンガリー王国に史料上登場した時期以来、頻繁に用いられた呼び名である「頭領(vajda/ vojvoda)」を主に用いる。この vajda という言葉自体は、スラヴ語を起源としており、歴史的には、中世ハンガリー王国のトランシルヴァニア太守やルーマニア人集落の指導者などの称号としても用いられてきた²⁰⁶。この言葉がツィガーニの間で用いられるようになった経緯には不明な点も多いが、ツィガーニに関する場合でも、15 世紀の特許状の中で用いられたことが確認されており、また三分割期のトランシルヴァニア侯国やハンガリー王国では、ツィガーニ関連の業務に携わる貴族に官職名としてこの称号が与えられていたことが知られている。さらに、17 世紀後半のハンガリー王国の一部地域では、この言葉は、ツィガーニ集団の指導者のみならず、集団内の成人男性一般を指すものとして用いられている²⁰⁷。この言葉の以上のような多義性を認めつつも、ここでは、18 世紀のツィガーニに関する場合に限定して vajda という語を用いることとする²⁰⁸。

18 世紀の「頭領」についてこれまで知られていることを大まかにまとめると、以下のようなになる。この時期の「頭領」はツィガーニ集団内の指導者であると同時に、統治権力とツィガーニ集団を仲介する存在として位置づけられる。彼らは集団内で行使できる影響力を特許状や法規定を通じて統治権力から認められ、またその一方で、統治権力側の義務に従うように求められてもいた。ただし、ツィガーニの頭領やそれに類する役職は 1767 年 12 月 10 日の総督府令によって法的に廃止され、ツィガーニたちは地域の判事の下に従属することとなった²⁰⁹。また、1783 年にそのことが再度確認されている²¹⁰。

従来の研究では、「頭領」に関して主に 1767 年以前の時期が検討され、この人々に対して認められた具体的な活動範囲やその義務の内実が明らかにされてきた。それらの試みからは、集団指導者の称号、選出主体、影響の範囲、課された義務や容認された権利の内容などの点で、地域や時期によって、ある程度の多様性が存在していたということがわかっている²¹¹。各地の条例をは

I., 33-38; MCD, 103, 107.

²⁰⁶ DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatások tükrében*, 45.

²⁰⁷ 18 世紀以前の頭領に関する詳細は以下を参照。NAGY Pál, „Faraó népe”: *A magyarországi cigányok korai története (14. -17. század)*, 89-108.

²⁰⁸ 以下ではツィガーニ集団の指導者全般を表す場合を「頭領」、原文においても vajda が用いられている場合を頭領、と表記上区別して用いる。なお、「頭領」として言及される人物たちは従来の研究で知られる事例も含め、常に男性である。

²⁰⁹ 「[1767 年 12 月 10 日総督府令] 第 3 条: (….)最終的にはツィガーニのいわゆる頭領たちを排除し、この人々[=ツィガーニ]をその土地土地の判事の下に置かなければならない。」MCD, 85.

²¹⁰ 「[1783 年 10 月 9 日総督府令]第 17 条: (….)すでに彼ら[=ツィガーニ]の頭領は職を解かれており、そして彼ら[=ツィガーニ]は土地土地の判事の下にある。」MCD, 88.

²¹¹ 以下 4 段落の記述については次の研究を参照。BANA József, “Győr város kísérletei a cigányok megrendszabályozására 1746-ban”, *Cigánysors* I., 33-38; IVÁNYOSI-SZABÓ Tibor, “Adatok a Cigányok Kecskeméti Történetéhez (1596-1850)”, 9-17; MCD, 103-105, 107; NÁDASI Edit, “A gróf Esterházy-

じめとする諸史料によると、集団指導者の影響力の範囲として、県、郡、領主所領内、王国自由都市、市場町など、様々な領域が想定されている。その名称も、多くの事例で頭領という称号が用いられたことに加えて、市場町シクロシュの判事(bíró/judex)、ノーグラード県の県頭領(megye fővajdája)と郡頭領(sereg vajdája)²¹²、市場町ケチケメートの街区長(tizedes)、老頭領(öreg vajda)、ヤースアパーティ(Jászapáti)の新ハンガリー人の頭領(új magyarok vajdája)など、様々な役職名が見られた。さらに、これらの人々の補佐的な役職についても、ケチケメートの小頭領(kis vajda)、王国自由都市ジェール(Győr)の副頭領(vice vajda)などが知られている。

その選出方法に目を向けると、これらの「頭領」は、西ハンガリーのエステルハーズ家所領、王国自由都市ジェール、市場町ケチケメートなどにおいては、領主、都市や市場町参事会などの統治権力によって選出されていた。その一方で、参事会が設定した日取り、任期の下で、ツィガーニ集団の構成員自身が頭領を選出していた市場町ホードメズーヴァーシャーレヘイ(Hódmezővásárhely)の事例や、県当局が任命した県頭領への不満を理由に、県内のツィガーニたちが自分たちの推薦する人物を頭領とするために県当局と交渉を行ったノーグラード県の事例が示すように、「頭領」の選出をめぐる、統治権力とツィガーニ集団との間で取り決めや交渉がなされることもありえた。

「頭領」たちには統治権力から課された義務が存在しており、それらは多くの場合、集団に属するツィガーニのふるまいの統制、集団からの徴税とその管理、地域当局への納税を含んでいた。また、ノーグラード県では税金を持って逃亡したり、治安を乱したツィガーニを罰する義務が、ヤースアパーティでは罪を犯したツィガーニについて集落内の首席判事(főbíró)に報告する義務が定められていた。加えて、ケチケメートや王国自由都市ジェールで確認されるように、統治権力から課された手紙運搬や見張り、牧草収集といった賦役義務へのツィガーニの動員と監督が、頭領ら集団指導者に求められることもあった。特に王国自由都市ジェールでは、他集落のツィガーニが都市領域内で義務を遂行する際に、副頭領と判事はその監督を義務付けられていた。ポジョニ県(Pozsony vármegye)では、「ハンガリー人の頭領(Magyar vajda)」と呼ばれる行政側のツィガーニ監督官にツィガーニ集団の構成員に関する諸情報を報告する義務が課せられていたことも確認されている。

また、「頭領」に認められていた権利には以下のものがある。まず、上でも義務として言及した集団構成員を罰する行為は、統治権力が「頭領」の集団内裁判権を容認したものとも捉えられる。それにとどまらず王国自由都市ジェールではツィガーニから罰として徴収された罰金の半分が頭領のものとなることも明文化されていた。加えて、シクロシュやケチケメートでは、「頭領」の地位にある者は免税措置を受けることができ、あるいは、王国自由都市ジェールでは、ツ

család galántai és cseszneki uradalmán élő cigányok a XVII–XVIII. században”, 59-56; NAGY Pál (szerk.), *Források a siklósi cigány múltjából*; NOVÁK Veronika, “Cigány oklevelek és kiváltságlevelek az Eszterházy család levéltárában”, 7-23; SZOMSZÉD András, “A nógrádi cigányság története az összeírások tükrében”, 157-207.

²¹² 直訳すると「大集団の頭領」だが、ソムセードによると、ノーグラード県ではこの名称で呼ばれる頭領は郡単位で組織された集団を統制していたため、この訳語を採用した。SZOMSZÉD András, “A nógrádi cigányság története az összeírások tükrében”, 186-187.

ィガーニ各自の収入の一部を獲得できた。最後に、ケチケメートやノーグラーード県で確認されたように、集団を代表した請願の提出も、規定には明示されていないものの、「頭領」に認められた権利と捉えることもできよう。なお、これらの「頭領」の地位を多様に規定した各地の条例は、総督府令によるツィガーニの法的規制が本格化する 1760 年代以前、すなわち各地の統治権力がツィガーニに対して各自で対処していた時期に多く確認されている²¹³。

以上のような 18 世紀の「頭領」の研究では、従来、県や各地の条例、あるいは統治権力から集団に対して発行された特許状が主な史料として用いられる傾向にあり、その他の行政文書や統計資料、あるいは請願史料などの利用は、一部の研究を除き、見られなかった。先行研究にはこのような史料上の偏りが指摘できることに加え、時期的な偏りも指摘できる。つまり、以上で概観した各地の「頭領」を対象とする研究は、市場町シクローシュの事例を除き、17 世紀後半から 1760 年ごろまでに作成された史料を用いたものであるため、「頭領」の法的廃止の直前にあたる 1760 年代の「頭領」の機能が地域的にどの程度影響力を有していたのかについては、どの地域でもいまだ十分な検討がなされているとは言えない。さらに、法的に「頭領」が廃止された 1767 年以降の「頭領」や「かつて「頭領」だった人物」について着目している研究が非常に少ないことも指摘できる。このような研究状況は地域ごとの史料状態のばらつきもさることながら、「頭領」の機能に対する 1767 年法令の影響を、従来の研究の多くが当然視した結果生じたものであると考えられる。しかし後に見る市場町シクローシュなどの事例のように、1767 年以降もツィガーニの頭領、判事などの指導者が一定期間存続していたことが知られるようになってきている²¹⁴。そうである以上、18 世紀のツィガーニの「頭領」をめぐるいくつかの空白は、特定地域における 1767 年以前の頭領ら指導者の機能をできる限り把握した上で、それが 1767 年で失われてしまうことを無条件の前提とせず、その後の「元・頭領」たちの動向にも目を向けることを通じて、補足される必要があろう。また、これらの検討の結果、ある地域において 1767 年以降の「頭領」の機能停止が明らかになったとして、1767 年以降も「頭領」の機能の継続が見られた地域が確認される以上、特定の地域において、頭領の停止という状況がなぜ生じたのかを、1767 年政令の規定以外の要素から、つまり地域的な文脈からも考えてみる必要があるだろう。

本章では、ミシュコルツを事例として、1750 年代から 1767 年代にかけてのこの都市における「頭領」の機能を検討し、またその後の「元・頭領」の動向にも目を向けることを通じて、ツィガーニの「頭領」をめぐる以上の問題圏に取り組みたい。

ミシュコルツの頭領にも言及した先行研究としては、トートのプロソポグラフィ的研究がある²¹⁵。そこでは、18 世紀中葉のミシュコルツにおいて誰が「頭領」であったかということが明らかにされている。しかし、そこでも、それらの人物の集団指導者としての行動や、その 1767 年以降の動向についての言及はわずかである。また、当時のミシュコルツの社会層の多様性を明らかにした研究でもツィガーニへの言及は行われており、「頭領」について示唆を得られる内容も

²¹³ NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában*, 272-278, 283-287.

²¹⁴ 本章 3-2 参照。

²¹⁵ TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 205-215.

そこに含まれているが、扱われる事例自体は非常に限られており、頭領の機能が史料に即して全体的に論じられるには至っていない²¹⁶。なお、史料面での前提として、他の地域の事例とは異なり、18 世紀中にボルショド県やミシュコルツが発布した条例の中に、ツィガーニ「共同体」の活動範囲、「頭領」の地位や権限・義務などを網羅的に規定した条項は管見の限り存在しない²¹⁷。そのため、その他の史料のみから、その機能を探っていくことになる。

史料としては、『参事会議事録』、市場町内の裁判所としても機能していた参事会が作成した裁判関連文書、参事会に対する請願書などを中心的に用い、必要に応じてその他の未刊行史料、刊行史料などを利用する²¹⁸。これらの史料の頭領に関する断片的な記述からは、頭領をはじめとする指導者層がどのような文脈でどのような行動を行ったか、あるいは、都市に居住するツィガーニたちや参事会によって、どのような状況と関連付けて言及されているか、などについて知ることができる。網羅的な条文が確認できない以上、このような記述から、頭領に付随した慣習的な機能を読み解いていくことが必要となる。

以下、第1節では、ミシュコルツのツィガーニの社会的結合関係、並びにそのつながりを通じて社会的な枠組みとして成立したツィガーニ「共同体」の姿を再構成し、第2節では、そのような枠組みの中で当時のミシュコルツにおいて想定されていた「頭領」の機能や役割、そしてその限界を検討する。その上で、統治権力としてのミシュコルツ参事会やツィガーニたちにとってこの時期、ツィガーニの「頭領」とはどのような存在でありえたのかを考察する。次に第3節では、1767 年以降の史料に現れる「かつて「頭領」だった人物」のその後に注目することで、参事会の「頭領」に対する認識が、その後どのように変化したのかを検討する。またその際、その他の地域の 1767 年以降の事例とも比較することを通じて、ミシュコルツで、そのような頭領への認識の変化がどのような地域的背景の下で生じたのか、についても考えたい。

第1節 ミシュコルツのツィガーニ共同体

まず、ミシュコルツの頭領の機能を検討していくに先立って、18 世紀半ばに史料に現れてくる当該地のツィガーニの社会的結合関係、並びにそのつながりが有していた社会的機能を確認しておきたい。

この時期、とりわけ 1760 年代の史料の中で、ミシュコルツのツィガーニたちは何度も酒場などで酒の席を共にする人々としてその姿を現す。オラー・ペシュタ(=ヴァダースィ・イシュトヴ

²¹⁶ LEVELES Erzsébet, “A 800 éves Miskolc”, HALMAY Béla és LESZIH Andor (szerk.), *Miskolc* [Magyar városok monográfiája, V.] (Budapest: Magyar Városok Monográfiája Kiadóhiv., 1929), 77; Ö. KOVÁCS József, SZENDI Attila és FAZEKAS Csaba, “Városi társadalom”, MT III. 2. köt. 543-545.

²¹⁷ 『参事会議事録』に加え、以下も参照。TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok*; TÓTH Péter és BARSZ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai*.

²¹⁸ BAZML TJ 1-16 köt.; BAZML Sp.; BAZML Acta Politica; MOL C56 Helytartótanács levéltár, Departamentum Zingarorum, Acta Secundum Referentes (以下、MOL ARS); MOL C 56 Helytartótanács levéltár, Departamentum Zingarorum, Acta Departamentum Zingarorum (以下、MOL ADZ); MCD; NAGY Pál (szerk.), *Források a siklósi cigány múltjából*.

アーン)とブンディ・イロナ、ダルドシュ・ジグモンド(老)とヨーナーシュ・カタなど、夫婦で酒場にいた事例のみならず、ダニ・ダーニエルとモイシュカの妻(Moiskané)、上述のヴァダースィ夫妻とカッロー・ダーニエルの妻ドゥダーシュ・シャーラやイヴォーク・イシュトヴァーンの妻ダル・シャーラなど、1764年の「煙突登録簿」に基づけば近所(ファービアーン通り)に居住しているツィガーニ同士が飲んでいる事例が確認できる²¹⁹。また、名は明示されないものの、ツィガーニの頭領と判事が、何人かの仲間たちと酒盛りをしていたという記述も知られている²²⁰。このことは、ツィガーニたちの間で日常的な交流が行われていたことを示している。そのような言及が現れるのは、ほとんどの場合、ツィガーニたちの間で生じた喧嘩や口論、誹謗中傷に対する処罰を記録した記述の中だが、参事会が処罰に値すると見なしたこれらの行為を、彼らが酒を飲むたびに毎回引き起こしていたのでなければ、ツィガーニたちの飲酒を通じた交流は、より頻繁で日常的に生じていたと考えられる。もちろん、酒宴の席にツィガーニ以外の人々が加わっていた可能性もあるが、その情報を1760年代までの史料から引き出すことは難しい²²¹。

また、1760年代までの時点では決して言及が多いわけではないが、ツィガーニたちは生計活動においても協力し合っていたことを伺わせる記述が存在する。カッロー・ダーニエルの妻ドゥダーシュ・シャーラとイヴォーク・イシュトヴァーンの妻ダル・シャーラは、1752年にヴァダースィの妻ブンディ・イロナから誹謗中傷を受けたが、その際、前者2人の女性とともにピアツ通りに商業に従事しに行くところだったという。また、同じくこの女性2名は、1763年に都市の市場にて古着売りに従事していた²²²。生計活動における協働関係は、時には、合法的な意味での職業活動の範疇の外でも見られた。親族関係を有する者たち同士ではあるが、ヴァダースィ・イシュトヴァーンとブンディ・イロナ、その娘のオラー・エルジェーベト(または、エルジョーク)は、1764年に、ウィーンからミシュコルツにやって来た商人とトラブルを起こした末、彼に暴行を加えてその持ち物を奪っている²²³。同じく、1765年にコザーク・ヤーノシュは自らの息子に命じて、他人の家の庭の木からリンゴの実をもぎ取らせている²²⁴。これらの行為は参事会によって犯罪行為と見なされ、相応の裁きがなされることとなった。その点では、これらは社会的に職業活動と呼びうるものではないが、生計のためのツィガーニ同士による共同作業という意味では、社会的に職業と見なされた活動における共同と同様の文脈で語りうるものである²²⁵。

²¹⁹ BAZML TJ, 3. köt., 678; 5. köt., 254, 349 ; BAZML Sp. XII. 244.

²²⁰ BAZML Sp. XII. 244.

²²¹ 1780年代になると、ツィガーニとその他の住民が酒場でカードゲームに興じるなどの事例にも出会うことができる。BAZML TJ 9. köt., 108-110.

²²² BAZML Sp. XII. 244; BAZML Sp. XIV. 293.

²²³ BAZML Sp. XV. 18.

²²⁴ BAZML TJ 5. köt., 252.

²²⁵ ナジによれば、定住していたとしても、自らは生産を行わず、「周囲の人々を利用して利益を引き出す」このような側面にツィガーニの「物乞い共同体」的性質を見出すことができるという。NAGY, Pál, “A magyarországi cigányság története a 16 -19 században”, FORRAY R. Katalin (szerk.), *Ismeretek a Romológia az alapképzési szakhoz*, 43. ただし、ミシュコルツ内のツィガーニが盗みを行うとき、その協力者は必ずしもツィガーニだったわけではないことには留意しておくべきであろう。本章検討時期については、大人数によって盗み出された羊の処理にツィガーニのダルドシュ・アンドラーシュ、ダルドシュ・ジュリが加わっていたことが指摘できる。BAZML TJ 5. köt.,

このような結合関係によってつながったツィガーニという紐帯は、法的、あるいは社会的な枠組みとしても機能していた。一つには、職業上の枠組みである。第3章で見たボルショド県の価格規定表に示されるように、ツィガーニが金属加工業に従事する場合、「ツィガーニの鍛冶師」として、その他の同様の職種と区別が設けられており、彼らの仕事内容やそれに対する対価が別に設定されていた。例えば、時代は少し下るが17世紀後半のデブレツェンの条例でも、ツィガーニが作成、修理しても構わない道具類(熊手、動物用の足かせ、火床、家畜用の鈴、釘抜き、鋤、鍬、釘、手綱など)が規定されていたことが知られている²²⁶。

次に、すでに見た1751年のボルショド県条例や、その後のツィガーニ帳簿の作成が示すように、ツィガーニは、その他の社会集団とは異なる徴税単位として扱われていた。例えば、ミシュコルツでは、1755年にハンガリー財務局の管轄下に入るまで、都市の自治を担保するために「買い戻し金(quantum)」の支払いが都市の住民に課されていたが、ツィガーニ帳簿を見る限り、ツィガーニはその支払いを行っておらず、彼らが納めた税は、王国に支払う名目で県から課された軍事買い戻し税(porción/hadi adó)と、家畜などの所有財産に応じて課される税のみに限られていた。少なくともその状況は1768年まで続いていたこともツィガーニ帳簿の記述から窺える²²⁷。なお、18世紀のミシュコルツにおいては、1724年以降、いくつかの通りごとに組織された住民の団体である街区(tized)が、住民による防災、夜警、見張りなどの治安維持活動、荒れ地の除草や道路修理といった共同奉仕への動員、住民の意見集約や参事会からの通知伝達の範囲、参事会の雇った牧人への給与支払いの単位などとして機能していたことに加えて、徴税単位としても機能していたが²²⁸、少なくとも1760年代までのツィガーニは街区とは異なる枠組みでの徴税がなされていたように見える。その論拠については、次節で頭領の機能を検討する折に譲りたい。

そして、この時期のミシュコルツのツィガーニ集団は請願を行う主体つまり、「共同体」(közönség/közösség)として立ち現れることがあった。それは、1766年にボルショド県に提出された馬の保有の許可を求める請願において確認できる。この請願では、公共の負担や奉仕、軍事買い戻し税の支払いが請願者たちに課されている現状が説明されたうえで、一方で、請願者たちに蓄えがなく、また、(恐らく鍛冶)仕事に必要な木切れや炭が高価なことから、納税に必要な金を稼ぐこともできなくなっているため、課された負担を十分にこなすことが困難であるとの主張がなされている。そして、請願者たちは、その状況を改善し、彼らが「義務を負っている方々に」、つまり国家や県やミシュコルツ参事会に、より多くを支払えるように、政令で禁じられている馬

452-453. ちなみに、ミシュコルツの外部からやってきた複数のツィガーニによる「共同作業」として盗みが行われていたことも、この時期の史料から確認できる。BAZML TJ 4. köt., 234, 573; BAZML TJ 5. köt., 173, 462-463.

²²⁶ MCD, 106.

²²⁷ 1770年代のツィガーニ帳簿では、ツィガーニは軍事買い戻し税に加えて、集落に対して支払う家税(házi adó)を徴収され始めたことも確認できる。ただし、領主に対する賦役奉仕の内容などに関する史料については、県文書館でも国立文書館でも現時点では確認できていない。MOL ARS, 5.cs. 72. ミシュコルツの徴税体系とその変化については以下も参照。SZEGŐFI Anna, “Mezőgazdaság-Árútermelés-Piac”, MT III. 1. köt., 278-282.

²²⁸ TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci státutumok*, 34, 48, 53-54, 57; GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III. 1. köt., 119-120; SZEGŐFI Anna, “Város gazdalkodás”, MT III. 1. köt., 418.

の保有を許可して欲しいと訴えることになる。その際、請願者たちが、自らを「我々はこの地の住民であり、風とともにさまよう者たちではありません(mi helyben lakosok, nem széjjel vándorlók vagyunk)」と、自分たちと、法令に抵触する馬を所有して放浪生活を送るツィガーニとの区別を強調していることは興味深い、それ以上にここで注目すべきなのは、請願主体の名義が、「ミシュコルツに居住するツィガーニ 皆が共同で(a' miskolci lakos cigányok mind közönségesen)」と表現されている点である。実態として、ミシュコルツのツィガーニのどれ程がこの請願に関わり、また賛同していたかは定かではない。そして、この請願がその後、県のどのような反応を受けたのかについても追跡はできない。それでもこの請願からは、「ミシュコルツに居住するツィガーニの共同体」という結びつきが、請願の主体を形作り、一つの枠組みとして機能しうるものであったことは指摘できるだろう²²⁹。なお、このような請願に際して、頭領の名が集団の代表として記される事例がいくらかの地域では確認されている²³⁰。しかしミシュコルツではそうではない。この点は第3節で検討したい。

以上の検討からは、18世紀半ばのミシュコルツのツィガーニが日常的な交流関係や、生業の協働を通じてお互いに結び付いていたこと、並びに、その結びつきが、徴税区分、業務の範囲などの点で、他の社会集団から彼らを社会的、法的に区別し、また請願に際しては、共同体としても機能しえたことが指摘できる。このような共同体の枠組みの中で、18世紀ミシュコルツのツィガーニの頭領は一定の機能を果たしていた。次節ではそれらについて確認していきたい。

第2節 1767年以前のミシュコルツにおける「頭領」の機能と限界

これまでの章でも指摘したように、18世紀前半の史料におけるツィガーニの「頭領」への言及はほとんどなく、唯一、1744年3月9日に頭領コザーク(Kozák Vajda)なる人物が市場町参事会の所有する障害を持つ馬を購入したという記述が確認できるのみである²³¹。このような史料状況から、本研究は18世紀半ば以降の史料に大きく依拠することになる。以下、第2章では、1752年から1767年までの史料を用いて、ミシュコルツにおけるツィガーニの「頭領」の諸機能を検討していく。

5-2-1 18世紀ミシュコルツの「頭領」たち

まず当該時期に「頭領」でありえた人物たちについて言及しておく。この時期にツィガーニの頭領をはじめとしたツィガーニ集団内部の指導者でありえた人物は、ヴァダーズィ・シャームエル(Vadászi Sámuel)、ヴァダーズィ・イシュトヴァーン(Vadászi István)、コザーク・ヤーノシュ(Kozák János)の3名である。そのうち、ヴァダーズィ・イシュトヴァーンはオラー・ピシュタ／ペシュ

²²⁹ BAZML Sp. XI. I. 113; NAGY Pál (szerk.), *Források a magyarországi cigányság történetéből 1758-1999*, 28.

²³⁰ 例えば SZOMSZÉD András, “A nógrádi cigányság története az összeírások tükrében”, 157-207; IVÁNYOSI-SZABÓ Tibor, “Adatok a Cigányok Kecskeméti Történetéhez (1596-1850)”, 7-55.

²³¹ BAZML TJ 3. köt., 125.

タ(Oláh Pista/Pesta)、ヴァダースィ・ピシュタ/ペシュタ(Vadászi Pista/Pesta)、オラー・イシュトヴァーン(Olah István)、オラー・ヴァダースィ・イシュトヴァーン(Oláh Vadászi István)などの別名でも史料に登場する²³²。彼らのうち、ヴァダースィ・シャームエルは頭領であると史料上で明言されてはいないが、1752 年に行われた聞き取り調査において、ある証言者によって「老頭領(öreg vajda)」と表現された人物と、別の証言者によって言及されるヴァダースィ・シャームエルの位置づけが同様であるため、本稿では 1752 年時点の頭領とヴァダースィ・シャームエルを同一人物と見なして扱う²³³。

まず、集団の指導者の名称に関しては、多くの場合、頭領という称号が用いられている。時には、判事(bíró)、下級判事(kis bíró)、評定人(eskütdek)などの称号にも言及がなされるが²³⁴、これらの役職が史料中に現れるタイミングが頭領と同時であるか、別の人物が頭領在任中の時期であることから、あるいは、頭領への言及のみが確認される時期もあることから、これらの役職は、ミシュコルツでは頭領と同等であったというよりは、その補佐役のような位置づけだったと推測できる。これは、頭領の称号が確認されておらず、判事のみが唯一の指導的役職であったと見られるシクローシュの事例などとは異なっている²³⁵。

上記の頭領 3 名がこれらの役職名とともに言及されている時期を整理すると、以下のようになる。すでに言及したように、ヴァダースィ・シャームエルは 1752 年の時点で、頭領だったと推測できる。その後、数年間、史料中での「頭領」に関する言及が見られなくなるため、彼がいつまで頭領の地位にあったかは定かではない。ヴァダースィ・イシュトヴァーンは、ヴァダースィ・シャームエルの息子であることが示唆されているが²³⁶、1752 年には判事の役職にあり、後にも言及するように 1761 年から 1764 年まで頭領の地位に就いていた。なお、彼の頭領就任に関する 1761 年の史料では、ヴァダースィが「今後も頭領の地位にあることが確認された(Vajdaságban tovább is confirmaltatott)」とあることから、それ以前から、すでに彼が頭領であった可能性も考えられる²³⁷。また、彼はその後、1766 年には、下級判事の役職名とともに言及されている。最後に、コザーク・ヤーノシュは、徴税記録や裁判文書などによると、1764 年から 1767 年まで、すなわち頭領の法的な廃止まで、頭領の地位にあったと考えられる²³⁸。以上の事例から、ミシュコルツ内での頭領在任期間に関する明確な傾向を見出すことは難しいが、例えばノーグラード県や王国自由都市ジェールなどで見られた事例のように、数十年の長期にわたって同じ

²³² TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 211.

²³³ BAZML Sp. XII. 243. 一方の証言によれば、妻を売春婦呼ばわりされた夫のツィガーニが、老頭領の下に行き、彼女の汚名が払拭されるまでは妻とともに眠らないことを誓ったとされるが、もう一方の証言では、証言者はその誓いの言葉をヴァダースィ・シャームエルのところで聞いたと語っている。

²³⁴ これらの称号は、以下の史料中に確認できる。BAZML TJ 3. köt., 678; 4 köt., 619; 5. köt., 349.

²³⁵ シクローシュでは、各種帳簿に登録されたツィガーニの中に判事の称号を持つ人物がしばしば登場するが、頭領など、その他の称号を持つ人物は現れない。NAGY Pál (szerk.), *Források a siklósi cigány múltjából*, 21-39, 42-46, 48-50, 82-85, 86-88.

²³⁶ BAZML TJ 4. köt., 774.

²³⁷ BAZML TJ 3. köt., 678; 4. köt., 580; BAZML Sp. XV. 18.

²³⁸ BAZML Acta Politica III. I. 903; BAZML Sp. XII. 378, 382; XXI. X. 109.

人物が在任し続けたというパターンや²³⁹、あるいは逆にホードメズーヴァーシャーレヘイのように毎年頭領の選出が条例によって義務付けられている²⁴⁰、などの特徴は少なくとも見られない。

次に、頭領選出主体に目を向けると、1761 年 5 月 23 日の事例が示唆に富んでいる。その日、参事会は「ツィガーニたちの間でも、あるべき良き秩序を保つため(A Czigányok között is leendő jó rend tartás kedvéért)」、ミシュコルツ内のツィガーニを市場町庁舎へ一堂に集めた。その後、推挙された候補者 3 名(ヴァダースィ・イシュトヴァーン、コザーク・ヤーノシュ、カッロー・ダーニエル)の中からツィガーニたちの掛け声(Vox)によって、ヴァダースィ・イシュトヴァーンが頭領に選出された。その結果を市場町参事会が承認し、ヴァダースィにその地位に伴う義務を課した²⁴¹。ここから、ミシュコルツ内では頭領の選出には、意中の候補に対して声を上げるという形でツィガーニたち自身の意図が反映されていること、他方で、その選出プロセスが統治権力である参事会の関与の下で成立していたということが指摘できる²⁴²。また、ツィガーニの指導者層の罷免についても、参事会が影響力を持っていたことも史料から見て取れる。1752 年の判決文では、ツィガーニの判事ヴァダースィ・イシュトヴァーンが参事会によって解任されている²⁴³。

5-2-2 ミシュコルツにおける「頭領」の諸機能

続いて、ツィガーニ集団の構成員や市場町当局から期待される「頭領」の機能、あるいは義務を検討したい。先述のヴァダースィ・イシュトヴァーンの判事解任の事例において、参事会は、彼の解任の理由を、オラー・ペシュタ、すなわちヴァダースィが「ツィガーニたちの間で判事の地位にあることから、自らが他人を罵るべきではなく、さらに言えば他人がそうすることを禁ずる義務があったにもかかわらずそうしなかったため(minthogy a Cigányok között úgy is Bíróságot viselett, és nemhogy magának kellett volna másokat meg besteleníteni, sőt másokat is attól tiltani

²³⁹ BANA József, “Győr város kísérlétei a cigányok megrendszabályozására 1746-ban”, *Cigánysors* I., 36-37; SZOMSZÉD Andárs, “A nógrádi cigányság története az összeírások tükrében”, 162.

²⁴⁰ MCD, 107.

²⁴¹ Ö. KOVÁCS József, SZENDI Attila és FAZEKAS Csaba, “Városi társadalom”, MT III. 2. köt., 543; BAZML TJ 4. köt., 580.

²⁴² 推測の域は出ないが、頭領候補の選定基準において頭領経験者の親族であること、ないしはミシュコルツ内の古参家系であることは大きな意味を持っていたと思われる。ここまでに断片的に提示した情報を改めて思い起こすと、1760 年の選出時に候補となった 3 名の姓の内、カッローは遅くとも 1736 年、コザークは 1744 年、そしてヴァダースィは 1752 年には確認できる。そしてそのうちコザーク某とヴァダースィ・シャームエルは当時の頭領在任者でありえた。後に記すように、1760 年の選出で頭領に選ばれたヴァダースィ・イシュトヴァーンはヴァダースィ・シャームエルの息子であり、また、その次の頭領コザーク・ヤーノシュも、同姓であることから、1740 年代の頭領コザークと何らかの親族的つながりがあったと考えられる。このことから、ミシュコルツでは、頭領の親族が後に頭領に選ばれるというツィガーニ集団内部のサイクルが存在していた可能性を指摘できる。他方、もう一人の候補者カッロー・ダーニエルも古参家系と同姓であることから、そのような頭領候補には、この都市と比較的早くに関係を持ち始めた家系の人物から候補が立てられ、が選ばれていたのではないかと推察できる。

²⁴³ BAZML TJ 3. köt., 678.

kötelességében lett volna)」と説明している²⁴⁴。また、『参事会議事録』の1766年の記述では、ここでもオラー・ピシュタの名で表記されたヴァダースィ・イシュトヴァーンが、ツィガーニ同士のけんかを仲裁しようとし、それが原因で彼が傷を負ったことが記録されているが、その際、参事会は彼が「ツィガーニたちの間で下級判事として命じられた(a Czigányok között kis Bíróul rendeltett)」人物であることにわざわざ言及を行っている²⁴⁵。あるいは、1765年の裁判用の聞き取り調査において、ヴァダースィ・イシュトヴァーンとその妻ブンディ・イロナは、盗みを犯したツィガーニ、ダルドシュ・ジグモンドから頭領コザーク・ヤーノシュが金床(szarvas üllő)を没収したことを証言しているが、彼らはその行動の理由を、「コザーク・ヤーノシュが頭領として、新ハンガリー人の間でそのような盗みが起こらないようにするために(Kozák János, mint vajda, hogy az új magyarok között olyan tolvaj ne legyen)」あるいは、「コザーク・ヤーノシュが頭領として、彼[=ダルドシュ]が更生するように(Kozák János, mint vajda üllőjét elvitette, hogy magát igazítsa)」と説明している²⁴⁶。これらから、ツィガーニ内部の指導的立場の人物には、ツィガーニ集団内での争いの仲裁や治安の維持が期待されており、そのような「頭領」の機能は当局のみならず、集団構成員からも認識されていたことが読み取れる。

また、1752年のある裁判記録では、夫以外と肉体関係を持った疑いのあるツィガーニの女性に関する聞き取り調査において、その女性が「都市[参事会]の前でも、頭領の前でも、自身への売春婦の汚名を払拭していない(sem város előtt, sem vajda előtt ki nem tisztította a' kurva név alól)」という旨の証言が見られる²⁴⁷。ここから、「頭領の前」が、ツィガーニたちにとっては「汚名の払拭」を行う場として、「参事会の前」と同様の意義を有していると捉えられていたこと、そしてその証言を取り調べの記録に残した参事会側も、その意義を恐らく認めていたであろうことが指摘できる。加えて1765年の裁判記録からは、県判事(szolgabíró)や市場町の徴税人の指示を受けて、頭領コザーク・ヤーノシュが「すべてのツィガーニから銅貨一枚ずつ(minden cigánynak egy és egy petákot kellett fizetni)」を徴収する業務を担っていたことが見て取れる²⁴⁸。

次に、ミシュコルツの「頭領」の権限に目を向けると、他地域では「頭領」に認められていた免税特権は、表5-1でまとめたように、ミシュコルツでははっきりとは確認できない。ただし、いくつかの地域では、徴収した罰金を自分のものとするのが「頭領」に認められていたことはすでに見たが、ミシュコルツにおいても同様の「権利」が頭領従事者に容認されていた可能性は否定できない。1765年に頭領コザーク・ヤーノシュが、自身が罰したツィガーニからその所持品を没収した上述の事例は、厳密には罰金徴収ではないが、そのように解釈することもできよう²⁴⁹。

最後に、ミシュコルツの頭領がその影響力を行使できた範囲について検討したい。このことを直接的に示す史料は現時点では確認されておらず、断片的な史料から推定できるのみである。それでも、例えば、前述の頭領選出の際、市場町参事会は、その主体を「この住民であるすべて

²⁴⁴ BAZML TJ 3. köt., 678.

²⁴⁵ BAZML TJ 5. köt., 349.

²⁴⁶ BAZML Sp. XII. 378.

²⁴⁷ BAZML Sp. XII. 243.

²⁴⁸ BAZML Sp. XII. 378, 382.

²⁴⁹ BAZML Sp. XII. 378.

のツィガーニ(az itt lakos egész Czigányság)」と記していることを考えると、頭領が影響力を行使できた範囲には、少なくともミシュコルツの管轄領域内に居住するツィガーニが含まれていたと考えられる²⁵⁰。また、上述の事例で頭領コザーク・ヤーノシュが所持品を没収したダルドシュ・ジグモンドは、ミシュコルツの近隣の市場町ディオーシュジェールで盗みを犯して逃げてきたツィガーニであったことを考慮すると、頭領の影響力は外部からミシュコルツに流入したツィガーニに対しても及ぶものであったことが推測できる²⁵¹。

5-2-3 頭領の機能の「限界」

しかし、頭領やその他の指導的役職の影響力には自ずと限界が存在していたと見ることもできる。以下3点からこの問題について検討したい。

一つには、ミシュコルツのツィガーニの中には、頭領などの役職者に反発を持つ者、あるいは彼らに従わない者たちも確認できるということである。例えば、先述の頭領コザーク・ヤーノシュの徴税業務に関する1765年の言及は、コザーク・ヤーノシュが、税の支払いを拒否したツィガーニ、ブダイ・マーチャーシュとその妻アンドリ・ジュジャンナに対して罵声を浴びせたか否かをめぐる聞き取り調査の中でなされるものである。この事例からは集団構成員へ納税を強制する頭領の力が必ずしも強くなかったことをも伺うことができる。

また、同じく、この全2回の聞き取り調査の過程で、多くの目撃者の証言などから、コザークがひどい罵声を浴びせたとするブダイとその妻の訴えにはやや誇張されたところがあるということが大勢となっていくが²⁵²、ブダイの請願を受けて実施された第1回目の取り調べには、コザークが聞くに堪えない罵り言葉を何度も繰り返したと証言した者たちもいた。それはダルドシュ・ジグモンドとその妻ヨーナーシュ・カタリンである。このダルドシュは、前項で言及した盗みへの懲罰として頭領コザークによって金床を没収されたツィガーニであり、2回目の聞き取り調査におけるヴァダースィ・イシュトヴァーンとその妻ブンディ・イロナの証言によると、その件でダルドシュ夫婦はコザークに対して強い怒りを持っていた。また、コザーク側の請願に応じて実施された二回目の聞き取り調査では、調査を担当したミシュコルツ参事会の書記(jegyző/notarius)が、「ダルドシュ・ジグは妻とともに、[コザークに]怒っていたのか?それゆえに[前回の取調べで] 誓いを立ててコザーク・ヤーノシュに対して証言したのか」という質問項目を設定している²⁵³。これはおそらく、コザークの訴えの中にそのような指摘があったためと思われるが、それを受けて参事会もダルドシュ夫婦を、この聞き取り調査において、個人的な確執のためにコザークに不利になるような偽証を行ったと疑っていたのである。この一件からは、頭領の管轄範囲の人物が皆、彼に従うわけでも、その権威を背景になされた行動を認めているわけでもなかったということが窺える。あるいはこれも前出のように、1766年にオラー・ピシュタコとヴァダースィ・イシュトヴァーンが「下級判事」としてけんかの仲裁に入った際に、当事者た

²⁵⁰ BAZML TJ 4. köt., 580.

²⁵¹ BAZML Sp. XII. 378.

²⁵² ただし、最終的な判決文は残されていない。

²⁵³ BAZML Sp. XII. 378, 382.

ちは彼の制止を聞かず、ヴァダースィに暴行を加えた。このことから、ミシュコルツに居住するツィガーニたちがツィガーニの指導者層によって必ずしも統制されていたわけではなく、また指導者側も、その反抗を現場で抑止する有効な手段を持ち合わせていなかったということが見て取れる²⁵⁴。

次に、本章の検討時期において、頭領自身も時に問題行動を引き起こしていたということも指摘できる。これらもすべて先に述べた事例であるが、ヴァダースィ・イシュトヴァーンは 1752 年の判事在任時に、妻が行った罵りを止めず、自らもそれに加わっていた。また、1764 年の頭領在任時に、ウィーンの商人に暴行を加えた上、持ち物を奪っている。これらの行為に対しては参事会による懲罰が加えられており、前者においては判事の地位の剥奪が、後者には棒たたき 50 回が彼に宣告された²⁵⁵。コザークも前出のように、頭領在任中の 1765 年に、息子を使って他人の家のリンゴを盗ませるなど、素行不良で棒たたき 12 回の罰を受けている²⁵⁶。時折生じるこのような頭領のふるまいは、ツィガーニの間での秩序維持の機能を期待して頭領を承認していた参事会からすると、その期待を裏切るものだったと言える。

最後に、このような頭領の限界は、恐らく周囲の社会的変化によっても助長されていた。この後の議論を先取りすることとなるが、とりわけ 1760 年代以降、ツィガーニの「犯罪行為」への言及が『参事会議事録』や裁判記録においてそれ以前と比べて増加し始める。この現象は、全国レベルでのツィガーニの統制強化を受けて、ミシュコルツでも、ツィガーニの行動に向けられるまなざしが厳格化した結果と考えられる。これは、周囲がツィガーニの行動に対する許容度を変化させたことをも意味している。周囲の認識の変化を通じたこのようなツィガーニによる「犯罪」の増加という現象は、参事会が従来頭領に期待していたツィガーニの問題行動の抑制という機能を、頭領の能力という問題とは関係なく、この時期、相対的に低下させていたと見られる。

1767 年以前のみシュコルツにおけるツィガーニの「頭領」の機能に関して、以上の事例からは次のことが指摘できる。まず、頭領をはじめとしたツィガーニ指導者層は、その法的な廃止直前の時期まで、名目上存在していたのみならず、ある程度の実際的機能を有しており、またそれは周囲からも認められていたと考えられる。1765 年のコザーク・ヤーノシュによる所持品没収が、彼の指導下にあるツィガーニから「頭領として」行われたと認識されていたこと、また、1766 年のヴァダースィ・イシュトヴァーンによるけんかの仲裁が、参事会によって、彼が「下級判事」であることと関連付けられて語られていることは、その証左と見なしてよいだろう。万一、コザークの行為が私利私欲からの行いであり、ヴァダースィの行動が単なるけんかへの参加だったとしても、少なくとも周囲は彼らの行動を集団指導者としてのそれと理解・説明しえたということ自体から、この時期には「頭領」であることやそれに伴う機能が、統治権力や集団構成員にとって一定の意義を有していたことを読みとることができよう。

次に、頭領の活動に対する統治権力、特に市場町参事会の大きな存在感が見て取れる。参事会

²⁵⁴ BAZML TJ 5. köt., 349.

²⁵⁵ BAZML Sp. XII. 244; BAZML Sp. XIV. 293.; BAZML Sp. XV. 18.

²⁵⁶ BAZML TJ 5. köt., 252.

は、頭領選出の場を設け、ツィガーニたちによって選出された頭領を承認したばかりか、その指導者が期待にそぐわない行動をとった際には、その任を解くこともできた。とはいえ、少なくとも 1767 年までの時期には、ツィガーニ集団という枠組みそのものを解体することはなく、ある頭領の後には別のツィガーニの頭領が、同様の形で、集団に影響力を行使することを容認していた。また参事会は、頭領をはじめとした指導者層にツィガーニ集団内での治安維持を期待し、加えて県レベルの権力に属する県判事も、市場町の徴税人を介して、頭領にミシュコルツ内のツィガーニに対する徴税を命じることができた。以上から垣間見えてくるのは、ミシュコルツのツィガーニ「共同体」が、頭領を媒介として、その枠組みのまま市場町や県の統治実践の中に組み込まれていたという像である。それは逆に言えば、統治権力側がミシュコルツ内の統治実践の一部をツィガーニ集団の指導者に委ねていたということでもある。このように、1767 年以前のミシュコルツにおいては、市場町内の統治権力とツィガーニ集団の「頭領」、さらにツィガーニ集団の構成員の間で、集団の枠組みや頭領による統率の存在を前提とした関係が取り結ばれていた。ミシュコルツにおいても同時期の他の地域と同様に、「社団」的側面を有する集団としてのツィガーニと、それを体現する存在としての「頭領」という像が、史料から読み取れるのである。

とは言え、この時期の史料からは頭領の活動には限界が存在し、参事会の期待に沿うほどの成果はあがっていなかった可能性も示唆されている。いずれにしても、参事会の頭領に対する態度は、1767 年以降の流れの中で、決定的に変化して行く。

第 3 節 1767 年以降のミシュコルツにおける「頭領」の消滅

ハンガリー総督府令によってツィガーニの「頭領」が廃止された 1767 年末の政令はツィガーニの社団性の喪失=法的自律性の喪失を規定したという点において画期だったと言える。ミシュコルツの場合、以下に見るように、それ以降の時期に作成された参事会の史料では、ツィガーニの頭領やその他の指導的役職に関する言及が見られなくなっていく。それでは、その後、かつて頭領だった人物はどのように振る舞っていたのであろうか。また、ミシュコルツにおけるこのような頭領の「消滅」は、どのような背景を持っていたのだろうか。以下では、1767 年以降の統治権力側の史料において、かつてミシュコルツの頭領だった人物はどのように描写されたのかを確認した後、1767 年以降のミシュコルツ以外の地域の事例も踏まえつつ、ミシュコルツにおいて頭領の消滅が生じた理由を、「頭領」と参事会、あるいはツィガーニ「共同体」との関係性という地域的な要素から検討したい。

5-3-1 1767 年以降の「元・頭領」—ヴァダースィ・イシュトヴァーンの動向から—

以下では、1767 年以降のヴァダースィ・イシュトヴァーンに関する記録を「元・頭領」の例として取り上げ、頭領の法的廃止後の彼の振る舞いを検討したい。なお、彼を取り上げる理由としては、上述の 3 人の頭領経験者のうち、1767 年以降も史料上での言及が比較的多いということ

が挙げられる²⁵⁷。

1767 年以降の検討に入る前に、それ以前のヴァダースィ・イシュトヴァーンについて少し補足しておこう。繰り返しとなるが、ヴァダースィ・イシュトヴァーンは遅くとも 1761 年から 1764 年までの間にミシュコルツのツィガーニの頭領を務め、またその前後の時期にツィガーニの判事、下級判事など、その他の役職名とともに、史料中に現れる人物である。また、1752 年に罵倒によって、1764 年には暴行と略奪によって参事会から罰を受けていることをすでに触れた通りである。1764 年の事件と、彼が同年に頭領の地位から退いたこととの因果関係は明確ではないが²⁵⁸、その後ツィガーニ集団内での下級判事の役職を担っていたことを考慮すると、頭領ではなくなった後も、集団内での彼の影響力は依然ある程度は存在していたと考えられる。

さらに、1767 年以降も含めて、『参事会議事録』では、金品の貸し借りとの関連でヴァダースィの名が散見される。貸借のやり取りがあった相手には酒場経営者、鍛冶師、貴族の婦人なども含まれていることから、彼はツィガーニ以外の住民ともある程度交流がある、もっと言えば、借金ができる程度には信頼関係を築いている人物であったと考えられる。さらに言えば、1762 年の彼の父親の借金が問題となった事例では、その父親がヴァダースィ・シャームエルであることが言及されており、イシュトヴァーンは「頭領経験者の息子」という立場にあったことが分かる²⁵⁹。

次に、1767 以降のヴァダースィ・イシュトヴァーンの動向について、以下で検討していく。

まず、1767 年以降のヴァダースィ・イシュトヴァーンについて、参事会の史料中に最も多く見られる言及は、問題行動を理由にヴァダースィが参事会から罰を宣告されるというものである。例えば、頭領廃止から間もない 1769 年に、ツィガーニの仲間たちと夜中に騒いでいたことを理由に、参事会から罰せられている²⁶⁰。また、1783 年には、借金の取り立てにきた女性に対して暴力を振るったことに加え、ツィガーニたち同士で日常的に口論を行っていることが問題視され、棒たたき 24 回の刑を宣告されている²⁶¹。その際、参事会は、ヴァダースィ、ならびに別件で被告となったその息子シャームエルに対して、「無信仰に陥った人々(Istentelenségben merült Személyek)」という言葉を用いて非難を行っている。さらには、1785 年に義理の息子プキ・シャールドと孫を酔っぱらって殴り、「父の御心」を冒瀆する言葉を叫んだことから、棒たたき

²⁵⁷ 『参事会議事録』に現れる記録からは、ヴァダースィ・シャームエルは 1762 年までに死亡している。BAZML TJ 4. köt., 776. コザーク・ヤーノシュについては、少なくとも 1784 年まではミシュコルツ内で居住していたことがツィガーニ帳簿から確認できるが、1767 年以降その他の史料にその名が現れることは、ほとんどない。ICHIHARA Shimpei, “A cigányság területi mobilitása a 18. században a miskolci járás cigányösszeírásainak a tükrében”, 151-158.

²⁵⁸ TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 212; BAZML Sp. XV. 18. この事件の取り調べにおいて証言した酒場経営者は、ヴァダースィのことを頭領と呼んでいる。このことから、この裁判の時点ではヴァダースィは頭領の地位にあったこと、参事会やツィガーニ集団構成員以外のミシュコルツの住民にとっても彼が頭領であることは認識されていたことが伺える。

²⁵⁹ ヴァダースィ・イシュトヴァーンの関与した貸借については以下を参照。BAZML TJ 4. köt., 776; 5. köt., 83, 379; 6. köt., 195; 7. köt., 194; 9. köt., 38.

²⁶⁰ BAZML TJ 6., köt., 68.

²⁶¹ BAZML TJ 9., köt., 38.

15 回に処され²⁶²、あるいは、1788 年に息子ヤーノシュとともに橋の木材を盗んだことから、罰を受けている²⁶³。

参事会からの罰が課されるこのような問題行動、すなわち「犯罪行為」は、ヴァダースィやその家族に特有なものではなく、ミシュコルツのその他のツィガーニ、ないしはツィガーニ以外の住民たちによっても当時しばしば引き起こされたものであることは前提としておく必要があるだろう²⁶⁴。とはいえ、かつてヴァダースィが判事や下級判事であった時代に参事会の言説に見られた彼の行動への期待やその「職務怠慢」への叱責は、この時期にはもはや見られなくなっているという事実にはここでは注目しておきたい。

一方で、1787 年に、金を盗んだ嫌疑で投獄された息子やその他のツィガーニたちの釈放を求めて、ヴァダースィは他数名のツィガーニとともに請願を行っているが、それは聞き入れられ、結果として実際に彼の息子を含む数名が解放されている²⁶⁵。ここからは、参事会にとって問題と見なしうる上記のような行動を時に引き起こしながらも、ヴァダースィと参事会との間には、依然として交渉の余地が存在していたことを指摘できる。しかしこの件に関する記述の中では、彼がツィガーニを指導する地位にあったことへの言及はない。また、彼がこのような釈放要求を特に主導した人物である様子も見られない。さらに、その前年の 1786 年にも、ヴァダースィは、家を建てるために分与地の割譲を要求する請願を参事会に提出し、それも受け入れられている²⁶⁶。この請願のレトリックからも、彼と参事会との当時の関係の一端を読み説くことができる。この請願の中でヴァダースィは、自分がミシュコルツで生まれたこと、これまで 54 年間、軍事買い戻し税を支払ってきたこと、県とミシュコルツに仕える楽師であること、などに言及しつつ、「誠実に振る舞い、(…)道を踏み外すこともなかった」と自らについて語っている。すでに見たように、彼が市場町当局から何度か処罰されてきたことを想起すると、「誠実」で、「道を踏み外すこともなかった」、という語りは、いささか誇張であると言えるが、その点での事実の成否がここでの問題ではない。ここで注目すべきは、ミシュコルツと自らとのかかわりについて、生まれや納税期間の長さなど、過去に関する要素を含めて語りが展開される中で、「ヴァダースィが頭領であった」という過去については、この請願の中で全く言及されていない点である。このことは 2 通りに解釈することが可能だろう。つまり、1786 年時点のヴァダースィにとっては、かつてツィガーニの頭領であったという情報が、この参事会との交渉に有利に働く要素と見なえなかった、あるいは彼に代わって請願を作成した人物が、ヴァダースィが頭領であったという事実に意義を見出さなかった²⁶⁷、このいずれかの理由から、頭領としてのヴァダースィの過去は

²⁶² BAZML TJ 11., köt., 58.

²⁶³ BAZML TJ 14., köt., 69.

²⁶⁴ 例えば、以下を参照。NAGY Pál (szerk.), *Cigánypercek Magyarországon (1758-1787)*; STIPTA István és TÓTH Péter, “Miskolc igazgatásának és jogéletének jellegzetességei”, MT III. 2. köt., 725-730.

²⁶⁵ BAZML Sp. XIV. 145; BAZML TJ 13. köt., 231-232

²⁶⁶ BAZML TJ 12. köt., 336-337.

²⁶⁷ 当時の農村社会に属する人々の多くと同じく、ツィガーニ自身は文書作成能力をほとんど持っていなかったと考えられている。ミシュコルツにおいて、彼らに代わって請願を作成した主体については、いまだ不明な点が多いが、その他の地域の事例では、ツィガーニのために請願を作成したのは現地当局の書記 (jegyző) や教育者 (tanító) だったとされている。NAGY Pál, *A*

請願中に書きこまれなかった。このような可能性をここでは提起しておきたい。それは、かつて、頭領であることの強調が請願におけるレトリックとして用いられていたこととは対照的である。例えば、1738 年にノーグラード県に提出された請願では、県当局から移動の停止を命令されたツィガーニの郡頭領が、移動の継続を求める際に、自らが 30 年間、頭領の地位にあり、その間に県に損失を与えてこなかったという「実績」が語られている²⁶⁸。いずれにしても、この 1786 年の請願からは、かつてツィガーニの頭領であったという経歴が 1780 年代のミシュコルツの市場町参事会とこの都市の住民である一人のツィガーニとの交渉において大きな意味を持たなかったということを読みとることができるだろう。

このように、「元・頭領」はヴァダースィにしても、コザークにしても、1767 年以後、何らかの権限を有する人物として現れることはなくなる。彼らが引き続きミシュコルツのツィガーニの間で主導的な立場を保っていたかどうか、あるいは別の誰かが主導的な地位を有していたかどうかさえも、参事会によって作成された様々な史料からは読みとることができない。ここから、ミシュコルツ参事会は 1767 年以降、総督府のツィガーニ政令の方針と歩調を合わせていたと考えられる。また、その結果、この時期に、たとえ都市内に居住するツィガーニたちの間で一定のヒエラルキーが実際のところ存在していたとしても、ツィガーニについて記述を作成した参事会や周辺のその他の人々の側は、以前とは異なりそれに全くの注意を払わなくなっていたことが見えてくる。

5-3-2 1767 年以降の他地域における「頭領」

ミシュコルツで確認された以上の状況について、その直接の原因を、ツィガーニの定住化や慣習的な自律性の解体を押し進めるハンガリー総督府の方針に見ることは可能だろう。一方で、1767 年から数年経った時期のその他の地域の事例をも考慮した場合、ミシュコルツで生じた上記の状況の原因を、政令のみに求めてしまうこともまた不十分であることに気づくだろう。つまり、その他の地域の事例に目を向けると、1767 年以降の「頭領」の位置づけについて、ミシュコルツとは若干異なる状況が見えてくるのである。

まず確認しておきたいことは、問題となっている 1767 年の政令以後も、いくつかの地域では、頭領をはじめとした、ツィガーニの指導者の存続が確認できるということである。例えば、王国南西部のバラニャ県の市場町シクローシュを所有するバッチャーニ家の領主達は 1767 年以降もツィガーニたちの間に独自の判事が存在することを認めていた。1773 年に市場町内のツィガーニ集団との間で更新された賦役規定(Urbarialis Regulatio)では、「判事の選出、ならびにより良き秩序の維持のために必要なその他の諸規則は、この賦役規定に基づいて存続する(A Bíró választás, és egyéb a jobb rendnek meg tartására szükséges rendelkezések, az Urbarialis Regulatio szerint meg maradnak)」ことが言及されている²⁶⁹。ここからは、ツィガーニの判事の存在は「より良き秩序の

magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában, 13; TÓTH, István György, *Literacy and Written Culture in Early Modern Central Europe* (Budapest: Central European University Press, 2000).

²⁶⁸ Szomszád Andárs, “A nógrádi cigányság története az összeírások tükrében”, 162.

²⁶⁹ NAGY Pál (szerk.), *Források a siklósi cigány múltjából*, 92-96. ただし、その選出方法については

維持のために必要」である、という領主側の認識が、シクローシュでは 1767 年政令の存在にもかかわらず、それ以降も依然として継続していたことが読み取れる。

この事例を紹介したナジはシクローシュで確認できる 1767 年以降の頭領の存続を「例外的」と位置づけているが、少なくとも 1770 年代前半に限れば、そのような事例は一定程度ありえたのではないかと推察される。その根拠は、いくつかの県のツィガーニ帳簿に求められる。

1767 年に頭領が法的に廃止された後、ほどなくして、王国各地で頭領の存続の有無がツィガーニ帳簿を通じて把握されるようになっていく。1770 年代以降、ハンガリー総督府に提出されたツィガーニ帳簿では、登録されたツィガーニの従属先を問う質問が設定された。当初この質問は、その従属先として「土地の判事(judex localis)」と頭領のどちらかを選択する形式でなされたが、1780 年以降、単に土地の判事への従属の有無を問うものに変更される²⁷⁰。そして、少なくともその前者の質問形式の下では、頭領に従属すると答えたツィガーニは決してゼロではなかった。例えば、1775 年にペシュト県からハンガリー総督府に送付されたツィガーニ帳簿では、同県ヴァーツ郡(Váci járás)のセントラスロー(Szentlászló)で登録された 3 世帯、ならびにヘーヴィズ(Hévíz)で登録された 1 世帯の当該項目において、「領主に任命された頭領である(Vajda per dominium denominatus est)」、あるいは「頭領に従っている(Vajdae subjectus/Vajdae subest)」との記入がなされている²⁷¹。

1770 年代に頭領の活動が確認できるのはペシュト県に限った話ではない。王国西南部のザラ県(Zala vármegye)でも、1772 年、1773 年のツィガーニ帳簿において、県内の各地で、ツィガーニの頭領が存在していたことが確認できる。例えば、1772 年にチチョー村(Csicsó)、セントヤカブ村(Szentjakab)に居住していたツィガーニの家族は、村の判事の権威の下にあると回答すると同時に、市場町シュメグ(Sümeg)に自らの頭領がいると回答していた。また 1773 年の帳簿では、ナジカポルナク郡(Nagykapornaki járás)、タポルツァ郡(Tapolcai járás)において、村の判事に従属していない、あるいは特定の奉仕業務以外では従属していないと回答したツィガーニが複数名確認できる(ただし、彼らが頭領に従属していたかどうかはわからない)。さらにキシュカポルナク郡(Kiskapornaki járás)では、ウーイウドヴァル村(Újudvar)の 4 世帯が「頭領に従属している」と明示されている²⁷²。

一方で、頭領の存続は、県によって大きなばらつきがあったとも思われる。例えば、ミシュコルツ郡のツィガーニ帳簿では、1783/84 年後半にシャヨーラード(Sajólad)で登録されたロントー・マーチャーシュの納税額記入欄に税額の代わりに“Vajda”と記入されていることが確認できることを除いて、1770 年代、1780 年代のいずれの史料にも頭領や、彼に従うツィガーニへの言及は

明言されていない。

²⁷⁰ 例えば、MOL ARS 21. cs. 172.には、1779 年後半に作成された帳簿と 1780 年前半に作成された帳簿の 2 つが含まれており、両者の質問項目の変化が比較可能である。

²⁷¹ MOL ARS 5. cs. 71.

²⁷² KARDOS Ferenc (szerk.), „Veszedelemes habok között látszatik életünk forogni”: Források a zalai cigányság 18. századi történetéhez (Zalaegerszeg: Zala megyei levéltár, 2008), 127-128, 144-147, 152-153, 160-165, 188-189, 252-253.

確認できない²⁷³。

このような 1767 年以降も頭領に従属していたツィガーニたちは、一帳簿の記述が実態をそのまま反映していたのだとすれば一、見たところ地域ごとに登録されたツィガーニたちの中のごく少数でしかない。例えば上述のペシュト県の例では、129 世帯の中 4 世帯に過ぎない。しかし、たとえ少数であろうとも、頭領が存続していたことは事実であり、また、総督府も当時、このような少数の事例に対しても、厳しい態度で反応した。1775 年 11 月 16 日付でペシュト県に宛てた書状では、総督府は、当時最新の帳簿から抽出された現状の問題点 14 点のうち 1 点目、2 点目に、それぞれ「領主権力によって特別に任命されることを大いに禁じられているところのツィガーニの頭領が任命されていること (Vajdam tantopere prohibitum per Dominium specificie haud nominatum, denominatum haberi)」、「多くの者が、今日もなお、土地の判事ではなく、頭領に従属していること (Complures adhuc esse Vajdae, et non Judici Loci subjectos)」を割り当てている。そして、総督府は、優先的に修正、完了されるべき課題として「頭領を直ちに無効化する (Vajdae indilate cassentur)」こと、「頭領に従属するツィガーニたちが、土地の判事の下へ置かれる (hisque subjecti Judicibus localibus [...] subjiciantur)」ことなどを県に指示した²⁷⁴。この書状からは、たとえわずかな規模であっても、地域の領主が頭領を任命することや、ツィガーニたちが頭領に従属するという状態が、総督府にとって問題として強く意識されていたことを知ることができる²⁷⁵。

これらの、1767 年以降も存在した各地の頭領の実態やその背景には、いまだ十分な説明を与えることができない。しかし、少なくともこれらの事例から、1767 年を境にして、ハンガリー王国内のどの地域でもツィガーニの頭領の意義が一斉に失われたわけではないということは確認できたと言える。頭領の機能の廃止についても、地域ごとの差異が存在していたのである。

5-3-3 ミシュコルツにおける頭領の「消失」と地域的要素

それでは、ミシュコルツにおいて頭領の機能停止を導き出した地域的な要素とは何だったのだろうか。この問いに直接的に答える史料は存在していないが、1767 年までのミシュコルツで生じていたツィガーニと関わる状況からさしあたりの仮説を提示してみたい。

繰り返しとなるが、1767 年以後、ミシュコルツの史料から頭領に関する記述が消えてしまっ

²⁷³ MOL DZ. 36. Cs. 102. ツィガーニ帳簿では、免税措置が取られた人物の納税額記入欄に税額の代わりに税を徴収していない理由を記入するということが時折見られた(例えば、同じく 1783 年後半の帳簿のヴァダースイ・イシュトヴァーンとダル・ジグモンドの納税記入欄には、それぞれ、「哀れむべき者 (miserabilis)」、「哀れな老人 (miser senex)」と書き込まれており、おそらく貧困や傷病、老齢などの理由から彼らへの徴税が行われなかったものと理解できる)。このことを考慮すると、この記述はロントーが頭領であることを帳簿作成者が認識しており、かつその理由から彼が税を免除されていることを表現したものと理解できる。1780 年代に至っても、頭領の称号やその権利を認識し、承認する統治権力が存在しえたことをこの事例は示唆している。

²⁷⁴ MOL ARS 5. cs., 87.

²⁷⁵ 総督府のこのような態度の背景には、——領主権力による頭領の任命をも問題にしている点から考えると——ツィガーニの統制という関心の他にも、恐らく頭領を任命する権限を有する領主権力の制限という目的もあったのではないかと推察されるが、現時点では十分な根拠を示しつつの論証は不可能である。その点についてのより深い検討は今後の機会に譲りたい。

たことは、1767 年の政令をミシュコルツ参事会が受け入れた結果であったと考えることはほぼ間違いない。つまりミシュコルツには、総督府のこの政策に対する反発、あるいは受け入れがたい特段の理由がなかったということになる。では、その直前まで、「頭領」が一定程度機能していたにもかかわらず、ミシュコルツ参事会がこのような変更を受け入れるに至った条件とは何だったのだろうか。その一つはやはり、すでに指摘したように、「頭領」の機能の限界に起因するだろう。ある程度の機能を有し、それを実行していたとは言え、けんかの仲裁や徴税の失敗に見られるように、「頭領」が統制すべきツィガーニ「共同体」は、決して無条件に彼に従っていた訳ではなかった。そして頭領の側も、ひとたび彼らから反抗された場合、独力で問題を解決できず、上位の統治権力である参事会に訴えることもあった。加えて、「頭領」本人についても、常に参事会が望む通りに動くことが確約されているわけでもなく、自身が問題を引き起こすことすらあった。また、特に 1760 年代にツィガーニの行為に対するまなざしが厳格化するとともに、ツィガーニの「犯罪」が増加して行ったことは、参事会にすれば、頭領がツィガーニの統制に行き届く影響力が低下したものと映ったことだろう。このように見ると、頭領の機能は、慣習であるがゆえに参事会によって容認されていたものの、参事会の側は、少なくとも 1767 年の時点では、頭領の働きを期待通りと見なし、満足していたとは必ずしも言いきれないだろう。

別の観点からも説明が可能である。ツィガーニ「共同体」による請願が示すように、ミシュコルツでは、その他の地域の事例²⁷⁶とは異なり外部の統治権力との交渉の際に、頭領が前面に現れるわけではなく、「ミシュコルツのツィガーニ」という総体が、彼らを代表する言葉として用いられていた。このことは、頭領という称号を有していることが、ミシュコルツのツィガーニたち自身からも、その他の地域のツィガーニ共同体と比較して、対外的に大きな意味を付与されていたことを示している。ミシュコルツのツィガーニ「共同体」は、4 章でも指摘したように、そもそもその成り立ちから、特定家系の拡大ではなく、近隣の諸集落からばらばらに集まって形成されたものであると考えられるが、そのような人々の集まりであるがゆえに、——実際には頭領が「共同体」の自律性を法的に担保する機能を果たしていたとしても——、その構成員にとっての頭領の比重は人によってはそれほど大きなものと認識されておらず、そのためツィガーニの側からも、頭領の権限停止に抵抗が生じなかったということも考えられる。

最後に、県のツィガーニへの立ち位置も、ミシュコルツの状況に何らかの影響を与えたかもしれない。ミシュコルツが開催地となっていたボルショド県議会は、第 2 章で見たようにツィガーニによる県の境界侵犯を問題として捉えており、頭領の法的廃止を含むツィガーニの定住化・「同化」の政令を拒絶する理由は少なかつたと思われる。また、現状での確証はないが、シクローシュで 1767 年以降も領主の承認によってツィガーニがその自律性を維持できていたことを鑑みるに、当時のミシュコルツの領主がハンガリー財務局、つまり王権側の機関であったことも、ミシュコルツにおける頭領への言及の消滅に何らかの形で作用したと推察される。

以上の要素は、史料上にはっきりと明示されたものではないが、1767 年の政令が発布された

²⁷⁶ IVÁNYOSI-SZABÓ Tibor, “Adatok a Cigányok Kecskeméti Történetéhez (1596-1850)”, 50-52; SZOMSZÉD András, “A nógrádi cigányság története az összeírások tükrében”, 162, 186-187.

際、その内容を参事会、あるいはツィガーニたち自身が特に抵抗なく受け入れることにいくらかは影響を与えたと思われる。

小括

本章の議論をまとめたい。1767 年まではミシュコルツにおいてもツィガーニの「頭領」が史料上可視的な形で存在していた。そして、その機能に関しては、ツィガーニ集団内部や市場町参事会の側でも、その意義を認識し、基本的には「頭領」の役割を承認していたということが史料から伺える。

一方で総督府令によってハンガリー王国内での「頭領」の法的廃止が通達された 1767 年末以降には、ミシュコルツでは、史料上での頭領への言及は消え、かつて頭領であった人物に対しても、そのことを想起させる表現や描写はなされなくなる。これを政令の影響と捉えることは間違いではないが、1767 年以降の「頭領」に関して、ミシュコルツ以外のいくつかの地域ではその称号や機能の存続が見られていたことを考慮すると、ミシュコルツにおいて「頭領」に関する言説が消滅した背景を、法的な規定の存在のみから説明することもまた不十分と言えるだろう。そのため、地域的な事情を踏まえてその理由を考察した結果、1760 年代のミシュコルツにおいて確認しうる頭領の機能の限界などの諸要素が、ミシュコルツやツィガーニたちに、頭領の権限の停止を特に抵抗なく受け入れさせる条件として作用したのではないかと推察するに至った。

こうして、頭領の機能に代表されていた社団としてのツィガーニは、地域的に多少の差異はあるとしても、この 1767 年を境に解体を迫られていった。社団性を喪失し、法的単位としての意義を失いつつあったツィガーニたちは、彼らを別の社団へと再編することを目指す政策過程により本格的に組み込まれて行くことになる。それは、1760 年代から 1780 年代にかけて、ツィガーニたちの間では、社会的結合関係の組み換え、すなわち、周囲の住民との「同化」というプロセスとして端的に現れていくことになる。

第6章 18世紀後半のミシュコルツにおけるツィガーニの「同化」

導入

前章で取り上げた時期と前後するが、1760年代に総督府のツィガーニ政策が本格化したことを受けて、ツィガーニに対するまなざしは、徐々に変化して行く、それは何よりもツィガーニに関する記述の種類、数の豊富化によって示される。本章ではこうした史料を用いて、1760年代から1780年代末までの間に、ミシュコルツのツィガーニが経験した変化を分析し、地域的な事例を通じてツィガーニの社会的「同化」という現象について考察したい。

マリア・テレジア期に始まりヨーゼフ2世の治世まで続く、ハンガリー総督府によって主導されたツィガーニの「同化」政策は、その成否という点では、少なくとも20世紀後半以降、基本的には一致した評価がなされてきたように見える。つまり、ヨーゼフ2世のその他の改革の多くがそうであったように²⁷⁷、ほとんどの場合、「同化」は達成されず、政策は失敗に終わったというものである²⁷⁸。このような評価を下している比較的最近の実証研究には、市場町ケチケメートのツィガーニの「同化」について言及したイヴァーニョシュ=サボー・ティボルの研究がある。彼は、総督府の政策は失敗に終わったと評価しており、その実施期間にツィガーニの定住という現象が見られたとしても、それは政策の成果ではなく、より以前から続く自然な流れの帰結だと捉えている²⁷⁹。

しかし、一方で、近年では、政策が期待されたほどの成果が最終的に上がらなかったとしても、その過程で何が、どれほど変わったのかという観点からの評価も提出されている。例えば、トート・ペーテルは、様々な県の断片的な史料から、この時期においてもツィガーニの移動に関して言及する史料が多く残ることを指摘する一方、ツィガーニ帳簿を手掛かりにしつつ、このような目に見える動きとは別に、定住したツィガーニがこの時期に増加していることにも目を向ける

²⁷⁷ H. バラージュ、前掲書、308-318頁。

²⁷⁸ 邦訳や英語で出版されている文献の多くは管見の限り、基本的にこの立場を取っている。クローウェ、前掲書、131-133頁；フレーザー、前掲書、217頁；ハンコック、前掲書、86頁；CROWE, David M., “From Persecution to Pragmatism: The Habsburg Roma in the Eighteenth Century,” *Austrian History Yearbook*, Vol. 37 (New York, 2006), 99-120. ただし、大谷による最近の研究では19世紀末から20世紀初頭に出版されたドイツの百科事典『マイヤース百科事典』第5版(1897)、第6版(1908年)において、ヨーゼフ2世のツィガーニ政策が「大成功をおさめた」と評価されていたことが言及されている。大谷、前掲論文、7頁。また、ほぼ同時代のハンガリーの民族誌学者コヴァーチ・ヤーノシュは、18世紀当時の史料を用いてセグドのツィガーニについて記述した論文(1895年)において、ドゥプチュク曰く、「18世紀にすでに激しく同化し、順応したツィガーニの人々」のことを描き出していたと評されている。DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatások tükrében*, 55-57. このように19世紀末には、同化の失敗という評価はまだ一般的ではなかったと思われる。従来の研究における研究史整理も含めて、この評価があったことや、その転換点がいつであったかなどについては述べられない傾向にあるが、そのような問題についても、今後追求する必要があるだろう。

²⁷⁹ IVÁNYOSI-SZABÓ Tibor, “Adatok a Cigányok Kecskeméti Történetéhez (1596-1850)”, 28-32.

べきであると主張している²⁸⁰。トートは、特にそのようなツィガーニたちの定住の舞台として市場町を重要視し、ツィガーニ帳簿、県の報告書、旅行記などの史料を根拠に、ボルショド県の市場町ミシュコルツのツィガーニたちが 1770 年代以降、市場町社会に、職業、住居、服装などの点で高い程度で周囲に順応(*beilleszkedés*)=「同化」していたと評価した²⁸¹。また、ザラ県の史料を検討したカルドシュ・フェレンツは、1768 年から 1773 年のツィガーニ帳簿などの分析から、一連の政策の過程で、ハプスブルク君主やハンガリー総督府といったより上位の権力が望んだ形での文化的な「同化」は十分に達成されなかったものの、県内の小規模な村落では、18 世紀中に、時には中央の政令に反しつつ、ツィガーニと周囲との文化的違いを許容した上でツィガーニによる移動式の鍛冶仕事や、音楽演奏、馬など動物の売買、占いなどの芸能サービス活動、その他の季節労働を各村落の経済の中へ組み込んでいたことを明らかにした。その意味では、「同化」は生じなかったものの、ザラではツィガーニのジェッレール層への「統合」(*integrálás*)が実現していた、とする²⁸²。

あるいはナジは、このような政策によってツィガーニが周囲の社会に「統合」、あるいは「同化」される流れは進展したものの、それでも、文化的な規範やリズムが周囲と異なるツィガーニ集団は、その過程で、周囲のツィガーニ以外の人々との衝突を引き起こしたということを各地の事例を引用しつつ指摘している²⁸³。

近年進展したこのような研究は、政策を最終的な失敗・成功という次元で論じるととどまらず、政策の実施に伴うツィガーニの変化や社会への影響を具体的に見ていこうとする点で示唆的なものである。これらの研究では、裁判史料の発掘に注力したナジを除けば、主に帳簿史料から、豊富な情報が引き出されてきた。しかし、ツィガーニ帳簿の分析を中心とするアプローチでは、他方で帳簿の調査項目以外のことが見えづらいという欠点も生じる。その欠点を補完するために各地の行政関連史料も断片的に用いられてきたが、対象とする地域の限定がなされない場合も多く、特定の集落レベルにおけるツィガーニの「同化」を検討しようとする場合には、いまだ史料の精査が不十分である。

この問題は、ツィガーニをある程度周囲に順応させることに成功した都市と評価される傾向にあるミシュコルツの研究状況についても当てはまる。ミシュコルツにおけるツィガーニの順応=「同化」を根拠づけるためにトートが引用した 1783 年のボルショド県の報告書では、「ツィガーニたちが賢明にも、領主の下での、伝統的な農民の生活に、そして手工業での生活に適応した」こと、「ワインやたばこを買うために金を払っている」こと、そして彼らは「音楽演奏やその他の芸事を今後も実践する」という見通しなどが語られ、ツィガーニは誠実な生活を将来的に

²⁸⁰ TÓTH Péter, “Kóborlás és letelepedés (A magyarországi cigányok feudális kori történetéhez)”, *Borsodi levéltári évkönyv*, VII. (Miskolc, 1994), 7-30; idem, *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában*, 134-135.

²⁸¹ TÓTH Péter, “Cigányok Miskolcon”, 213-214.

²⁸² KARDOS Ferenc, “Integrációs és asszimilációs kérdés a 18. századi Zalában – egy zalai forráskötet kapcsán”, DEÁKY Zita és NAGY Pál, (szerk.), *A cigány kultúra történeti és néprajzi kutatása a kárpáti medencében*, 225-235.

²⁸³ NAGY PÁL “„Kicsinségemben elszakattam””, 320-338.

も維持するだろうとの評価がなされている²⁸⁴。この記述はツィガーニ帳簿の記録に基づいたものであるが、ミシュコルツそのものを名指ししているものではない。また、この報告書やツィガーニ帳簿がより上位の権力である総督府に提出するために作成されたものであるという性格上、帳簿作成者側が上位権力の望むような情報を強調している可能性も考慮する必要があるだろう。つまり、そこで書かれた内容はその他の史料との突合せを経て初めてその妥当性を測ることができるのである。同じく、トートがその主張の根拠とする 1790 年代に書かれたハンガリー出身のイエーナ大学学生ヤコブ・グラーツの旅行記における記述についても、そこで「同化」と関連付けて語られるのはあくまで楽師のツィガーニであるため、その評価がこの都市に暮らすツィガーニ全体に一般化可能なものであるかどうかは検討されていない²⁸⁵。また、トートの研究では、『参事会議事録』などの行政関連史料などを断片的に用いて、ツィガーニ個々人に関する帳簿のデータを補完することも試みられているが、同時期の『参事会議事録』の網羅的な調査やツィガーニを取り巻く状況との関連付けなどは行わなかったため、彼の見解は当時のミシュコルツのツィガーニの全体像を可能な限り把握した上で結論されたものとは言えない。とりわけ 1780 年代の史料に関しては帳簿データも含め、ほとんど利用されていない。そのため、少なくともトートの評価は、時間の上ではより長期の、そして数量的にはより多数、種類の上でより多様なデータによって、再検討された上で補強される必要がある。

幸い、従来用いられてきたツィガーニ帳簿に加え、『参事会議事録』、参事会の裁判関連文書や請願書などの史料群には、トートが用いた以上に豊富なツィガーニに関する記録が存在する。これらを用いれば、特に、1760 年代以降のミシュコルツ内におけるツィガーニの姿を、周囲との関わりのある方も含めてより具体的に再構成することが可能である。この時期にツィガーニたちが経験した状況は「同化」と呼びうるものだったのか。それは周囲との関わりに着目した場合、どのような形で立ち現われるものであったか。このような問題意識の下、以下の通り検討を行い

²⁸⁴ BAZML KJ 44. köt., 42; TÓTH Péter és BARSÍ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai*, 134.

²⁸⁵ 「(…)ツィガーニを文明化し、手工業、あるいは農耕業の習得を奨励し、このようにして彼らの生活を我々にとって耐えられるものにすることは不可能なのだろうか?というのも、ツィガーニは兵隊のキャリアに適しており、軍規にも順応しているからだ。もっと言うとツィガーニの同胞の中から、すでに多くのものが、本当にその人がツィガーニなのかと人々を困惑させるほどに、教養がある人たちとなっていたからである。彼らの黒い色も見たところ変化してしまっている。これに関連して、ミシュコルツのツィガーニに言及することが出来る。特に、音楽の才能を陶冶され、このことを通じて素晴らしい財産を手に入れた人々のことを語ろう。もっと言うと、彼らはしばしば華美に着飾り、快適に暮らし、良き家庭を持っている。
(…) 私は何度か、ミシュコルツのツィガーニが演奏しているのを聞いたことがある。彼らの音楽は聞くに値すると認めねばなるまい。各人は楽譜を見て演奏したわけではないが、これを演奏している人たちが学校で音楽を学んだわけではないということを聴衆が忘れてしまうほど、[その演奏は]素晴らしいかった。特にそれはハンガリー風のダンスで顕著だった。『哀愁(melankolikus)』という曲も技巧的で、これが最も強く彼らの持ち味が出た曲だった。ミシュコルツのツィガーニはこの都市で催されるすべてのパーティーや祝宴で演奏し、彼らは良い支払いを受けた。彼らは引っ張りだこになった。ここに、楽師のツィガーニに見出せる誇るべきものがある。その演奏技術への需要は彼らの服、飲食物、歩き方、話し方、他の人に対するあらゆる振る舞いととともに、その誇りの根拠となるものである。」 GLATZ, Jakob, *Egy magyar ember őszinte megjegyzései hazájáról néhány magyar vidéken tett uazása során* (Budapest: Balassi Kiadó, 2013), 100-101.

たい。

第1節では、ここで問題となる「同化」という概念について検討する。すでに、第2章において、総督府のツィガーニ政令などから、この時期に求められていた同化の内実が身分的な意味での「農奴化」であったことは指摘したが、その要件や基準については具体的な検討をしなかった。そこで、まずツィガーニ帳簿の質問項目から、ハンガリー総督府が求めているツィガーニの「同化」の要件がいかなるものであったかを整理し、加えて、ミシュコルツを対象とするツィガーニ帳簿のいくつかの項目に注目して、当地のツィガーニたちはその基準に照らして、どのように評価されえたのかを検討する。

第2節においては、帳簿からはミシュコルツのツィガーニ住民とその他の住民との関係の一端を、『参事会議事録』などの史料の内容分析、並びに統計的分析から明らかにする。

最後に、第3節では、当時のミシュコルツのツィガーニに関する記述の中で、最も多数を占めるものとして浮かび上がるツィガーニの「犯罪行為」の傾向を分析し、その結果を「同化」と関連付けて考察する。そうすることで18世紀後半にこの都市の中でミシュコルツのツィガーニたちと周囲の住民たちとの間で生じていた関係性や距離感がより明確となるだろう。

第1節 「書類上の同化」

6-1-1 「同化」の基準—ツィガーニ帳簿質問事項—

第2章でも見たように、ツィガーニの「同化」＝「農奴化」とは、ツィガーニの文化、慣習、道德観念、精神性なども含めた形で、その生活形態を周囲の人々、つまり身分的な意味での「農奴」と同じように変化させることであると語りうる²⁸⁶。あるいは序章でも触れたように、ナジはそれを、ツィガーニを取り巻く定住社会の人々が美德とする要素を、ツィガーニが身につけていくプロセスとして説明する²⁸⁷。その場合、例えば19世紀後半の「ハンガリー化」のように、ツィガーニたちが、必ずしも特定の民族の言語や文化的要素への同化を強要されているわけではないという点で、ここで問題となる「同化」は近代以降の「民族的同化」(＝「国民化」)とは異なっている²⁸⁸。では、ツィガーニの「同化」とは、具体的に何がどの程度変化することによって達成されると見なされていたのだろうか。以下では、ツィガーニ帳簿の質問項目から、それを探っていきたい。

1770年代以降、総督府への定期的提出が義務付けられたツィガーニ帳簿には、特定の質問項目が設定されていたが、その内容は時期によって、変化していく。提出の恒常化に先だって全国的に作成を要請された1768年の帳簿、提出が恒常化していく1770年代の帳簿、そして1780年

²⁸⁶ 例えば、KARDOS Ferenc, “Integrációs és asszimilációs kérdés a 18. századi Zalában – egy zalai forráskötet kapcsán”, DEÁKY Zita és NAGY Pál, (szerk.), *A cigány kultúra történeti és néprajzi kutatása a kárpáti medencében*, 228.

²⁸⁷ NAGY Pál, “A magyarországi cigányság története a 16 -19 században”, FORRAY R. Katalin (szerk.), *Ismeretek a Romológia az alapképzési szakhoz*, 37-55; idem, “„Gádzsósodás – cigányosodás.” Akkulturáció és parasztosodás a cigányok magyarországi történetében”, 21-22.

²⁸⁸ 19世紀後半の「ハンガリー化」については、ケヴェール、前掲書、240-253頁を参照。

代の帳簿の質問項目を検討することで、ツィガーニの「同化」の基準や要件が何に求められ、それがどのように変化して行ったのかを検討したい。

まず確認しておかなければならないのは、ボルショド県全体を対象とした 1768 年(より厳密には、1767/68 年)作成の帳簿の所在がこれまでのところ把握されていないということである。しかし、1768 年にミシュコルツのみを対象として作成された帳簿の存在は知られている²⁸⁹。恐らく、県全体を対象とする帳簿作成のために集落単位で予備的に作成された帳簿の一部だと考えられる。その調査項目には、家長の名前・年齢、その妻の名前・年齢、息子・娘の数、職種、宗派、雇用主/主人の 6 点が見られる。

同年に作成された帳簿の調査項目については、セペシュ(Szepes vármegye)、ゲメル、トルナの 3 県の帳簿を分析したハザグ・アーダームが、県ごとの調査項目が一致していたという指摘を行っている。確かに、その 3 県では登録地、世帯構成者のデータ(男性家長、女性配偶者の名前、子どもの名前と年齢)、職業、宗派、納税額の 7 点の調査項目が共通して確認できる。しかし、ミシュコルツの項目と比較した場合、登録地は含まないにしても、納税額欄の有無など若干の違いが見られる²⁹⁰。また、例えばボーディ・ジュジャンナが利用した同年のペシュト県の帳簿の調査項目に目を向けると、それは登録地、土地台帳上の法的地位(農奴かジェッレールか)、従属先の領主の名前、家長、妻、子どもの名前と年齢、宗派、職業から構成されていた。このことから、1768 年の帳簿では、帳簿ごとに家長や家族構成員名、職業、宗派など、共通の要素が見られ、項目が完全に一致する県も確認できるものの、地域によっては若干の異動も存在しているため、王国全土で統一された基準に基づいて調査がなされていたわけではないということが指摘できる。

1768 年の帳簿では、ミシュコルツの項目を含め、全体的に、定住の推進という方針を背景として、特定の集落とツィガーニの世帯とを結びつける形でツィガーニが分類されており、また職業、宗派の把握も行われていた。ツィガーニの特定の集落への登録はボルショド県では徴税との関連ですでに以前から行われていたが、その他の追加要素も踏まえると、一まだ厳密な統一見解は作り出されていなかったものの—1768 年の時点での統治権力にとって、あるべきツィガーニの姿とは、特定の土地で登録され、何らかの職業を営み、納税を行っており、また特定の信仰を有している人々、であったことが読み取れる。

1770 年代に入ると、調査項目はより増加していく。ボルショド県の 1774/75 年、並びに 1775/76 年の帳簿を見ると、以下の調査項目が確認できる²⁹¹。

①居住地 (Locus Mansionis)

② ツィガーニとその寡婦の姓名 (Nomen et Cognomen Zingari vel Zingaræ Viduæ)

③ どのような子供がいるか。どんな人数で、どんな年齢か (Habet ne Proles quales, quotve Numero et cujus ætatis)

²⁸⁹ BAZML Sp. XXI. X. 109.

²⁹⁰ HAZAG Ádám, “Cigányösszeírások statisztikai elemzése az északkelet-magyarországi régióban”, 805-806.

²⁹¹ BAZML IV. 501/b Sp. XI. I. 129.

- ④ これらの子どものしつけはどのようなものか。学習のため、そして何らかの手工業技術のために、どこかに引き渡されているのか。(Educatio harum quails? et an aliqua pro condiscendo et quali opificio tradita sit?)
- ⑤ 家々の連なりに隣り合って、家に住んでいるか。あるいは掘立小屋かテントに住んでいるのか。(Habitat ne in Domo juxta seriem, vel in Gazula, aut Tentorio?)
- ⑥ 農奴か。そしていかなる所有地を持っているか。あるいは家持ちジェッレールか、家なしジェッレールか。(Et ne Colonus, et quale Possessorium habens, vel Inquilinus, aut Subinquilinus?)
- ⑦ 家長自身やその妻、子どもはいかなる服装を利用しているのか。(Quali vestitu utitur ipse Pater, Uxor, et Proles ipsius?)
- ⑧ どのようにして生活を維持しているのか。あるいはどのような職業をどのように実施しているのか。(Qualiter vitam sustentat, et an aliquod opificium exercet, et quale?)
- ⑨ その土地の判事に従属しているのか。それとも誰か[ツィガーニの]頭領に従属しているのか?(Est ne locali Judici subjectus? vel vero alicui vajdae?)
- ⑩ 死んだ家畜の肉を食べているか。(Vescitur ne Carne peremptorum Pecorum, aut Pecundum?)
- ⑪ 馬の売買や馬の交換を実行しているか?(Exercet ne quaestum aut Cambia cum Equis?)
- ⑫ 領主の金庫に[家税を]、ならびに軍の金庫に[軍事買い戻し税を]どれほど支払っているか?(Contribuit ne, et quantum tam ad Militarem quam ad Domesticam Cassam?)

これらの質問と同様の 12 項目は 1773 年のザラ県のツィガーニ帳簿や 1775 年のペシュト県の帳簿でも確認されるため、恐らく、1770 年代には統一的な調査項目が各県の間で普及していたと考えられる²⁹²。

1770 年代の帳簿では、1768 年の帳簿でも見られた、登録地、世帯構成員の名前、職業などの項目に加えて、子どもの育て方、居住場所や居住形態、農奴身分における地位、服装、法的に従属する対象、食習慣、馬の利用、などに関する質問が加わっている²⁹³。このように、ツィガーニへの要請が、その生活のより広範な面に及ぶものとなっていることが見て取れる。その一方で、仕える主人や宗派に関する項目は見られなくなっている。

これらの調査項目から読み取れる統治権力にとってのあるべきツィガーニの姿とは、次のようなものだろう。つまり、特定の集落に住所を持ち、子どもを農民風/ハンガリー人風に育て、あるいは子どもに手工業技術の教育を受けさせ、家々の連なりの中で家屋に住み、農民風/ハンガリー人風の衣装をまとい、土地の判事に従属し、死んだ動物の肉を食べず、馬を利用しておらず、職業に従事しつつ、家税と軍事買い戻し税を支払っているツィガーニ、が望ましいものとされていた、ということになる。

1780 年になると、ハンガリー総督府は県側に新たな質問様式を配布し、その形式に従ってツ

²⁹² MOL 5. ARS cs. 71; KARDOS Ferenc (szerk.), „Veszedelem és habok között látszatik életünk forogni”, 131-132.

²⁹³ 子どもの養育や服装に関して、回答欄では、「農民風」、あるいは「ハンガリー人風」、そうでなければ「ツィガーニ風」といった記入がなされた。

ィガーニ帳簿を作成させるようになったが²⁹⁴、望ましいツィガーニ像をめぐる上述の傾向は、1780 年代に質問項目の形式変更が生じたのちも変わらず継続する。

1780 年代には、帳簿の形式は以下の質問項目で統一されるようになった²⁹⁵。

- ①居住地 (Locus Mansionis)
- ② ツィガーニの夫の姓名 (Nomina et Cognomina Zingarorum Uxoratorum)
- ③ ツィガーニの寡夫の姓名(Zingarorum Viduorum)
- ④ ツィガーニの寡婦の姓名(et Nomina et Cognomina Zingarorum Viduarum)
- ⑤～⑩ この人たちに子どもはいるか (Horum Plores Sunt)
- ⑤ 2 歳児以下 [少年／少女] (2rum Annorum et infra (Pueri/ Puellae))
- ⑥ 12 歳以下 [少年／少女] (12 Annorum et infra (Pueri/ Puellae))
- ⑦ 12 歳以上 [少年／少女] (12 Annorum et supra (Pueri/ Puella))
- ⑧ 家にとどまっている [少年／少女] (Domi manentes (Pueri/ Puellae))
- ⑨ 学校へ通っている [少年／少女] (Seholas Frequentates (Pueri/ Puellae))
- [⑩～⑮ 子どもの養育先]
- ⑩ 両親に受け入れられている [少年／少女] (A parentibus Accepti (Pueri/ Puellae))
- ⑪ 軍隊(Milites)
- ⑫ 楽師(Musici)
- ⑬ 職人(Opifices)
- ⑭ 奉公人(Servi)
- ⑮ 女性奉公人(Ancillae)
- ⑯～⑰ [どこに]住んでいるか(Habitant?)
- ⑯ 他の家々の連なりの中で(In Serie reliquarum Domorum)
- ⑰ 他の家々の連なりの外に(Extra Seriem reliquam Domorum)
- ⑱～㉑ 分与地持ちの農奴である(Coloni Sessionis)
- ⑱ 1 [完全分与地農奴]
- ⑲ 1/2 [2 分の 1 分与地農奴]
- ⑳ 1/4 [4 分の 1 分与地農奴]
- ㉑ 1/8 [8 分の 1 分与地農奴]
- ㉒ 家持ちジェッレールである(Inquilium)
- ㉓ 家なしジェッレールである(Subinquilium)
- ㉔ 服装は他の住民と一致したものを利用している (Vestitu aliis Incolis Conformi utuntur)
- ㉕ 服装は他の住民と異なるものを利用している(Vestitu Aliis Incolis differmi Utuntur)
- ㉖～㉙ [以下のことで]生活を維持している (Vitam sustentant)

²⁹⁴ BAZML Acta Politica XI. I 138.

²⁹⁵ MOL ADZ 32. cs. 45.

- ②⑥ 音楽で(Musica)
- ②⑦ 手工業で(Labore Fabrili)
- ②⑧ 手仕事[=日雇]で (Labore Manuali)
- ②⑨ 物乞いで(Mendicando)
- ③⑩ 土地の判事に従属している(Locali Judici subest)
- ③⑪ 土地の判事に従属していない(Locali Judici non Subest)
- ③⑫ 疫病で死んだ家畜の腐肉を食べてない(Non vescuntur lue peremptorum Pecorum carne)
- ③⑬ 食べている(Vescuntur)
- ③⑭ 馬で利益を得たり、交換したりしていない (Quaestum aut Cambium cum equis non exercent)
- ③⑮ そのようなことを実行している(Exercent)
- ③⑯~③⑰ 次の[税を]金庫へ支払っている (Contribuunt ad Cassam)
- ③⑱ 軍事買い戻し税(Bellicam)
- ③⑲ 家税(Domesticam)

これらの諸項目について、子どもの年齢や養育先、農奴としての財産状況、生計手段に関する項目をはじめとして、選択肢がより細分化したことを除けば、1770年代から大きな傾向の変化は認められない。ここでも、「同化」に求められる像は、1770年代と軌を一にしていたと言える。

つまり、特定の集落に住所を持ち、子どもを学校や軍隊、職業教育、奉公にやり、家々の連なりの中で、農奴、あるいはジェッレールとして居住し、周囲の住民と一致した衣装をまとい、土地の判事に従属し、死んだ動物の腐肉を食べず、馬を利用しておらず、何らかの職業に従事しつつ、家税と軍事買い戻し税を支払っていることが、ツィガーニに求められていたのだ。

6-1-2 ツィガーニ帳簿におけるミシュコルツのツィガーニのプロフィール

それでは、この基準にミシュコルツのツィガーニたちを照らし合わせた時、その生活状態はどのように評価できるだろうか。1774/75年から1783/84年前半の間に作成された8部の帳簿から、いくつかの調査項目を手掛かりに考えてみたい。なお、指導者への従属の問題に関しては、すでに5章で検討しているため、ここでは取り上げない。

まず、その生計手段を見てみたい。本章に至るまでも強調してきたように、ミシュコルツのツィガーニたちの主な生計手段は手工業、とりわけ鍛冶仕事をはじめとした金属加工業であった。表 6-1 を見る限り、その状況は18世紀後半に至っても基本的には変わらない。しかし、この時期に音楽演奏従事者の増加も確認できる。とりわけ1779/80年前半から1780/81年前半にかけて、楽師として登録されたツィガーニの数は急激に増加し、逆に手工業に従事者するツィガーニの数は激減している。この調査の時期に楽師が急激に増えた原因は特定できないが、一つ想定できるのは、ミシュコルツのツィガーニたちの中には「手工業と音楽演奏」、というように複数の生計活動を行う者がおり、そのような人々は調査の時々で従事していた活動を職業として回答していただろう、ということである。例えば、当該期の多くの帳簿で登録されているボーディ・

ジェルジは1774年時点では自らの職業を「農耕」と回答しているが、その後調査の度に、「手工業」、「手工業と音楽演奏」、「音楽演奏」など、異なる回答を行っている。彼ほどではないにしても、多くのミシュコルツのツィガーニが、当該期のいずれかの帳簿において、前後の年とは異なる職業とともに登録されている。その中で唯一、同じ職業で登録され続けたバゴシ・シャーンドルは楽師である。彼以外にも、「職業楽師」と見なせるような人々、つまり複数の職業で登録されているものの、ほとんどの帳簿で楽師として登録されている人々を、1770年代以降にミシュコルツに定着したツィガーニの中に見出すことができる²⁹⁶。酒場において楽師の需要がありえたことについては、すでに第4章でも触れたが、ミシュコルツの酒場は一違法なものも含めこの時期に大きく増加する²⁹⁷。このような事象も、ミシュコルツにおいて、この時期、音楽演奏への需要を拡大させていたと思われる²⁹⁸。

このように、ミシュコルツでこの時期のツィガーニに特徴的な生業は手工業と音楽演奏である。その他にも日雇業務、農耕、物乞いなどで生計を立てていた人々もいたが、全ての帳簿で確認できる訳ではない。ここまでも言及したように、ミシュコルツの住民の多くは農耕ではなく、むしろ手工業に従事する人々であった。その点では、ツィガーニの手工業への従事も、その他のミシュコルツ住民の日常の営みへの順応と捉えられるだろう。楽師については、ツィガーニ以外の従事者について十分な情報を得られていないが、この時期、酒場の増設、後に触れる募兵活動などを背景として、ミシュコルツ内で一定の需要が存在したと思われる。そのため楽師の活動も、周囲の需要に応じるものであったと言える。

続いて、子どもの養育方法に目を向けたい。これは1779年/80年前半と後半を境にして質問項目が変化しているため、他の項目と比べて通時的な変化を追い難いが、特に後半の調査項目からは、ツィガーニと社会との関係の一端を読み説くことも可能である。

表6-2でまとめたように、1779年/80年前半までの3部の帳簿では、子どもの育て方をツィガーニ風か、あるいは農民風、ないしはハンガリー人風かと問う形式で調査が行われた。1779年/80年前半の登録者数が、恐らく作成者側の記入漏れなどの理由から極端に減っているため、単純な比較は難しいが、ツィガーニの間でも元々過半数を占めていたハンガリー人風/農民風の養育形態が、ツィガーニたちの間でさらに受け入れられていったように見受けられる。

1779年/80年後半以降の調査項目は、ツィガーニの両親が子どもを誰かに預けているか、を問うものになる。ツィガーニの子どもを親元から引き離して「ハンガリー人風/農民風」の生活を身につけさせることを謳った1773年の政令の精神に則った項目であろう。ツィガーニの親からの子どもの引き離しは時には過激な暴力を伴って行われたことが知られている²⁹⁹。ただし、ミ

²⁹⁶ 例えばプキ・イシュトヴァーン、オルゴン・アンドラーシュなどがそれにあたる。

²⁹⁷ DOBROSSY István, *A miskolci vendégfogadó és a vendéglátás története (1745-1945)*, 15-24.

²⁹⁸ 同じく楽師の需要を増加させていたと見られる募兵活動と音楽演奏との関係は次節で触れる。

²⁹⁹ DEÁKY Zita, “Cigány gyermekek a családon kívül (a 18. századtól a 20. század első feléig)”, DEÁKY Zita és NAGY Pál (szerk.), *A cigány kultúra történeti és néprajzi kutatása a kárpáti medencében*, 165-179; NAGY Pál, “„Kicsinségemben elszakattam””, 320-338. この時期のツィガーニの子どもをめぐる従来の研究では、ナジにしても、デアーキイにしても、ボジョニイ県などで見られた親元から強制的に引き離された事例に大きく関心を集中させているが、そのような事例をその地域のどれほど

シュコルツの場合、学校、楽師、女性奉公人などの引受先が確認できるものの、ほとんどの子どもが親元で生活をしていた。しかし一方で、親元から学校に通う事例を2～6名、楽師の下へ通う事例を1～2名確認できるなど、親元にいることは、「ハンガリー人風/農民風」の養育の妨げに必ずしもなっていなかったようにも見える。また、総督府の政令では、子どもの預け先として手工業者、ギルドなどを想定している項目がしばしば見られるが、ミシュコルツでは職人に預けられた子どもは確認できない。これは、恐らく、ミシュコルツのツィガーニ自身がある程度手工業技術に通じており、子どもは親元でも技術習得が可能であったことも影響したと思われる。

以上のようにミシュコルツのツィガーニたちは、子どもの養育に関しては、多くの場合「農民風」/「ハンガリー人風」の育て方をするようになっていた。他方で、ほとんどの子どもは他の人々のところに職業訓練や奉公のために引き取られることはなく、親元で暮らしていた。これが意味するところを追求する材料は現時点では乏しいが、参照可能な史料を見る限りでは、このような状況下にあっても、恐らくこの都市のツィガーニたちのところでは、その他の地域で知られているように、子どもが親元から強制的に引き離されるという事態は生じていなかったように思われる³⁰⁰。また、ある者たちは子どもを学校へと通わせるなど「ハンガリー人風」の養育を行っていたことから、親元での暮らしを「同化」や順応に反するものと単純に見なすことは難しい。

最後に、表 6-3 から、その他の生活形態や生活習慣について確認しておきたい。

ツィガーニの居住形態については、その多くは小屋やテントではなく家屋に住んでいた³⁰¹。「家々の連なりの中」で暮らす人々が、ほとんどの帳簿で多数派を占めたが、1780/81 年後半の帳簿のみ、ツィガーニたちのほとんどは家々の連なりの外に居住しているという、あたかも調査項目を逆転させたかのような結果が生じている。4 章で見たように、1781 年から 1783 年の間にほとんどのツィガーニの居住地区は変化していないことから、1780/81 年前半から後半の間にツィガーニの居住地が大きく移動したとは考えづらい。もしこの記述が単なる間違いではないとしたら、この調査結果はツィガーニたちの居住領域は、帳簿作成者の見方次第で、どのようにも分類されえたということを示しているのかもしれない。そうであれば、ツィガーニの居住地区が、家々の連なりの内と外、どちらとも捉えられる市内域周縁部に位置していたことが、この帳簿作成者の判断に何らかの影響を与えたことだろう。

服装について、1770 年代には周囲と異なる、「惨めでボロボロな服装」がある程度確認される一方で、その後それが徐々に減少し、周囲と一致した服装を着る者が増加していったことが見て

のツィガーニが経験しえたのかについては十分論じなかった。子どもの強制的引き離しという問題が、その質的な部分で重要なテーマであることを全く否定しないが、今後はより包括的に数量データ分析を行い、ミシュコルツのような引き離しが生じなかった地域も視野に入れたより広い文脈で引き離しの強制という事例を評価する必要があるだろう。

³⁰⁰ 例えば、同じボルショド県のシャヨーケレストゥール村に住むツィガーニ女性は、自分が老齢の寡婦であることを理由に、息子や娘を農民に預けることからの免除を求める請願を県に提出しており、同県内でも引き離しがありえたことが窺える。NAGY Pál, “„Kicsinségemben elszakattam””, 333.

³⁰¹ ただし、1780 年代の『参事会議事録』の記述からは「ツィガーニの掘立小屋」についての言及も見られるため、全てのツィガーニ住民が家屋に居住していたと見ることはできない。BAZML TJ 10 köt., 235.

取れる。また食習慣としての腐肉食はミシュコルツのツィガーニには確認されておらず、また、馬の交換や馬を利用した商売についても、それを実行していると確定された者はいなかった。

以上から、ミシュコルツのツィガーニたちの生活が 1780 年代においても、1770 年代までのデータからトートが指摘したように、居住形態、服装、食生活などの点で、多くの場合周囲と一致していると帳簿作成者から判断されていたことが確認できた。また、子どもの育て方については、親元に多数の子どもが留まっていることへの評価を現時点ではまだ見定められないことは措くとしても、子どもを強制的に引き離されることなく、「ハンガリー風」の養育方法を採用していたと見られる家族の存在が窺える。生計手段についても、ミシュコルツでは一般的な手工業分野に多くが従事しており、また、この時期需要が増加していたであろう音楽演奏に恒常的に従事する者にも増加が見られる。

少なくとも以上の点からは、この帳簿に基づいて彼らの「同化」が進展しているとする評価も十分ありえるだろう。それはこの時期のボルショド県議会の県内のツィガーニへの評価ともつながる。しかし、作成時点によって、調査結果が大きく異なっている面を重視すると、帳簿の内容は作成者の認識如何でどのようにでも書きえたのではないかとの疑念は残る。そこで、これらの調査結果を補完するために、次節では、帳簿以外の行政、裁判関連史料から、この時期にミシュコルツ住民とツィガーニとの間の接触がどのような形でなされていたのかを検討したい。

第2節 行動上の「同化」

6-2-1 行政・裁判関連史料に見るミシュコルツのツィガーニの行動傾向

まず、ツィガーニに関して言及した『参事会議事録』、請願書、裁判関連文書の記述の内容を大まかに分類した表 6-4 の分析を通じて、この時期のツィガーニの行動傾向への一定の見通しを持っておきたい。ただし、ここで用いた史料の中には請願書など、ツィガーニ側の関心から作り出された史料も含まれているものの、その中心を占めるのは、参事会などの統治権力がツィガーニに対して何らかの関心を向けた際に記述されたものであることにも留意する必要がある。そのことを踏まえると、これらの史料から明らかとなるのは、ツィガーニの行動の全般的傾向というよりは、場としてのミシュコルツにおいて、ツィガーニたちが都市参事会をはじめとした周辺社会とどのような局面で接触を持ち、互いに関わる契機を有していたのか、という点に関する傾向ということになるだろう。また、分類にあたっては 1 事例につき 1 つの要素を抽出しているため、内容が複雑な事例になるほど、その事例の持つ多面性が表 6-4、6-5、6-6 には反映されなくなっている。そのような点については、個別事例の分析を行う次項 6-2-2 においてその内容を示すことで、少しでも多面性を踏まえた議論を展開したいと思う。

さて、1730 年代から 1790 年までの記述から作成した表 6-4 を一瞥した際に、非常に目立つ点として次の 2 つを指摘できる。すなわち、1750 年代までと比して、1760 年代以降のツィガーニに関する記述が大幅に増加しているということ、そして 1760 年代以降の記述の中でも、事例の半数以上(63.5%)が、ツィガーニによる「犯罪行為」と関係している、ということである。

この二つの現象の背景には、恐らく同様の原因が存在している。第2章で確認したように、ツィガーニの行動のいくらかは18世紀中葉の地域、県、国家の各レベルでの統治権力間のやり取りや法的整備を通じて、問題化され、取り締まりの対象として明確化されていくこととなった。このような雰囲気の中で1760年代に総督府主導のツィガーニ政令が登場したことを受けて、ミシュコルツでもツィガーニの行動に参事会がより一層の目を向けるようになったと考えられる。そしてそれは、結果として1760年代以降に、ミシュコルツにおけるツィガーニが「犯罪」と関連付けて語られるようになるという意味での「ツィガーニの犯罪化」を進展させるものとなった。表6-4で顕著に見て取れる現象はこのように解釈すべきだろう³⁰²。ツィガーニの「犯罪行為」に関するより詳しい分析は次節に譲るとして、ここでは、その他の要素に焦点を定めて分析したい。

「犯罪行為」以外の事例に関して、明確に指摘できることは、1780年代にその言及数が突出して高くなるということである。それは1760、70年代には約76%を占めた「犯罪行為」に関する言及を55.2%まで低下させるほどであった。より細分化した場合、土地の測量、住居の売買、分与地の獲得など都市内での居住に関する話題、借金や委託販売をめぐる生じた民事のトラブルに関する言及などが、1780年代のみならずその他の年代においても、比較的多く見られる。土地に関する言及の増加はミシュコルツでの定着傾向の進展を示していると思えるだろう。また、借金や委託販売については、ツィガーニとその他の住民の間で行われたものである場合、ツィガーニと周囲の人々との間の一定程度の信頼関係や距離感の近さを示すものとも言えるだろう。さらに、このようなやり取りがトラブルに発展したために『参事会議事録』に記録されたという側面を考慮すると、ツィガーニと周辺住民との間の業務委託や借金は、現存する記録以上に日常的に行われていた可能性は十分に考えられる。

6-2-2 ツィガーニとその他の住民の関係性

以下では、ツィガーニ帳簿の記録や表6-4からは見えてこないツィガーニの社会的結合関係の変化や周囲の住民との関係性を確認し、上述の見解を補強するために、個々の事例を具体的に検討していきたい。

まず、引き続き借金の話題に目を向ける。借金に関する事例は1760年代からすでに確認でき、その後、徐々に数を増やしていくが、その過程で変化して行った要素も存在する。1760年代に頭領を務めたヴァダースィ・イシュトヴァーンが当時周囲の住民から借金をしていたことはすでに第5章で述べたが、1760年代における借金関連の記述はこのヴァダースィの事例のみである³⁰³。しかし、1770年代以降、借金に関与するツィガーニはヴァダースィに限られなくな

³⁰² ただし、近世の犯罪史研究などですでに指摘されているように、前近代の裁判史料などから発生した犯罪すべてを数量的に正確に把握することは不可能である。そのため、本章で提示した数値もあくまで傾向を探る以上のものではないことはあらかじめ述べておく。池田利昭「中世後期・近世ドイツの犯罪史研究と「公的刑法の成立」—近年の動向から—」『史学雑誌』第114編第9号、60-84頁。

³⁰³ ヴァダースィ・イシュトヴァーンの関与した貸借については以下を参照。BAZML TJ 4. köt., 776; 5. köt., 83, 379; 6. köt., 195; 7. köt., 194; 9. köt., 38.

って行く³⁰⁴。また、借り手としてのみならず、1771年のグディ・アンドラーシュや1779年のバゴシ・シャーンドルなど、借金の貸し手としてもツィガーニの名が言及されるようになっていく³⁰⁵。時には、1782年のチェンケ・シャーラのように、総勢13名から約200フォリントの借金を負い、返済不能のため家と財産を売りに出した事例も見られるが(彼女の夫カッロー・ジェルジが財産状況に応じて当時支払っていた軍事買い戻し税は半年間で3フォリント、家税は1フォリント20クライツァールであった³⁰⁶)、それ以外の事例では、問題となる額は概してはるかに少ない³⁰⁷。ただし、参事会が借金問題について取り扱ったのは、要求額の確定までであり、その後、借金の返済がなされたかについては多くの事例ではっきりとしない。

次に、ツィガーニへの委託販売について目を向けよう。このような事例に関わるのは基本的にツィガーニの女性たちだった。これに関する案件は1760年代後半ごろから『参事会議事録』で確認できるが、そこで生じた問題の基本的な構図についてはミシュコルツ参事会が主導した民事裁判の判決文などから次のようにまとめられる。農民の妻、あるいは貴族の妻、あるいは農民男性など、その都度の依頼人たちは、自身の所有する衣服(コート、マント、スカート)、装飾品(スカーフ、ハンカチ)などの転売をツィガーニ女性たちに依頼したが、彼女らは、売り上げをごまかす、あるいは売り上げ全額を使いこむ、依頼人に売り上げを渡すことを拒むなどの態度を示したことで紛争に発展した。その後、依頼人の訴えを受けたミシュコルツ参事会が仲裁に入り、本来依頼人が受け取るべきであった金額を払い戻すように、ツィガーニ女性たちに宣告する³⁰⁸。委託販売をめぐる問題はこのように進展していった。時には払い戻しが執行されたことへの言及も見出せるが、多くの場合は払い戻しが達成されたかどうかは不明である。

この委託販売は、ブンディ・イロナ、グディの妻(ヴァーラディ・エーヴァ)、シロキの妻(コザーク・ジュジャンナ)、バゴシの妻(イヴォーク・マーリア)ら、時々複数の女性によって担われており、その言及の頻度から考えると、この仕事はツィガーニ女性がミシュコルツにおいて合法的に一、時にはごまかしという非合法的な手段も用いつつ一稼ぎを得る手段として重要なものだったと考えられる³⁰⁹。なおツィガーニ男性の場合も、鍛冶仕事において修理を依頼された品を質に入れて利益を得ていたことが問題となった事例が確認できる³¹⁰。ナジによれば、ツィガーニの特徴とされる「周辺環境の利用」に基づく生活形態は、ツィガーニがその心性や価値規範を維持

³⁰⁴ 例えば、BAZML TJ 6. köt., 574, 7. köt, 337.

³⁰⁵ BAZML TJ 6. köt., 281; BAZML TJ 7. köt., 529; BAZML TJ 14. köt., 175.

³⁰⁶ MOL ADZ 36. cs. 102.

³⁰⁷ BAZML TJ 8. köt., 11-12, 21-22.

³⁰⁸ BAZML TJ 5. köt., 556; BAZML TJ 6. köt., 166; BAZML TJ 7. köt., 128-129; BAZML TJ 9. köt., 179; BAZML TJ 14. köt., 67.

³⁰⁹ 従来の研究ではツィガーニ女性に見られた生計手段として予言や占い、魔術の実践を、あるいはそれ以外では子連れのもの乞い行為や売春などを強調する傾向があるが、住民との距離がより近い場においては委託販売を介して利益を上げるこのようなやり方もありえたことにも目が向けられるべきだろう。TÓTH Péter, “A varázsló cigány asszony a XVIII. században”, *Borsod-Abaúj-Zemplén megyei Levéltár Évkönyve*, XII-XIII. (Miskolc, 2005), 61-68; Nagy Pál, “A magyarországi cigányság története a 16-19 században”, Forray R. Katalin (szerk.), *Ismeretek a Romológia az alapképzési szakhoz*, 45.

³¹⁰ BAZML TJ 10. köt, 307-308.

したまま定住的生活に移行した場合、頻繁な借金などの形を取って現れるというのが³¹¹、このような、委託販売に際して必要以上の利益を上げる手法も、同様に「周辺利用」的と見なすことができよう。しかしいずれにしても、このような形で住民たちから利益を引き出すには、ツィガーニに依頼しても問題ないという住民側の信頼をある程度獲得していなければならないため、少なくとも依頼前の段階では、住民とツィガーニたちの間に一定の交流が存在していたと思われる。

次に、犯罪カテゴリーに分類されている事例にも言及しつつ、この時期にツィガーニたちの社会的結合関係が新たに組み直されていたことについて考えたい。すでに述べたように、1760年代までの段階では、ツィガーニたちの間の社会的結合関係がある程度確認できる一方で、参事会などの統治権力との関わりを除けば、周囲の住民との関係については、あまり明確に見えて来なかった。しかし、特に1780年代の記述において、ミシュコルツのツィガーニの社会的結合関係に新たな展開を見ることができる。一つは街区組織への編入である。

第5章で確認したように、1767年までのミシュコルツのツィガーニ「共同体」は、頭領をその先頭に置くという形式の下、その他の住民であれば街区単位で機能していたはずの徴税などの枠組みとして、街区を超えた形で成立していた。それまでに、街区単位で編成されていた共同奉仕など、公共活動への参加枠組みとしてもツィガーニ「共同体」が機能していたかどうかは分からない。1760年代まで、ツィガーニたちがミシュコルツ内の共同奉仕に参加していた痕跡が発見されていないためである。しかし、頭領制度の解体の後、公共の活動に参加するツィガーニたちの姿を確認できるようになる。1783年にツィガーニのブダイ・マーチャーシュが罵詈雑言を吐いて問題となった時、彼はウーイラキ・アンドラーシュ、ヴァーラディ・イシュトヴァーンなる人物たちとともに、夜警業務に従事していた³¹²。すでに触れたように夜警は街区ごとに持ち回りで担当されるものであり、また、レーミアシュの編纂した「煙突登録簿」によると彼ら3名は1783年の調査でメツジェシュアヤの川沿い(ヴィーズケズ)にてその住居を登録されている³¹³。ブダイとともに夜警に携わっていた人々については、ウーイラキ(Újlaki)という名が「新住民(ウーイラコシュ)(Új Lakos)」を彷彿とさせるものの、少なくとも両方ともツィガーニ帳簿には登録されていないため、ツィガーニと見なされた人々ではないと考えられる。つまりブダイはヴィーズケズ街区の一員として、同街区のその他の住民とともに夜警業務に携わっていたと見ることができるのである。また1785年に、ツィガーニ、オラー(=ヴァダーズィ)・イシュトヴァーンの妻(ブンディ・イロナ)が街区長ジェルジェイ・ヤーノシュの妻の頬をたたくという事件が発生したが、その時2人はミシュコルツに駐留する兵士のために枕を運ぶ業務に従事していた。レーミアシュの編纂資料からは、残念ながらこの街区長ジェルジェイと全く一致する名を発見できないが、「壺焼き人のジェルジェイ(Györgyei Fazekas)」なる人物がウーイヴァーロシュのペツェ川沿いに住んでいたことが分かっている。ヴァダーズィが住んでいたファービアーン通りの北の外れと、当時は明確な通りという形を取っていなかったウーイヴァーロシュのペツェ川

³¹¹ Nagy Pál, “A magyarországi cigányság története a 16 -19 században”, Forray R. Katalin (szerk.), *Ismeretek a Romológia az alapképzési szakhoz*, 44.

³¹² BAZML TJ 9. köt., 139.

³¹³ RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma*, CD melléklet, UJ_3 1783.

沿いは東西につながっているため、ブンディもこのあたり一帯を含む街区の共同奉仕としてこの業務に参加していた可能性がある³¹⁴。このように 1780 年代には街区の業務と思われる作業に携わるツィガーニたちの姿が見られるようになっていく。

一方で、街区以外の論理によって組織された公共業務にも、ツィガーニたちは参加していたと思われる。それは軍隊の募兵活動(Verbuválás)である。18 世紀のハンガリー王国では、徴兵が行われる際に、対象者を軍隊に誘い込むために、酒や踊り、音楽などの娯楽を提供していたことが知られている³¹⁵。そしてその活動の中で、ツィガーニの楽師は一定の役割を果たしていたとされる³¹⁶。ミシュコルツでも、1776 年ごろから酒場での募兵活動の痕跡が確認されているが、1778 年の請願からはボルショド県では特にミシュコルツのツィガーニが募兵活動に奉仕として参加しており、ツィガーニたちはそれを大きな負担と感じていたことが明らかとなる³¹⁷。また、すでに第 5 章で言及したように 1781 年にはヴァダースィ・コズィと名乗るツィガーニが音楽演奏奉仕の軽減を求めて県に請願を行っている。このように少なくとも 1770 年代後半から 1780 年代前半のミシュコルツでは、募兵用の音楽演奏という公共奉仕のために楽師の需要が高まっていた。このような場で活動しえた楽師がミシュコルツにどれほどいたのか定かではないが、そこには楽師のツィガーニも加わっていた。上述の 1778 年の請願からは、ボルショド県で居住するツィガーニの中でも、特にミシュコルツのツィガーニに多くの負担が課されているとのツィガーニたちの認識が読み取れる³¹⁸。

³¹⁴ BAZML TJ 11. köt., 27.

³¹⁵ HÖGYE István, “Verbuválás Zemplénben a XVIII. században”, *A Miskolci Herman Ottó múzeum Évkönyve*, XXXII. (Miskolc, 1994), 505-511. また、同時期のオーストリア諸邦においても同様の手法で徴兵が行われていたことが知られている。岩崎周一「近世のハプスブルク君主国における軍隊と兵士」『京都産業大学論集 社会科学系列』30 号、2013 年、131-132 頁。

³¹⁶ 横井雅子「募兵から舞踏・音楽へ—ハンガリー音楽を彩ったヴェルブンコシュが成立するまで—」『音楽研究：大学院研究年報』1998 年、202-178 頁; SÁROSI Bálint, *Cigányzene...* (Budapest: Gondolat, 1971), 80-108.

³¹⁷ 「高貴なる県へ。我々が慈悲深き良きご主人様方へ、保護者様方へ

我々の哀れな運命を、(…)旦那様方のところでお知らせします。貴族県の慈悲部深きご条例に基づいて生じた、軍隊の募兵が始まって以来、夜も昼もいつでも我々は学んだ音楽で懸命に、そして忠実なる心で奉仕してまいりましたし、今この時も奉仕しております。この予定のぎっしり詰まった奉仕のために、我々はその他の生計のための活動から引き離され、食料を絶えず手に入れるという機会も奪われてしまいましたし、軍事買い戻し税分の金を得るのにもふさわしくない状態になってしまいました。このため、我々はいやしくも高貴なる県に以下のように請願いたします。これまで我々が忠実になした奉仕に慈悲深きご配慮をいただき、我々を軍事買い戻し税から、ほんのいくらかの部分であっても、ご慈悲に基づいて、快く取り除き、解放していただけないでしょうか。

そうして、今後、ミシュコルツのみならず、この高貴なる県の中に位置し、見つけることのできるより多くの土地に住む新ハンガリー人にも、これまでは我々のみによってなされてきたこの喜ばしき奉仕を、順番に行うように、快くお命じになっていただけないでしょうか。

貴顕にして高貴なる県のお優しきご慈悲へ、十全なる信頼をもって寄り添いつつ、我々はあらゆる尊敬の念でもって、貴顕にして高貴なる県の卑しき下僕であり続けます。

軍隊兵舎にて忠実に奉仕する楽師の新ハンガリー人たち」BAZML Acta Politica III. I. 1767.

³¹⁸ なお、前節で見た、1780 年前後のツィガーニ帳簿においてツィガーニの音楽演奏従事者が一時的に大量に登録されていたという事実は、この業務となんらかの関係があるのかもしれない。

最後に、紛争解決の在り方として、市場町の司法制度を利用するツィガーニが増加したことも指摘できる。第5章でも触れたように、ミシュコルツでは頭領の司法権を保証する具体的な条例が存在したわけではない。しかし、断片的な事実から、恐らくその他の地域と同様に、ツィガーニのみに関わる場合は頭領の司法、執行権が多少は機能していたと考えられる。それでも1767年以前にも、ミシュコルツ参事会がツィガーニのみの関わる事件を裁いた事例や、ツィガーニたちが参事会の法廷に訴えて紛争解決を図った事例は確認できる。ただし前者は、見たところ、流血の伴う激しい暴行など被害の重大な行為や、夜間の罵り合いなど公共の秩序を乱すと判断された場合に限定されている³¹⁹。そして、後者、つまりツィガーニ同士の紛争解決を目的とした参事会への請願は、偶然かもしれないが、1767年以前には、当時の頭領(コザーク・ヤーノシュ)、ないしは頭領の身内(ヴァダースィ・イシュトヴァーンの妻ブンディ・イロナ)が一方の当事者として関与している紛争においてのみ生じている³²⁰。頭領やその身内と対立する側が請願を提出した場合は、この請願を頭領による身びいきの裁定を避けようとした紛争当事者の戦略と捉えることもできるだろうし、あるいは頭領やその縁者が請願を提出した場合は、紛争における頭領の裁定により上位の権力からのお墨付きを付与しようとした結果とも取れるだろう。これらにしても推測以上のことは語れないが、いずれにしても頭領の法的廃止後、そのような場合を除いても、ツィガーニ同士の紛争が参事会にて取り扱われるようになり、また、ツィガーニたちも、以前は請願の対象としなかった案件を参事会に持ち込むようになっていく。

例えば、1775年に参事会は、オラー・ペシュタ(=ヴァダースィ・イシュトヴァーン)とバゴシ・シャーンドルとの間に生じた借金をめぐって、その金額を確定させるための仲介を行っている³²¹。それまでもツィガーニの借金に関する事案が参事会において扱われることはあったものの、ツィガーニ同士での借金について扱った記録はこれが初めてだった。あるいは、家庭を顧みずに別の女性と放埒に暮らす夫をどうにかするようと、「新住民」の妻が参事会に請願を提出した事例³²²や、ツィガーニ同士の仕事において発生したトラブルの解決を当事者双方が請願を通じ

しかし、十分な掘り下げの見通しは現時点では立っていない。

³¹⁹ 例えば、BAZML TJ 5 köt., 254, 446.

³²⁰ BAZML Sp. XII. 243, 244, 378, 382; NAGY Pál (szerk.), *Cigányperek Magyarországon. II rész: Korai perek (1715-1758)*, 107; idem (szerk.), *Cigányperek Magyarországon (1758-1787)*, 122-125.

³²¹ BAZML TJ, 7. köt., 194.

³²² 「誉れ高き判事様。お優しきわが保護者様!

(…)わが夫、シロキ・ジェルジは5年前から、私が妻として婚約をして以来、——私が不満に思っていることですが——、役立たずで、悪い人たちと一緒に付き合うことや、この人たちのために稼ぎを浪費することをやめず、この3年前にも、ある少女と逃げていき、信じられないことに、[私を]子供とともに、負担のある状態の中に見捨てていきました。最近でも、今年の1月1日から自分の家で働くことを望んでいません。自身は鍛冶仕事のために必要とされるあらゆる道具を持っているにもかかわらず、です。単に、次の理由から、夫はその兄のところで働いています。つまり、今、新たに関係を結んだトランペット吹き之女と、より淫らに密通できるように、逃げようとしているのです。私と夫から生まれた2人の養育されていない子供たちの生活のために、夫はその稼ぎから1クライツァールも渡しはしません。そうではなく、あの先に申し上げた人[=トランペット吹き之女]と夜も昼も一緒にいて、金を浪費し、酒を飲んでいきます。もっと言うと私のところにやってきました。このことはすべての通りで証言されます。(…)これらに関して、いやしくも懇願いたします。私の夫は、すでに酒場や、そのほかの場所で、繰り返し借

て参事会に依頼する事例³²³なども見られた。ここからは、日常的に発生する様々な紛争の調停に参事会を利用しようとしたツィガーニたちの姿勢が窺える。

以上の検討から、この時期に周囲の住民との差異や距離を完全になくすほどの変化はなかったものの、彼らとの接触を通じて互いの距離感を以前以上に縮めて行ったツィガーニたちの姿が見て取れる。それは、周囲の住民からの転売の委託や借金の機会の増加など、社会的つながりの再編という形を取って現れた。また、ツィガーニたちが頭領の法的廃止以降、街区制度や司法制度など、ツィガーニ「共同体」に付随していた制度とは異なるミシュコルツ内の諸制度に組み込まれて行った様子も確認できる。1760年代から1780年代にかけて、ツィガーニたちの間で行動上の「同化」が進展し、それと同時に、制度上での「同化」が生じつつあったことも見出せる。

金をして、逃げようと決心し、彼がかつて逃げたときに、家を奪われてしまったように、再び、夫の借金と引きかえに私の家が奪われてしまわないために、家を担保に入れました。そのため、このような私の夫を法廷へ召喚し、このような不法な行いについて、誉れ高き判事様がお叱りいただき、夫のなすべき義務を快くご提示いただきますように。

今後も、誉れ高き判事様の価値もなく、卑しき奉公人のままでおります。

新住民コザーク・ジュジャンナ ミシュコルツにて、1786年6月13日」BAZML Sp. IX. 439.

³²³「高貴なる旦那様

高貴なる参事会の前にて、次のことについて卑しき請願を通じて懇願いたします。

先週金曜日にシロキ・イシュトヴァーンが、日雇仕事で私を彼のために森に炭焼きに行かせようと、私のところへやってきました。私はそれにこう答えました。すでに他の人のために[炭焼きを]すると約束しているのだ、と。シロキはそれに対して、自分も金を払っているのだから、日雇仕事をしろ、と言いました。彼が支払ったということは事実です。私はこう言いました。行けばいいんだろ。この袋も持っていくぞ、と。この時シロキは私に何も言いませんでした。

炭を持ち帰った時、袋の中の炭を降ろしたかったのですが、シロキ・イシュトヴァーンはそれを許さず、こう言いました。ツィガーニ野郎、後で払うよ。さらに、頭も殴ったのです。このことを車夫も証明してくれます。

高貴なる判事様へ、いやしくも請願をいたします。快く、私もこの件を調停し、シロキ・イシュトヴァーンに警告をお与えくださいますように。

その慈悲と引き換えに私は生き、死にます。

高貴なる参事会の卑しき奉公人 ダルドシュ・ヤーノシュ [1785年某日]

「高貴なる旦那様

高貴なる参事会の前にて、次のことについて卑しき請願を通じて懇願いたします。

先週金曜日に私はダルドシュ・ヤーノシュに、一日4ガラシュで、森で炭を焼かせ、2日分の日雇料を支払いました。炭を持って、町のはずれまで来たときに、ダルドシュは車夫に語りかけながら、こう言いました。お前さん、止まってくれ。この袋の炭を降ろさせてくれ。それに私は言いました。お前さんには2日分の日雇賃を払っているっていうのに、なぜ炭を降ろすのか、と。袋は1ケベル(約125リットル)ではなく、6ヴェーカ(約180リットル)でした。この時、ダルドシュは2方向に袋を引き裂き、中から炭が全部散らばり出てしまいました。

高貴なる参事会へ、いやしくも請願をいたします。快く、我々のこの件を調停し、我々の間に判決をなしてくださいますように。

そのお優しき善行を高貴なる判事様へ感謝するときには、高貴なる参事会の卑しき奉公人です。シロキ・イシュトヴァーン [1785年某日]」BAZML Sp. IX. 337.

第3節 「同化」と「犯罪」

最後に第3節において、ツィガーニに関して『参事会議事録』などの記述で最も言及されたその「犯罪行為」の分析を通じて、ツィガーニの「同化」を考えてみたい。

ここで本研究における「犯罪行為(bűnözés)」、ないしは「犯罪(bűn)」の含意するところを明らかにしておきたい。これらの概念は、当時ミシュコルツにおける司法業務を運営していた参事会の法廷において裁かれ、刑事罰(büntetés)を宣告された行為のことを指す。またその際、借金の返済や経済的損失の賠償など、当事者間の紛争の調停を目的とした民事的な案件は含めない。

ところで、社会学者ドゥプチュクが指摘しているように、ハンガリーにおいて「ツィガーニの犯罪的性向」めぐる言説は古くから存在しており、現在に至るまで繰り返されてきた。すでに第2章などで確認したように、18世紀においても、ツィガーニを問題化する際、彼らは盗みなどの「犯罪行為」と結び付けられて語られていたことが分かっている。しかしドゥプチュクの指摘するところでは、そのような認識は全体的な視野を欠いたものであり、例えば19世紀末以降においては、実証的な調査データに基づけばしばしば覆されうるものだった。また、統計データがこの主張に利するよう見える場合でも、誰がツィガーニと見なされたのか、あるいはその他のカテゴリーとの比率の問題などにも目を光らせる必要性をドゥプチュクは説いている³²⁴。本章第2節で指摘したように、1760年代以降、70・80年代には、程度の差はあれ、ミシュコルツでは、「ツィガーニの犯罪」に関する言及の増加が顕著に見られ、「ツィガーニの犯罪化」と呼ぶ現象が生じていた。しかし、ドゥプチュクのような構築主義的視点に立てば、18世紀後半のミシュコルツのツィガーニの行動に占める「犯罪行為」の比率の高さは、すでに上で指摘したように、ツィガーニの「犯罪的性向」を証明するものではなく、むしろ、彼らを取り巻く社会的なまなざしがツィガーニに関わる事象のうち、特にその「犯罪行為」に目を向ける傾向にあったことを示すものと捉えるべきであろう。また、ツィガーニの「同化」を問う本章においては、このような犯罪行為を「自明の犯罪性を帯びた行為」としてではなく、ナジのように、互いに規範の異なるツィガーニと周囲との衝突・紛争の結果であると捉え、それを通じて見えてくる両者の関係性に目を向ける姿勢が重要となるだろう。このまなざしを読み説き、18世紀後半において、周囲から問題化され、処罰の対象として捉えられたツィガーニたちが、史料上にどのように表出し、またその表徴はどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのかを問うことは、そして、このような外部の視点に規定された史料の中にあっても垣間見えるツィガーニの日常的な生活の断片を捉えていくことは、ツィガーニと周辺社会との関係性やその変化を読みとることの一助となるだろう。ツィガーニの「犯罪行為」を通じてツィガーニの「同化」を検討することの意義はその点にある。

このような周囲のまなざしをできる限り相対化しつつ、ツィガーニの「犯罪行為」の意義を位置づけるためには、ツィガーニ以外の犯罪に関するデータをも含めた分析が不可欠となるが、残

³²⁴ DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatók tükrében*, 86-87, 92.

念ながら、現時点では史料的な制約により、ミシュコルツ住民による「犯罪」に関する当該期のデータを全体的に数値化した上で、ツィガーニのデータと比較するという作業を行うことはできない。ツィガーニに関連付けられた「犯罪行為」のみの分析が可能な現状において試みることができるのは、少なくとも、ツィガーニと見なされた人々の中に、極度に一枚岩的な傾向を想定することではなく、この人々の中に見られる多様性、差異にも敏感であることだろう。このような認識的前提を踏まえて、以下では、ミシュコルツ内で生じたツィガーニの「犯罪行為」をミシュコルツに定着したツィガーニによるものと、その他の都市外から流入したツィガーニによるものとに区別し、それぞれその特質を検討することによって、ミシュコルツに定着したツィガーニたちの「犯罪」と「同化」との関係を浮かび上がらせたい。

6-3-1 定着者と外部流入者の「犯罪行為」

まず、表 6-4 で提示した「犯罪行為」に関するデータを犯罪の諸項目ごとに分類した上で、ミシュコルツ内に定着したツィガーニによる「犯罪行為」と、外部から流入したツィガーニによる「犯罪行為」とを区別して分析を行う。なお、この場合、定着者というのはツィガーニ帳簿に登録されているツィガーニ、あるいはその他の史料中でミシュコルツに居住しているなどの情報が明らかになっているツィガーニのことを指し、流入者というのは外部からやってきたと明示されているツィガーニのことを指している。ただし、特に出身地などに明言がない場合も、ミシュコルツ定着者として扱う。

表 6-5、6-6 を見ると、両者を比較した場合、全体的に見て、定着したツィガーニによってより多くの「犯罪行為」がなされていることが指摘できる。1760 年代以降の定着者と流入者それぞれによる「犯罪」の発生頻度は 10 年ごとに見ても、大体 2:1 の割合で生じている。

定着者の「犯罪」の内訳をより詳細に見ると、盗み、誹謗中傷、傷害、騒音/口論などがより頻繁になされていた行為であったことを確認できる。特に誹謗中傷は、ツィガーニ同士で、あるいは近隣の住民との間でしばしば発生しており、参事会法廷もこの行為に何度も体罰刑を宣告していたことがわかっている³²⁵。中には、「ツィガーニたちのところで、このような忌まわしい罵り言葉は実に習慣的に投げ交わされている」ことを理由として、より厳しい体罰刑が課せられた事例も見られる³²⁶。

さらに付け加えれば、ツィガーニ帳簿においてミシュコルツの住民として一度でも登録されたツィガーニのうち、その総数にあたる 76 世帯中、表 6-7 で示した 29 世帯の構成員が、少なくとも一度は何らかの形で「犯罪と見なされた行為」に関係していることも指摘できる。登録されたツィガーニの世帯の約 5 分の 2 に属する人々がそのような文脈で記録されたという事実に対しては様々な解釈が可能なものと思われるが、さしあたり、この 29 家族に含まれる人々の中には、ごく短い期間のみミシュコルツで登録されたツィガーニたちよりはむしろ、中期的、長期的にミシュコルツに留まっていた人々、最終的にこの都市に定住していく人々が多く見ら

³²⁵ 例えば、BAZML TJ, 5. köt., 349; BAZML TJ, 7. köt., 50.

³²⁶ BAZML TJ, 9. köt., 139.

れるということを指摘しておきたい。それらの家族は例えば、バゴシ、ブダイ、ダニ、ダル、ダルドシュ、グディ、イヴォーク、カッロー、コザーク、セーケイ、ヴァダースィなどである。ただし、一方で、これらの家族構成員の中でも頻繁に問題化される特定の人物、家系が存在していたことも事実である。同じく表 6-7 からは例えば、個人で言えばダル・ジェルジ(ダル・ジュリ/ダルドシュ・ジェルジ)というツィガーニが 1760 年代から 1780 年代の間に参事会から合計 16 回、何らかの罪で有罪判決を受けていることを知ることができる。彼に限らず、ダル姓、あるいはダルドシュ姓の人物たちも、当該期間に「犯罪行為」を行ったとして比較的多く言及される。また、プキ・イシュトヴァーンの家族も、家長のイシュトヴァーン以上に、特にその子どもたちが、盗みに関する行動によって問題となることが多い³²⁷。この家族も 1780 年代にしばしば「犯罪行為」との関連で言及される。あるいは、第 5 章でも見たように頭領経験者ヴァダースィ・イシュトヴァーンやその家族も、特に頭領から退いた後に、その「犯罪行為」についての記述が現れ始める。他方で、上で列挙した長期的な定着者の家系の中でも、バゴシ、ブダイ、カッロー、コザーク、セーケイなどは比較的わずかな言及にとどまっている。以上の事例からは、ミシュコルツのツィガーニに関して、周囲の統治権力が書き留めた史料の半分以上が周囲から「犯罪と見なされた行為」に関するものだとしても、それらの行為に対するツィガーニそれぞれの関わり方は、一概に同じものだったとは言い難い、ということとは指摘できるだろう。

続いて、外部のツィガーニについて触れておきたい。第 1 章でも指摘したように、ミシュコルツが上部地方と大平原をつなぐ主要な街道、通商路上に位置していたこと、年に数回、大規模な定期市が開催されていたことなどから、ミシュコルツには近隣や遠方から足を運ぶ人々が頻繁に行き来していた。このような人の流れの中には、ツィガーニも含まれていたが、すでに見たように、その中のある者たちは、ミシュコルツに定着していくこととなった。他方で、数年間のみ、あるいはより短い期間のみこの都市に留まるという形でミシュコルツの社会と関わりを持つツィガーニたちも存在した。これらの人々の中にはツィガーニ帳簿にはほとんど捉えられず、『参事会議事録』などの記述のみからその存在を伺うことができる人たちも多く含まれる。このようなツィガーニたちに周囲の社会が目を向ける場合、圧倒的多くはその「犯罪行為」に焦点が当たった。表 6-5 を見る限り、外部から流入したツィガーニによる「犯罪行為」は当該期間には 50 件に上る。一方で「犯罪」とは関係しない事例は 1780 年代にわずかに 4 点知られているのみである³²⁸。すなわち、外部のツィガーニに関する記述の実に 74%が「犯罪」に関する事例ということになる。これは、「犯罪行為」以外の事例も比較的多く記録されたミシュコルツ定着者たちと比べて顕著な違いである³²⁹。

³²⁷ プキ家のツィガーニが盗みへの関与した 5 事例のうち、4 件は子どもたちによるものである。BAZML TJ 12. köt., 192; 13. köt., 30, 231-232; 15. köt., 148.

³²⁸ 具体的には、いなくなった妻を探してミシュコルツへやって来た人物、ミシュコルツの住民から借金を返済された人物、ミシュコルツで家を購入しようとしてできなかった人物、定期市での盗みの被害者たちに関する 4 事例がそれに当たる。BAZML TJ 11. köt., 62-63, 113; 14. köt., 175; 15. köt., 168.

³²⁹ ミシュコルツに定着したツィガーニに関する事例は 248 事例あり、うち 110 件が「犯罪」と関連している。すなわち、ミシュコルツ内の定着者に限った場合、犯罪に関する事例は 44%とな

外部からの流入者の間の「犯罪傾向」に目を向けると、ミシュコルツ定着者と比較して、その内訳に大きな違いが見られる。表 6-5、表 6-6 を見る限り、誹謗中傷、盗み、口論、傷害など複数の「犯罪行為」が高い比率で問題化されたミシュコルツ定着者と異なり、流入者において特に問題となった行為は盗みである。盗みは、外部のツィガーニによる「犯罪行為」の半数以上を占めており、また量的にも定着者と同水準で生じていた唯一の行為である。少なくとも参事会からは、外部からやってくるツィガーニは盗みという行為によって多くの場合特徴づけられていたと考えてよいだろう。例えば、都市内外から様々な人々が訪れた定期市は、買い物客から盗みを行うことを目的とした人々をも引き寄せたが、定期市での盗みで罰せられた人々の中には外部からやって来たツィガーニの一部も含まれていた³³⁰。

他方で、表 6-5、表 6-6 の示すように、盗みはミシュコルツに定着したツィガーニにとってもその「犯罪行為」の 25%強を占めるものだった。しかし、表 6-7 からは、盗みに限って見ても、ダル・ジェルジ、あるいはプキ・イシュトヴァーンの子どもたちなど、特定の人物によってなされる傾向にあったことが指摘できる。そのため、盗みはミシュコルツのツィガーニ住民全体と関わりが強い行為だったとは必ずしも言えない。

り、内部、外部両者を合わせた場合の 63,5%から随分低下することになる。

³³⁰ 「[1758 年 11 月 1 日] ヴェレシュ・ジェルジとバドゥ・マチャーシュは盗賊のツィガーニである。彼らは都市ミシュコルツにて、聖ルカーチの日に始まった王国市の好機に 46 ハンガリー・フォリントをある誠実なご婦人のポケットから数名の盗賊仲間とともに抜き出し、くすねたという。彼ら自身がその金の返済を自らに義務付けられるのみならず、効率良く返されることがかなり望ましいことである。それに関して、損害額が彼らによって払い戻されたとしても、一方でしかしながら、その上で、このような盗賊たちに対しては、この国内で有効な体罰が命じられる。そのような理由から、言及された 2 人のツィガーニは彼ら自身の盗みに値する罰として没収と判決され、他のことについては、慈悲深い判例にて、棒たたき 50 回と判決される。」BAZML TJ, 4. köt., 571;

「[1783 年 2 月 19 日]判決

オルゴン・ヨーゼフとミハーイ・イシュトヴァーン、またの名を、オルゴン、あるいはブシャ・アンドラーシュというフェルシュージュオルツァのツィガーニたちに対して、次のことがはっきりと明らかになった。先ごろのユリアンナの定期市の際に、彼らはここミシュコルツで市場にいたが、ティサ・ヤーノシュという名の一人の指物師のポケットから 8 ライン・フォリントを隠れて抜き取り、そのような被害を意図的にもたらした。もし人情のある人物によって気づかれていなかったら、すでに盗まれた金をズボンの中に突っ込んで、確実にだまし取っていたことだろう。しかしながら気づかれて、盗まれた金はすぐに持ち主の手に与えられた。当の盗人たちは捕まえられた。オルゴン・ヨーゼフはまだ若い年のため、むち打ち 40 回で、ミハーイ・イシュトヴァーンは 40 回の棒たたきで罰せられる。」BAZML TJ 9. köt., 41;

「高貴なる参事会へ

卑しき請願を通じて、高貴なる参事会のお優しき御前で次のことについて、懇願いたします。
[ミシュコルツの]ルカーチの定期市の前に、ディオーシュジェールのトート・ピシュタという名のうろろうしているツィガーニの盗人が、私の職業につきものの鉄のはさみ、ペンチとピストン、私のブーツ 1 足、そして一束に縛った斧を盗みました。それらの道具がなければ、働くことができません。このような惨めさの中から、ここミシュコルツの住民ヤヴォルスキ・ヤーノシュという鍛冶職人のところで、私のペンチを発見しました。(…)

旦那様のご慈悲に、私の死ぬまで[感謝しつつ]、高貴なる参事会の卑しき奉公人であります。
バボシュの住民ファルカシュ・アンドラーシュ ミシュコルツ、3 月 16 日、1790 年。」BAZML Sp. IX. 765.

このように、外部のツィガーニと比べ、ミシュコルツ内部のツィガーニが盗みを行う比率が相対的に低いことについては、盗みの常習者に対して体罰のみならず、時に追放刑も適用されたという事実も何らかの影響を与えていたかもしれない。例えば、何度も盗みを繰り返していたモイシュ・ジェリ、またの名をモーイシェシュ・ジェルジという名のツィガーニは、その行為への罰として 1775 年にミシュコルツから追放されている³³¹。表 6-8 で示したように、その後 8 年間は、ミシュコルツ内に定着したツィガーニによる盗みは記録されていない。他方で、外部からやってきたツィガーニによる盗みは、この間に 6 件を数えている。そのうちの 1 人は再びミシュコルツに戻って来たモーイシェシュ本人だった。彼は市場町当局に逮捕された後、髪を切られて再度追放される³³²。ミシュコルツに定着したツィガーニたちが 1770 年代から 80 年代前半にかけて、追放刑が代償として課されうる盗みに関わらなかったという以上の事実は、この時期に、元々盗みとあまり関わりのなかったツィガーニたちはもちろんのこと、生活の中で盗みを行うことに比較的抵抗がなかったツィガーニも、自らの生活の場から追い出されることを嫌って不必要な盗みを自粛していた可能性を示唆しているように見える。ここまで見てきたように、ミシュコルツの定着者とこの都市との様々な結びつきがこの時期に深まっていたことを考慮する時、このような見方の蓋然性は高まる。

6-3-2 「犯罪」関連史料に見るツィガーニの社会的紐帯

ところで、第 2 節での検討では、1780 年代には、この都市に定着したツィガーニたちに新たな社会的結合関係が生じていたことが、「犯罪行為」に関する記述などから、明らかとなった。しかしそのことは一方で、ツィガーニたちの間の紐帯が「同化」の進展によって完全にほどこけてしまったことを意味してはいなかった。最後に、「犯罪行為」をめぐるいくつかの事例からそのことを指摘したい。

まず、彼らが「犯罪行為」を集団で行う場合、その編成原理の一つとしてツィガーニ間の結びつきは機能していた。ミシュコルツの「新住民」ヴァダーズィ・ユリシュ、ヴァダーズィ・シャームエル、ブリ・エルジョーク、プキ・シャーンドルの 4 名は、1787 年にミシュコルツの穀物市を訪れていたある人物のカバンから 30 フォリントを抜き取った事でミシュコルツの牢獄に入れられることとなった。彼らは過去数十年間にミシュコルツに定着してきたツィガーニたちの

³³¹ 「[1775 年 1 月 3 日] ツィガーニのモイシュ・ジェリはすでにこれまでも何度も盗みのために罰を受けていたが、自らを改善することもなく、それどころか再び鉄のうすや木を切る手斧を盗んだ。この行動のために 40 回の棒たたきに苦しんだ。また、彼はこれ以上、この都市内で住むことは許されない。」 BAZML TJ, 7. köt., 152.

³³² 「[1777 年 7 月 2 日] 判決

ツィガーニのモーイシェシュ・ジェルジはすでにこれ以前にも何度か取るに足らない盗みのために、彼自身にふさわしい罰を受け、そして、この都市からも最終的に追放されていた。しかしながら、自らをより良きことへ位置づけるのではなく、大胆にも再びこの都市で通りから通りへとろつき、自らの口での証言によると、ショールテース・ヤーノシュ夫人の窓辺で一枚のシーツを引っ張り、そうして同胞たるキリスト教徒を傷つけた。このふるまいのために彼は 30 回の棒たたきに苦しむように判決された。そして髪を切って、最終的に再び都市の境界の外に追放された。」 BAZML TJ, 7. köt., 357-358.

息子や娘にあたる、比較的若い世代のツィガーニたちであった³³³。このように、盗みに際してツィガーニ同士で集団化するという事は、外部からの流入者の間でのみならず 1780 年代のミシュコルツ定着者の間でも見られていた。無論、「犯罪」実行の際にはそれ以外の集団編成形態もありえたのは事実であるため³³⁴、「犯罪」におけるツィガーニ同士の紐帯は、あくまでその選択肢の一つであったことには留意する必要はあろう。

次に、財産の譲渡先としてツィガーニが選択されることがありえた。1785 年に県の許可なく県内の別の集落エチェグへ移ろうとしていた「新住民」ホルヴァート・ペーテルは、ミシュコルツ当局からその行為が違反であるとの通告を受けたためにその試みを断念するが、彼の計画ではミシュコルツに残される自身の家を、外部からやってきたと見られる「新住民」のダルドシュ・ヤーノシュに売り渡し、移住先のエチェグ(Ecseg)でも「新住民」から家を買うつもりであった、ということが『参事会議事録』の記述からは垣間見える³³⁵。このように、法的な規制に抵触する行為ではあったものの、ツィガーニたちは、移動を希望した場合、移動先の滞在場所を当地のツィガーニを通じて確保するというルートを有していた。その他にも、ミシュコルツでは、外部からやって来たツィガーニの一時的滞在場所を同地のツィガーニが提供するという事例も多く確認されている。これも参事会の目からは処罰の対象と映っていたが、断続的にこのような事例は発生している。ここからは、たとえこの都市に定着・定住していたとしても、ミシュコルツのツィガーニたちには、その他の集落のツィガーニとの間に何からの形での紐帯が存在、存続していたことが窺える³³⁶。ただ、ここでも付け加えておくと、ツィガーニたちから家を購入したのはツィガーニばかりではなかったし、ツィガーニ以外の家で滞在した外部のツィガーニも存在した³³⁷。それでもここで指摘しておきたいのは、1780 年代に至るまで、このようなその他の紐帯の中にツィガーニ間の紐帯も消えることなく保たれていたということである。

ツィガーニたちが「犯罪行為」のために拘束された人々の恩赦を求めるために、互いに協力し合っていたことも確認されている。上述の 1787 年の、4 名のツィガーニが拘束された事例に戻

³³³ BAZML TJ 13. köt., 231-232.

³³⁴ 例えば、1767 年にダル・ジェルジやダルドシュ・アンドラーシュが関与した羊泥棒の参加者は総勢 6 名いたが、この 2 名を除けばツィガーニではなかった。BAZML TJ 5. köt., 452-453.

³³⁵ BAZML TJ 11. köt., 113.

³³⁶ 例えば、1788 年にダルドシュ・アンドラーシュがディオーシュジェールからやって来たダルドシュ・ダーニエルとトート・フェレンツを自宅に泊めた事例は、その姓から親族的紐帯に基づくつながりを想定させる。BAZML TJ 14. köt., 173-174. ただし、1790 年にシロキ・ミハーイがボルショド県北方に位置するシャヨーカザ(Sajókaza)のツィガーニ、バログ・ジェルジを泊めた事例や、1778 年にエステルゴム(Esztergom)から流れてきたツィガーニ女性シャンドル・マリシュが、オラー・ペシュタ(=ヴァダーズィ・イシュトヴァーン)の家に一時滞在した事例などについては、これらの受け入れを実現させるにあたり、互いにツィガーニであることを除いて、どのような紐帯が作用したのかにまで考えを及ぼすことは現時点では困難である。BAZML TJ 16. köt., 10; BAZML Sp. XV. 19; Nagy Pal (Szerk.), *Cigánypersek Magyarországon (1758-1787)*, 151-153.

³³⁷ ツィガーニが自らの家をミシュコルツ内のツィガーニではない人物に売り渡すことは、1780 年代に入り比較的多く見られるようになる。その理由は不明な場合も多いが、上述のホルヴァートのように転居を目的とするもの以外に、裁判費用の捻出について語る事例も見られる。BAZML TJ 11. köt., 107-108; BAZML TJ 12. köt., 336-337.; BAZML TJ 13. köt., 168; BAZML Sp. XV. 19; NAGY Pal (szerk.), *Cigánypersek Magyarországon (1758-1787)*, 151-153.

ると、この際、この4名(ヴァダースィ・ユリシュ、ヴァダースィ・シャームエル、ブリ・エルジョーク、プキ・シャーンドル)のうちいずれかの父親と思しきヴァダースィ・イシュトヴァーンとバログ(=プキ)・イシュトヴァーンが参事会にそれぞれ個人名義で請願を提出しているが³³⁸、『参事会議事録』によれば、最終的に彼ら2名に加えて、ヴァダースィ・ヤーノシュ、バゴシ・シャーンドル、ヨーナーシュ・フェレンツらも自らを保証人として請願を行ったことで、拘束されていた4人のうち証拠不十分であったヴァダースィ・ユリシュとプキ・シャーンドルが釈放されたという³³⁹。先の請願者の2名やヴァダースィ・イシュトヴァーンの息子ヴァダースィ・ヤーノシュが親族的紐帯に基づいて行動したことは間違いないと思われるが、残りのツィガーニ2名は婚姻関係においてもヴァダースィ家やプキ家とのつながりは確認できていない。またこの2名が居住する通り(ピアツ通り、スィルマ通り)も、前者3名(ファービアーン通り)とは異なっている。そのように考えるとき、彼らを結び付けていた紐帯の一つは、ツィガーニという共通項であったと見るのはそれほど不自然なことではないだろう。法的な有効性はすでに失われていたとしても、ツィガーニという枠組みは、その後も依然として彼らの共同行為を形作る枠組みの一つとして機能していたのである。

最後に、ツィガーニの「犯罪」に関わる諸データの分析結果を「同化」という問題と関連付けて評価したい。ミシュコルツのツィガーニの内部には、とりわけ長期的な定着者の中にも、周囲によって「犯罪」と見なされる行為に頻繁に関わる人々や家族が見出されたが、そのような人々は全体的に見て限られており、その他の人々は必ずしも「犯罪」と関連付けられるわけではない。例えば、盗みへの関わりはツィガーニの「犯罪」で最も頻繁に発生したものの一つだと言えるが、その実行者は大きく偏っている。盗みに関わる人物たちの絶対数が、その行為の発生数に比して相対的に少なかった背景の一つには、盗みに対して課されえた追放刑が盗みを抑止していた可能性も想定しうるが、追放を恐れる心理がそれらの人々との間に生じていたとすれば、それはミシュコルツのような都市化した集落では彼らの生活の糧となりうる楽師や鍛冶師への需要が存在したこととも無関係ではないだろう。このようにツィガーニたちの特定の「犯罪行為」への態度から、ミシュコルツ社会と緊密に結びついた存在としてのツィガーニの姿が浮かび上がってくるのである。外部から流入したツィガーニに関する記述の中で「犯罪行為」に関する言及がその全体のほとんどを占め、特に盗みへの言及の比率が非常に高かったことと照らし合わせると、定着者たちのデータはより際立つ。ミシュコルツに生活の場を見出したツィガーニたちの多くは、1760年代以降、市場町ミシュコルツに定着し、少なくとも盗みという行為にはそれほど関わらなかったという点で、外部から流入したツィガーニや内部のより頻繁に「犯罪行為」を行う人物たちと比べれば、ミシュコルツの統治権力や住民にとって、市場町内の社会により順応＝「同化」していると見なされていたかもしれない。

しかし一方で、盗みと関わりを持たなかった人々の中にも、1780年代に至っても、誹謗中傷や口論をしばしば行い、罰を受けた人々は存在していた。このように、少なくとも都市当局側の

³³⁸ BAZML Sp. XIV. 145.

³³⁹ BAZML Sp. 13. köt., 231-232.

規範に照らしてみると、ツィガーニたちは取り締まられるべき行為に手を出し、そして罰されるべき側面をも有する人々でもあった。このことから考えると、少なくとも現地の統治権力が、この人々のことを全体として、—1783 年の総督府政令が想定した程度に—市場町社会に完全に「同化」しているとは見なしていた、と手放しで断定することはできないように思える。また、法的には機能を失ったとは言え、ツィガーニたちの間の「共同体」的紐帯は存続しており、「犯罪行為」の実施や統治権力への請願を行う場合に、それは形を取って現れていたということも、彼らが完全に「同化」したという評価を与えることを躊躇させるものでありうる。帳簿に基づいて彼らがいかに「同化」したことが喧伝されようとも、ツィガーニという紐帯そのものの解体を企図した 1783 年政令の理念は、この点については、ミシュコルツでも紛れもなく貫徹されることはなかったのである。

ただし、これらの誹謗中傷や口論などの「犯罪行為」は、それがツィガーニ以外の人々との関わりの中で生じたものであったならば、これらの行為の発生は、むしろツィガーニとその他の住民と間の空間的な近さを表すものだとも解釈可能だろう。その意味では、これらの「犯罪行為」は、上位権力の要請するレベルの「同化」にまでは至らなくとも、ミシュコルツ社会にツィガーニたちがある程度なじんでいく過程で引き起こされた周囲との摩擦、紛争状態だったと考えることもできる。また、ツィガーニという紐帯は、1780 年代までには、彼らが都市内で選択しうる唯一の選択肢ではなく、多様な結びつきの中の選択肢の一つでありえたことも様々な事例から垣間見えた。「犯罪」に限らず、前項で指摘したツィガーニ住民の都市の街区制度への組み込みも、その一つであり、それは両者の接触の機会を増やしていたことだろう。そのように考えると、ミシュコルツにおける「ツィガーニの犯罪化」は、ツィガーニの「同化」の進展とともに、より顕著となったと言えるかもしれない。

小括

本章では、ツィガーニ帳簿の質問項目、調査結果の分析、並びにミシュコルツ内のツィガーニに関する記述の数量的、質的分析から、主に 18 世紀後半のミシュコルツにおけるツィガーニの「同化」を検討した。以下では、その内容を整理しつつ、特にツィガーニの「犯罪」を含めた諸動向に関わる諸データの分析結果を「同化」という問題と関連付けて評価したい。

1760 年代末以降のツィガーニ帳簿の質問項目からは、統治権力から期待されていた「同化」の要件が明らかとなった。すなわち特定の集落に住所を持ち、子どもを学校や軍隊、職業教育、奉公にやり、家々の連なりの中で、農奴、あるいはジェッレールとして住み、周囲の住民と一致した衣装をまとい、土地の判事に従属し、死んだ動物の腐肉を食べず、馬を利用しておらず、何らかの職業に従事しつつ、家税と軍事買い戻し税を支払っていることがツィガーニに求められていた。また、そのような「同化」の基準に照らした場合、ミシュコルツのツィガーニに関するツィガーニ帳簿の記録は、居住形態、服装、食生活、生計手段、子どもの養育などの点でどちらかと言えば「同化」の傾向を示していることを明らかにした。

また、これらの「同化」をめぐる見解を別の角度から検討するために、『参事会議事録』などの行政関連史料の分析を行い、ツィガーニと周辺住民との間の差異を完全に取り去るほどの変化ではなかったとしても、1760年代以降、ミシュコルツのツィガーニと住民との間の新たな社会的結合関係の出現や、都市の街区組織や司法制度へのツィガーニの取り込みが見られ始めることを指摘した。その意味で、この時期のミシュコルツでは、ツィガーニの行動上の「同化」が進展しており、それと同時に、制度上の「同化」も生じつつあったと言える。他方、ツィガーニの「犯罪行為」に関する史料分析からも、ミシュコルツに定着したツィガーニたちが、外部のツィガーニたちに比べて都市生活における距離の近さ故に生じる衝突を経験しやすかったこと、逆に都市追放の対象となる盗みを行う者は限られていたことを指摘し、ミシュコルツの住民との接触を深め、都市になじんだ存在としての定着者たちという像を提示した。他方でいくつかの局面におけるツィガーニという紐帯の維持についても指摘し、その意味で統治権力が目指すほどの「同化」は生じていなかったこと、しかし、1780年の時点ではその紐帯はツィガーニたちにとっても複数存在する多様な選択肢の一つとなっていたことを指摘した。

以上から、ミシュコルツにおいては、統治権力によって問題化されたツィガーニの生活形態や慣習は、18世紀中葉ごろからそのまま維持されているわけでも、権力側が望む「同化」が貫徹されたわけでもなかったことが指摘できる。ツィガーニたちの従来の紐帯は完全に解体されたわけではなく、一定程度維持され、日々の暮らしの中で浮かび上がった。他方で、彼らは新たな社会的結合関係にも徐々に組み込まれ始めていた。それが1760年代から1780年代の間に生じた状況だった。この像は冒頭で紹介したボルショド県報告書やヤコブ・グラーツによるツィガーニ楽師評よりもはるかに陰影に富んだものだと言えよう。第4章で指摘したように、その後いくつかの家系は、この都市に1838年に至るまで長く定着していくことになる。その間の約50年間にツィガーニの内実がどのように変化し、その紐帯や18世紀後半に生じた新たな社会的結合関係が、さらにどのように組み替えられて行くのかについては、いまだ多くを語るができないこの問題には継続して取り組みたい。

終章

本論文を締めくくるにあたって、本稿の検討内容とその結果、そしてそれが持つ意義を整理したい。そして残された多くの課題と、それらの課題を果たした先に展望される本研究の可能性について、最後に述べたい。

結論

本研究は、従来のハンガリーのツィガーニ史研究においては十分に掘り下げられていなかった、地域史的な情報を活用してツィガーニ史を描き出すという問題関心から出発し、18 世紀の市場町ミシュコルツで活動したツィガーニを対象として、その特徴や変化の内実を時代的、地域的な文脈とも関連付けながら跡付けることを目的としていた。

その目的を果たすために、第 1 章では、場としての 18 世紀ミシュコルツの特徴を概観し、18 世紀初頭から後半にかけて、ミシュコルツ自体が大きな変化、とりわけ人口拡大、宗派的・職業的・エスニシティの多様化、経済・商業の発展、地理的変容など、発展・拡大と呼びうる局面にあったことを指摘した。次いで第 2 章では、18 世紀においてツィガーニを規定する法規定を検討し、本研究の検討時期が、県や市場町自身から国家へとその方針の決定権が徐々に移り変わり、全国的に共通の枠組みに則った「ツィガーニの問題化」が進展していった時期であることを確認した。その際、全国的な「ツィガーニ問題」の解決案として提示されたのがツィガーニの特権の剥奪であり、その上での社会的「同化」であった。第 3 章、第 4 章では、それぞれ、18 世紀前半のミシュコルツにおけるツィガーニ鍛冶師の活動、18 世紀中葉以降のツィガーニの人口動態と空間的分布を俎上に載せた。第 5 章においては、18 世紀中葉のミシュコルツのツィガーニ共同体、ならびに、その指導者と位置づけうる頭領が有した機能、およびその変化を検討し、第 6 章では、主に 18 世紀後半の史料から、ミシュコルツにおけるツィガーニの「同化」という現象を、当時のツィガーニの様々な行動から読み解いた。結果として、大まかには以下のような流れがこの時代に生じていたことが明らかとなる。

18 世紀初頭のミシュコルツにおいて、急速な人口増大に伴う金属加工の需要増大、他方での手工業者人口の一時的減少など、ツィガーニの鍛冶師にとって生計可能な余地が生じたことからツィガーニたちはこの再建・発展中の都市に入植を開始した。その結果、1740 年の時点では、ミシュコルツの金属細工師ギルドに不満を持たれるほどに、ツィガーニはミシュコルツ内で鍛冶仕事の担い手となっていた。この時期に入植した人々のうち、いくらかの家系は、ミシュコルツ市内域にその居を定め、その後長くミシュコルツに定着していくこととなる。当該時期において、人口動態の観点からは、1770 年代まで見られるツィガーニの内実の流動性は、1780 年代になるとほとんど見られなくなっており、したがって、流動から安定へという変化が見られた。他方、居住領域の観点からは、1760 年代までに都市内の特定の一角に集中していたツィガーニの居住領域は、新たな流入者とともに、市内域の南東部、南西部、北東部など、都市の拡大に伴い居住地化したより周縁的な地区へも分散することとなっていき、したがって、凝集から分散へという

変化によって検討時期が特徴づけられる。

18 世紀中葉ごろまでには、ツィガーニたちは生計活動の共同、日常的交際など、様々な側面においてお互いに結び付き、その集まりは請願や徴税の枠組みなどの点で他の社会集団から区別された「共同体」としても機能していたことが確認された。また、この共同体の指導者、頭領は、参事会の監督の下、ツィガーニ「共同体」内の事案に対して、ある種自治的な権限を有していた。しかし、王国全体を対象としてツィガーニの頭領の権限が法的に廃止され、そして恐らくツィガーニの犯罪の増加や頭領の有用性の低下などを理由に、ミシュコルツ参事会がその法的変化を受け入れたために、1767 年以降、ツィガーニ共同体に認められていた自治的な機能はミシュコルツにおいて失効する。一方で、1760 年代から 1780 年代にかけて、ツィガーニは都市の社会組織内に再編され、夜警や共同奉仕への参加など、日常生活の中でその他の住民との接触の機会を増やしていった。他方で、この時期にツィガーニによる「犯罪行為」が増加して行くことも確認できる。しかし、その「犯罪」の傾向からも、ミシュコルツ内部に定着したツィガーニとその他の住民の距離が以前より近くなったゆえに、紛争が生じやすくなっていたことが読み取れる。ただし集団的に行われた「犯罪行為」や、犯罪者への恩赦の請願主体として、ツィガーニ住民のみから構成された人々が見出されることから、ツィガーニという紐帯は、「共同体」が法的に大きな意味をなさなくなった後も、日常のある局面において選択可能な枠組みの一つとして持続していたと考えられる。端的に言えば、ミシュコルツにおいては、18 世紀において統治権力によって問題化されたツィガーニの生活形態や慣習は、18 世紀中葉ごろからそのまま維持されているわけでも、権力側が望む形での「同化」が貫徹されたわけでもなかった。

以上は、ナジの言うところの「文化変容」の具体相を特定地域に絞って辿った結果だと言える。そこからは次のことが指摘できる。18 世紀において、ミシュコルツのツィガーニも、ナジの指摘する急激な「文化変容」の波を経験した。それは生業や服装、言語などの「文化」的側面において顕著に表れたが、一方で、それはツィガーニという存在の社会的・法的な地位の変容、あるいはツィガーニに対する周囲のまなざしの変化など、狭義の文化にとどまらない周囲との関係性の変化を伴うものであったと言える。ただし、1780 年代までの状況に限って言えば、ミシュコルツのツィガーニたちは自治的な機能を失いつつも、ツィガーニという紐帯自体は維持し、かつ、定着先であるミシュコルツ社会の制度にも編入されながら周囲との距離を縮めていくなど、その変化に比較的うまく対応していたように見える。その状況を可能たらしめた一因は、18 世紀当時のミシュコルツが、多様な出自の人々を受け入れつつ、発展の糧に変えていく、「許容量の広さ」を持った場であったことに求められるだろう。

今後の課題と展望

本稿における検討は、18 世紀末の時点の、ミシュコルツのツィガーニたちのこのような姿を明らかにしたところで、終えざるを得ない。しかし、ここで提示した像を補強し、より説得力を増すためには、本稿では果たされなかったいくつかの課題に取り組む必要があるだろう。

本研究において主に参考にした史料の作成者はミシュコルツ参事会の職員であるが、加えて

ボルショド県、ハンガリー総督府など、その他の統治権力の手による史料も適宜用いてきた。しかし第1章でも述べたように、当時のミシュコルツと大きく関わりえた統治権力の一つ、ハンガリー財務局が作成した史料については、十分な調査・検討ができなかった。ハンガリー財務局は本文中でも触れたように、1755年以降ミシュコルツの直接的な領主となった機関であり、主にミシュコルツの財政問題などにおいて、大きな決定権、管轄権を有していた。この機関の史料は従来のミシュコルツ史の研究でも、所領経営や経済政策などの側面で利用されているものの、社会史的な観点からの利用などは行われていない。これらの史料には、ミシュコルツのツィガーニに関して、参事会の史料とは異なる情報も期待しうるため、今後追って検討していきたい。

次に、「既存の時代区分」からのある程度の脱却が企図されるべきだろう。すなわち、本研究で取り上げた18世紀のハンガリー王国におけるツィガーニ政策は、1790年のヨーゼフ2世の政策撤回をもって終わりを告げたと評されることが少なくない。同年に「ヨーゼフ2世が死ぬと、ハンガリーのロマを同化しようとする努力は放棄され、ロマの大多数は伝統的な放浪生活に戻っていった」という表現は典型的なものである³⁴⁰。その後の時期に確認されている帳簿史料の減少などを考えると政策の方針転換がそこで生じたことは、間違いないかもしれない。しかし、ヨーゼフの撤回はあくまで彼の国王時代に行った政策に向けられたものであり、彼の時代に押し進められたツィガーニ政策の多くが一例えば頭領廃止、子どもの引き離しなど一すでに先代のマリア・テレジア期にも施行されていたことを考慮すると、ヨーゼフがツィガーニ政令を撤回したことによって、結果としてどのようなツィガーニ政策が中央レベルで継続、ないしは廃棄されたのか、また地域レベルでも、1790年時点をどの程度画期と評価しうるのかなどの問いは、改めて検討される必要があろう。地域レベルの課題に関しては、引き続きミシュコルツの『参事会議事録』などを読み進めていくことによって達成しうる見込みは大きい。ミシュコルツを対象としたツィガーニ帳簿は、1780年代以降、当分存在しないため、このような史料が断続的に作成されていた1780年代ほどの正確性は期待できないが、『参事会議事録』などに言及される個々人の名称などから、ツィガーニ住民の連続性の有無の確認などはおそらく可能だと考えられる。今後の機会に少なくとも1800年ごろまで、また可能であれば、1815年のナポレオン戦争終了ごろまで検討できれば、本研究の独自性はより増すことだろう。

より小規模な課題のうち、最後に挙げるのは、その他の地域のツィガーニの状況との比較である。ミシュコルツの場合、この都市の様々な面での発展、拡大という条件が、ツィガーニを引き寄せ、また彼らがそこで留まることを可能にした。では、ツィガーニが集住したその他の地域の条件はどのようなものだったのだろうか。従来の研究においてもツィガーニが多く定着していたことが知られる地域を対象に、本稿と同じく地域史の成果を取り入れることで、ツィガーニ定着の背景をより明確化し、その結果をミシュコルツと比較することは、今後の課題の一つであろう。例えば、既存の研究でも少なくとも1770年代ごろまで領主による強力な保護の存在が示唆されているバラニャ県の市場町シクローシュ、17世紀以来のツィガーニと都市社会との関係の延長線上にツィガーニの定住が生じたと評価されているペシュト県の市場町ケチケメートなど

³⁴⁰ クローウェ、前掲書、132頁。

は、史料集や地域史の成果がまとまって刊行されていることから、その対象として適当と思われる。

ただし、以上の3つの課題に本格的に取り組むには、再度の現地での史料調査の機会が必要となるだろう。

ところで、本論文で検討した過程において、ナジの主張するツィガーニの「文化変容」という現象が確認されたが、同時に、別の変化もはっきりと見て取れたことは結論で述べた通りである。それは、ツィガーニの法的地位の変容、よりはっきり言えば、自治的な地位を有するツィガーニ共同体の法的な解体、再編である。

しばしば指摘されてきたように、このような法的な社会集団、すなわち社團の国家主導による再編は、上は県から下は農民まで、ハンガリー王国内の様々な集団が18世紀、とりわけその後半に経験したことであり、その意味では、ツィガーニの変化のみを取り立てて強調するのは、視野狭窄とも言えるかもしれない。しかし、少なくとも日本のロマ/ジプシー研究や歴史学界において、従来、法という枠組みによって規定された集団という文脈ではほとんど扱われて来なかったツィガーニという人々も、この社團再編の流れの中に位置づけられうるということは、本論文で提示した地域的な事例からも、垣間見ることはできたであろう。

さらに指摘するならば、このような社團再編の流れの中にあったツィガーニたちは、一定の自治を許されていた場合においても、受け入れ側のさじ加減によって、その権限を任意に制限、再編されてしまう、「弱い社團」の一つであった。彼らも請願を通じて制度の変更によって生じた不具合や過酷な現状を地域の統治権力や県に訴えることはできたが、地域レベルにしても王国レベルにしても自らの地位の決定に直接関与する回路を持っておらず、大局的な観点から見れば、一ヨーゼフの決定を最終的に覆した貴族など特権諸身分層などとは異なり—その声はかき消されてしまったと言える(その結果の一つが「同化」だとも言える)。17世紀末から18世紀末までのツィガーニをめぐる政策上の変化は、ツィガーニを地域の統治権力との関係性に応じてその地位を決定されえた「地域的社團」から、国家によってその地位を規定される「国家社團」への変化させる、漸進的な制度再編の過程とも捉えることができる。しかも後者は、ツィガーニという社会的結合関係の最終的な消滅、他社團への制度的、文化的溶解を念頭に置いた、「暫定的な社團化」とも評しうるものである。18世紀のツィガーニの急激な「文化変容」は、このようなツィガーニの「法的・社團的変容」によって制度的に下支えされていたことも、念頭に置いておく必要があろう。

しかし、ここで提起した論点の射程は、本論文で論じることができた範囲を大きく超えている。この問題圏に、引き続きツィガーニという集団を通じて取り組んでいくためには、本研究のような地域レベルの分析に加えて、より広域を管轄した統治権力の側の取り組みにさらに焦点を当てていく必要があるだろう。とりわけ、国家がツィガーニの案件に本格的に取り組むようになっていく1760年代以降の中央政府における政策決定、執行、他の統治権力との意見交換などの具体的なプロセスはいまだ研究の余地が多く残されている分野である³⁴¹。今後、それらの検

³⁴¹ 例えば、本研究でも用いたハンガリー国立文書館所蔵の総督府ツィガーニ部局の文書群には、

討も通じて、本研究の成果を社団論の再検討など、歴史学研究におけるより大きな文脈の議論に接続していくことが求められる。この課題の検討は他日を期したい³⁴²。

全体としては、マリア・テレジア治世の末からヨーゼフ 2 世期半ばにかけての 10 年ほどの間に各県、並びに総督府によって作成された諸史料が収められている。この機関は当時のツィガーニ行政を司り、ツィガーニに関する情報を王国全土から集約していたにもかかわらず、それらの史料はこれまでの研究ではほとんど利用されて来なかった。今後更なる利用が検討されるべきであろう。KATONA Csaba, “A Departamentum Zingarorum működésének forrásai a magyar országos levéltárban (1775-1785)”, *Cigánysors* I., 45-49.

³⁴² 近代、あるいは近現代以降であれば、マイノリティ、とりわけ「少数民族」という枠組みで捉えられ、その人々と国家との関係性がしばしばネガティブなものとして解釈されてきたような周縁集団(例えばユダヤ人、タタールなど)を、それ以前の近世において、社団的国家編成の中のアクターの一つとして捉え直し、周縁的であるが故にこの人々に付随しえたその「特権」と「ネットワーク」をより積極的に評価しようという動きが近年現れている。田村愛理、川名隆史、内田日出海編『国家の周縁—特権・ネットワーク・共生の比較社会史—』刀水書房、2015 年。筆者の関心により近いものとしては川名隆史「近世国家ジェチポスポリタにおける周縁の諸相」同書、5-36 頁。本論文でその一端を明らかにした 18 世紀ハンガリー王国のツィガーニをめぐる諸相も、この取り組みに連なりうる可能性を秘めていると筆者は考えている。しかし、これらの人々が国家、ないしはより地域的な統治権力との間で取り結びえた関係性の全体像は、今後、これら統治権力の側の動向をより詳細に検討するまでは、十全には語りえぬことだろう。今後の課題は尽きない。

表・地図

表 2-1 : 1783 年 10 月 9 日政令

通し番号	内容
1	ツィガーニ同士の結婚／妻子の扶養手段を証明できないツィガーニ男性の結婚禁止
2	ツィガーニによる売買を目的とした馬保有の禁止
3	物乞い防止のための村への定住、定職への従事の要請／放浪防止を目的とした通行許可証発行の停止
4	農耕のみならず、手工業へのツィガーニ男女の雇用
5	2歳以上のツィガーニの子どもの親からの引き離し
6	森、山間部にあるツィガーニの居住地域の撤去／平地での定住の強要
7	全ツィガーニの村判事の裁判権下への移管
8	県判事による定期的な県内諸地域の調査／将来的な調査・報告業務の県評定人への移管
9	評定人の報告の結果、違反者・放浪者と判明したツィガーニへの処罰
10	通行許可証なしでの地域間の移動の禁止／許可証発行者の規定
11	聖職者に発行された結婚証明証取得の義務付け／結婚状況の把握のための調査
12	放浪ツィガーニの規模、受け入れ可能な鉱山、入植地に関する調査要請
13	手工業ギルド加入を望むツィガーニのギルドへの受け入れ
14	侵入した「よそ者」の強制送還、処罰／ドイツ語圏からの流入者の受け入れ
15	地域住民の服装への順応
16	「裸で走り回る子ども」、「シーツに身を隠す女性」への体罰規定
17	権限を取り消された頭領と集団構成員の村判事の裁判権への従属
18	動物の生肉を食べるツィガーニ、羊飼い、牛追いへの罰則、パンの提供
19	ツィガーニによる地域住民の言語の使用
20	満4歳以上のツィガーニの子どもの親元から農民の下への引き離し
21	農奴であるツィガーニによるツィガーニの使用人の保有の禁止
22	「本当の物乞い」への物乞い行為の許可
23	名前の変更の禁止
24	ツィガーニの各県間の移動の禁止
25	各領主の下へのツィガーニの分散
26	徴兵されたツィガーニへの休暇の不許可
27	欠番
28	特定の許可を得たツィガーニのみへの音楽演奏の許可
29	ツィガーニに分与された土地の自身での耕作／賃貸した場合の罰則
30	ツィガーニの宴会、集会の禁止、罰則
31	地域の共同体内へのツィガーニ用の家屋の建設
32	ツィガーニ同士の結婚の禁止
33	農民に養育されるツィガーニの子どもに関する規定
34	領主役人、共同体役人によるツィガーニへの通行許可証、確認証の発行の将来的な禁止／県官職保持者への一元化
35	山間部に居住するツィガーニに関する調査要請
36	山間部、森、街道での「強盗」の追跡
37	「強盗」への罰則規定のその支援者、受益者への拡大
38	ツィガーニの集団入植、ツィガーニの言語の使用禁止
39	ツィガーニ男性の軍務への徴用、女性の工場での雇用に関する予備調査の要請
40	ツィガーニの農奴化に関する県判事による定期調査の要請
41	ツィガーニの「公共事業」での雇用／正当な賃金の支払いの奨励
42	募兵用楽団でのツィガーニの奉仕に関する規定
43	ツィガーニの分散に関する地域当局からの提案への返答
44	ツィガーニの服従を目的とした政令の実行を妨げる領主への対応
45	労働に適したツィガーニの重労働への従事の奨励
46	高齢・疲労を理由に農奴の労働が出来ないツィガーニへの小作人の地位の認定
47	地域間移動時の通行許可証提示に関する規定
48	ツィガーニの信仰に関する調査、聖職者の取り組みに関する報告要請
49	トランシルヴァニア、ルーマニアから来たツィガーニのハンガリーからの排除
50	手工業、農奴の義務への従事／ドイツ語圏からの流入者の受け入れに関する要請
51	動物の腐肉を食べるツィガーニへの罰則
52	ツィガーニの集団的枠組み、文化的性質の維持、集団入植提案の否定／44条の再確認
53	県判事から県評定人への政令実行者としての業務委託
54	ツィガーニのプロヴィナ、パナト入植提案の拒否
55	引き離した子どもの両親への養育費負担に関する規定
56	非ツィガーニとの結婚への祝儀贈呈という案の拒否／第1条の再確認
57	ツィガーニの終身強制労働に関する提案の拒否／3年間の減税をとまなう荒廃地域への入植
58	鉱山、工場、公共事業などでのツィガーニの雇用に関する提案の拒否
59	当局によるツィガーニ政令の遵守、半年以内の執行の呼びかけ／「同化」達成者の政令適用対象からの除外
最後に	各県、各領主によるあらゆる点でのツィガーニの統制、迅速な報告の提出に関する要請
MEZEY Barna (Szerk.), <i>A magyarországi cigánykérdés dokumentumokban 1422–1985</i> (Budapest: Kossuth, 1986), 85–94. を基に著者が作成。	

表 3-1 17 世紀末-19 世紀前半のミシュコルツの人口

年	家族数(1786 年以前は推定)	人口数(1786 年以外は推定)
1690	900	4000-4500
1715	600-700	2400-3000
1745	1100	7500-8500
1765	2000	8500-9500
1786	3038	14086
1798	3223	14500-15500
1813	3900	16000-17000
1825	4400	17000-18000

出典：FARAGÓ Tamás, “A város népesség”, MT. III. 1. köt. 153 より著者が作成。

表 3-2 ミシュコルツの手工業者数の変遷 1698-1770 年

職種	1698	1730	1734	1758	1770
屠殺業者 (Mészáros)	19	15	13	8	9
靴作り (Varga)	10	15	13	21	40
ブーツ作り (Csizmádia)	29	41	46	69	200
毛皮服作り (Szűcs)	8	9	7	13	41
床屋外科医 (Borbély)	4				
ボタン付け (Gömbkötő)	4	9	6	8	10
金属細工師 (Lakatos)	9	4	5	9	20[+徒弟 7]
鍛冶師 (Kovács)	9	4	6	9	10
銅細工師 (Rézműves)				1	1
織工 (Takács)	5	9	11	15	17
樽屋 (Bodnár)	9	6	15	14	11
車輪作り (Kerékgyártó)	3	2	3	10	7
仕立て屋 (Szabó)	11	2	3	15	40

出典：VERES László és NÉMETH György, “Iparfejlődés”, MT. III. 1. köt. 337-338 より著者が作成。

表 4-1：ミシュコルツ郡主要都市のツイガーニ世帯(家長・寡婦)登録数 1751/52～1783/84 年

集落名	1751/52	1752/53	1753/54	1757/58	1758/59	1759/60	1760/61	1762/63	1763/64	1764/65	1765/66	1768/69	1774/75	1775/76	1779/80前半	1779/80後半	1780/81前半	1780/81後半	1782/83前半	1783/84後半
Miskolc	17	11	17	17	17	16	17	13	16	18*	16*	19*	25*	21*	12*	25*	24*	21*	20*	20*
◆		8	6	10	15	13	12	9	8	11	15	10	11	20	10	12	24	19	17	20
Csát	7	3	9	9	11	12	10	9	9	18*	11*	11*	11*	14*	12*	14*	13*	13*	12*	12*
◆		2	3	6	6	8	9	8	7	7	7	8	6	8	5	6	12	10	8	12
Diósgyőr	1	2	---	1	6	---	2	2	2	2	2	2	3	4	7	10	10	8	11	12
◆		1			1			2	2	2	1	2		3	1	7	10	7	7	12
* = 10回連続登録者が確認できる集落																				
◆ = 前回調査から継続して登録された者の数																				

表 4-2：ボルショド県諸郡中心都市におけるツイガーニ家長数

	1768/69 年	1779/80 年後半	1783/84 年前半
ミシュコルツ	19	25	20
メズークヴェジュド	9	9	14
シャヨーセントペーテル	4	10	5
センドルー	7	6	5

出典：BAZML Acta Politica XI. I. 118.; MOL ASR 21. cs. 172.; MOL ADZ 36. cs. 102.

表 4-3：ミシュコルツで登録された全ツィガーニ世帯

人名 \ 年度	1751/52	1752/53	1753/54	1757/58	1758/59	1759/60	1760/61	1762/63	1763/64	1764/65	1765/66	1768/69	1774/75	1775/76	1779/80 前半	1779/80 後半	1780/81 前半	1780/81 後半	1782/83 前半	1783/84 後半
バゴシ・アンドラーシュ	●		●		●		●	●		●	●									
バゴシ・シャンドル/イヴォーク・マリア						●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
バゴシ・シャンドル(別人)									●											
バゴシ・アンドラーシュ(若)			●									●								
バゴシ・ジェルジ									●	●	●	●								
ベルキ・アンドラーシュ	●								●	●	●									
ボーディ・ジェルジ/パログ(シヨムボーディ)・レベッカ													●	●	●	●	●	●	●	●
ブダイ・アンドラーシュ			●	●	●	●	●													
ブダイ・マーチャーシュ(若)/パログ・ジュジャンナ	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●
ブダイ・マーチャーシュ(若)/ナニ・ジュジャンナ			●		●								●	●		●	●	●	●	●
ブダイ・マーチャーシュ(3人目)			●																	
B.ジェルジ										●										
ダニイ・ダーニエル										●	●									
ダニイ・イシュトヴァーン(老)	●	●	●	●	●	●	●	●	●											
ダニイ・ダーニエル(若)/ヴァダースイ・ジュジャンナ												●	●	●	●	●	●	●	●	●
ダニイ・マーチャーシュ										●	●									
ダニイ・ジグモンド/ベルキ・エルジェーベト														●						
ダルドシュ・ジグモンド/ヨナーシュ・カタ										●	●	●								
ダルドシュ・ジグモンド(別人)/ラカトシュ・バルバラ													●	●						
ダルドシュ・アンドラーシュ / タロー・シャーラ													●							
ダルドシュ・ダーニエル/ ブダイ・シャーラ																●	●	●		
ダル・フェレンツ/ コシヤーイ・エルジェーベト					●		●		●	●	●		●	●		●	●	●		
ダル・ガシュパール								●												
ダル・ジェルジ/ キシュ・マリア												●	●	●	●	●	●	●	●	●
ダル・ダルガイ								●												
ダル・ラースロー				●	●															
ダル・ジグモンド(若)(=ダル・ツィガーニ?)	●	●	●	●	●	●	●		●											
ダル・ジグモンド(若) / プンディ(=ベルキ)・エルジェーベト/ ボンツ・シャーラ/ ブダイ・アンナ			●	●	●	●	●		●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
ドクスイ・ジェルジ										●										
エートヴェシュ・フェレンツ	●																			
ファルカシュ・ジェルジ										●										
フィンドリク(=ブダイ)・マーチャーシュ									●	●	●									
グディ・アンドラーシュ/ダル・ジュジャンナ						●							●	●						
グディ・ジェルジ / ヴァラディ・エーヴァ												●	●	●						
ハムゾーク・フェレンツ/バリ・ユリアンナ												●	●			●	●			
ハムゾーク・フェレンツ(別人)												●								
ハムゾーク・ジェルジ												●				●	●		●	●
ホルヴァート・ジェルジ							●													
ホルヴァート・ミクローシュ							●													
イヴォーク・イシュトヴァーン/ダル・シャーラ	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●						
ヨナーシュ・フェレンツ/ダル(=ジガ) エーヴァ													●	●	●	●	●	●	●	●
カバイ・ヤーノシュ / カプシュ・ジュジャンナ													●							
カッロー・ダーニエル(=カッロー・ツィガーニ?)	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●								
カッロー・フェレンツ/ホルヴァート・シャーラ												●	●	●		●	●	●	●	●
カッロー・ジェルジ/チェンケ・シャーラ												●	●	●		●	●	●	●	●
ボコシュ・カッロー				●				●												
キシュ・フェレンツ/ボーディ・アンナ									●							●	●	●	●	●
キシュ・ジェルジ/ホルヴァート・シャーラ																●	●	●	●	●
コザーク・ヤーノシュ/チェンゲ・バルバラ	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●	●
コザーク・ジェルジ/キシュ(=ユノ)・クリスティナ													●			●	●	●	●	●
ラカトシュ・ミハーイ/ チョンカ(=ツヨウ)・クララ													●			●	●			
ラカトシュ・アーダム/ラカトシュ・アンナ																●	●			
マチョー・アンドラーシュ	●	●																		
モイシユカ(=ミシユカ=ミンケ?)・フェレンツ	●	●		●	●															
ミンケ・フェレンツの息子		●																		
モノク(=モニコーク)・アンドラーシュ	●																			
オラー・マーチャーシュ			●																	
オラー・シャームエル	●		●																	
オルゴン・アンドラーシュ/リガーシュ・アンナ													●	●	●	●	●	●	●	●
オルゴヴァーニイ・ジェルジ/マツヨー・アグネシュ													●	●	●	●	●	●	●	●
エクレス・アンドラーシュ												●								
ボコシュ・フェレンツ								●												
ボコシュ・ヤーノシュ																				
ブキ(ボコル/パログ)・イシュトヴァーン/養オラー(=ヴァダースイ)・エーヴァ													●	●	●	●	●	●	●	●
リガーチュ・ダル(=リガーツ・ツィガーニ?)	●	●	●																	
シロキ・ジェルジ																			●	●
シロキ・イシュトヴァーン																			●	●
セーケイ・ミハーイ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●
スイヴォーク・ヤーノシュ		●																		
トート・アンドラーシュ												●								
テューコディ・アンドラーシュ				●	●	●	●													
ヴァダースイ・シャームエル/ベルキ・ユリアンナ		●		●	●	●	●													
ヴァダースイ・マーチャーシュ				●	●	●	●													
ヴァダースイ(=オラー)・イシュトヴァーン/プンディ・イロナ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ヴァダースイ・ヤーノシュ/キシュ・マリア															●	●	●	●		
ツィガーニ・ミクローシュ	●																			
		寡婦																		

出典：BAZML Acta Politica III. I. 741, 748, 752, 760, 768, 791, 808, 822, 840, 841, 863, 883, 903, 914, 937; BAZML Acta Politica XI. I. 118, 129; MOL ARS 3. cs. 11, 5. cs. 72, 21. cs. 172, 24. cs. 27, 32. cs. 45; MOL ADZ 36. cs. 102. より著者が作成。

表 4-4 : 18 世紀後半のミシュコルツにおけるツィガーニの居住地 (1764 年,1781 年,1783 年,)

登録年	1764 年	1781 年	1783 年
登録名			
バゴシ・アンドラーシュ	ピアツ通り		
バゴシ・ジェルジ	ピアツ通り		
バゴシ・シャーンドル	ピアツ通り	ピアツ通り	ピアツ通り
ボーディ・ジェルジ		ウーイヴァーロシュ西側	ウーイヴァーロシュ西側
新ハンガリー人ブダイ・ヤーノシュ			ケンデルフェルド通り
ブダイ・マーチャーシュ (老)	ウーイヴァーロシュ上手	ティゼンハーロムヴァーロシュ通り	ティゼンハーロムヴァーロシュ通り
ブダイ・マーチャーシュ (若)		ヴィーズケズ(=川沿い)	メッジェシュアヤの川沿い
ダニイ・イシュトヴァーン	メーサール・ファービアーン通り	ファービアーン通り	ファービアーン通り
ダルドシュ・ジグモンド	ウーイヴァーロシュ上手		
ダル・ジェルジ		スィルマ通り	スィルマ通り底部
ダル・ジグモンド		キシフニャド通り	キシフニャド通り
ブダイ・フィンドリク・マーチャーシュ	ウーイヴァーロシュ ペツェ川岸		
グディ・アンドラーシュ	メーサール・ファービアーン通り	ファービアーン通り	ファービアーン通り
グディ夫人ヴァーラディ・エーヴァ		ファービアーン通り	
イヴォーク・イシュトヴァーン	メーサール・ファービアーン通り		
新住民ヨーク夫人(Jokné Újlakos)		キシアルノート通り	
ヨーナーシュ・フェレンツ		スィルマ通り	スィルマ通り底部
カッロー・ダーニエル	ツィコー通り		
カッロー・ジェルジ		ファービアーン通り	ウーイヴァーロシュ西側
カッロー・フェレンツ		ウーイヴァーロシュ西側	
キシュ・ジェルジ		ナジフニャド通り	ナジフニャド通り
コザーク・ヤーノシュ	ウーイショル		セレシュ
新住民コザーク・ジェルジ		キシアルノート通り	
モイシュカ夫人	メーサール・ファービアーン通り		
オルゴヴァーニイ・アンドラーシュ		スィルマ通り	スィルマ通り底部
プキ(=パログ)・イシュトヴァーン		ファービアーン通り	ファービアーン通り
オラー(=ヴァダースイ)・イシュトヴァーン	メーサール・ファービアーン通り	ファービアーン通り	ファービアーン通り
シロキ・イシュトヴァーン			メッジェシュアヤの川沿い
セーケイ・ツィガーニ		スィルマ通り	スィルマ通り底部

出典 : RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma: feudális kori összeírásai alapján* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, BAZML és Bíbor kiadó, 2004), 764-CON, 781-CON, 783-CON, CZIG1764, CZIG1781, CZIG1783[付録電子ファイル]; BAZML Acta Politica III. I. 903; MOL ARS 3. cs. 11; MOL ADZ 36.cs. 102.より著者が作成。

表 5-1：ミシュコルツの頭領経験者の納税額 (1751~1768/69 年)

	1751/52	1752/53	1753	1757/58	1758/59	1759/1760	1760/61	1762/63	1763/64	1764/65	1765/66	1767		1768/69
コザーク・ヤーノシュ	1 [R.fr.]+30 [Kr.]		1・30	1・00	1・30	1・00	1・00	1・00	1・30	1・00	1・15			2・00
	●		●	●	●	●	●	●	● (vajvoda)	● (vajvoda)	●	●(vajda)		●
ヴァダースイ・シャー ムエル		0・30		1・00	1・30	0・15								
		●		●	●	●								
ヴァダースイ・イシュ トヴァーン	1・00	0・30	1・30	1・00	1・30	1・30	1・00	1・00	1・15	1・00	0・30			2・00
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●

・●はミシュコルツに居住するツィガーニとして登録されていることを示す。 ・ R. fr. = Rajnai forint/ Kr. = Krajcár [1 R. fr. = 60 kr.]

表 6-1：ツィガーニの生計手段に関する調査結果 ツィガーニ帳簿(1774/75-1783/84 前半)

	生計手段							合計
	鍛冶師 /手工業	楽師	日雇	農耕	物乞い	併記	未記入	
1774/75	17	4		3	1			25
1775/76	14	4		1	1	1(農・工)		21
1779/80前半	3	7	0			2(音・工)		12
1779/80後半	8	8	4		3		2	25
1780/81前半	3	14	5		2		1	25
1780/81後半	14	6			1			21
1782/83前半	14	5					1	20
1783/84後半	13	6					1	20

出典：MOL ARS, 3. cs. 11., 5. cs. 72., 21. cs. 172., 24. cs. 27; MOL ADZ, 32. cs. 45., 36. cs. 102.; BAZML Acta Politica XI. I. 129.

表 6-2：ツィガーニの子どもの養育に関する調査結果 ツィガーニ帳簿(1774/75-1783/84 前半)

	子どもの人数			子どもの育て方			養育先			
	男子	女子	合計	ツィガーニ風	農民風 /ハンガリー人風	子おらず/ 未記入	親元	学校	楽師	女性奉公人
1774/75	23	26	49	8	13	4				
1775/76	26	21	47	2	14	4				
1779/80前半	15	11	26	4	8					
1779/80後半	25	24	49				46	2		
1780/81前半	23	26	49				45	2		
1780/81後半	26	15	41				35	[5](親元から)	1	2
1782/83前半	25	17	42				42	[5](親元から)	[2](親元から)	
1783/84後半	25	19	44				42	[6](親元から)	[2](親元から)	

出典：MOL ARS 3. cs. 11, 5. cs. 72, 21. cs. 172, 24. cs. 27; MOL ADZ 32. cs. 45, 36. cs. 102; BAZML Acta Politica XI. I. 129.

表 6-3：ツィガーニの生活形態に関する調査結果 ツィガーニ帳簿(1774/75-1783/84 前半)

	居住				服装			腐肉食の食習慣		馬の利用		納税の有無		各合計
	家々の連なりの中	家々の連なりの外	家なし	未記入	農民風/ハンガリー人風 /周囲と一致	惨めでボロボロな服装/ 周囲と異なる	未記入	食べない	未記入	しない	未記入	納税者	免除/未記入	
1774/75	21	4			20	5		25		25		23	2	25
1775/76	18	2	1		14	7		21		21		18	3	21
1779/80前半				12	11	1		12		12		12		12
1779/80後半	14	11			18	6	1	25		25		19	6	25
1780/81前半	19	4		2	19	4	2	22	3	22	3	18	7	25
1780/81後半	1	20			19	2		21		21		20	1	21
1782/83前半	20				18	2		20		20		18	2	20
1783/84後半	20				20			20		20		18	2	20

出典：MOL ARS, 3. cs. 11., 5. cs. 72., 21. cs. 172., 24. cs. 27; MOL ADZ, 32. cs. 45., 36. cs. 102.; BAZML Acta Politica XI. I. 129.

表 6-4：ミシュコルツにおけるツィガーニの行動(1730~1790 年)

	1730年代	1740年代	1750年代	1760年代	1770年代	1780~1790年	合計
犯罪行為			5	52	35	68	160
土地/家の測量			1	4	1	2	8
土地問題(境界や獲得時の不具合)						2	2
住居の売買				1		8	9
土地の獲得						2	2
土地の放棄				1			1
仕事への報酬	1					1	2
仕事関連のトラブル						3	3
ツケ・借金				3	6	9	18
委託販売[からの金銭トラブル]				2	3	5	10
通行規制		2					2
職業に関連する規制(鍛冶仕事)		1					1
移出規制						1	1
居住に関する規制		1					1
新住民の調査に対する言及						2	2
商取引(対都市当局)		2					2
交換取引(対住民)		1				4	5
頭領選出				1			1
当局による役職剥奪			1				1
事件の被害者として				1		4	5
結婚問題						1	1
いなくなったツィガーニについての照会						1	1
請願 馬の保有 (共同)				2			2
請願 演奏負担の軽減 (楽師共同)					1		1
請願 演奏負担の軽減 (個人)						1	1
請願 税負担の軽減						2	2
請願 解放要求				1			1
請願 家庭内トラブルの調停要求						1	1
請願 汚名の払拭						2	2
当局による請願への対応(請願内容不明)						1	1
盗みの疑い(冤罪確定)						2	2
法廷への出廷拒否(理由不明)						1	1
合計	1	7	7	68	46	123	252
全体における犯罪行為の比率(%)	0	0	71.4	76.4	76	55.2	63.5

出典：BAZML TJ 2.-16. köt; BAZML Sp. III. I. 1767; IX. 64, 104, 181, 337, 419, 431, 450, 765; XI. I. 108, 113, 141; XII. 145, 243, 244. 258, 378, 382, 435; XIII. 117, 343, 564; XIV. 92, 145, 279, 293; XV. 18, 19, 26, 116, 120, 489. より著者が作成。

表 6-5：ミシュコルツ定着者、流入者ごとの犯罪項目内訳

内部居住者の犯罪	1730年代	1740年代	1750年代	1760年代	1770年代	1780年～1790年	各種合計	合計の比率(%)
誹謗中傷			4	11	7	5	27	24.5
盗み				11	1	16	28	25.5
傷害				9	5	8	22	20
盗品売買				1		4	5	4.5
淫行				2	2		4	3.6
賭け事					1	3	4	3.6
騒音/口論				4	6	4	14	12.7
夜間徘徊						1	1	0.9
許可証なしの流出						1	1	0.9
魔術						1	1	0.9
喫煙								0
泥酔						1	1	0.9
放浪者の世話						2	2	2
合計			4	38	22	46	110	100
流入者の犯罪	1730年代	1740年代	1750年代	1760年代	1770年代	1780年～1790年	各種合計	合計の比率(%)
誹謗中傷				1	1	2	4	8
盗み			1	10	5	11	27	54
傷害				1	3	1	5	10
盗品売買						3	3	6
淫行				1		2	3	6
賭け事						1	1	2
騒音／口論					1		1	2
夜間徘徊				1			1	2
許可証なしの流入					1	1	2	4
魔術					1		1	2
喫煙					1		1	2
泥酔						1	1	2
合計			1	14	13	22	50	100
両者合計	0	0	5	52	35	68	160	

出典：BAZML TJ 2.-16. köt; BAZML Sp. III. I. 1767; IX. 64, 104, 181, 337, 419, 431, 450, 765; XI. I. 108, 113, 141; XII. 145, 243, 244. 258, 378, 382, 435; XIII. 117, 343, 564; XIV. 92, 145, 279, 293; XV. 18, 19, 26, 116, 120, 489. より著者が作成。

表 6-6：「犯罪行為」におけるミシュコルツ定着者と流入者の比率

	内部居住者比率	流入者比率(%)	犯罪全体における比率(%)	各種合計(件)
誹謗中傷	87	13	19.3	31
盗み	51	49	34.3	55
傷害	81	19	16.9	27
盗品売買	62.5	37.5	5	8
淫行	57	43	4.3	7
賭け事	80	20	3.1	5
騒音／口論	93	7	9.4	15
夜間徘徊	50	50	1.3	2
許可証なしの流出／流入	66.5	33.5	1.9	3
魔術	50	50	1.3	2
喫煙	0	100	0.6	1
泥酔	50	50	1.3	2
放浪者の世話	100		1.3	2
合計	68.7	31.2	100	160

出典：BAZML TJ 2.-16. köt; BAZML Sp. III. I. 1767; IX. 64, 104, 181, 337, 419, 431, 450, 765; XI. I. 108, 113, 141; XII. 145, 243, 244. 258, 378, 382, 435; XIII. 117, 343, 564; XIV. 92, 145, 279, 293; XV. 18, 19, 26, 116, 120, 489. より著者が作成。

表 6-7：犯罪に関わったミシュコルツのツィガーニ家系 (29 世帯)*

	世帯合計	家長	配偶者	子ども/親族	複数	盗み
バドシ・アンドラーシュ/妻ヴァーラディ・エーヴァ	1	1				
バゴシ・シャーンドル/妻イヴォーク・マーリア	3	1	1	1		1
バゴシ・ジェルジ	2	2				
ブダイ・マーチャーシュ(老)/妻バログ・ジュジャンナ	2		1		1	
ブダイ・マーチャーシュ(若)/妻ナニ・ジュジャンナ	1	1				
ダニイ・ダーニエル	2	2				
ダニイ・イシュトヴァーン(若)/妻ヴァダースィ・ジュジャンナ	3		1	2		2
ダルドシュ・ジグモンド/妻ヨナーシュ・カタ	7	3	2	2		2
ダルドシュ・アンドラーシュ/妻ターロー・シャーラ	4	4				2
ダル・フェレンツ/妻コシャーイ・エルジェーベト	4	4				
ダル・ジェルジ/妻キシシュ・マリーア	16	16				7
ダル・ジグモンド(若)/妻ブンディ(/ベルキ)・エルジェーベト、ポンツー・シャーラ、ブダイ・アンナ	1	1				
グディ・アンドラーシュ/妻ダル・ジュジャンナ	3	1	2			
グディ・ジェルジ/妻ヴァーラディ・エーヴァ	5	3	1		1	
ハムゾーク・フェレンツ/妻バリ・ユリアンナ	1	1				
イヴォーク・イシュトヴァーン/妻ダル・シャーラ	6	4	2			
カバイ・ヤーノシュ/妻カバシュ・ジュジャンナ	3	2	1			1
カッロー・ジェルジ/妻チェンケ・シャーラ	1	1				
キシシュ・ジェルジ/妻ホルヴァート・シャーラ	1	1				
コザーク・ヤーノシュ/妻チェンデ・ボルバラ	1				1	1
コザーク・ジェルジ/妻キシシュ(/ユノ)・クリスティナ	1	1				
ラカトシュ・ミハーイ/妻チョンカ(/ツコー)・クラール	1	1				
モイシュカ・フェレンツ/妻ラザール・クリスティナ?	3		1	2		2
オルゴヴァーニ・ジェルジ/妻マツコー・アーグネシュ	2	1	1			
プキ(/ボコル/バログ)・イシュトヴァーン/妻オラー(/ヴァダースィ)・エーヴァ	10	2	3	5		6
シロキ・イシュトヴァーン	2	2				
セーケイ・ミハーイ	2	1		1		
ヴァダースィ(/オラー)・イシュトヴァーン/妻ブンディ・イロナ	10	4	3	1	2	2
ヴァダースィ・ヤーノシュ/妻キシシュ・マリーア	4	4				1
合計	102	64	19	14	5	27

出典：BAZML TJ 2.-16. köt; BAZML Sp. III. I. 1767; IX. 64, 104, 181, 337, 419, 431, 450, 765; XI. I. 108, 113, 141; XII. 145, 243, 244. 258, 378, 382, 435; XIII. 117, 343, 564; XIV. 92, 145, 279, 293; XV. 18, 19, 26, 116, 120, 489. より著者が作成。

表 6-8：モイシェシュ・ジェルジ追放後の 10 年間の盗み件数

	1775	1776	1777	1778	1779	1780	1781	1782	1783	1784	1785
内部	1									1	1
外部			1	2		1			2		1

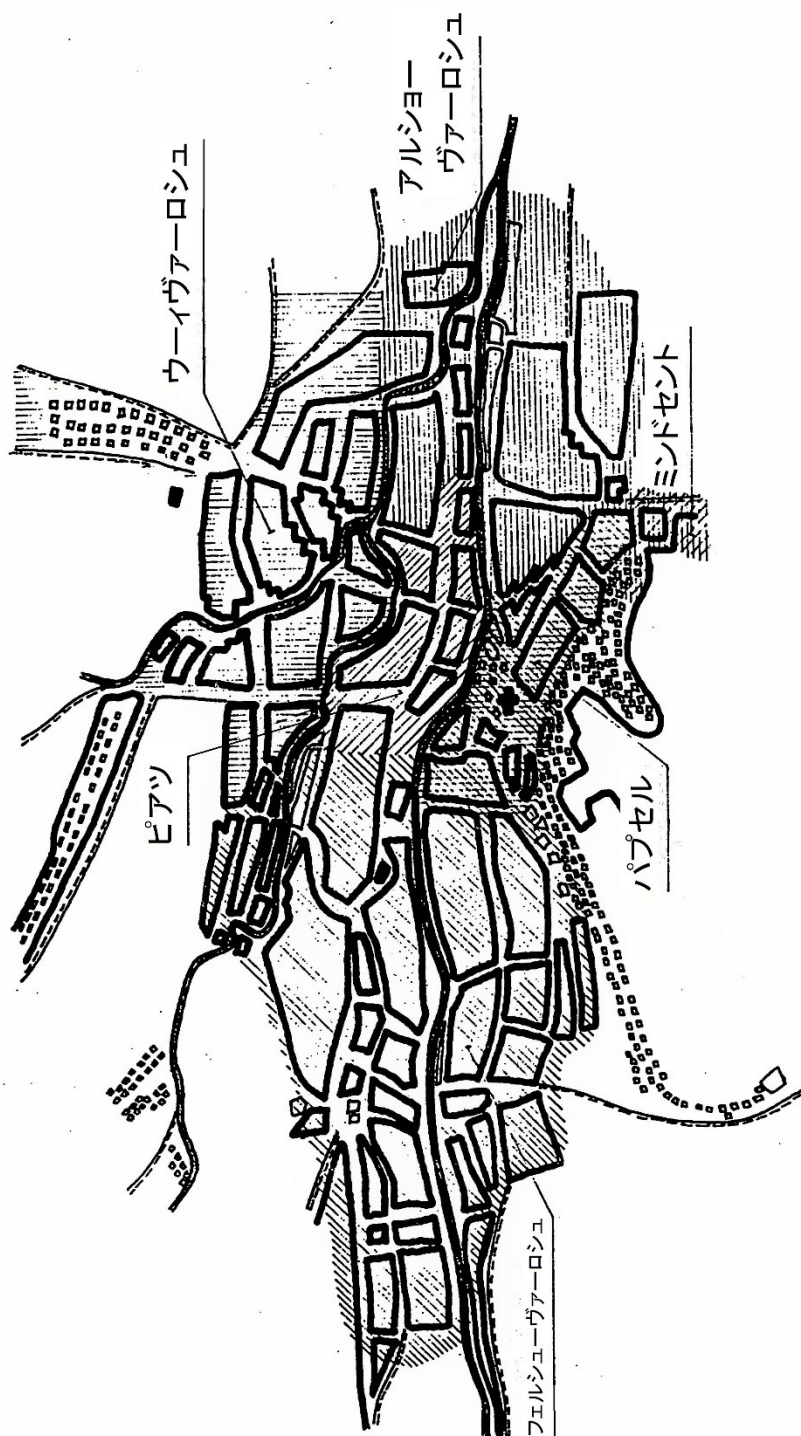
出典：BAZML TJ 7-11. köt. より著者が作成。

* ここではツィガーニ帳簿に登録された人々のみを列挙しており、その他の史料でミシュコルツの住民とされた人々、あるいは外部からの流入者であるとは明言されなかった人々に関する記述は除いている。また、一事例に複数名のツィガーニに関わっていた場合でも事例ごとに一件として集計した表 6-4, 6-5, 6-6 などと異なり、この表においては、一件ごとに参加した家系が複数あった場合は家系ごとに集計している。先の表と数値を比較した場合、計算結果が食い違うが、その原因はこのような集計方法の違いにあるということをご了解いただきたい。なお、いくつかの事例を除けば、ミシュコルツで定着したツィガーニが家系を超えて複数名で盗みを行った事実は確認できていないため、本表と表 5-7 の間の誤差はさほど大きなものではないと言える。

[illegible]

xii

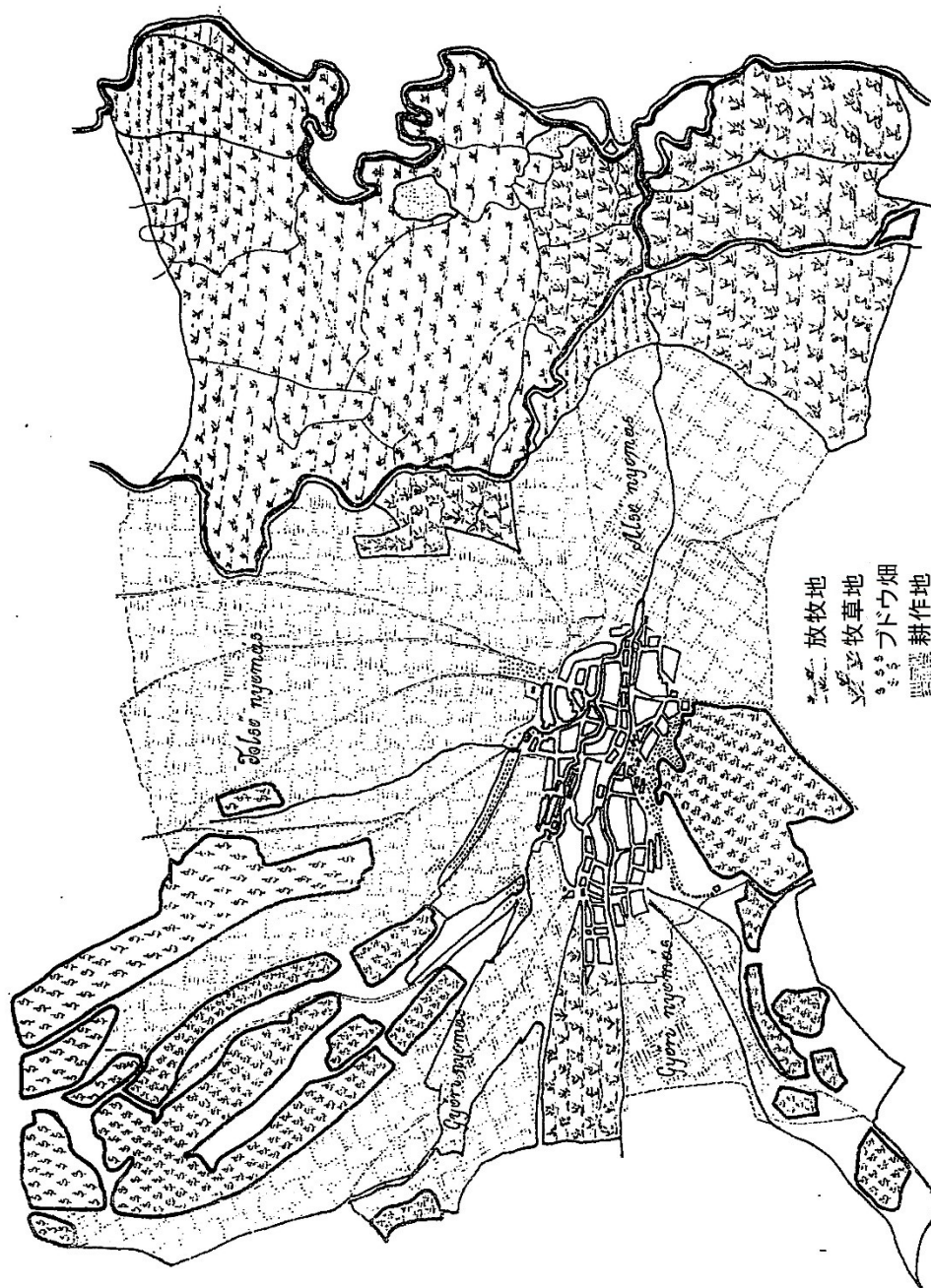
地図② 18世紀ミシュコルツ 市内域



Miskolc XVIII. századi városrészei

出典: MT III., 1. köt. 506.を基に著者が加工。

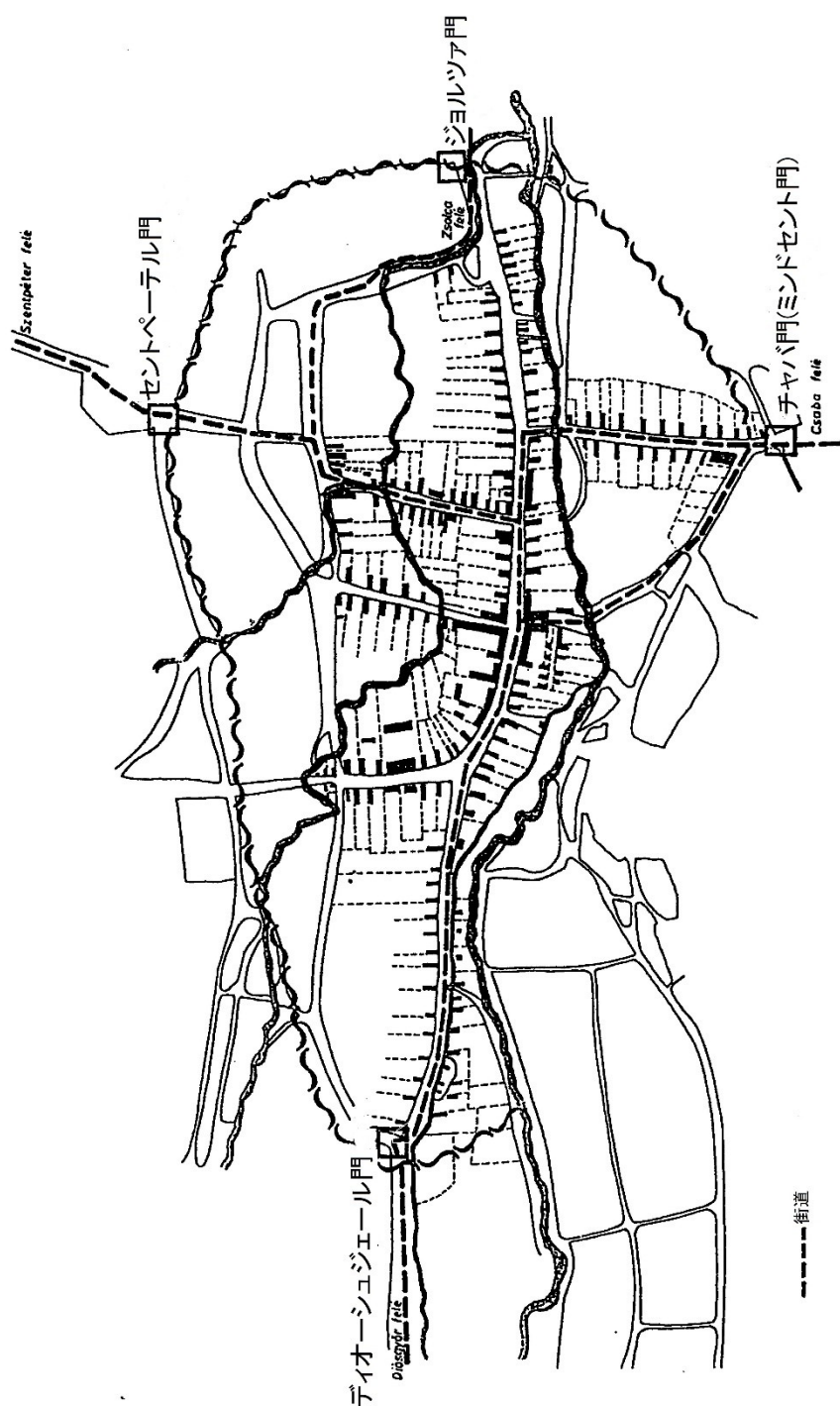
地図③ 18世紀後半ミシュコルツ 全域



Miskolc határa a XVIII. század második felében

出典: MT III., 1. köt. 504. を基に著者が加工。

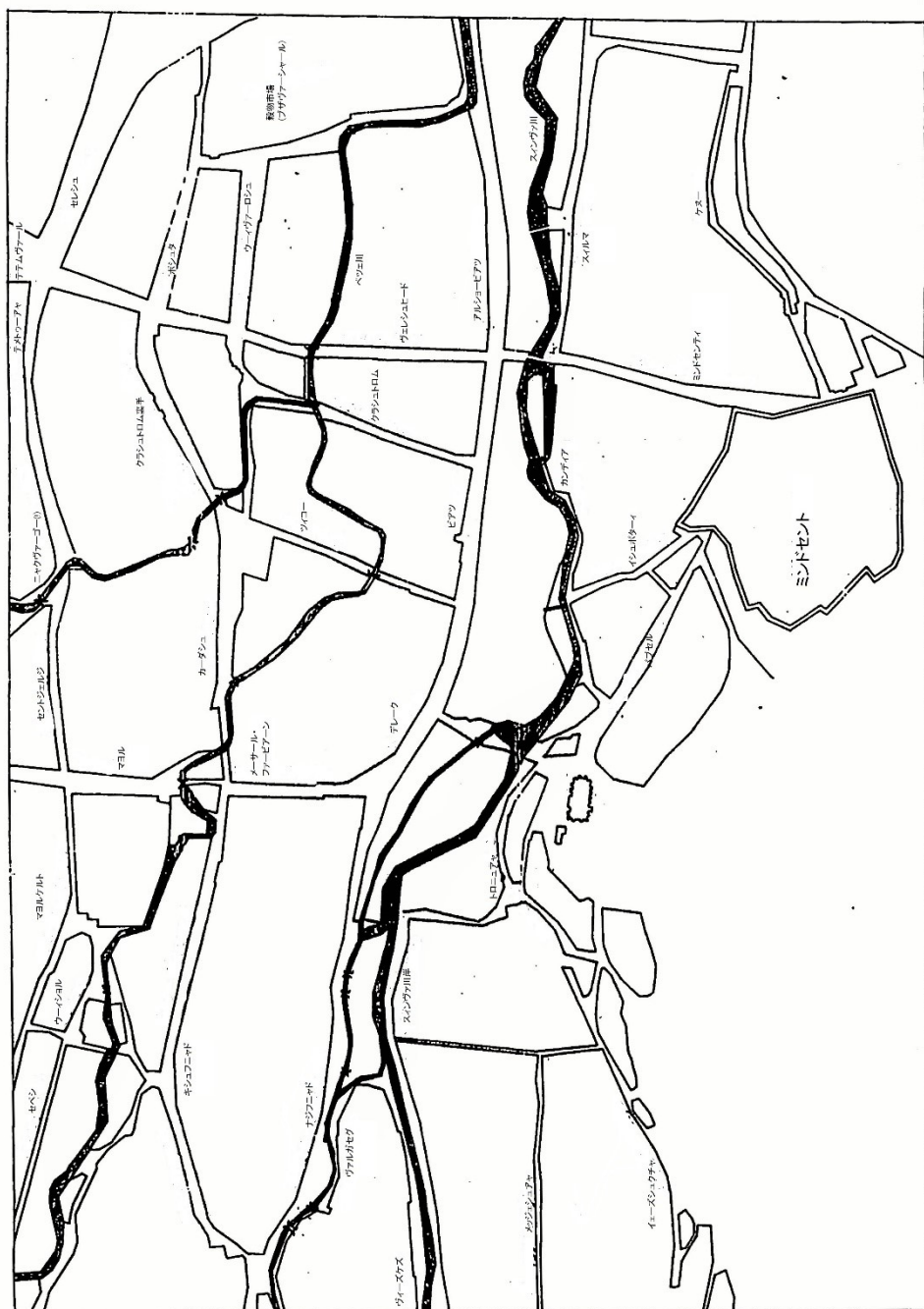
地図④ 18世紀前半 ミシュコルツ 市内域境界



Kapuk és országutak Miskolcon a XIX. század elején

出典: MT III., 1. köt. 502. を基に著者が加工。

地図⑤ 18-19 世紀 ミシュコルツ 通り分布図



Miskolc utcái a XIX. század első felében
(B.-A.-Z. m. Lt. IV. A. 1501/g. 1. alapján)

出典: MT III., 1. köt. 507. を基に著者が加工。

地図⑥ 18世紀後半ボルショド県ミシュコルツ郡集落分布図



参考文献表

史料

文書館史料

- Magyar Országos Levéltár C 56 Helytartótanács levéltár, Departamentum Zingarorum, Acta Secundum Referentes (=MOL ARS) 『総督府文書 総督府ツィガーニ部局 参考書類』
- Magyar Országos Levéltár C 56 Helytartótanács levéltár, Departamentum Zingarorum, Acta Departamentum Zingarorum (=MOL ADZ) 『総督府文書 総督府ツィガーニ部局文書』
- Borsod-Abaúj-Zemplén Megyei Levéltár (=BAZML) IV. 501/a. Borsod Vármegye Nemesei Közgyűlésének iratai, Közgyűlési jegyzőkönyvek (=BAZML KJ) 『ボルショド県議会文書 県議会議事録』
- BAZML IV. 501/b. Borsod Vármegye Nemesei Közgyűlésének iratai, Közgyűlési iratok-Acta Politica (=BAZML Acta Politica) 『ボルショド県議会文書 県議会政治関連文書』
- BAZML IV. 501/e. Borsod Vármegye Nemesei Közgyűlésének iratai, Közgyűlési és törvényszéki iratok (=BAZML Közgyűlési és törvényszéki iratok) 『ボルショド県議会文書 県議会及び県裁判所文書』
- BAZML IV. 501/f. Borsod Vármegye Nemesei Közgyűlésének iratai, Királyi rendeletek - Mandata et intimata politica (=BAZML Mandata et intimata politica) 『ボルショド県議会文書 国王政令集』
- BAZML IV. 501/i. Borsod Vármegye Nemesei Közgyűlésének iratai, Népösszeírások - Conscriptiones populares (=BAZML Népösszeírások) 『ボルショド県議会文書 人口登録簿』
- BAZML IV. 1501/a. Miskolc város tanácsának iratai, Tanácsulési jegyzőkönyvek (=BAZML TJ) 『ミシュコルツ参事会文書 参事会会議議事録』
- BAZML IV. 1501/b. Miskolc város tanácsának iratai, Species. (=BAZML Sp.) 『ミシュコルツ参事会文書 個別事案』
- BAZML IV. 1501/f. Miskolc város tanácsának iratai, Miskolc Város Számadási Iratai (=BAZML Város Számadási Iratai) 『ミシュコルツ参事会文書 市場町会計報告書』

刊行史料集

- BARSI János, *Magyarország történeti helységnévtára: Borsod Vármegye (1773-1805)* (Budapest-Miskolc: Központi statisztikai hivatal könyvtár és dokumentációs szolgálat/ BAZML, 1991). 『ハンガリー歴史的地名集 ボルショド県(1773-1805)』
- DÁNY Dezső és DÁVID Zoltán (szerk.), *Az első magyarországi népszámlálás 1784-1787* (Budapest: Központi Statisztikai Hivatal Könyvtára/ Művelődésügyi Minisztérium Levéltári Osztálya, 1960). 『ハンガリー最初の国勢調査 1784-1787 年』
- KARDOS Ferenc (szerk.), „*Veszedelem és habok között látszik életünk forogni*”: *Források a zalai cigányság 18. századi történetéhez* (Zalaegerszeg: Zala megyei levéltár, 2008) 『「危険な波間で私たちの命は巡り巡っているようだ」——18 世紀ザラ県のツィガーニの歴史に関する史料集』

- MEZEY Barna (szerk.), *A magyarországi cigánykérdés dokumentumokban 1422-1985* (Budapest: Kossuth kiadó, 1986). (= MCD) 『ハンガリーのツィガーニ問題関連文書集 1422-1985 年』
- NAGY Pál (szerk.), *Cigányperek Dél-Dunántúlon. 1796-1847* (Szekszárd: Romológiai kutatóintézet, 2001). 『ドナウ右岸におけるツィガーニ裁判 1796-1847 年』
- NAGY Pál (szerk.), *Cigányperek Magyarországon. II rész: Korai perek (1715-1758)* (Pécs: Pécsi Tudományegyetem Bölcsészettudományi Kar Romológia Tanszék, 2002). 『ハンガリーにおけるツィガーニ裁判——第二部 初期の裁判 (1715-1758)』
- NAGY Pál (szerk.), *Források a siklósi cigány múltjából (1721-1830)* (Szekszárd: Romológiai Kutatóintézet, 2003). 『シクローシュのツィガーニの過去についての史料集 (1721-1830 年)』
- NAGY Pál (szerk.), *Cigányperek Magyarországon (1758-1787)* (Szekszárd: Kerényi, 2003). 『ハンガリーにおけるツィガーニ関連訴訟 (1758-1787 年)』
- NAGY Pál (szerk.), *Források a magyarországi cigányság történetéből 1758-1999* (Gödöllő: az Emberi Erőforrások Fejlesztése Alapítvány, 2011). 『ハンガリーのツィガーニの歴史に関する諸史料 1758-1999 年』
- TÓTH Péter (összeáll.), *Miskolci statútumok 1573-1755* (Miskolc: BAZML, 1981). 『ミシュコルツの諸条例 1573-1755 年』
- TÓTH Péter és BARSÍ János (közread.), *Borsod vármegye statútumai 1578-1785* (Miskolc: BAZML, 1989). 『ボルショド県の諸条例 1578-1785』

二次文献

外国語文献

- ACHIM, Viorel, *Roma in Romanian History* (Budapest: Central European University Press, 2004).
- AKIYAMA, Shingo, “Greek Merchants, Their Wives, and Transiency of Migration in Eighteenth-Century Hungary”, *Medeiterán és Belkán Fórum*, VIII. Évfolyam I. Szám (Pécs, 2013), 2-8.
- AMMERER, Gerhard, *Heimat Strasse: Vaganten im Österreich des Ancien Regime* (Wien: Verlag für Geschichte und Politik, 2003).
- AUGUSTINI AB HORTIS, Samuel, *Von den heutigen Zustände, sonderbaren Sitten und Lebensart wie auch von denen übrigen Eigenschaften und Umständen der Zigeuner in Ungarn* [1775] (Bratislava: Stúdió-dd, 1994).
- BÁCSKAI Vera, *Városok Magyarországon az iparosodás előtt* (Budapest: Osiris, 2002). 『工業化以前のハンガリー諸都市』
- BAGI Gábor, “Cigányok a Jászságban 1768-ban”, *Jászsági évkönyv* 1996 (Jászberény, 1996), 103-115. 「1768 年のヤース管区のツィガーニ」
- BANA József, “Győr város kísérletei a cigányok megrendszabályozására 1746-ban”, MÁRFI Attila (szerk.), *Cigánysors: A cigányság történeti múltja és jelene I.* (Pécs: A cigány kulturális és közművelődési egyesület, 2005) [以下、*Cigánysors* I.], 33-38. 「ツィガーニの規制に関する 1746 年の都市ジ

エールの試み」

BARANY, Zoltan, *The East European Gypsies: Regime Change, Marginality, and Ethnopolitics* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003).

BÁRSONY, János and ÁGNES, Daróczy (eds), *Pharrajmos: Fate of the Roma During the Holocaust* (New York-Amsterdam-Brussels: Idebate Press, 2008).

BARTA János, ifj., *A tizennyolcadik század története* (Szekszárd: Pannnonica, 2000). 『18 世紀の歴史』

BINDER Mátyás, “„Felébredt ez a nép...“. A magyarországi romák/ cigányok etnikai-nemzeti önszerveződési folyamatairól”, GERGELY Jenő (szerk.), *A múlt feltárása—előítéletek nélkül* (Budapest: ELTE BTK Történelemtudományok Doktori Iskola, 2006), 61-81. 「この人々は目覚めたのだ。—ハンガリーのロマ／ツイガーニのエスニック・ナショナルな自己組織化のプロセスについて—」

---, “„A cigányok” vagy a „cigánykérdés” története?: Áttekintés a magyarországi cigányok történeti kutatásairól”, *REGIO: Kisebbség, Politika, Társadalom*, 20-4. (Budapest, 2009), 35-59. 「「ツイガーニの」歴史か、「ツイガーニ問題」の歴史か?—ハンガリーのツイガーニの歴史研究に関する概観—」

---, “„Újraegyesülés”? A roma nemzeti gondola keleti-európai történeti kontextusban”, DEÁKY Zita és NAGY Pál (szerk.), *A cigány kultúra történeti és néprajzi kutatása a kárpáti medencében: Bódi Zsuzsanna emlékére rendezett történeti és néprajzi konferencia előadásai [Gödöllő, 2009, február 18-20.] [Cigány néprajzi tanulmányok 15]* (Gödöllő, Magyar néprajzi társaság/ Szent István Egyetem Gazdaság- és Társadalomtudományi Kar, 2010) [以下 *A cigány kultúra történeti és néprajzi kutatása a kárpáti medencében*], 225-235. 「再結集か?—東欧史の文脈の中のロマ民族思想—」

---, “„Közös a kultúránk, az eredetünk és a nyelvünk, egy nemzet vagyunk”: A roma nemzeti narratíva vitatott kérdései a történetírás tükrében”, SZALAI László (szerk.), *A nemzeti mítoszok szerkezete és funkciója Kelet-Európában* (Budapest: L'Harmattan/ ELTE BTK Kelet-Európa Története Tanszék, 2013), 99-120. 「「我々には共通の文化、起源、言語がある。われらは一つの民族である。」—歴史叙述を通じて見るロマ民族という語りの論争的諸問題—」

BÓDI Zsuzsanna, “Egy 18. századi magyarországi cigány összeírás: Tények és következtetések”, BÓDI Zsuzsanna (szerk.), *Romanothon* (Budapest: Magyar Néprajzi Társaság, 2004), 25-52. 「18 世紀ハンガリーのあるツイガーニ帳簿——諸事実と結論」

BODÓ Béla, “Cigányok A XVIII. századi Szabolcs vármegyében”, *Krónika, Újfolym I. Évfolyam*, 1. Szám (Pécs, 1987), 167-186. 「18 世紀サボルチ県のツイガーニ」

CROWE, David M., “From Persecution to Pragmatism: The Habsburg Roma in the Eighteenth Century,” *Austrian History Yearbook*, Vol. 37 (New York, 2006), 99-120.

DEÁKY Zita, “Cigány gyermekek a családon kívül (a 18. századtól a 20. század első feléig)”, DEÁKY Zita és NAGY Pál (szerk.), *A cigány kultúra történeti és néprajzi kutatása a kárpáti medencében*, 165-179. 「家族から離れたツイガーニの子どもたち(18 世紀から 20 世紀初頭まで)」

- DOBROSSY István, *A miskolci vendégfogadó és a vendéglátás története (1745-1945)* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, 1985). 『ミシュコルツの宿泊施設とてなしの歴史(1745-1945 年)』
- DOMINKOVITS Péter, “Cigányösszeírások Sopron vármegyében, A 18. század második felében (Egy tematikus repertórium előmunkálatai az 1770-es években)”, *Cigánysors* I., 51-69. 「18 世紀後半シヨプロン県のツィガーニ人口調査——1770 年代におけるある項目別リストに関する基礎研究」
- , “Ellentétek közepében: cigányok a felsőbüki közbirtokosok konfliktusában a 18. század derekán”, MÁRFI Attila (szerk.), *Cigánysors: A cigányság történeti múltja és jelene II.* (Pécs: A cigány kulturális és közművelődési egyesület, 2009), 23-34. 「対立の只中で——18 世紀中葉フェルシュービュクにおける共有地保有者たちの紛争の中のツィガーニ」
- DUPCSIK Csaba, *A magyarországi cigányság története: Történelem a cigánykutatások tükrében, 1890-2008* (Budapest: Osiris Kiadó, 2009). 『ハンガリーのツィガーニなるものの歴史——ツィガーニ研究を通じて見る歴史 1890-2008 年』
- ERDŐS Zoltán, “Értelmezés és megértés: A magyarországi cigányság korai történetének historiográfiája”, *Iskolakultúra*, 2007/11-12. (Veszprém-Budapest, 2007), 129-144. 「解釈と理解—ハンガリーのツィガーニの初期の歴史に関する歴史叙述—」
- FARAGÓ Tamás (szerk.) [DOBROSSY István (Főszerk.)], *Miskolc története III. 1.-2. köt. 1702-1847-ig* (Miskolc: a Nemzeti Kulturális Örökség Minisztérium / BAZML/ a miskolci Herman Ottó Múzeum, 2000) (=MT III.). 『ミシュコルツの歴史 第3部 1-2 巻 1702-1847 年』
- FARAGÓ Tamás, “A város népesség”, MT III. 1. köt., 151-272. 「都市の人口」
- FARAGÓ Tamás, “Miskolc az ország településrendszerében a XVIII. század eleje és a XIX. század közepe között”, MT III. 2. köt., 955-975. 「18 世紀初頭から 19 世紀半ばまでのハンガリー王国の定住システムの中のミシュコルツ」
- FAZEKAS Csaba, “Miskolc város az országos politikában”, MT III. 1. köt., 7-56. 「国内政治の中の都市ミシュコルツ」
- FLECK Gábor és SZUHAY Péter (összeáll.), *Kérdés és Válaszok a cigányokról* (Budapest: Napvilág, 2013). 「ツィガーニに関する Q&A」
- GLATZ, Jakob, *Egy magyar ember őszinte megjegyzései hazájáról néhány magyar vidéken tett uazása során* (Budapest: Balassi Kiadó, 2013).
- GYULAI Éva, “Gazdalkodás, termelés és árúcsere a kora újkori Miskolcon”, SZAKÁLY Ferenc (szerk.) [DOBROSSY István (Főszerk.)], *Miskolc története II. 1526-tól 1702-ig* (Miskolc: BAZML/ A miskolci Herman Ottó Múzeum, 1998) (=MT II.), 175-356. 「近世のミシュコルツにおける経営、生産、商品交換」
- GYULAI Éva, “Topográfia és városkép”, MT III. 1. köt., 57-150. 「地誌と都市景観」
- GYULAI Éva, “Régiók és kézművesség a török kori Északkelet-Magyarországon”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum,

- 2006, 7-13. 「トルコ時代の北東ハンガリーにおける地域と手工業」
- HAZAG Ádám, “Adalások a 18. századi Magyarország cigányságának életéről a Szepes varmegyei cigányösszeírás tükrében”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XLIV. (Miskolc, 2005), 227-236. 「セペシ県のツィガーニ帳簿を通してみる 18 世紀ハンガリーのツィガーニに関する諸データ」
- , “Cigányösszeírások statisztikai elemzése az északkelet-magyarországi régióban”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XLVII. (Miskolc, 2008), 802-813. 「北東ハンガリー地方のツィガーニ帳簿の統計的分析」
- , “Borsodi források cigányokról a 18.század második felében”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XLVIII. (Miskolc, 2009), 97-108. 「18 世紀後半のツィガーニに関するボルショド県の諸史料」
- HAZAG Ádám és SPÓNER Péter, “Lakatosok, fegyverművesek, óráskok, ágyúöntők”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, 2006), 82-96. 「金属細工師、武器作り、時計技師、鋳造人」
- HIPPEL, Wolfgang von, *Armut, Unterschichten, Randgruppen in der frühen Neuzeit* (München: Oldenbourg, 2013²).
- HÖGYE István, “Adatok a Zemplén megyei cigányság XVII-XVIII. századi történetéhez”, *A Miskolci Herman Ottó múzeum közleményei*, XXII., (Miskolc, 1984), 39-47. 「17、18 世紀のゼムプレーン県のツィガーニの歴史に関する諸データ」
- , “Verbuválás Zemplénben a XVIII. században”, *A Miskolci Herman Ottó múzeum Évkönyve*, XXXII. (Miskolc, 1994), 505-511. 「18 世紀ゼムプレーンにおける募兵活動」
- ICHIHARA Shimpei, “A cigányság területi mobilitása a 18. században a miskolci járás cigányösszeírásainak a tükrében”, *PUBLICATIONES UNIVERSITATIS MISKOLCINENSIS. Sectio Philosophica*, Tomus XVIII. Fasc. 1. (Miskolc, 2014), 131-172. 「ミシュコルツ郡のツィガーニ帳簿を通じて見る 18 世紀におけるツィガーニの領域的移動」
- IVÁNYOSI-SZABÓ Tibor, “Adatok a Cigányok Kecskeméti Történetéhez (1596-1850)”, *Bács-Kiskun Megye Múltjából* XIII. (Kecskemét, 1993), 7-55. 「ケチケメートのツィガーニの歴史に関する諸データ」
- KAPRALSKI, Slawomir, “Identity Building and the Holocaust: Roma Political Nationalism”, *Nationalities Papers*, Vol. 25, No. 2. (1997), 269-283.
- KARDOS Ferenc, “Integrációs és asszimilációs kérdés a 18. századi Zalaiban – egy zalai forráskötet kapcsán”, DEÁKY Zita és NAGY Pál (szerk.), *A cigány kultúra történeti és néprajzi kutatása a kárpáti medencében*, 225-235 「18 世紀のザラ県における[ツィガーニの]統合と同化の問題——ザラ県の史料集に関して」
- KATONA Csaba, “A Departamentum Zingarorum működésének forrásai a magyar országos levéltárban (1775-1785)”, *Cigánysors* I., 45-49. 「ハンガリー国立文書館におけるツィガーニ部局の活動に関する史料群 1775-1785 年」
- KATUS László, “Magyarország a Habsburg Monarchiában (1711-1918)”, ROMSICS Ignác (Főszerk.),

- Magyarország Története* (Budapest: Akadémiai Kiadó, 2007), 488-772. 「ハプスブルク君主国の
中のハンガリー 1711-1918 年」
- KOSÁRY Domokos, *Újjáépítés és Polgárosodás 1711-1867* (Budapest: Háttér, 1990). 『再建と市民化
171 年-1867 年』
- KRISZTÓ Gyula, *Nem magyar népek a középkori Magyarországon* (Budapest: Lucidus, 2003). 『中世ハ
ンガリーのハンガリー人以外の人々』
- LEVELES Erzsébet, “A 800 éves Miskolc”, HALMAY Béla és LESZIH Andor (szerk.), *Miskolc* [Magyar
városok monográfiája, V.] (Budapest: Magyar Városok Monográfiája Kiadóhiv., 1929), 11-126.
「800 周年のミシュコルツ」
- LUPOVITCH, Haward N., *Jews at the crossroad: Tradition and accommodation during the Golden Age of
the Hungarian Nobility* (Budapest: Central European University Press, 2007).
- LUCASSEN, Leo, “« Harmful tramps » Police professionalization and gypsies in Germany, 1700-1945”,
Crime, Histoire & Sociétés / Crime, History & Societies, Vol. 1. No. 1 (Genève, 1997), 29-50.
- MATRAS, Yaron, “Review article: A conflict of paradigms”, *Romani Studies* 5, Vol. 14, No. 2. (Liverpool,
2004), 193-209.
- MAYALL, David, *Gypsy Identities 1500-2000: From Egipcians and Moon-men to the Ethnic Romany*
(London and New York: Routledge, 2004).
- MÉSZÁROS László, “Bács-Kiskun megyei cigányságának történetéhez (Az 1768-as cigányösszeírás
népesség sztatistikai-demográfiai adatai)”, *Bács-Kiskun Megye Múltjából*, I., (Kecskemét, 1975),
133-143. 「バーチ・キシュクン県のツイガーニ集団の歴史(1768 年のツイガーニ人口調査の
統計的・人口動態的データ)」
- MEZEY Barna (szerk.), *Magyar Alkotmánytörténet* [5., átdozott kiadás] (Budapest: Osiris, 2003). 『ハ
ンガリー国制史 増補第 5 版』
- MÓRÓ Mária Anna, “Mária Terézia cigány-rendeletei és a Baranya megyei cigányösszeírások 1775-1779”,
Baranyai helytörténetírás 1978 (Pécs, 1979), 205-302. 「マリア・テレジアのツイガーニ法令と
バラニャ県のツイガーニ帳簿 1775-1779 年」
- MRÓZ, Lech, *Roma-Gypsy Presence in the Polish Lithuanian Commowwealth: 15th-18th Centuries*
(Budapest/New York: CEU Press, 2015).
- NÁDASI Edit, “A gróf Esterházy-család galántai és cseszneki uradalmán élő cigányok a XVII–XVIII.
században”, *Kisebbségkutatás*, 11. Évf. 1. Sz. (Budapest, 2002), 59-65. 「17-18 世紀のエステル
ハーゾイ伯爵家領ガラント、チェスネクで生活したツイガーニたち」
- NAGY István és F. KISS Erzsébet, *A Magyar Kamara és egyéb kincstár szervek* (Budapest: Magyar
országos levéltár, 1995). 「ハンガリー財務局及びその他の王国財務機関」
- NAGY Pál, *A magyarországi cigányok története a rendi társadalom korában* (Kaposvár: a Csokonai Vitéz
Mihály Tanítóképző Főiskola Kiadója, 1998). 『身分制社会の時代におけるハンガリーのツイガ
ーニの歴史』

- , “„Kicsinségemben elszakattam”: cigány közösség, szocializáció, és gyermekmors Magyarországon a 16-19. században”, *Educatio*, 1999-2. (Budapest, 1999), 320-338. 「《小さな頃に私は引き離されました。》—16-19 世紀ハンガリーにおけるツィガーニ共同体、社会化、そして子供たちの運命—」
- , “Levágott ujjak, megsebzett arcok: Magyarországi cigány emberek különös testi jegyei a 18-19. században”, FORRAY R. Katalin (szerk.), *Ciganológia – Romológia* (Budapest – Pécs: Dialóg Campus, 2000), 89-126. 「《切断された指、傷のある顔》—18-19 世紀のハンガリーのツィガーニたちの風変わりな身体的諸特徴—」
- , „Faraó népe”: *A magyarországi cigányok korai története (14.-17. század)* (Pécs: Pécs Tudományegyetem, Bölcsészettudományi Kar Neveléstudományi Intézet Romológia és Nevelésszociológia Tanszék, 2004). 『「ファラオの民」——ハンガリーのツィガーニの初期の歴史 (14-17 世紀)』
- , “A magyarországi cigányság története a 16 -19 században”, FORRAY R. Katalin (szerk.), *Ismeretek a Romológia az alapképzési szakhoz* (Pécs: Pécs tudományegyetem Bölcsészettudományi Kar Neveléstudományi Intézet Romológia és Nevelésszociológia Tanszék, 2006), 37-55. 「16-19 世紀におけるハンガリーのツィガーニの歴史」
- , “„Gádzsósodás – cigányosodás.” Akkulturáció és parasztosodás a cigányok magyarországi történetében”, *Amaro Drom*, 17. évf. 2. sz. (Budapest, 2007), 21-22. 「《[ツィガーニの]非ツィガーニ化—[非ツィガーニの]ツィガーニ化》——ハンガリーのツィガーニの歴史における文化変容と農民化」
- NOVÁK Veronika, “Cigány oklevelek és kiváltságlevelek az Eszterházy család levéltárában”, BÓDI Zsuzsanna (szerk.), *Romanothan* (Budapest: Magyar Néprajzi Társaság, 2004), 7-23. 「エステルハーゾイ家文書の中のツィガーニ関連書状、ならびに特許状」
- OBLATH Márton, “A „cigány” kategória diskurzív és történeti rekonstrukciója”, *Anthropolis* 3. Évf. 1. szám (Budapest, 2006), 51-60. 「《ツィガーニ》カテゴリーの言説的、歴史的再構成」
- Ö. KOVÁCS József, SZENDI Attila és FAZEKAS Csaba, “Városi társadalom”, MT III. 2. köt., 517-678. 「都市の社会」
- P. KOVÁCS Melinda, “Cigányok Egerben a XVIII. században”, CSIFFÁRY Gergely (szerk.), *Historia est... (Írások Kovács Béla köszöntésére)* (Eger: Garamond kiadványszerkesztő Stúdió/ Heves Megyei Levéltár, 2002), 279-287. 「18 世紀エゲルのツィガーニ」
- PRÓNAI Csaba, “A kulturális antropológiai cigánykutatások rövid története”, *Magyar Tudomány*, 1997-6 (Budapest, 1997), 729-740. 「文化人類学的ツィガーニ研究の手短な歴史」
- RÉMIÁS Tibor, *Miskolc 18. századi társadalma: feudális kori összeírásai alapján* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, BAZML és Bíbor kiadó, 2004). 『封建時代の登録簿類に基づいたミシュコルツの 18 世紀社会』
- ROSTÁS-FARKAS György és KARSAI Ervin, *A cigányok története: Le romengi historiija* (Budapest:

- Művelődési és Közoktatási Minisztérium/ Cigány Tudományos és Művészeti Társaság, 1992). 『ジプシーの歴史』
- SÁROSI Bálint, *Cigányzene...* (Budapest: Gondolat, 1971).
- SCHLEININGER Tamás, “A solti járásban letelepedett cigány családok összeírásai Mária Terézia korában”, BÁRTH János (szerk.), *Szavak Szívárványa* (Baja – Kecskemét: a Bács-Kiskun Megyei Önkormányzat Muzeumi Szervezete/ a Bács-Kiskun Megyei Nemzetiségi Alapítvány, 2006), 51-81. 「ショルト郡に定住したツィガーニ家族に関するマリア・テレジア期の人口調査」
- SOÓS István, “Cigányper Sopronban (Adalékok Sopron és a cigányság XVIII. századi kapcsolatához) I. rész”, *Soproni Szemle*, 41-3. (Sopron, 1987), 225-236. 「ショプロンのツィガーニ裁判(18世紀のショプロンとツィガーニの関係に関する諸データ) I」
- SOÓS István, “Cigányper Sopronban (Adalékok Sopron és a cigányság XVIII. századi kapcsolatához) II. rész”, *Soproni Szemle*, 41-4. (Sopron, 1987), 320-329. 「ショプロンのツィガーニ裁判(18世紀のショプロンとツィガーニの関係に関する諸データ) II」
- SPÓNER Péter, “A miskolci csizmadiacéh története a megalakulástól a céh felszámolásáig (1667-1872)”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XXXVII. (Miskolc, 1999), 603-619. 「ミシュコルツのブーツ職人ギルドの形成から破綻までの歴史」
- , “Vashámorok, kovácsok, cigánykovácsok”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, 2006), 73-81. 「鉄工所、鍛冶師、ツィガーニ鍛冶師」
- , “Borsod vármegye 1770-es limitációjának kerékgyártó-árszavása”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XLV. (Miskolc, 2006), 241-248. 「ボルショド県の1770年価格規定表の車輪職人の商品価格」
- , “Városháza adatok a miskolci lakatoscéh történetéhez”, GYULAI Éva és VIGA Gyula (szerk.), *Történet – muzeológia: Tanulmányok a múzeumi tudományok köréből a 60 éves Veres László tiszteletére* (Miskolc: Borsod-Abaúj-Zemplén Megyei Múzeumi Igazgatóság/ Miskolci Egyetem BTK Történettudomány Intézet, 2010), 152-161. 「ミシュコルツの金属細工師の歴史に関する参事会議事録の諸データ」
- , “Céhes iparosok Miskolc Város Tanácsának szolgálatában (1761-1848)”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, L. (Miskolc, 2011), 341-353. 「ミシュコルツ参事会に奉仕するギルドの手工業者たち 1761-1748年」
- , *Egy mezőváros céhes ipara a városi jegyzőkönyvek tükrében: Miskolc céhes ipar története (1761-1848)* (Debrecen: Debreceni Egyetem, 2011). [doktori disszertáció] 『参事会議事録を通して見る、ある市場町のギルド手工業——ミシュコルツのギルド手工業の歴史 1761-1848年』
- STIPTA István és TÓTH Péter, “Miskolc igazgatásának és jogéletének jellegzetességei”, MT III. 2. köt., 679-736. 「ミシュコルツの行政ならびに法的生活の諸特徴」
- SZABÓ László, “Mária Terézia 1760/1761-es cigányrendelete a Jászságban”, *Jászkunság*, 12-3. (Jászberény, 1966), 125-132. 「ヤース管区におけるマリア・テレジアの1760-61年ツィガーニ

王令」

- SZAKÁLY Ferenc, “Miskolc helye Magyarország török kori település- és gazdasági rendszerében”, SZAKÁLY Ferenc (szerk.) [DOBROSSY István (Főszerk.)], *Miskolc története II. 1526-tól 1702-ig* (Miskolc: BAZML/ A miskolci Herman Ottó Múzeum, 1998), 507-529. 「トルコ時代のハンガリーの集落・経済システムにおけるミシュコルツの位置」
- SZEGŐFI Anna, “Mezőgazdaság-Árútermelés-Piac”, MT III. 1. köt., 273-315. 「農業・商品生産・市場」
- , “Város gazdalkodás”, MT III. 1. köt., 395-427. 「都市経営」
- SZOMSZÉD András, “A nógrádi cigányság története az összeírások tükrében (17. sz. második felétől a 19. sz. közepéig)”, *A Nógrád Megyei Múzeumok Évkönyve*, XIII. (Salgótarján, 1987), 157-207. 「帳簿を通じて見るノーグラードのツィガーニの歴史 (17 世紀後半から 19 世紀半ばまで)」
- TÓTH, István György, *Literacy and Written Culture in Early Modern Central Europe* (Budapest: Central European University Press, 2000).
- TÓTH Péter, “Borsod vármegye tervezete a cigányok szabályozására 1784-ből”, *A miskolci Herman Ottó Múzeum közleményei*, XXVI. (Miskolc, 1989), 63-67. 「1784 年のボルショド県のツィガーニ規制に関する計画」
- , “Cigányok Miskolcon a 18. század közepén”, *A Herman Ottó múzeum évkönyve*, XXX-XXXI. (Miskolc, 1993), 205-215. 「18 世紀中葉のミシュコルツにおけるツィガーニ」
- , “Kóborlás és letelepedés (A magyarországi cigányok feudális kori történetéhez)”, *Borsodi levéltári évkönyv*, VII. (Miskolc, 1994), 7-30. 「放浪と定住(ハンガリーのツィガーニの封建制時代の歴史について)」
- , “Gondolatok a cigányok magyarországi történetéről és annak forrásairól”, GÉMES Balázs (szerk.), *Pillanatképek a romák múltjából* (Szekszárd: Romológiai Kutatóintézet, 1998), 37-44.
- , “A cigányok megjelenése a középkori Magyarországon”, *Cigánysors* I., 15-19. 「中世ハンガリーにおけるツィガーニの出現」
- , “Mária Terézia cigánypolitikája”, *Cigánysors* I., 39-44. 「マリア・テレジアのツィガーニ政策」
- , “A varázsló cigány asszony a XVIII. században”, *Borsod-Abaúj-Zemplén megyei Levéltár Évkönyve*, XII-XIII. (Miskolc, 2005), 55-68. 「18 世紀における魔術使いのツィガーニ女性」
- , *A magyarországi cigányság története a feudalizmus korában* (Budapest: Bölcsész Konzorcium, 2006). 『封建制の時代におけるハンガリーのツィガーニの歴史』
- , “Az 1768. évi cigányösszeírás a Jászságban”, *Zounuk: a Szolnok Megyei Levéltár évkönyve*, 26. sz. (Szolnok, 2011), 443-464. 「ヤース管区における 1768 年ツィガーニ帳簿」
- TÜRKE Gábor, “A Romák helyzete Pest-Pilis-Solt vármegyében a 18. században”, *Tanulmányok Pest megye múltjából*, IV. (Budapest, 2012), 69-83. 「18 世紀のペシュト=ピリシュ=ショルト県におけるロマの状況」
- VARGA J. János, “Kísérletek Magyarország újratelepítésére 1689-1723”, HANÁK Péter (szerk.), *Híd a századok felett: Tanulmányok Katus László születésnapjára*. (Pécs: University Press Pécs, 1997), 137-

150. 「ハンガリー王国再建の試み 1689-1723 年」

- VERES László, “Borsod megye etnikai arculatának változásai a 18. század első felében”, KUNT Ernő, SZABADFALVI József és VIGA Gyula (szerk.), *Interetnikus kapcsolatok Északkelet-Magyarországon* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, 1984), 27-35. 「18 世紀初頭におけるボルショド県のエスニシティ的様相の変化」
- , “Az armalista nemesség szerepe Miskolc 17-19. századi gazdasági-társadalmi életében”, *A miskolci Herman Ottó múzeum közleméye*, 27 köt. (Miskolc, 1991), 132-134. 「17-19 世紀のミシュコルツにおける証書貴族の経済的、社会的役割」
- , “A 18-19. századi iparfejlődés sajátosságai”, VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, 2006), 13-22. 「18-19 世紀の工業発展の特殊性」
- VERES László és NÉMETH György, “Iparfejlődés”, MT III. 1. köt. 317-393. 「工業発展」
- VERES László és VIGA Gyula (szerk.), *Kézművesipar Északkelet-Magyarországon* (Miskolc: Herman Ottó Múzeum, 2006). 『北東ハンガリーの手工業』
- VERMEERSCH, Peter, *The Romani Movement: Minority Politics and Ethnic Mobilisation in Contemporary Central Europe* (New York – Oxford: Berghahn Books, 2006).
- VERMEERSCH, Peter and RAM, Melanie H., “The Roma”, RECHEL, Bernd (ed.), *Minority Rights in Central and Eastern Europe* (London and New York: Routledge, 2009), 61-73.
- VIDRA Zsuzsanna, “A roma holokauszt narratívái: Történeteírás, megemlékezés, politikai diszkurzusok”, *REGIO: Kisebbség, Politika, Társadalom*, 16-2. (Budapest, 2005), 111-129. 「ロマ・ホロコーストの語り—歴史叙述、記憶、政治的言説—」
- VISSI Zsuzsanna, “A cigánykérdés —200 éve”, *Új forrás: Komárom megyei antológia*, 13-1 (Tatabánya, 1973), 85-92. 「ツィガーニ問題の 200 年」
- VIZI, Balázs, “Hungary: A model with lasting problems”, RECHEL, Bernd (ed.), *Minority Rights in Central and Eastern Europe* (London and New York: Routledge, 2009), 119-134.
- WILLEMS, Wim, *In Search of the True Gypsy: From Enlightenment to Final Solution* (London: Frank Cass, 1997).
- WILLEMS, Wim and LUCASSEN, Leo, “Gypsies in the Diaspora?: The pitfalls of a biblical concept”, *Histoire Sociale/ Social History*, Vol. 66. (Ottawa: 2000), 251-270.

邦語文献

- イルジーグラ、フランツ/ラゾッタ、アルノルト著『中世のアウトサイダー(新装版)』藤代幸一訳、白水社、2005 年。
- クローウェ、デーヴィッド著『ジプシーの歴史——東欧、ロシアのロマ民族』水谷驍訳、共同通信社、2001 年。
- ケヴェール、ジェルジ著『身分社会と市民社会——19 世紀ハンガリー社会史』平田武訳、刀水書

- 房、2013 年。
- ケンリック、ドナルド/パクソン、グラタン共著『ナチス時代の「ジプシー」』小川悟監訳、明石書店、1984 年。
- H. バラージュ、エーヴァ著『ハプスブルクとハンガリー』渡邊昭子、岩崎周一訳、成文社、2003 年。
- ハンコック、イアン著『ジプシー差別の歴史と構造——パリア・シンドローム』水谷驍訳、彩流社、2004 年。
- フレーザー、アンガス『ジプシー——民族の歴史と文化』水谷驍訳、彩流社、2002 年。
- レック、ベルント著『歴史のアウトサイダー』中山博幸、山中淑江訳、昭和堂、2001 年。
- 秋山晋吾「農村と地方都市」大津留厚、水野博子、河野淳、岩崎周一編『ハプスブルク史研究入門——歴史のラビリンスへの招待——』昭和堂、2013 年、73-80 頁。
- 「貴族の自治の誕生——中・近世ハンガリー史の中の県制度——」篠原琢・中澤達哉編『ハプスブルク帝国政治文化史』昭和堂、2012 年、105-136 頁。
- 「近世国制とディアスポラ——18 世紀トランシルヴァニアのカトリック・ブルガリア人——」小沢弘明、山本明代、秋山晋吾編『つながりと権力の世界史』彩流社、2014 年、26-45 頁。
- 「近世東欧の交易ネットワークとその担い手たち——18 世紀ハンガリーとバルカン商人——」『東欧史研究』38 号、2016 年、67-72 頁。
- 飯尾唯紀『近世ハンガリー農村社会の研究——宗教と社会秩序』北海道大学出版会、2008 年。
- 池田利昭「中世後期・近世ドイツの犯罪史研究と「公的刑法の成立」——近年の動向から——」『史学雑誌』第 114 編第 9 号、60-84 頁。
- 岩崎周一「近世のハプスブルク君主国における軍隊と兵士」『京都産業大学論集 社会科学系列』30 号、2013 年、123-154 頁。
- 大谷実「一九世紀末から二〇世紀初頭のドイツにおけるシンティ・ロマ概念の変遷——百科事典と内務省資料を手掛かりに——」『ゲシヒテ』第 8 号、2015 年、3-22 頁。
- 小川悟『ジプシー——抑圧と迫害の轍』明石書店、1990 年。
- 加藤久子「社会主義ポーランドの建設とロマ——「ジプシー」をめぐる政策とプロパガンダ——」『現代史研究』53 号、2007 年、1-14 頁。
- 金子マーティン編『「ジプシー収容所」の記憶——ロマ民族とホロコースト』岩波書店、1998 年。
- 「ブルゲンラント・ロマ小史」加賀美雅弘編著『「ジプシー」と呼ばれた人々——東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在』学文社 2005 年、157-198 頁。
- 木村靖二編『ドイツ史』山川出版社、2001 年。
- 佐藤雪野「チェコスロヴァキアにおけるロマの歴史とオーラル・ヒストリー——ラツコヴァーの自伝を手がかりに——」『国際文化研究科論集』15 号、2007 年、65-79 頁。
- 柴宜弘編『バルカン史』山川出版社、1998 年。
- 関哲行、立石博高、中塚次郎編『世界歴史体系 スペイン史』1-2 巻、山川出版社、2008 年。

中澤達哉『近代スロヴァキア国民形成思想史研究——「歴史なき民」の近代国民法人説』刀水書房、2009年。

二宮宏之「フランス絶対王政の統治構造」同『フランスアンシャン・レジーム論』岩波書店、2007年、219-262頁。

水谷驍『ジプシー—歴史・社会・文化—』平凡社新書、2006年。

山本明代「ハンガリーにおけるロマ研究の現状と課題」、水野博子編『記憶のタペストリー——マイノリティ、ナチズム、戦争をめぐる現代文化の諸相』（若手研究(A)「1945年以後の日本・オーストリア両国における「記憶の文化」形成に関する比較研究」／萌芽研究「20世紀国際関係における「少数民族問題」—「少数民族保護」政策と国際連盟を中心に」研究報告書）、2005年、19-30頁。

横井雅子「募兵から舞踏・音楽へ—ハンガリー音楽を彩ったヴェルブンコシュが成立するまで—」『音楽研究—大学院研究年報』1998年、202-178頁。